

国立国語研究所学術情報リポジトリ

国立国語研究所年報 2019年度

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-04-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0000003295

国立国語研究所

年報

2019 *NINJAL YEARBOOK*

国立国語研究所の活動 (2019 年度)



国立国語研究所創立 70 周年・
人間文化研究機構移管 10 周年記念式典
(2019 年 10 月 1 日, 国立国語研究所)



国立国語研究所創立 70 周年・人間文化
研究機構移管 10 周年記念シンポジウム
「国立国語研究所の果たすべき役割」
(2019 年 10 月 1 日, 国立国語研究所)



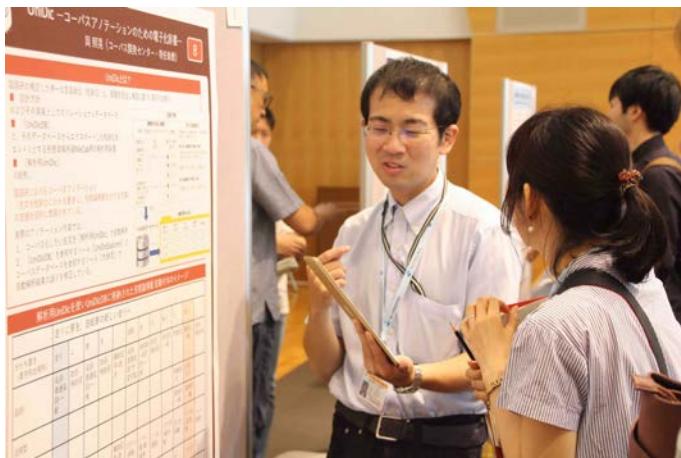
オーストリア科学アカデミー デジタル人文学・
文化遺産センターとの学術交流協定
(2020 年 3 月, オーストリア科学アカデミー)



国際シンポジウム「北京日本語学習者縦断
コーパス (B-JAS) の構築と応用研究」
(2019 年 10 月 20 日, 北京師範大学)



国際シンポジウム
「NINJAL ICPP 2019
(6th NINJAL International Conference on
Phonetics and Phonology)」
(2019年12月13–15日, 立川総合研究棟)



国立国語研究所オープンハウス 2019
(2019年7月20日, 国立国語研究所)



令和元年度国立国語研究所
日本語教師セミナー(海外)
「世界諸言語からみた日本語」
(2019年9月17–18日, サマルカンド国立外国語大学)
(2019年9月21–22日, ウズベキスタン日本センター)



令和元年度国立国語研究所
日本語教師セミナー(国内)
「顕在化する多言語社会日本と日本語教育」
(2020年2月15日, 立川総合研究棟)



第14回 NINJAL フォーラム
「私の日本語の学び方」
(2019年11月30日, 一橋大学一橋講堂)



第33回 NINJAL チュートリアル
「日本の言語の多様性」・「日本語の自然会話とディスコース・ポライトネス理論」
(2019年11月9-10日, 東吳大学〔台湾〕)



「令和元年度危機的な状況にある
言語・方言サミット (奄美大会)」
(2020年2月22-23日,
奄美市 AiAi ひろば・奄美文化センター)



ニホンゴ探検 2019—1日研究員になろう！
(2019年7月20日, 国立国語研究所)



令和元年度「こども霞が関見学デー」
(2019年8月7-8日, 文部科学省)



大学共同利用機関シンポジウム 2019:
宇宙・物質・エネルギー・生命・情報・人間文化
その謎に挑む
(2019年10月20日, 日本科学未来館)



立川市歴史民俗資料館共同企画講演会
「中世多摩の文字づかい
—板碑と經典文字からわかること—」
(2020年1月18日,
立川市女性総合センターAim)

目 次

2019年度年報の発刊に当たって	1
I. 概要	3
1. 沿革とミッション	4
2. 2019年度の活動の概略	4
3. 組織	6
(1) 組織構成図	6
(2) 運営組織	7
・運営会議	7
・外部評価委員会	7
・所内委員会組織	7
(3) 構成員	8
・所長・研究教育職員・特任研究員	8
・客員教員	9
・名誉教授	10
・プロジェクト PD フェロー	10
・外来研究員	10
4. 2019年度の予算および決算	12
II. 共同研究と共同利用	13
1. 共同研究プロジェクト	14
2. 人間文化研究機構基幹研究プロジェクト	32
3. 外部資金による研究	34
4. 2019年度公開中のコーパス・データベース	36
5. 学術刊行物	42
(1) 所員による著書・編書	42
(2) 国立国語研究所論集	43
6. 研究成果の発信と普及	44
(1) 国際シンポジウム	44
(2) 合同シンポジウム・研究発表会	82
(3) プロジェクトのシンポジウム・ワークショップ・研究発表会	86
(4) NINJAL コロキウム・ミニ講義	95
(5) NINJAL サロン	96
(6) 講習会・セミナー	98
7. センター・研究図書室の活動	101
(1) 研究情報発信センター	101
(2) コーパス開発センター	102
(3) 研究図書室	102
III. 国際的研究協力	105
1. 世界の大学・研究機関との提携	106
2. 国際シンポジウム・国際会議の開催	106
3. 日本語研究英文ハンドブック	106
4. 海外の研究者の招聘・受入	107
IV. 社会連携と広報	109
1. 消滅危機言語・方言の調査・保存・分析	110
2. 日本語コーパスの拡充	110

3. 第二言語（外国語）としての日本語教育研究	110
4. 地方自治体との連携	110
5. 見学・研修・視察等	110
6. 学会等の後援・共催	110
7. 広報	111
(1) 刊行物	111
(2) Web 発信等	112
(3) 一般向けイベント	112
(4) 児童・生徒向けイベント	113
V. 大学院教育と若手研究者育成	115
1. 連携大学院	116
2. 特別共同利用研究員制度	116
3. NINJAL チュートリアル	116
4. 優れたポストドクターの登用	116
VI. 教員の研究活動と成果	117
略歴, 所属学会, 役員・委員, 受賞歴, 参画共同研究, 研究業績（著書・編書, 論文・ブックチャプター, コーパス・データベース類, 展示など, その他の出版物・記事), 講演・口頭発表, 研究調査, 学会等の企画運営, 一般向けの講演・セミナーなど, その他の学術的・社会的活動, 大学院教育・若手研究者育成	
VII. 資料	207
1. 運営会議	208
運営会議規程	208
2019 年度の開催状況	208
運営会議の下に置かれる専門委員会	209
2. 評価体制	209
(1) 自己点検・評価委員会	210
(2) 外部評価委員会	210
(3) 基幹研究プロジェクトの評価	210
3. 所長賞	210
4. 研究教育職員の異動	212
VIII. 外部評価報告書	213
令和元年度業務の実績に関する外部評価報告書	215
1. 評価結果報告書	219
令和元年度「機関拠点型基幹研究プロジェクト・センターの研究活動」に関する評価結果	221
令和元年度「管理業務」に関する評価結果	304
2. 資料	309

2019年度年報の発刊に当たって

2019年度の年報をお届けします。2019年には国立国語研究所（以下「国語研」）の創立70周年、人間文化研究機構移管10周年事業を行い、この70年、10年の展望を行い、第4期の将来計画を見通す機会を持ちました。いよいよ来年度は第3期中期計画の最終年度、2022年4月1日からは第4期中期計画が始まります。第4期には第3期の「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」と題した共同研究をより発展させ、かつ、これから日本語研究の基盤となるような研究を行っていきたいと思います。国語研はこれまで言語研究の基礎となるデータの収集と整理・公開、その活用方法の提示を行ってきましたが、第4期ではこれから全世界的に高まっていくと予想されるオープンデータ・オープンサイエンスを進めていく予定です。国語研のこれまで蓄積してきたデータをデジタル化し、公開していく作業と並行して、日本中に眠っているデータを掘り起こして、アーカイビングしていきます。同時にそれらの利活用の新しい方法も提案する予定です。

現在、自然災害、火災、自然劣化などにより、日本各地に残るさまざまな言語資料がなくなっています。また、各地の祭礼、行事がなくなっていくと同時にそれにまつわる言葉もなくなっています。それらを支えてきた話者たちも高齢となり、学校教育、社会からの共通語化の圧力、異なる言語地域間の通婚など様々な要因で、地域話者の母語が次世代に継承する機会を失い、地域の言葉がなくなりつつあります。これらの言葉を文字記録だけでなく、音声・高解像度の映像として残して、次世代へつなげることが急務となっています。第3期には、多くの地域で、地域の言葉を記録し、残す作業を行ってきました。このような地域の言葉の記録は、第4期ではアーカイビングし、研究者だけでなく、次世代の話者たちが利用して、地域の言葉を学習したり、活性化したりできる仕組みを作ることが重要です。3期においては、その試みを若い世代の研究者が行ってきました。この年報でもそれらの成果の一部が見られるかと思います。

また、国語研では、現代言語理論を活用した研究も多く行われており、その成果は英語で出版されており、2019年度に公開された研究成果にも見ることができます。その代表的なものである *Mouton Handbooks of Japanese Language and Linguistics* 全12巻は、現在8巻までが公刊されており、3期の終わりまでには全巻完成する予定です。このシリーズは日本語に関する記述的、理論的研究がバランスよく掲載され、かつ、参加した著者による最先端の研究が紹介され、現在の世界の日本語研究の水準を示すものとなっています。

現在、大学共同利用機関の在り方をめぐって、さまざまな改革案が議論されています。これは、2022年から始まる第4期に向けて、それぞれの機関がどのような目標を持ち、どのようにそれらを実現していくのかを測る評価基準の策定に関わるものです。国語研も大学共同利用機関として、共同研究の中核的拠点としての役目を常に意識して研究を進めていかなければならぬでしょう。地域の活性化に寄与し、大学や地域をつないで、大学自体の活性化にも寄与できるような活動をしていく必要があるかと思います。同時にそれらの活動を世界中の研究機関との共同研究につなげ、日本の研究とその成果を発信して行く必要があります。

2019年の年報をご覧になると分かることと思いますが、国語研の研究はそのほとんどが共同研究プロジェクトからなります。基本的にはそれらは国語研メンバーがプロジェクトリーダーを務めますが、一部は外部の研究者による公募型の研究です。2019年度からは従来から行っている新領域創出型の公募研究に加えて、国語研の設備や資料を用いて行う共同研究を新設しました。国語研が70年間にわたり収集・整理してきた未公開資料などを利用しながら研究を行っていただくものです。これは単年度で行いますので次年度も公募されます。多くの応募をお待ちしています。

2021年3月
国立国語研究所長
田 窪 行 則

I

概要

1 沿革とミッション

沿革

国立国語研究所は、国語に関する総合的研究機関として1948（昭和23）年に誕生した。幕末・明治以来、国語国字問題は国にとって重要な課題であり、様々な立場からの議論がおこなわれてきた。第二次世界大戦の敗戦とその後の占領期は大きな転機となり、戦後、我が国が新しい国家として再生するに当たって、国語に関する科学的、総合的な研究をおこなう機関の設置が強く望まれるようになった。各方面の要望を受けて「国立国語研究所設置法」が昭和23年12月20日に公布施行され、国家的な国語研究機関である国立国語研究所の設置が実現したのである。その後、明治時代から大正、昭和初期にかけての日本語の混乱（漢字の激増や、文語と口語の違いなど）を収拾し日本語の安定化に資するという当初の設置目的が薄れるとともに旧国立国語研究所は廃止され、2009（平成21）年10月1日に大学共同利用機関法人人間文化研究機構の下に設置された。現在、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所、国立民族学博物館に次ぐ6番目の研究機関として再発足し、日本語および関連する領域の学術研究機関として活発な活動を展開している。

ミッション

国立国語研究所は、日本語学・言語学・日本語教育の国際的研究拠点として、国内外の大学・研究機関と連携することによって大規模な共同研究を全国的・国際的に推進し、共同研究から得られた各種の成果や学術情報を研究者コミュニティと一般社会に提供することで、日本語と人間文化の新しい研究領域を開拓することを実質的なミッションとしている。そのため、大学共同利用機関への移行にあたっては、研究所の英語名称“linguistics”（言語学）という言葉を加え、National Institute for Japanese Language and Linguistics（「日本語と日本言語言語学の国立研究所」、略称NINJAL（ニンジャル））とした。言語学・日本語学とは、日本語を人間言語のひとつとして捉え、ことばの研究をとおして人間文化に関する理解と洞察を深めることを意図した学問であり、そこには、当然のことながら、「国語及び国民の言語生活、並びに外国人に対する日本語教育」（設置目的）に関する研究が含まれる。

日本語の研究を深めることは、究極的には日本という国を発展させることにつながる。私たちの財産である日本語を将来に引き継ぎ、発展させていくことが国立国語研究所の役割である。

2 2019年度の活動の概略

国立国語研究所では、国内外の諸大学・研究機関と連携して、個別の大学ではできないような研究プロジェクトを全国的・国際的規模で展開しているが、第三期中期計画の6年間においてそれらの土台となるのは「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」という第三期機関拠点型プロジェクトの研究目標である。この目標の達成に向けて2016年度に研究領域に設けられた合計6件の共同研究プロジェクトとコーパス開発センターでの研究テーマのもとに、引き続き数々の共同研究プロジェクトを実施した。

日本語研究の国際化に向けては、外国人研究者を専任教員、客員教員、共同研究員として招聘するとともに、中国・北京日本学研究センター、台湾・中央研究院語言學研究所等、アジアで10機関、英国・オックスフォード大学人文科学、米国・ミシガン大学日本研究センター等欧米で4機関との協定に加え、新たにスリランカ・ケラニア大学日本学研究センター、オーストリア・オーストリア科学アカデミーデジタル人文学センターとの学術交流協定を締結した。また、言語学分野で定評のあるドイツ・De Gruyter Mouton社との協定による日本語研究英文ハンドブックシリーズ（全12巻）については、順次刊行している（既刊は7巻、2020年度中に1巻追加）。

オープンデータにもとづく日本語研究の国際化を推進するために、ウェブページやコーパス・データベースの解説、調査報告書を英語で公開するとともに、日本語データを国際音声記号やローマ字で公開した。ま

た、日本語学的・言語学的にパイオニア的価値を持つが、これまで世界に知られていなかった日本語論文を英訳し、「先駆的名論文翻訳シリーズ」として国立国語研究所学術情報リポジトリで公開した。

学術研究により得られた多くの成果物を電子化し、ウェブサイト上で公開している。専門家向けに『国立国語研究所論集』などの刊行物、一般向けに『ことばの波止場』、『NINJAL フォーラムシリーズ』などの冊子、研究資料・研究材料として7点のコーパス・データベースを新規公開、24点のコーパス・データベースを追加・拡充した。コーパスの一部はオンライン検索システムを通して無償公開されており、大学の授業で利用するための講義用アカウント発給システムも整備した。これにより検索数は105万件以上(前年度比20%増加)となるなど、共同利用による大学等の研究・教育力強化への貢献を拡大している。

さらに対象者別に、国際シンポジウム、コロキウム、チュートリアル、フォーラム、セミナー、ニホンゴ探検など、種類の異なるイベントを多数開催した。

異分野と融合した新学術領域研究の創成のために、時間概念を生み出すこころの仕組みを探る新学術領域研究「時間生成学」、機構間連携・異分野連携研究プロジェクト「知性と認識の情報神経物理学」に参画し、言語表現から出来事の時間的順序関係を出力する人工神経回路を構築するとともに、脳活動データと対照するうえで必要な言語資源を提供した。

言語資源を活用した異分野融合研究の推進のために、日本IBM、NTTコミュニケーション科学基礎研究所、リクルート社、国立情報学研究所(情報・システム研究機構)、東京大学および京都大学と連携し、言語横断的な係り受け構造を設計する国際的な取組Universal Dependencies(係り受けのデータベース)に関する研究を引き続き推進し、共同研究成果の学習済みモデルが組み込まれた日本語の自然言語処理ライブラリ「GiNZA」が(株)リクルートMegagon Lab.から公開されるなど、自動翻訳を含む自然言語処理技術の発展に貢献した。

地方自治体との連携による地域社会への研究成果還元の一環として、宮崎県椎葉村との協定に基づき、村と共同で『宮崎県椎葉村方言語彙集』の作成を進めるとともに、鹿児島県沖永良部島和泊町、知名町における地域言語復興活動、鹿児島県薩摩川内市甑島における方言の講演会を実施した。

2020年2月には、日本の危機言語・方言の記録・継承を目的として、文化庁や鹿児島県等と連携し開催した「危機的な状況にある言語・方言サミット(奄美大会)」にアイヌ語から与那国語に至る日本各地の言語および北欧のサーミ語の保存・継承に携わる人々が参加し、活動報告や意見交換をおこなった。1日目はのべ約600名、2日目はのべ約750名参加した。

展示を通した最先端の言語研究成果を社会へ発信するために、八丈島の方言動画を3本作成したほか、可搬型展示ユニットを与論町生涯学習フェア・文化祭、東京外国語大学等で展示した。また、ハワイに関する企画展示(歴博)、比嘉太郎に関する展示(沖縄県北中城村、沖縄県立図書館、沖縄県公文書館)を開催し、ネットワーク型共同研究の成果を社会に発信した。

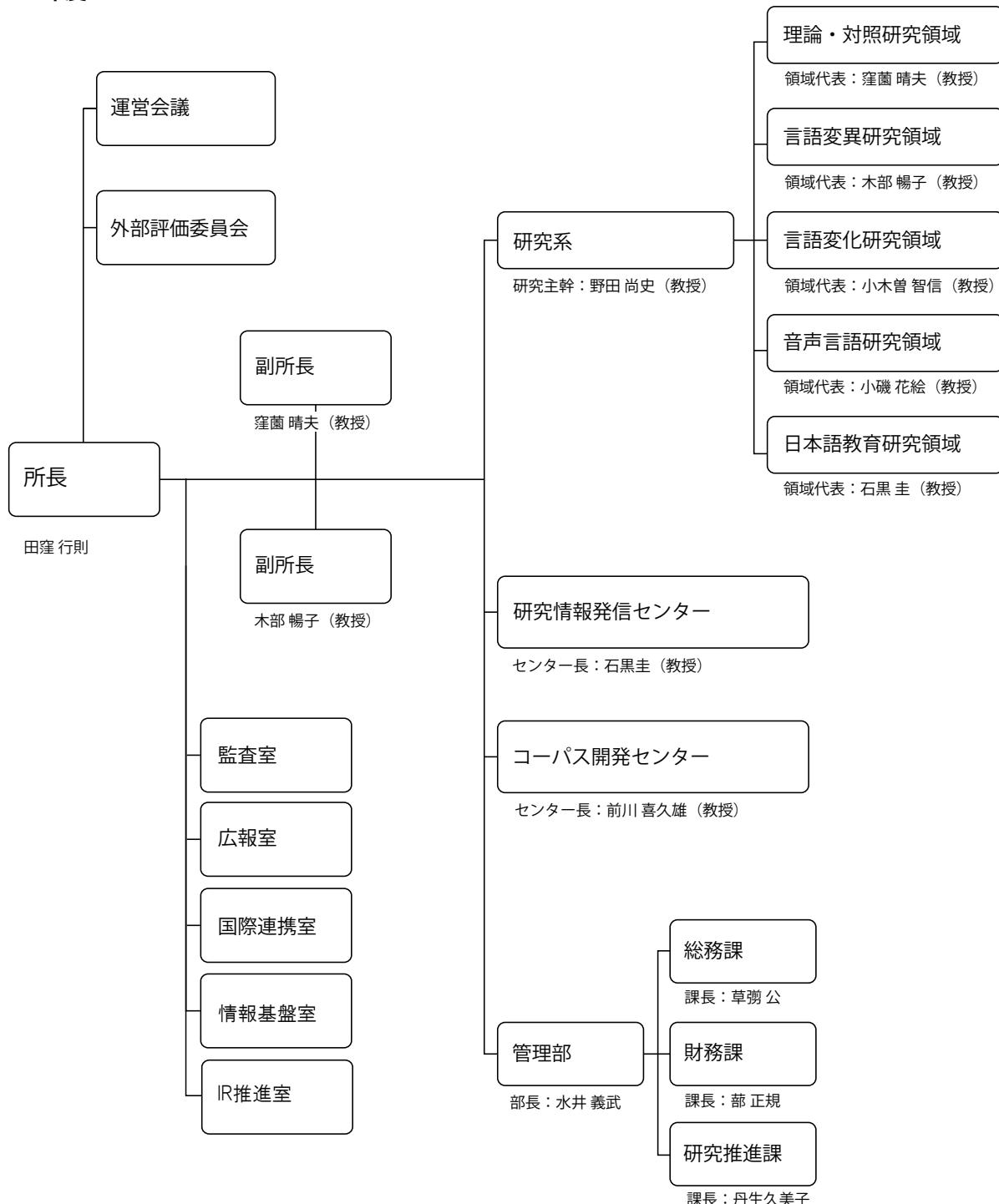
日本語教育水準の向上のため、大学等研究機関と連携して、日本語教師・研究者を対象とするセミナー「NINJAL 日本語教師セミナー」を国内で1回、海外で2回開催し、合わせて計154名の日本語教育のスキルアップに貢献した。特に、海外においては、ウズベキスタン・国立サマルカンド外国語大学およびウズベキスタン日本センターと連携してセミナーを開催し、合わせて90名の参加があった。

活動・成果の詳細は各項目をご覧いただきたい。

3 組織

(1) 組織構成図

2019 年度



(2) 運営組織

運営会議

(外部委員)

伊東祐郎	国際教養大学専門職大学院教授
上野善道	東京大学名誉教授
吳人惠	富山大学人文学部教授
近藤泰弘	青山学院大学文学部教授
樋口知之	中央大学理学部経営システム工学科教授
福井直樹	上智大学大学院言語科学研究科教授 / 国際言語情報研究所所長
益岡隆志	関西外国语大学外国语学教授
馬塚れい子	理化学研究所脳科学総合研究センターシニア・チームリーダー

(内部委員)

木部暢子	副所長 / 教授
窪薙晴夫	副所長 / 教授
野田尚史	研究主幹 / 教授
石黒圭	研究情報発信センター長 / 研究系 / 教授 (2018年4月1日-)
前川喜久雄	コーパス開発センター長 / 研究系 / 教授
小木曾智信	教授

任期: 2017年10月1日-2019年9月30日 (2年間)

任期: 2019年10月1日-2021年9月30日 (2年間)

外部評価委員会

上山あゆみ	九州大学教授
沖裕子	信州大学教授
小野正弘	明治大学教授
片桐恭弘	公立はこだて未来大学学長
坂原茂	東京大学名誉教授
砂川裕一	国際交流基金日本語国際センター所長
橋田浩一	東京大学教授
森山卓郎	早稲田大学教授

任期: 2018年10月1日-2020年9月30日 (2年間)

所内委員会組織

・連絡調整会議 (所長, 専任研究教育職員, 管理部長)

連絡調整会議のもとに, 各種委員会を設置

▶ 管理運営関係

- 自己点検・評価委員会
- 情報セキュリティ委員会
- 情報基盤運用委員会
- 知的財産委員会
- 情報公開・個人情報保護委員会
- ハラスメント防止委員会
- 研究倫理委員会
- 施設・防災委員会
- 研究図書室運営委員会
 - 選書部会
- 将来計画委員会

- ・学術・発信関係
 - コーパス開発センター運営委員会
 - 研究情報発信センター運営委員会
 - 広報室運営委員会
 - 研究情報誌編集委員会
 - 論集編集委員会
- ・共同研究プロジェクト推進会議
- ・安全衛生管理委員会
- ・創立記念事業実施委員会

(3) 構成員

所長

田窪行則 理論言語学, 韓国語, 琉球諸語, 言語ドキュメンテーション, 危機言語

教育研究職員・特任研究員

- ・理論・対照研究領域
 - 領域代表 / 教授
窟蘭晴夫 言語学, 日本語学, 音声学, 音韻論, 危機方言
 - 教授
Prashant Pardeshi 言語学, 言語類型論, 対照言語学
松本曜 意味論, 認知言語学
 - 准教授
窪田悠介 理論言語学 (統語論, 意味論)
- ・言語変異研究領域
 - 領域代表 / 教授
木部暢子 日本語学, 方言学, 音声学, 音韻論
 - 准教授
朝日祥之 社会言語学, 言語学, 日本語学
井上文子 方言学, 社会言語学
熊谷康雄 言語学, 日本語学
山田真寛 言語学, 形式意味論, 言語復興
 - 特任助教
青井隼人 言語音声学, 音韻論, 琉球語学
麻生玲子 言語学, 記述言語学, 琉球諸語, 八重山語, 波照間方言
籠宮隆之 音声科学
新永悠人 記述言語学, 琉球諸語
中川奈津子 コーパス言語学, 方言学
- ・言語変化研究領域
 - 領域代表 / 教授
小木曾智信 日本語学, 自然言語処理
 - 教授
大西拓一郎 方言学, 言語地理学, 日本語学
山崎誠 日本語学, 計量日本語学, 計量語彙論, コーパス, シソーラス
横山詔一 認知科学, 心理統計, 日本語学
 - 准教授
高田智和 日本語学, 国語学, 文献学, 文字・表記, 漢字情報処理

新野直哉	言語学, 日本語学
・特任助教	
間淵洋子	日本語学, 日本語史, 計量言語学, コーパス言語学
・音声言語研究領域	
・領域代表 / 教授	
小磯花絵	コーパス言語学, 談話分析, 認知科学
・教授	
前川喜久雄	音声学, 言語資源
・准教授	
柏野和佳子	日本語学
山口昌也	情報学, 知能情報学, 科学教育・教育工学, 言語学, 日本語学
・日本語教育研究領域	
・領域代表 / 教授	
石黒圭	日本語学, 日本語教育学
・教授	
宇佐美まゆみ	言語社会心理学, 談話研究, 語用論, 日本語教育学
野田尚史	日本語学, 日本語教育学
・准教授	
野山広	応用言語学, 日本語教育学, 基礎教育保障学, 社会言語学, 多文化・異文化間教育, 言語政策・計画研究
・研究員	
福永由佳	日本語教育学, 社会言語学, 多言語使用, 識字, 移民に対する言語教育政策
・コーパス開発センター	
・教授	
浅原正幸	自然言語処理
・特任助教	
石本祐一	音声工学, 音響音声学
岡照晃	計算言語学, 自然言語処理

客員教員 (2019 年度在籍者)

・客員教授	
・理論・対照研究領域	
Wesley M. JACOBSEN	ハーバード大学教授
岸本秀樹	神戸大学教授
小泉政利	東北大学教授
斎藤衛	南山大学教授
John WHITMAN	コーネル大学教授
宮田 Susanne	愛知淑徳大学教授
吉本啓	東北大学教授
・言語変異研究領域	
狩俣繁久	琉球大学教授
新田哲夫	金沢大学教授
佐々木冠	立命館大学教授
渋谷勝己	大阪大学教授
岩崎勝一	カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授
長田俊樹	総合地球環境学研究所名誉教授
五十嵐陽介	一橋大学教授

・言語変化研究領域	
金水敏	大阪大学教授
青木博史	九州大学准教授
橋本行洋	花園大学教授
・音声言語研究領域	
伝康晴	千葉大学教授
大野剛	アルバータ大学教授
菊地英明	早稲田大学教授
丸山岳彦	専修大学教授
・日本語教育研究領域	
砂川有里子	筑波大学名誉教授
迫田久美子	広島大学特任教授
糀山洋介	南山大学教授
今井新悟	早稲田大学教授
・客員准教授	
理論・対照研究領域	
秋田喜美	名古屋大学准教授
言語変異研究領域	
下地理則	九州大学准教授
Anna BUGAEVA	東京理科大学准教授

名誉教授

角田太作	2012.4.1 称号授与
John WHITMAN	2015.10.1 称号授与
迫田久美子	2016.4.1 称号授与
Timothy VANCE	2017.4.1 称号授与
影山太郎	2017.10.1 称号授与
相澤正夫	2019.4.1 称号授与

プロジェクト PD フェロー (2019 年度在籍者)

平田秀	理論・対照研究領域
井戸美里	理論・対照研究領域
鈴木彩香	理論・対照研究領域
大島一	言語変異研究領域
松崎安子	言語変化研究領域
宮部真由美	日本語教育研究領域
蒙榎	日本語教育研究領域

外来研究員

林由華 (日本学術振興会特別研究員 (PD), 受入教員: 木部暢子)

「琉球諸語および八丈語の諸方言における係り結びの類型化と機能の解明」 (2017.4–2020.12)

下地美日 (日本学術振興会特別研究員 (PD), 受入教員: 木部暢子)

「方言研究と古代日本語研究の融合による日本語格配列システムの解明」 (2017.4–2019.9)

横山晶子 (日本学術振興会特別研究員 (PD), 受入教員: 木部暢子)

「危機言語の継承に向けた実践的研究—琉球沖永良部語を事例に—」 (2017.4–2020.6)

松井真雪 (日本学術振興会特別研究員 (PD), 受入教員: 窪菌晴夫)

「音声パターンの共時的不均衡性と通時変化の接点」 (2017.4–2020.3)

- 陳朝陽 (湖北第二師範学院 (中国) 副教授, 受入教員: 宇佐美まゆみ)
「対人配慮行動の日中対照研究—「ディスコース・ポライティクス理論」の観点から—」(2018.10–2019.12)
Kristina Hmeljak (リュブリヤナ大学 (スロベニア) 助教授, 受入教員: Prashant Pardeshi)
“Readability and typicality of pedagogically valid Japanese word usage example” (2018.11–2019.11)
Andrej Bekes (リュブリヤナ大学 (スロベニア) 名誉教授, 受入教員: 石黒圭)
「初級・中級のための日本語文法教育へのテクスト・談話の視点の応用」 (2018.12–2019.11)
山本恭裕 (日本学術振興会特別研究員 (PD), 受入教員: 窪薙晴夫)
「イロカノ語諸方言の空間表現の文法: 意味と言語使用に基づく言語記述研究」 (2019.4–2020.3)
増田恭子 (ジョージア工科大学教授, 受入教員: Prashant Pardeshi)
“Characterizing difficult aspect items through a usage-based approach in Japanese-as-second-language” (2019.5–2020.4)
伊藤順子 (カリフォルニア大学教授, 受入教員: 窪薙晴夫)
「日本語のピッチアクセント体系の類型」 (2019.6–2019.12)
Armin Mester (カリフォルニア大学教授, 受入教員: 窪薙晴夫)
「日本語のピッチアクセント体系の類型」 (2019.6–2019.12)
玉栄 (内モンゴル大学教授, 受入教員: 前川喜久雄)
「データベースを利用したモンゴル語の韻律特徴の分析」 (2019.6–2019.12)
玉村禎郎 (京都産業大学教授, 受入教員: 山崎誠)
「日本語語彙の計量的研究」 (2019.7–2021.6)
張秀娟 (華南農業大学講師, 受入教員: 石黒圭)
「日中分裂文の翻訳に見られる母語干渉」 (2019.7–2019.8)
楊超時 (北京外国语大学助教授, 受入教員: 高田智和)
「近代日本語における三字語の語彙化について」 (2019.7–2019.8)
蘇克保 (東吾大学准教授, 受入教員: 窪薙晴夫)
「台湾人日本語学習者発音指導について—日本語母語話者の聴覚許容度を中心に—」 (2019.9–2020.8)
ANDREEV Anton Stoytchev (聖クリメント・オフリドスキー・ソフィア大学准教授, 受入教員: 窪薙晴夫)
「日本語とブルガリア語の音韻・音声に関する対照研究」 (2019.9–2020.3)
Tamara V. Rathcke (ケント大学上級講師, 受入教員: 窪薙晴夫)
“Rhythm perception and sensorimotor synchronisation by Japanese listeners” (2020.1–2020.3)
George Tsoulas (ヨーク大学教授, 受入教員: 窪田悠介)
“The Comparative Grammar of Particles” (2020.2–2020.3)

国立国語研究所の2019年度の予算および決算を下表に示す。

(単位:千円)

	予算額(当初)	決算額
収入	1,112,805	1,275,246
運営費交付金	1,090,228	1,169,363
版権料	0	29,791
科学研究費補助金等間接経費収入	14,628	69,845
その他雑収入	1,201	1,383
寄附金収入	4,455	1,800
受託研究等収入	0	0
受託事業等収入	2,293	3,064
支出	1,112,805	1,244,506
研究経費	18,455	11,808
共同利用経費	442,752	475,218
教育研究支援経費	40,599	41,689
人件費	516,696	566,593
一般管理費	92,010	147,368
受託研究経費	0	0
受託事業経費	2,293	1,830

II

共同研究と共同利用

本章では、共同研究活動として、(1)各種の共同研究プロジェクト、(2)人間文化研究機構基幹研究プロジェクト等、および(3)外部資金による研究をまとめるとともに、共同利用のための成果として、(4)2019年度公開中の各種コーパス・データベース、(5)学術刊行物、(6)研究成果の発信・普及のための国際シンポジウム、研究系の合同発表会、プロジェクトの発表会、コロキウム、サロンなどの催し、および(7)センター・研究図書室の活動状況を掲げる。

1 共同研究プロジェクト

第3期中期計画における国語研全体の研究課題は「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」である。これを達成するため、5研究領域とコーパス開発センターでは共同研究プロジェクトを展開している。共同研究プロジェクトは、プロジェクトリーダーを中心とし、国内外の共同研究員の参画によって成り立っており、研究領域・センター間、プロジェクト間で連携しながら研究を進めている。また、この研究課題は、国語研が所属する人間文化研究機構における、機関拠点型基幹研究プロジェクトの1つとして位置付けられている。

2019年度は、「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」のプロジェクトとして基幹型(6件)、領域指定型(5件)、および新領域創出型(5件)、共同利用型(12件)の4タイプと、コーパス基礎研究(1件)を実施した。

なお、基幹型プロジェクトの概要については、『大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所令和元年度業務の実績に関する外部評価報告書』の各プロジェクト・センターの評価から抜粋した。詳細は、第VIII章を参照。

(1) 【基幹型】6件

基幹型プロジェクトは、国語研における研究活動の根幹となる大規模なプロジェクトで、日本語の全体像の総合的解明という学術的目標に向けて研究所が総力を結集して取り組むものである。5研究領域の専任教員のリーダーシップのもと、国内外の研究者・研究機関との協業により全国的、国際的レベルで展開している。

- ・対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法
- ・プロジェクトリーダー：窪薙晴夫(理論・対照研究領域・教授)
- ・研究期間：2016.4–2022.3.

《研究目的および特色》

日本語の研究は日本国内に長い伝統と優れた成果を有している一方で、他の言語と相対化させる努力が十分ではなく、(i)世界諸言語の中で日本語がどのような言語であるのか、(ii)一般言語学・言語類型論の視点から見ると、日本語の分析にどのような知見が得られるのか、(iii)日本語の研究が世界諸言語の研究や一般言語学・言語類型論にどのように貢献するのか、いまだ十分に明らかにされたとは言えない。現代の日本語研究に求められているのは、日本語の研究が世界諸言語の研究、とりわけ一般言語学や言語類型論研究にどのように貢献できるのかという「内から外を見る」視点と、一般言語学や言語類型論研究が日本語の分析にどのような知見をもたらすかという「外から内を見る」視点である。

本プロジェクトは、この両視点から日本語の言語事実を分析することにより、日本語(諸方言を含む)を世界の諸言語と対照させて日本語の特質を明らかにし、それにより日本語研究の国際化を図ることを主たる目的とする。日本語の音声・音韻、語彙・形態、文法、意味の構造を、言語獲得(第一言語獲得、第二言語習得)はもとより、言語に関する他の学問分野(心理学、認知科学他)との接点・連携をも視野に入れて、対照言語学・言語類型論の観点から分析することにより、諸言語間に見られる類似性(普遍性)と相違点(個別性・多様性)を明らかにする。このような対照研究を通じて得られた研究成果を国内外に向けて発信する。

上記の目的を達成するために、本プロジェクトは音声・音韻特徴を分析する音声研究班と、形態・文

法・意味構造を分析する文法研究班の2つの研究班（サブプロジェクト）を組織する。音声研究班は「語のプロソディーと文のプロソディー」を主テーマに、文法研究班は「名詞修飾表現」「とりたて表現」「動詞の意味構造」の3つをテーマに研究を進める。ともに海外の研究者との国際共同研究と国際シンポジウムの開催・誘致を軸に、論文集（英文、和文）の刊行や、アジアを中心とする諸言語の構造の異同を可視化する言語地図（電子媒体）の刊行を目指す。

《2019年度の主要な成果》

1. 研究

対照言語学研究を推進するために、国内研究者22人を共同研究員として追加し、国内外あわせて155人の組織で事業を遂行した。4つの研究班ごとの公開研究発表会を計11回（国内学会でのワークショップ2回を含む）、4班合同の発表会（Prosody and Grammar Festa 4）を1回、国際シンポジウム・ワークショップを8件開催した。これら20件の企画において計559件の研究発表が行われ（うち学生が筆頭発表者のもの169件）、計1369人（延べ）の参加者が得られた（うち海外機関研究者508人、大学院生を含む学生420人）。国際シンポジウム・ワークショップのほとんどは国内外の機関（理化学研究所、日本音声学会、ソウル大学、カリフォルニア大学、北京師範大学、デкан大学、ムンバイ大学、国際認知言語学会）との共同事業として立案・実施したものである。またプロジェクト全体で図書6冊、論文65編（ブックチャプター29編含む）、学術発表・講演110件（一般向け除く）を公開・刊行した（いずれもプロジェクトへの謝辞を記したもののみ）。このうちプロジェクトの所内メンバー（教員5名）は2冊の図書（研究論文集1冊、概説書1冊）、論文15編を刊行し、さらに7冊の研究論文集の編集を行った。

2. 共同利用・共同研究

前年度に締結した学術交流協定に基づき、神戸大学大学院人文学研究科とKobe-NINJAL-Oxford言語学コロキウム「日本語研究の最前線」（令和1年7月21日、神戸大学）と上記のProsody and Grammar Festa 4をともに共同開催した。また平成31年1～3月に構築した言語地図作成用のデータベースを利用し、名詞修飾表現の言語地図の試作版を構築し、β版を内部公開した。文献目録については、諸言語の移動動詞に関する文献目録（英文）の増補版（ver. 3.2）と、鹿児島県甑島方言の研究文献目録（和文）をそれぞれ公開した。この他、国際シンポジウムの開催や出版企画についてアドバイザリーボードのメンバーに意見を求め、その意見をテーマや招待講演者の選定、出版企画の立案に活用した。

3. 教育

若手育成としてPDフェローを2人雇用し、学振PD2人を外来研究員として受け入れ、それぞれ研究指導を行った。またプロジェクト全体で6人の非常勤研究員を雇用し、対照言語学の事業を推進した。さらに大学院生8人、学振PD4人を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、プロジェクト主催の発表会等で研究発表の機会を与えた。また研究発表会や国内／国際シンポジウム・ワークショップ等において延べ169人の大学院生（筆頭発表者）に発表の機会を与え、大学院生20人に対して発表旅費を支援し、加えて計3名の大学院生に対して言語調査の旅費を援助した。

4. 社会との連携及び社会貢献

プロジェクト全体で地域社会と連携した講演を計5件、それ以外の講演を2件行った（プロジェクトへの謝辞を記したもののみ）。このうち所内メンバー（教員5名）は鹿児島県薩摩川内市と交わした連携協定に基づき、同市・甑島の全小学校（5校）において小学生・教員・地元住民を対象として方言講演会を開催し、計298人（小学生156人、教員・一般142人）の参加者を得た。また東京言語研究所主催の小学校～大学教師向けのワークショップ（『教師のためのことばワークショップ』）などにおいて日本語に関する講演を行った。

5. グローバル化

国内外において合計8件の国際シンポジウム・ワークショップ等を開催し、合計941人の参加を得た。このうち国内では国際シンポジウム Learning Sounds of Asian Languages（理化学研究所脳神経科学研究センタープロジェクトと共に）、6th International Conference on Phonetics and Phonology（ICPP 2019、カリフォルニア大学と共に）、Pre-IPP Workshop（日本音声学会と共に）、15th International Cognitive Linguistics Conference（国際認知言語学会と共に）、ワークショップ Lectures on the Japanese language

from cognitive/typological perspectives の 5 件を開催した。海外ではソウル大学との学術交流協定に基づき国際ワークショップ JK 27 Satellite and the 1st NINJAL-SNU Joint Workshop (ソウル大学) を共催し、またインドのプネーで International Workshop on nominalization and noun modification, ムンバイで公開講演会 “What is nominalization? —Towards the theoretical foundations of nominalization” をそれぞれ開催した。海外の日本語研究者を対象とした NINJAL 日本語学講習会を 4ヶ国(中国、インド、ミャンマー、カンボジア)の計 5ヶ所で開催し、合計 236 名の参加者を得た。また人的交流として海外の研究者 5 人を外来研究員として受け入れた。プロジェクト全体では 48 件、国際会議で研究成果を発表した。このうち所内メンバー(教員 5 名)は 2019 Joint Conference of Linguistic Societies in Korea (慶熙大学), Neglected Aspects of Motion Event Description (NAMED) 2019 (パリ高等師範学校), 上海外國語大学創立 70 周年記念「新しい時代における日本言語文学研究フォーラム」などにおいてそれぞれ招待講演・基調講演を行った。

・共同研究員数: 134 名

・共同研究員所属機関:

放送大学、九州大学、金沢大学、京都大学、大阪大学、東京大学、一橋大学、室蘭工業大学、神戸大学、筑波大学、熊本大学、琉球大学、東京外国語大学、名古屋大学、富山大学、新潟大学、愛知教育大学、北海道大学、東京農工大学、岐阜大学、鳴門教育大学、宮崎大学、三重大学、お茶の水女子大学、弘前大学、国立民族学博物館、熊本県立大学、島根県立大学、公立小松大学、大阪府立大学、東京都立大学(首都大学東京)、前橋工科大学、京都産業大学、慶應義塾大学、北星学園大学、同志社大学、早稲田大学、上智大学、法政大学、大東文化大学、大阪保健医療大学、福岡大学、聖心女子大学、京都外国語大学、東京理科大学、麗澤大学、美作大学、獨協大学、京都外国語短期大学、亜細亜大学、立命館大学、関西外国語大学、神田外語大学、安田女子大学、実践女子大学、神奈川大学、慶應義塾大学、関西大学、南山大学、国際基督教大学、名古屋学院大学、志學館大学、聖学院大学、駿河台大学、理化学研究所、防衛大学校、神戸市立工業高等専門学校、カリフォルニア大学バークレー校、カリフォルニア大学ロサンゼルス校、カリフォルニア大学サンタクルズ校、ルンド大学、徳成女子大学校、韓国外国語大学、国立東洋言語文化大学、マサリク大学、スタンフォード大学、ライス大学、チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学、アンカラ大学、ネワール言語文化研究所

・統語・意味解析コーパスの開発と言語研究

・プロジェクトリーダー: Prashant PARDESHI (理論・対照研究領域・教授)

・研究期間: 2016.4–2022.3.

《研究目的および特色》

現在世界の主要言語について Penn Treebank 方式の統語解析情報付きコーパス(ツリーバンク)が作られ、言語学および言語処理の研究に目覚ましい成果を挙げている。しかし日本語については十分な規模の公開されたツリーバンクは存在しない。

本プロジェクトでは、上記のような日本語研究の遅れを挽回し、多様な日本語の機能語、句、節および複雑な構文を大量の言語データから検索・抽出して研究することを可能とする統語・意味解析情報付き日本語構造体コーパス NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ)・Keyaki Treebank/Kainoki Treebank/Kusunoki Treebank の構築に加えて、述語項構造解析のために必要となる意味役割情報を付与するコーパスの開発も試みる。さらに、このコーパスを利用して日本語の研究を行い、その成果を国内外に向けて発信する。コーパスの共同利用推進の一環として、最終年度までに 5~6 万文規模のコーパスを完成させる予定であり、言語処理の技術を持たない人でも簡単に利用できるインターフェースとともに、国立国語研究所のホームページから一般公開する。また、日本語に堪能でない海外の研究者にも本コーパスを利用できるようにローマ字版も用意する。

上記の目的を達成するために、本プロジェクトでは、日本国内外の研究者から構成される研究班に加えて国立国語研究所、東北大学、神戸大学にコーパス開発班を設け、それらの班が相互に連携しながら開発と研究を進める。また、日本語研究の国際化を目指して、世界のコーパス言語学研究の最前線で活躍している海外の研究者および日本国内の中堅研究者で Advisory Board を構成し、このメンバーのア

ドバイスを中心に諸企画の方針・方向を決定し、国際的研究ネットワークの構築を図る。また、国際シンポジウムなどを開催し、その成果を海外の定評のある出版社・研究雑誌を通じて発信する。

《2019年度の主要な成果》

1. 研究

統語・意味解析コーパスの開発と言語研究を推進するために、プロジェクト共同研究者47人（アドバイザーを含む、うちPDフェロー1名、大学院生5名）の組織でコーパス開発とコーパスに基づく言語研究を遂行した。公開研究発表会を計2回開催し、さらに学会におけるワークショップおよびシンポジウムをそれぞれ1回、企画・開催し、国内外で個別発表も行った。これらの企画において計20件の研究発表が行われ、6件の論文が刊行された。また、①NINJAL国際シンポジウムExploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing（2017年度）および②NINJAL国際シンポジウムMimetics in Japanese and other language of the world（2016年度）の研究成果が海外の著名な出版社から刊行された。加えて、NINJAL国際シンポジウムのMYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES（2013年度）の研究成果の編集作業が終了し、Oxford University Pressによるレビューを経て刊行することが決定した（“Verb-Verb Complexes in Asian Languages”）。さらに、日本語統語論の教育に特化したAnalyzing Japanese Syntax: A Generative Perspectiveの執筆（岸本著）が終了し、この教材の練習問題を、NPCMJコーパスを利用して解くための仕組み（試作版）の開発が完了した。書籍の刊行に合わせて公開する予定である。

共同研究者の宮田Susanne教授の主導するCHILDES（Child Language Data Exchange System）と連携し、①日本語を第一言語として獲得する幼児の発話データへの統語意味解析情報付与のための研究、②CHILDESの仕組みを利用したNPCMJに対する精密な形態論情報付与に関する研究を開始した。①の具体例として、大久保（1967）のデータにアノテーションを付与し、CHILDESでNINJAL-Okuboデータとして公開した。さらに、岡山大学竹内研究室と連携し、公開中のNPCMJコーパスの一部のデータに意味役割とフレームの情報を付加し、内部公開した。今後確認・修正などを経て一般公開する予定である。

2. 共同利用・共同研究

国内外の主要研究者から成るアドバイザリーボードと相談しながらアノテーションの質的な拡充を行った。共同利用の推進のために、コーパスの構築の面において、NPCMJコーパスに新たなデータ1万文を追加し、総データ量を4万文に増やし、公開した（2017年の公開から2020年3月25日現在のアクセス統計：ユーザー数11,940、ページビュー数250,503[Google Analytics統計]）。また、コーパスの利用を推進するためにNPCMJコーパス利用講習会を国内の大学で2回開催した。これらの講習会に51名の参加者（うち大学院生を含む学生17名）があった。さらに、日本語学習者のコミュニケーション（リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ）、科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し、「文型バンク」の開発・公開を進めた。初級の文型200件に意味解説を追加し、インターフェースとともに公開した。大久保（1967）のデータにアノテーションを付与し、CHILDESでNINJAL-Okuboデータとして公開した。

3. 教育

PDフェロー一人、および大学院生5名を非常勤研究員として雇用し、アノテーション作業や共同研究における発表の機会を提供することによって若手研究者を育成した。また、研究所で雇用されている非常勤研究員の国内外での学会発表の経費を援助した。さらに、統語コーパス利用講習会を2回開催し、コーパス利用に関するノーカウを提供した。

4. 社会との連携及び社会貢献

NPCMJコーパスをオンラインで公開し、研究に目的を絞らない、幅広い層の人々からの利用促進に努めた。インターフェースの開発だけでなく、オンラインドキュメンテーション、ユーザーズマニュアルを充実させ、コーパスにより容易にアクセスができるようにした。

5. グローバル化

国際シンポジウム3件（Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Process-

ing, MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES, Mimetics in Japanese and other language of the world) の研究成果の編集作業を進め, 3件のうち2件が刊行され, 残る1件も Oxford University Press から刊行することが決まった。国際会議において研究成果を2件発表した。また, 日本語の統語論の教育に特化した Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective の執筆を完了させ, 出版社に入稿し, 念校の確認まで作業を進めた(来年度刊行予定)。加えて, NPCMJ コーパスの漢字仮名交じりデータをローマ字化した形でも公開している。また, 検索インターフェースを含めたウェブサイトはすべて日本語と英語の2言語で作成されている。

・共同研究員数: 37名

・共同研究員所属機関:

神戸大学, お茶の水女子大学, 名古屋大学, 東北大学, 鳥取大学, 弘前大学, 東京大学, 岡山大学, 東京外国语大学, 国立情報学研究所, 国際教養大学, 関西外国語大学, 実践女子大学, 早稲田大学, 立命館大学, 愛知淑徳大学, 同志社大学, 南山大学, 駿河台大学, マサチューセッツ工科大学, ヨーク大学, ペンシルベニア大学, マサチューセッツ大学アマースト校, デラウェア大学, コーネル大学

・日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成

・プロジェクトリーダー: 木部暢子(言語変異研究領域・教授)

・研究期間: 2016.4-2022.3.

《研究目的および特色》

本プロジェクトは, 日本の消滅危機言語・方言の記録・分析・継承を目的として, 各地の言語・方言の調査を実施し, 言語資源の整備・分析を行うとともに, 言語・方言の継承活動を支援して地域の活性化に貢献することを目的とする。

近年, 世界的な規模でマイナー言語が消滅の危機に瀕している。2009年, ユネスコは世界の危機言語リストを発表したが, その中には日本で話されている8つの言語—アイヌ語, 与那国語, 八重山語, 宮古語, 沖縄語, 国頭語, 八丈語—が含まれている。しかし, 消滅の危機に瀕しているのはそれだけではない。日本各地の伝統的な方言もまた, 消滅の危機にさらされている。これらの言語・方言が消滅する前にその包括的な記録を作成し言語分析を行うこと, また, これらの言語・方言の継承活動を支援することは, 言語学上の重要課題であるばかりでなく, 日本社会においても重要な課題である。

以上のような状況を踏まえ, 本プロジェクトでは, 次のことを実施する。(1)日本の危機言語・方言の語彙集, 文法書, 談話テキストの作成と言語分析, (2)音声・映像資料(ドキュメンテーション付き)「日本語諸方言コーパス」等の言語資源の整備, (3)地域と連携した講演会・セミナーの開催, (4)若手育成のためのフィールド調査の手引き書の作成。

なお, 実施にあたっては, 機構の広領域型基幹プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」の「方言の記録と継承による地域文化の再構築」, ネットワーク型基幹プロジェクト「北米における日本関連在外資料調査研究・活用」, 「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化」と連携する。

《2019年度の主要な成果》

1. 研究

【フィールドワーク】

日本の危機言語・方言の記録・保存のために, 全国40地点において語彙集・文法書・談話テキスト, 言語教材の作成のための調査を行なった。2019年度のテーマは「格・情報構造」である。また, 広領域連携型「地域社会」と連携して, 青森県八戸市方言を集中的に調査する合同調査, および宮崎県椎葉村方言の方言語彙集のための調査を実施した。

【研究発表会等】

プロジェクト研究発表会「格・情報構造(琉球諸語)」, 日本語文法学会パネルセッション「日琉諸方言の格と情報構造」, 「手話言語と音声言語に関する民博フェスタ2019」(民博と共に開催)を開催した。

【研究成果】

共同研究員の研究も含めて, 図書・報告書6件, ブックチャプター9件, 論文23本, コーパス・データ

タベース等4件、学術発表・学術講演71件、一般向けの講演・セミナー等22件、講習・チュートリアル等13件、執筆記事11件、取材記事28件の研究成果を公開した。

【教材・教育プログラム】

東京外大AA研LingDyと共同で『フィールドワーク事前研修報告書』を刊行した。また、機構の広領域連携型プロジェクト「地域社会」及び鹿児島大学と共同で、連携授業の報告書『地域文化の可能性』を刊行した。

【受賞】

客員准教授の下地理則(九州大学准教授)が南琉球伊良部方言の研究により第47回金田一京助博士記念賞、および第16回日本学術振興会賞を受賞した。また、プロジェクトのメンバーが2019年度日本語学会春季大会発表賞、日本言語学会第157回大会発表賞、日本音声学会学術研究奨励賞を受賞した。

【社会的意義】

プロジェクトの調査や活動が東北や奄美・沖縄の新聞・テレビで紹介され、地元で注目された。また、ウェブ配信の講談社現代ビジネスの「大阪弁は危機言語」という意外な現実」が2,400以上人にシェアされ、方言の危機を社会的現象として考えるきっかけとなった。

【大学との組織的な連携】

東外大AA研LingDy3との連携協定に基づき、クロスマーチンポイントにより特任助教を雇用し、フィールドワーク事前研修、『フィールドワーク事前研修報告書』の作成、昨年度に開催した危機言語の国際ポスターセッションの発表を元にした英語論文集の作成、国連の定めた国際先住民言語年2019の企画・運営、展示等を共同で実施した。

2. 共同利用・共同研究

【データベース等の構築】

昨年度公開した『日本語諸方言コーパス(COJADS)』モニター版のデータを拡充するとともに、COJADSのホームページを開設し、データのダウンロード等の機能を整備した。COJADSは公開後1年で登録ユーザー数が3,000人以上となるなど、研究及び一般社会で広く活用されている。その他、「危機言語DB」の基礎語彙、『アイヌ語口承文芸コーパス』『日本言語地図データベース』のデータを拡充し、公開した。また、地域の方言資料の公開を支援する事業として、『鳩間島方言辞典』『多良間島方言辞典』を編集し、刊行した。

【コーパスを使った研究】

COJADSモニター版を活用して、13件の発表を行なった(うち4件が国際学会)。また、ブックチャプター2本を作成した。

【コーパス講習会・講演会】

COJADSモニター版の利用促進のため、利用講習会及び研究発表会「方言コーパスを活用した方言研究の開拓」を開催した。また、コーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション」を「通時コーパス」「日常会話コーパス」「学習者コーパス」と合同で開催した。

3. 教育

【発表の機会の提供支援】

プロジェクトの研究会に若手研究者の発表を積極的に組み入れ、若手研究者に発表の機会を提供した。

【フィールドワーク指導】

青森県八戸市方言調査に参加する大学院生を全国に公募し、応募者8人に対して事前研修、フィールドワーク指導、報告書作成指導を行なった。

【調査旅費・学会発表旅費支援】

若手研究者に対して方言の語彙集・文法書・談話テキスト、言語教材の作成のための調査旅費を援助した。また、JSAA2019(モナッシュ大学、オーストラリア)、NINJAL-UHM Linguistics Workshop(ハワイ大学)、IYIL2019(アメリカ、フランス)、LPSS 2019(Academia Sinica、台湾)等の国際学会での発表の旅費を支援した。

4. 社会との連携及び社会貢献

【地域社会との連携】

宮崎県椎葉村との連携事業「椎葉村方言調査と『椎葉村方言語彙集』の作成」が最終年度を迎える。これまでの調査データをまとめて、『椎葉村方言語彙集』の原稿を完成させた（出版は来年度の予定）。また、沖永良部島和泊町、知名町との連携協定に基づき、小学生・中学生向けの方言の研修会、方言辞書作成のための講座、子どもたちに方言を継承する活動「わどうまいしまむにプロジェクト」の発表会を開催した。

【社会人の学び直し】

沖永良部島和泊町・知名町で役場職員を対象とする研修会を実施し、方言の保存と復興に関する指導を行なった。

【一般向け講義・講演会等】

「危機的な状況にある言語・方言サミット（奄美大島）」を文化庁、鹿児島県、奄美市等と共に開催し、プロジェクトメンバー4人が報告を行なった。また、沖縄県石垣白保等で一般向け、及び子ども向けの方言の講演を行なった。

【展示】

人間文化研究機構「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」と共同で、八丈島のことばと文化を紹介する動画作品3本を作成したほか、モバイル型展示ユニットを使ったことばの展示4件（東外大AA研、与論町生涯学習フェア・文化祭等）、東外大AA研での展示に合わせた講演会1件を開催した。また、人間文化研究機構「北米における日本関連在外資料調査研究・活用」と共同で、「ハワイ：日系移民150周年と憧れの島のなりたち」（歴博と共同開催）、沖縄県北中城村、沖縄県立図書館、沖縄県公文書館と連携して、戦後の沖縄復興に奔走した比嘉太郎に関する展示を開催した。

5. グローバル化

【協定に基づく研究】

ハワイ大学マノア校との連携協定に基づき、NINJAL-UHM Linguistics Workshopをハワイ大学マノア校で開催し、統語と意味のインターフェース、言語獲得、コーパス言語学の観点から基調講演、口頭発表、ポスター発表、セミナーワークショップを行なった。

【国際学会・国際会議での発表】

プロジェクト全体として27件の国際学会・国際会議での講演、発表等を行なった。主なものに、21st Biennial Conference of Japanese Studies Association of Australia 2019（モナッシュ大学、オーストラリア）での講演・発表、国連の国際先住民言語年2019のPerspectives Conference（パデュー大学、アメリカ）におけるパネルセッションEndangered Languages in Japanの企画・実施（東外大AA研LingDy3と共同）、同じく、国際先住民言語年2019のInternational Conference Language Technologies for All（ユネスコ本部、フランス）におけるポスター発表、The 3rd International Symposium on Linguistic Patterns in Spontaneous Speech（Academia Sinica、台湾）におけるポスター発表等がある。

【国際出版】

ムートン社Handbook of Japanese Dialects、Handbook of the Ainu Languageの編集を行なった（出版は2021年度の予定）。昨年開催した危機言語の国際シンポジウムにおけるポスター発表を元にした英語論文集を東外大AA研Lingdy3と共同で編集し、東京外大のホームページで公開した。

【データ公開】

『喜界島方言調査報告書』『宮古島方言調査報告書』を英訳し、「危機言語DB」のウェブサイトで公開した。また、危機言語・方言のデータを音声記号、日本語、英語で公開した。

・共同研究員数：53名

・共同研究員所属機関：

金沢大学、一橋大学、琉球大学、福岡教育大学、千葉大学、九州大学、長崎大学、岡山大学、東京外国語大学、岩手大学、広島大学、東北大学、鹿児島大学、島根大学、東京学芸大学、熊本県立大学、愛知県立大学、東京都立大学（首都大学東京）、北星学園大学、東京理科大学、立命館大学、志學館大学、広島経済大学、

沖縄国際大学、安田女子大学、日本女子大学、目白大学、弘前学院大学、跡見学園女子大学、関西大学、南山大学、別府大学、國學院大學、立正大学、椎葉民俗芸能博物館、カリフォルニア大学ロサンゼルス校、フランス国立科学研究所、オーケランド大学、シンガポール国立大学

・通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開

- ・プロジェクトリーダー：小木曾智信（言語変化研究領域・教授）
- ・研究期間：2016.4–2022.3.

《研究目的および特色》

本プロジェクトは、上代（奈良時代）から近代までの日本語資料をコーパス化し、日本語の歴史研究が可能な通時コーパスと語誌のデータベースを構築する。そして、このコーパス・データベースを活用することで新たな観点から日本語史研究を展開する。従来の日本語史研究は、専門知識を必要とするさまざまな文献を取り扱う必要から、研究が特定の資料や形式に偏ったものになりがちであった。通時コーパスを構築し活用することによって個別の資料だけでなく日本語史全体をマクロな視点から見た研究を展開することを可能にする。さらにコーパス言語学で培われてきた新しい研究手法を導入し、従来行えなかった視点からの研究を展開する。

既に国語研究所では『日本語歴史コーパス』の構築に着手しているが、本プロジェクトではこのコーパスを通時コーパスとして利用可能にするために大幅に拡張する。第2期中期計画で構築済みの「平安時代編」（平安仮名文学作品）、「室町時代編」（狂言）等に加え、上代の万葉集・宣命、中古以降の和歌集、中世のキリスト教資料・軍記物・抄物、近世の洒落本・人情本、近代の雑誌・教科書・文学作品等をサブコーパスとして追加する。このほかにも、日本語史研究に資する資料を選定してコーパスに追加し、上代から近代までの日本語を一本に繋ぐ通時コーパスとして完成させる。また、コーパスと関連付けた語誌データベースを構築し、語誌情報のポータルページを公開し、研究者のみならず日本語の歴史に興味を持つ人々に役立つ情報を提供する。コーパスを活用する研究班には、上代、中古・中世、近世・近代の各時代別の研究グループの他、文法・語彙、資料性・アノテーションの検討の研究グループを設け、コーパス構築に携わるメンバーも全員が参加して研究活動を展開する。

なお、プロジェクトの実施にあたっては、オックスフォード大学東洋学部日本語研究センター、および人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の構築」の中の「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」（代表者・高田智和）と連携して行う。また、実践女子大学との提携に基づきデジタル化された所蔵資料の活用を図る。

《2019年度の主要な成果》

1. 研究

- ・通時コーパス活用班のグループ研究発表会を5回企画し3回実施（2回は新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止）、『日本語歴史コーパス』の講習会（チュートリアル）を3回開催した。
- ・プロジェクト全体での研究発表会として「通時コーパス」シンポジウム2020（3月13日）を企画したが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となった。
- ・研究成果を、書籍1件、論文・ブックチャプター等29件、発表・講演42件、コーパス・データベース等7件として公開した（プロジェクトに対する謝辞を含むもののみ）。
- ・『日本語歴史コーパス』「和歌集編（八代集）」の長単位と掛詞データを整備し、掛詞検索に対応した検索アプリケーション「中納言」を通して12月に公開した。また、新規に「江戸時代編 III 近松淨瑠璃」「奈良時代編 II 宣命」を3月に公開した。
- ・言語地図画像データベースに「森重幸分布図からみた徳島県の方言アクセント」等9件を追加・公開した。
- ・語誌情報ポータル（語誌データベース）の新バージョンを構築し、3月に公開した。
- ・日本語学会2019年度春季大会でワークショップ「『日本語歴史コーパス』の今とこれから」を開催した（5月19日）。

2. 共同利用・共同研究

- ・検索アプリケーション「中納言」をアップデートし、多重形態論情報（掛詞）検索に対応した。

- ・『日本語歴史コーパス』「和歌集編(八代集)」の長単位と掛詞データを整備し12月に公開した。
- ・新規に『日本語歴史コーパス』「江戸時代編III近松淨瑠璃」「奈良時代編II宣命」を3月に公開した。
- ・『日本語歴史コーパス』これまでの登録ユーザー数は約13,600人、2019年度の検索件数は約31万件となった。また、2019年度中に『日本語歴史コーパス』を利用して発表された研究論文と全国学会の発表件数は、72本となった。
- ・日本語の語彙研究の基礎資料として広く利用されてきた『語彙研究文献語別目録』(佐藤喜代治編『講座 日本語の語彙別巻』(明治書院、1983年)に収録)を電子化した全文データをオープンデータとして公開した。
- ・「語誌情報ポータルサイト」(旧称:語誌データベース)のアップデートを行った。

3. 教育

- ・コーパス講習会を3回(4月九州大・9月京都大・1月名古屋大)開催した。
- ・「日本語歴史コーパス活用ワークショップ」を8月20, 21日に開催し、大学院生を招待して高度な通時コーパスの活用(SQL, R)の講習会を行った。
- ・中学校・高等学校の国語科教員及び教職課程の学生院生向けに『日本語歴史コーパス』活用の講習会(国語教育活用ワークショップ)を企画したが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となった。

4. 社会との連携及び社会貢献

- ・前年度に引き続き、ジャパンナレッジ(ネットアドバンス社)との共同により『日本語歴史コーパス』からジャパンナレッジ新編日本古典文学全集JK Books「太陽」へのリンクを行った。
- ・三省堂古語辞典の編纂に、コーパス活用の面で協力し、通時コーパスを活用した記事を執筆した。

5. グローバル化

- ・オックスフォード大学東洋学部日本語研究センターと共同でONCOJのアップデートを行ない、日英語の解説ページを整備して公開した。
- ・上海外国语大学において11月7日にNINJALセミナー「日本語研究の基盤としての言語資源」を開催した。

・共同研究員数: 64名

・共同研究員所属機関:

奈良先端科学技術大学院大学、大阪大学、群馬大学、三重大学、千葉大学、埼玉大学、筑波大学、東京大学、北海道大学、東北大学、九州大学、福井大学、富山大学、愛知教育大学、信州大学、お茶の水女子大学、岩手大学、茨城大学、福岡教育大学、高知大学、名古屋大学、統計数理研究所、京都府立大学、東京都立大学(首都大学東京)、福岡女子短期大学、鎌倉女子大学、中央大学、中京大学、明治大学、関西学院大学、常葉大学、昭和女子大学、白百合女子大学、立命館大学、名古屋女子大学、日本女子大学、駒澤大学、青山学院大学、上智大学、花園大学、二松學舎大学、東京女子大学、國學院大學、成城大学、東亜大学、玉川大学、関西大学、ノートルダム清心女子大学、産業技術総合研究所、コーネル大学、オックスフォード大学、啓明大学、シカゴ大学

・大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究

・プロジェクトリーダー: 小磯花絵(音声言語研究領域・教授)

・研究期間: 2016.4-2022.3.

《研究目的および特色》

本プロジェクトの目的は、均衡性を考慮した大規模な日本語日常会話コーパスを構築し、それに基づく分析を通して、日常会話を含む話し言葉の特性を、レジスター・相互行為・経年変化の観点から多角的に解明することである。そのため、(1)多様な日常場面の会話200時間を収めた大規模コーパスの構築を目指す会話コーパス構築班、及び、構築したコーパスを用いて、(2)語彙・文法・音声などに着目してレジスター的多様性を研究するレジスター班、(3)会話相互行為の中で文法が果たす役割や構造を研究する相互行為班、(4)語彙・文法・音声などに着目して話し言葉の経年変化を研究する経年変化班の4つの班を組織して研究を進める。

会話コーパス構築班では、日常の会話行動に関する調査にもとづき、自宅・職場・店舗・屋外での家族・

友人・同僚・店員との会話など、多様な日常場面での会話を網羅するようコーパスを設計するものであり、世界的に見ても新しい試みである。また、従来の多くの会話コーパスのように収録のために人を集めて会話してもらうのではなく、生活の中で生じる会話を会話者自身に収録してもらうことにより、日常の会話を自然な形で記録する点にも特色がある。会話の音声・映像を収録し、文字化した上で、形態論情報や統語情報、談話情報などのアノテーションを施し、一般に公開する。これにより、話し言葉に関する高度なコーパスベースの研究基盤の確立を目指す。こうしたコーパスは、話し言葉や会話行動に関する基礎研究だけでなく、日本語教育や辞書編纂、音声情報処理、ロボット工学などの応用研究にも資するものである。また、後世の人々が21世紀初頭の日本人の生活や文化を知るための貴重な記録となる。

コーパスに基づく話し言葉研究では、現代の日常会話に加え、講演などの独話、発話を前提に書き言葉で記されたシナリオ、発話を前提としない小説などの会話文、1950年代以降の話し言葉など、多様なデータを対象に、高度な統計的分析や緻密な微視的分析を通して、話し言葉の語彙・文法・音声・相互行為上の特性や仕組み、その経年変化の実態を、実証的に解明する。こうした研究を支えるものとして、昔の話し言葉のデータやBCCWJの小説などの会話文、国会議録などを対象にデータを整備し一般に公開する。

このように本プロジェクトでは、日常会話を含む様々なコーパスやデータベースを整備・構築し一般に公開することによって、話し言葉コーパスの共同利用・共同研究の基盤強化をはかる。

《2019年度の主要な成果》

1. 研究

- ・レジスター班の研究成果を発信するため、シンポジウム「話し言葉の多様性」を令和1年8月30日に国語研で開催した。
- ・プロジェクト全体の研究成果を発信するため、シンポジウム「日常会話コーパスV」を令和2年3月9日に一橋大で開催する計画だったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止した。
- ・会話コミュニケーションについての議論を深めるため、関連する科研費プロジェクトと合同でシンポジウム「ことば・認知インテラクション8」を令和2年3月10日に国立情報学研究所で開催する計画だったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止した。
- ・『日常会話コーパス』モニター公開版を対象に語彙表などの基本的統計情報を報告書としてとりまとめ、プロジェクトのサイトで公開した。
- ・以上の研究成果は、プロジェクト共同研究員の研究成果も含めて、報告書1冊、論文・ブックチャプター11件、辞典編纂1件、発表・講演41件、データベース等4件（うち1件はプロジェクト内限定）として公開した。

2. 共同利用・共同研究

- ・昨年度、音声・文字化資料をオンラインで公開した『昭和話し言葉コーパス』モニター版について、形態論情報を新たに付与し、オンライン検索システム「中納言」にて音声配信機能を付けて公開した。
- ・『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の図書館サブコーパスの文学・物語に含まれる会話文に対し、話者情報（話者名・性別・年代）を付与し、オンライン検索システム「中納言」で公開した。
- ・昨年公開した『日本語日常会話コーパス』モニター版に加え、追加50時間（計100時間）をプロジェクト共同研究員およびその指導学生に限定公開し、研究・教育に活用した。
- ・コーパス構築・コーパス研究の可能性を広げるため、コーパス構築に関わる複数のプロジェクトと合同で、合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—くだけた表現」を国語研で開催した。

3. 教育

- ・コーパス言語学分野の人材を育成するために、若手研究者や大学院生を主対象とする講習会を3回（計4コース）開催した。また講習会で用いた資料をプロジェクトのサイトで公開した。
- ・若手研究者を育成するため、非常勤研究員5名を雇用した。Rを用いた統計勉強会を開催するなどし、コーパス言語学の若手研究者の育成につとめた。結果、非常勤研究員1名が令和1年9月に博士号（京都大学）を取得した。

- ・共同研究員が指導する大学生・大学院生に『日常会話コーパス』を優先的に提供してコーパス活用の研究支援を実施することで、修士論文2本、卒業論文4本の成果に結びついた。

4. 社会との連携及び社会貢献

- ・プロジェクトで構築した『日本語日常会話コーパス』モニター版、『昭和話しことばコーパス』モニター版、『名大会話コーパス』、『現日研究・職場談話コーパス』、『国国会議録』を、インターネットを通して一般に公開し、今年度合計で1万件を超える新規利用申請があった。
- ・『岩波国語辞典 第八版』(岩波書店)の改訂に際し、語釈の記述や見出し語の選定に『日本語日常会話コーパス』が用いられるなど、産業界で活用された。

5. グローバル化

- ・国語研とAcademia Sinicaが共催で開催した国際会議Linguistic Patterns in Spontaneous Speech 2019 (Academia Sinica, 11月21-22日)にて『日常会話コーパス』のデモンストレーションを行い、研究成果を国際的に発信した。
- ・海外在住の研究者1名をプロジェクト共同研究員として加え、『日本語日常会話コーパス』を用いたデータセッションを通して、コーパスについて評価してもらった。

・共同研究員数: 41名

・共同研究員所属機関:

一橋大学、熊本大学、東京大学、九州大学、お茶の水女子大学、千葉大学、宇都宮大学、名古屋大学、京都大学、はこだて未来大学、東京都立大学(首都大学東京)、早稲田大学、明治大学、文教大学、同志社大学、関西学院大学、慶應義塾大学、日本女子大学、専修大学、愛知学院大学、同志社女子大学、フェリス女学院大学、東洋大学、十文字学園女子大学、東京福祉大学、目白大学、NHK放送文化研究所、株式会社リクルート、行知学園、アルバータ大学、カリフォルニア大学ロサンゼルス校

・日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明

・プロジェクトリーダー: 石黒圭(日本語教育研究領域・教授)

・研究期間: 2016.4-2022.3.

《研究目的および特色》

本プロジェクトの目的は、日本語学習者のコミュニケーションを多角的に解明するとともに、その成果を日本語教育に応用する方法を明らかにすることである。具体的には、日本語教育やその関連領域の研究者や教育者、そして日本語学習者に有益なコーパスを構築すること、論文集や教師指導書を刊行すること、シンポジウムや研修会を開催することである。

本プロジェクトでは日本語学習者のコミュニケーションを多角的に解明するために、3つのサブプロジェクトを設ける。「日本語学習者の日本語使用の解明」、「日本語学習者の日本語理解の解明」、「日本語学習のためのリソース開発」である。

サブプロジェクト「日本語学習者の日本語使用の解明」では、「学習者の会話能力の解明」と「学習者の日本語習得過程の解明」を行う。「学習者の会話能力の解明」としては、母語話者と学習者の自然会話コーパスを構築し、それをもとに学習者の会話能力を解明する。この研究は、自然な日常会話をデータとした研究であることに特色がある。「学習者の日本語習得過程の解明」としては、さまざまな言語を母語とする学習者の対話や作文のコーパスを構築し、それをもとに異なる言語を母語とする日本語学習者の日本語の習得過程を解明する。この研究は、日本を含む世界のさまざまな地域において統制された条件で収集したデータを用いることにより、母語による違いを重視することに特色がある。

サブプロジェクト「日本語学習者の日本語理解の解明」では、「学習者の読解過程の解明」と「学習者の聴解過程の解明」を行う。これまでの研究は学習者の言語産出活動である発話や作文に焦点を当てたものが中心であったが、この研究は学習者の言語理解活動である読解や聴解に焦点を当てたものである。学習者に理解した内容を母語で語ってもらったデータや教室での学習者の談話を通して、外からは見えない読解や聴解の過程を可視化する研究である点に特色がある。

サブプロジェクト「日本語学習のためのリソース開発」では、「オンライン日本語基本動詞辞典の作成」と「読解教材・聴解教材の開発」を行う。「オンライン日本語基本動詞辞典の作成」としては、日本

語の基本動詞が持つさまざまな意味を図解なども用いてわかりやすく解説する音声付オンライン辞典を作成し、日本語教師や学習者に提供する。これは、大規模コーパスを活用して作成した辞典である点に特色がある。「読解教材・聴解教材の開発」では、日本語学習者用の読解教材・聴解教材を作成するための共同研究を行った上で、ウェブ版教材サンプルを作成し、日本語教師や学習者に提供する。これは、サブプロジェクト「日本語学習者の日本語理解の解明」で得られた調査結果に基づいて教材を作成する点に特色がある。

《2019年度の主要な成果》

1. 研究

- ・本プロジェクトでは、研究に関する計画として研究論文集を計8点刊行した。日本語使用班で、学習者コーパスに関する以下の研究論文集3点を刊行した。
 - ・①宇佐美まゆみ編『自然会話分析への語用論的アプローチ—BTSJ コーパスを利用して—』(ひつじ書房)
 - ・②迫田久美子・石川慎一郎・李在鎬編『日本語学習者コーパス I-JAS 入門—研究・教育にどう使うか—』(くろしお出版)
 - ・③石黒圭・鳥日哲編『どうすれば論文・レポートが書けるようになるか 学習者から学ぶピア・レスポンス授業の科学—』(ココ出版)
- ・日本語理解班で、日本語学習者の読解過程に関する以下の研究論文集4点を刊行した。そのうち、④は学会誌の書評で高い評価を受けた。
 - ・④野田尚史・迫田久美子編『学習者コーパスと日本語教育研究』(くろしお出版)
 - ・⑤石黒圭編『日本語教師のための実践・読解指導』(くろしお出版)
 - ・⑥石黒圭編『文脈情報を用いた文章理解過程の実証的研究—学習者の母語から捉えた日本語理解の姿—』(ひつじ書房)
 - ・⑦野田尚史編『日本語学習者の読解過程』(ココ出版)
- ・リソース開発班で、オンライン日本語基本動詞ハンドブックの成果を取りまとめた下記の研究論文集を刊行した。
 - ・⑧プラシャント・パルデシ、糀山洋介、砂川有里子、今井新悟、今村泰也編『多義動詞分析の新展開と日本語教育への応用』(開拓社)

2. 共同利用・共同研究

- ・本プロジェクトでは、共同利用・共同研究に関する計画として次の八つを推進した。
 - ・①母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し、44会話のコーパスデータを追加し、計377会話(754名分)を公開した。また、その活用のために講習会・講演会を6回開催した。
 - ・②多言語母語の日本語学習者横断コーパスの構築を継続し、日本語学習者215名分の第四次データ公開に加え、175名分の第五次データ公開を前倒しで行い、これにより、全データ1,050名分の公開を終え、完成した。また、その活用のために講習会・講演会を3回開催した。
 - ・③日本語非母語話者の読解コーパス、日本語非母語話者の聴解コーパスはそれぞれに20件を新たに公開した。
 - ・④日本語学習者の文章理解過程データベースは180名分のコーパスデータを新たに公開したこと、全データ240名分の公開を前倒しで終え、完成した。
 - ・⑤ウェブ版読解・聴解教材は合計7レッスンを新たに公開した。
 - ・⑥オンライン日本語基本動詞ハンドブックの15見出しを新たに公開した。
 - ・⑦北京日本学研究センターと共同で行っている日本語学習者の日本語習得過程に関するデータ収集を終え、大学入学から卒業までの4年間のデータ収集を完了した。
 - ・⑧「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」プロジェクト等との連携のもと、日本語文型バンクの開発・補充、公開を継続し、それに関連する特別講演を2回行った。

3. 教育

- ・本プロジェクトでは、教育に関する計画として、次の四つを行った。

- ・①プロジェクト PD フェローを 2 名雇用し、日本語教育分野の人材を育成した。
- ・②博士課程に在籍する大学院生 14 名を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、研究の指導を行った。
- ・③研究会を 2 回開催し、母語話者と学習者の自然会話コーパスに関して大学院生や若手研究者に発表の機会を提供した。
- ・④ NINJAL チュートリアルを海外（台湾の東吳大学）で開催した。

4. 社会との連携及び社会貢献

- ・本プロジェクトでは、社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置として、次の三つを遂行した。
 - ・①ビジネス日本語のプロジェクトを、(株)富士通研究所、(株)クラウドワークス等と協力して遂行し、次の論文集を刊行するとともに、公開シンポジウムを 1 件開催した。
 - 石黒圭編『クラウドソーシングを用いたビジネス文書の言語学的研究—インターネット上の求人サイトから臨むビジネス日本語研究の新たな地平—』(ひつじ書房)
 - ・②国立国語研究所日本語セミナー（海外）を、ウズベキスタン 2 都市で「世界諸言語からみた日本語」というタイトルで開催した。また、国内の国立国語研究所日本語教師セミナーを、国文学研究資料館で「顕在化する多言語社会日本と日本語教育」というタイトルで開催した。
 - ・③日本語教師を対象とした講座を、国際基督教大学グローバル言語教育研究センターとの共催で開催した。また、日本語ボランティアのための講座・研修会を、福岡県国際交流センターおよび仙台観光国際協会との共催で開催した。

5. グローバル化

- ・本プロジェクトでは、グローバル化に関する計画として次の四つを推進した。
 - ・①連携協定を結んでいる北京日本学研究センターと共同で、日本語学習者の日本語習得過程に関する大学卒業までの縦断データ収集を完了し、それに関連する二つのシンポジウムを北京日本学研究センターと北京師範大学で開催した。また、日本語教育の辞書に関するシンポジウムを北京日本学研究センターと共同で開催した。
 - ・②日本語教育学関連の著名な研究者に参加を依頼し、アドバイザリーボードの運用を開始した。

・共同研究員数：159 名

・共同研究員所属機関：

北陸先端科学技術大学院大学、京都大学、埼玉大学、東京外国語大学、一橋大学、広島大学、東北大学、宇都宮大学、島根大学、名古屋大学、琉球大学、金沢大学、東京大学、大阪大学、福井大学、東京学芸大学、京都教育大学、神戸大学、佐賀大学、九州大学、山口大学、東京海洋大学、岡山大学、お茶の水女子大学、国際教養大学、東京都立大学（首都大学東京）、都留文科大学、山梨県立大学、麗澤大学、南山大学、名古屋学院大学、関西学院大学、東京福祉大学、日本女子大学、聖心女子大学、中京大学、中央学院大学、東京経済大学、岐阜聖徳学園大学、東京工芸大学、清泉女子大学、実践女子大学、早稲田大学、明海大学、名古屋外国語大学、大阪産業大学、国際基督教大学、長崎外国語大学、学習院女子大学、法政大学、武庫川女子大学、神戸女学院大学、東亜大学、大手前大学、関西看護医療大学、愛知学院大学、大阪女学院大学、愛知文教大学、國學院大學、名古屋商科大学、東海大学、神戸市立工業高等専門学校、国際交流基金、平谷村役場、富士通研究所、カリフォルニア大学ロサンゼルス校、アルバータ大学、大連外国語大学、中国人民政府、ミネソタ大学ツインシティ一校、ミュンヘン大学、江南大学、重慶三峡学院、無錫職業技術学院、天津外国語大学、ハノイ大学、華中科技大学、華南農業大学、中山大学、洛陽師範学院、クイーンズランド大学、ブダペスト商科大学、サンフランシスコ市立大学、グルノーブル・アルプ大学、オークランド大学、コロンビア大学、香港大学、ハワイ大学、北京外国語大学、カリフォルニア大学バークレー校、西安外国語大学サンフランシスコ州立大学、明知大学校、広東外語外貿大学、メルボルン大学、元智大学、バルセロナ自治大学、チュラーロンコーン大学、ヨーク・セント・ジョン大学、パリ・ディドロ大学、リュブリヤナ大学、ジャパン・ソサエティ、東海大學、黒龍江大学、長春師範大学、ロイヤルメルボルン工科大学、ラトローブ大学、台湾政治大学、北京語言大学、北京師範大学、ニューヨーク大学

(2) 【領域指定型】5件

第3期中期計画において、新たな研究領域の創出に資するため、外部研究者をリーダーとする共同研究を実施している。領域指定型は、各研究領域が実施する基幹プロジェクトを充実・補完するため外部公募により採択されたプロジェクト。

・日本語から生成文法理論へ：統語理論と言語獲得

- プロジェクトリーダー：村杉恵子（南山大学・教授）
- 研究期間：2016.10–2019.9.

《研究目的および特色》

日本語を他の多くの言語と区別する主要な統語的特徴には、多重主語文・自由語順・項省略・生産的な複合述語形成などがある。本プロジェクトは、これらの現象を対象に、その統語的性質と獲得過程を明らかにし、それにより言語理論および言語獲得理論の構築に日本語の分析から貢献することを目的とする。

現代統語理論（極小主義アプローチ：Chomsky 2013, 2015）の基本的操作・概念（併合・ラベリング・フェイズなど）により、上記の日本語の主要な統語的特徴、そしてより一般的に、言語間変異をどのように説明しうるのかという課題に取り組む。さらに、それらの特徴を幼児は「刺激の貧困」の状況下でどのように獲得するのかについて、心理実験・コーパス分析など方法を用いて考察し、言語獲得と統語の両面から日本語の類型的な特徴の分析と極小主義理論の精緻化を試みる。

- 共同研究員数：19名

- 共同研究員所属機関：

北海道大学、東北大学、山形大学、大阪大学、神戸大学、九州大学、獨協大学、明治大学、横浜国立大学、南山大学、中京大学、金城学院大学、関西学院大学、同志社大学、福岡大学

・議会会議録を活用した日本語のスタイル変異研究

- プロジェクトリーダー：二階堂整（福岡女学院大学・教授）
- 研究期間：2016.10–2019.9.

《研究目的および特色》

本研究は、方言・社会言語学的研究で、「フォーマル」「カジュアル」のように単純に場面への言語的反応とされた「スタイル」という概念を、言語への意識や話題等に対する話者の心的態度や社会的立ち位置の表明などにより生じる「言語変異の社会的意味」を考慮し、話者が創り上げる言語的構造物であると仮定する。その上で、議会の委員会や本会議の状況に生じるスタイル変異を考察することで、日本語のスタイル研究に新たな発展をもたらすことができると考えている。

また海外のスタイル研究では、質的側面からの議論があるが、本研究でも、待遇表現、ポライトネス等の質的側面の研究からの考察を行い、より総合的・包括的に言語変異とスタイル構築の関連を明らかにする。

さらに、議会会議録をデータベースとして整備することで、他分野を含め、議会会議録を利用した国内外の研究での新たな相互作用が期待できると考えている。

- 共同研究員数：4名

- 共同研究員所属機関：

鹿児島大学、北星学園大学、神戸松蔭女子学院大学、福岡女学院大学

・古文教育に資する、コーパスを用いた教材の開発と学習指導法の研究

- プロジェクトリーダー：河内昭浩（群馬大学・准教授）
- 研究期間：2016.10–2019.9.

《研究目的および特色》

古文教育は今、岐路に立っている。従来の古文教育は、現代語の教育と切り離されて行われてきた。しかしこれからの古文教育では、古代から現代までの、言葉のつながりを理解させることが求められている。高等学校では、上代から近現代までの言葉を網羅した「言語文化」という科目が新設されること

になった。同時にわたるコーパスの設計は、こうした潮流と合致している。本研究は、新しい古文教育研究の先駆であり、今後の古文教育の基盤となるものだと確信している。

教材の開発として、コーパスを用いた古文単語集、文法集、及び自習用教材などの作成などを想定している。また学習指導法の研究として、コーパスを用いた古文教材研究の方法や、授業におけるコーパス活用方法の提示を想定している。加えてワークショップを開催し、教育関係者に本研究成果を広く公開する予定である。

・共同研究員数：8名

・共同研究員所属機関：

群馬大学、埼玉大学、信州大学、富山大学、昭和女子大学、名古屋女子大学

・会話における創発的参与構造の解明と類型化

・プロジェクトリーダー：遠藤智子（東京大学・准教授）

・研究期間：2016.10–2019.9.

《研究目的および特色》

日常の生活の中で人々は様々な活動に参与する。場面ごとに各参与者に期待される参与の仕方は多様であり、また、参与の構造は固定的ではなく創発的なものである—やりとりの中で各人がどのような役割を担い、どのような行動をするのかは、その場で進行しているやりとりのターンの中で形作られる。参与構造は、言語だけではなく、視線・姿勢・ジェスチャー・パラ言語情報・周囲の環境等が総体的に寄与することで実現する。

本研究は、日常会話に加え、宗教儀礼・教室場面・医療活動・ミーティングやインタビュー場面等の一見特殊とも思える活動の中でのやりとりをマルチモーダルに分析することにより、参与構造の創発性を解明し、類型化する。

・共同研究員数：12名

・共同研究員所属機関：

東京外国语大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、広島大学、九州大学、国立情報学研究所、慶應義塾大学、玉川大学、愛知大学、京都産業大学、摂南大学

・「具体的な状況設定」から出発する日本語ライティング教材の開発

・プロジェクトリーダー：小林ミナ（早稲田大学・教授）

・研究期間：2016.10–2019.9.

《研究目的および特色》

日本語教育におけるこれまでのライティング教材は、既習の文型や語彙を定着させるための作文が主であり、「学習者が実際に書く／打つ状況」を踏まえたものはほとんど見られない。学習項目も、教材作成者や教師によって経験的に設定されたものであり、「何を書きたいのか」「どのような支援が必要か」といった実態を踏まえていない。また、現実のコミュニケーションにおけるライティングは、「手で書く」から「キーボードやタッチパネルで打つ」に移行しているが、それを視野に入れた教材開発は遅れている。

本研究では、「「具体的な状況設定」から出発する日本語学習のためのライティング教材の開発」を目的とする。「状況設定」「必要なスキル」「学習者が抱える困難点」に関する3つの実態調査の成果を踏まえて教材を作成する。

・共同研究員数：24名

・共同研究員所属機関：

新潟大学、群馬大学、金沢大学、京都大学、藤女子大学、早稲田大学、上智大学、帝京大学、金沢工業大学、同志社大学、長崎外国語大学、イーストウェスト日本語学校、スバル学院、ヴェネツィア大学、タマサート大学、ナンヤン理工大学、ブラジリア大学、ルーヴェン・カトリック大学、ロイヤルメルボルン工科大学

(3) 【新領域創出型】5件

第3期中期計画において、新たな研究領域の創出に資するため、外部研究者をリーダーとする共同研究を実施している。新領域創出型は、研究領域や基幹研究プロジェクトの枠を越えて、新たな研究の展開・創出を探るための萌芽的研究として外部公募により採択されたプロジェクト。

・語用論的推論に関する比較認知神経科学的研究

- ・プロジェクトリーダー：酒井弘（早稲田大学・教授）
- ・研究期間：2016.10–2019.9.

《研究目的および特色》

「狭義の言語機能は言語機構に繋がっていなければ役に立たない」という趣旨の Chomsky (2014) の言葉をひくまでもなく、人間の言語コミュニケーション能力を解明するためには、狭義の言語能力に加えて語用論能力の研究を推進することが必要不可欠である。そこで本研究プロジェクトでは、狭義の言語能力のアウトプットである論理形式から表意（明意）や推意（暗意）を導く言語的推論のプロセスと神経基盤を、日本語と系統的・類型的に異なる言語を比較しつつ、脳機能計測を含む種々の実験手法を用いて実証的に研究する。さらに将来的には、日本語学習者にとって困難であるとされる発話意図を表す文末表現やイントネーションの学習、言語的推論が苦手だとされる自閉症児のコミュニケーション能力の発達、さらには「社会脳」の障害であると言われる認知症患者の推論能力などに関する研究を通してこれらの問題の解決に貢献し、人類の幸福に寄与することをめざす。

- ・共同研究員数：9名

- ・共同研究員所属機関：

東北大学、白石大学、東京理科大学、早稲田大学、津田塾大学、ライデン大学、ロンドン大学

・日本語の間接発話理解：第一言語、第二言語、人工知能における習得メカニズムの認知科学的比較研究

- ・プロジェクトリーダー：松井智子（東京学芸大学・教授）
- ・研究期間：2016.10–2019.9.

《研究目的および特色》

ポライトネスのひとつとして間接発話が多用されている。しかし、ヒトが間接発話を理解するメカニズムやその獲得プロセスには不明な点が多いのが現状である。言語学のみでなく、心理学や認知科学を含む学際的な研究領域として方法論も確立しつつある今、人工知能の研究の方法論も加えて、アイロニーや間接的表現の計算モデルの構築と検証が成功すれば、世界に先んじた研究として注目されることが期待される。そこで、本研究では文脈を用いて間接発話を解釈する能力がどのように習得されるのかについて、学習者の第一言語と第二言語、そして人工知能との比較をとおして明らかにすることをめざす。具体的には、「アイロニー」「遠回しな言い方」など2つ以上の意味解釈が可能な間接発話を題材とする。

- ・共同研究員数：6名

- ・共同研究員所属機関：

東京学芸大学、電気通信大学、愛媛大学、東京工芸大学、慶應義塾大学、岐阜聖徳学園大学

・現代語の意味の変化に対する計算的・統計力学的アプローチ

- ・プロジェクトリーダー：持橋大地（統計数理研究所・准教授）
- ・研究期間：2019.4–2022.3.

《研究目的および特色》

現代および近代日本語において、あるいは現代語一般に、単語の意味は時間を通じて一様ではなく、常に変化し続けている。こうした中、(1) どのような単語が、(2) どのように意味変化を起こしたのか、またそれはどのようなメカニズムで起きうるのかを理論的に調べることは、国語学および言語学において最も重要な現代的課題の一つであると考えられる。

特に、国立国語研究所において提供されている通時コーパスなどを用いれば、デジタル化されたテキストデータが大量に得られるため、上記の(1)においては適切な統計モデルに基づくデータ解析によっ

て目的を実現し、(2)においては、無数の言語使用者が周囲の影響を受けて確率的に言語使用を変化させる統計力学的描像によって、その理論的性質を解明する。研究は統計数理研究所のほか、国立国語研究所、東京都立大学、産業技術総合研究所人工知能研究センターによる横断的組織によって進める。

- ・共同研究員数: 4名
- ・共同研究員所属機関:
東京都立大学(首都大学東京), 統計数理研究所, 産業技術総合研究所

- ・多文化共生社会における日本語の言語的障壁の低減に関する研究

- ・プロジェクトリーダー: 庵功雄(一橋大学・教授)
- ・研究期間: 2019.4-2022.3.

《研究目的および特色》

政府の外国人受け入れ政策の急展開により、定住目的の外国人が日本国内で急増することが予想される。その際、日本語に関する様々な問題が生じることが予想されるが、そうした日本語に関する言語的障壁を少しでも低減することは日本語研究に課せられた大きな使命である。

本研究では、こうした認識のもと、外国人にとって生活上重要なものでありながら読解・産出が困難な類型のテキストについて、自然言語処理との協働により、その簡略化の方策を研究する。

具体的には、次のようなテキストを対象とする。

1. 外食チェーン店のオペレーション・マニュアル
2. 介護施設における申し送り書

これらのデータを収集し、そこから言語的特徴を抽出し、その定型化を行う。その後、文書を構成するパートを取り出し、それを組み合わせ、これらの文書作成用のエディターを開発する。

- ・共同研究員数: 3名
- ・共同研究員所属機関:
一橋大学、専修大学、長岡科学技術大学

- ・発達障害児の聞き取りの困難さの要因を探る実証研究

- ・プロジェクトリーダー: 藤野博(東京学芸大学・教授)
- ・研究期間: 2019.4-2022.3.

《研究目的および特色》

知的発達に遅れがなく言語を獲得できる自閉スペクトラム症(ASD)や注意欠如・多動症(ADHD)の子どもの中には、文章レベルの聞き取りが困難な者が少なからず存在する。しかしこれまで国内では発達障害児の聞き取りの困難さにつながる認知特性に関する研究は非常に少なく、体系的な実証研究はほぼ皆無といえる。そこで本研究は、知的に遅れのない発達障害児を対象とし、音韻知覚の特異性が語や文の理解のつまずきや、授業などでの学年相応の聞き取りの困難さの要因となるかどうかを検証する。具体的には、①発達障害児の音韻知覚の特性を多角的に検証するとともに、②語や文の構造理解の特徴と、文章・段落レベルの「聞き取り」の力を縦断的に検討する。そして最終的に①と②の結果を総合して、「聞き取り」の困難の要因を探る。さらに、その結果を国際基準による言語検査の開発および子どもの認知特性に合った支援法の提案につなげることを目標とする。

- ・共同研究員数: 5名
- ・共同研究員所属機関:
東京学芸大学、愛媛大学

(4) 【共同利用型】 12 件

共同利用型は、大学等に所属する研究者が、国語研が保有する研究資料・言語資源・分析装置等を利用して研究をおこない、日本語学、言語学及び日本語教育研究のさらなる発展を図ることを目的とするもの。

- ・音声の個人内変化を推定するためのコーホート分析の有効性に関する実証研究
プロジェクトリーダー: 尾崎喜光(ノートルダム清心女子大学教授)

- ・感謝表現研究における「各地方言収集緊急調査」資料の活用
プロジェクトリーダー：田島優（明治大学教授）
- ・訓点資料の精密解読によるデジタルアーカイブの検証
プロジェクトリーダー：小助川貞次（富山大学教授）
- ・言語接触における英語のインパクト：語彙の英語化に関するウェルフェア・リングイスティクスの視点から
プロジェクトリーダー：久屋愛実（福岡女学院大学専任講師）
- ・難解用語の言語問題に対応する言い換え提案の検証とその応用
プロジェクトリーダー：田中牧郎（明治大学教授）
- ・北海道調査データを再活用した言語変化の実時間プロセスの解明へ向けた研究
プロジェクトリーダー：高野照司（北星学園大学教授）
- ・東北方言の地理的・世代的動態についての研究
プロジェクトリーダー：半沢康（福島大学教授）
- ・音声談話資料を利用した大分方言 60 年間の変化の研究
プロジェクトリーダー：二階堂整（福岡女学院大学教授）
- ・日本語の自然発話における卓立認知に関する研究
プロジェクトリーダー：水口志乃扶（神戸大学名誉教授）
- ・日本語研究の戦前と戦後一国立国語研究所草創期に関与した研究者を通して明らかにする日本語の研究史一
プロジェクトリーダー：斎藤達哉（専修大学教授）
- ・国研の蔵書から見た海外言語地理学・言語地図の歴史と現状の研究
プロジェクトリーダー：沢木幹栄（信州大学名誉教授）
- ・大規模コーパスを利用した言語処理の計算心理言語学的研究
プロジェクトリーダー：大関洋平（東京大学講師 / 理化学研究所革新知能統合研究センター・客員研究員）
- ・第二言語学習における音声生成能力の向上が音声知覚能力に与える影響
プロジェクトリーダー：末光厚夫（札幌保健医療大学教授）

（5）【コーパス基礎研究】1 件

基幹型プロジェクト等で構築される予定の日本語史、日常会話、方言、日本語学習者に関するコーパスの高度化や効率的な構築・利用等を実現するために基礎研究を実施している。

- ・コーパスアノテーションの拡張・統合・自動化に関する基礎研究
 - ・プロジェクトリーダー：浅原正幸（コーパス開発センター・准教授）
 - ・研究期間：2016.10–2022.3.

《研究目的および特色》

形態論情報つきコーパスの整備が進む中、より高次の情報を付与することが言語研究において求められている。コーパス開発センターは、統語・意味・音声の三つの班により、既存のアノテーションの拡張手法、複数のアノテーションの統合手法、またその自動化の基礎研究を行う。統語班は、文節係り受け・述語項構造・節境界に関する研究と、統語アノテーションの国際化プロジェクトである Universal Dependencies プロジェクトに参画し、言語資源整備を進める。意味班は、『分類語彙表（増補改訂版）』を中心とした拡張として、UniDic 語彙素番号-分類語彙表番号対応表（現代・古典）や『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）、『日本語歴史コーパス』（CHJ）に対する分類語彙表番号アノテーションを行う。音声班は、『日本語話し言葉コーパス』（CSJ）に対する声質情報自動付与、調音運動データベースの設計、音声・テキスト自動アライメントの精度向上とともに、形態論情報と同期した音声ブロウジング環境の開発を行う。

- ・共同研究員数：25 名

- ・共同研究員所属機関：

東北大大学、茨城大学、東京外国语大学、総合研究大学院大学、東京大学、京都大学、奈良先端科学技術大学院大学、九州大学、統計数理研究所、千葉工業大学、中央大学、早稲田大学、立命館大学、甲南大学、日

2 人間文化研究機構基幹研究プロジェクト

人間文化研究機構では、国内外の大学等研究機関や地域社会等と組織的に連携し、現代的諸課題の解明に資する「基幹研究プロジェクト」を推進し、人間文化の新たな価値体系の創出を目指している。国立国語研究所もそれらのプロジェクト等に参画している。

(1) 広領域連携型基幹研究プロジェクト

人間文化研究機構を構成する6機関が協業して、国内外の大学等研究機関や地域社会と連携し、新たな人間文化研究システムを構築するとともに、異分野融合による新領域創出を目指すもの。

・日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築

国語研・歴博が主導機関となって、「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」と題する連携研究を2016年度に開始した。日本列島において地域が直面しているさまざまな課題、特に地域社会の変貌や災害によって多様性が失われつつある状況が惹起する諸問題とその解決のために、人間文化研究機構の各機関が相互に連携し、地域における大学・博物館等とも協働しながら調査研究を推進している。

〈国語研ユニット〉方言の記録と継承による地域文化の再構築

・研究代表者：木部暢子（言語変異研究領域教授）

・研究期間：2016.4–2022.3.

・共同研究員数：14名

・共同研究員所属機関：

岩手大学、千葉大学、広島大学、島根大学、九州大学、長崎大学、鹿児島大学、愛知県立大学、弘前学院大学、駒澤大学、別府大学、オーバーランド大学

・地域社会の変貌により、地域の貴重な文化資源である方言が急速に衰退しつつある。国語研ユニットでは、自治体や各地の大学・研究者と連携して地域の方言の記録や方言の継承活動を行うことにより、方言を主軸とする地域文化の再構築の可能性と方言の持つ文化的意義について研究を行う。

・異分野融合による「総合書物学」の構築

歴史的典籍の「書物」としての面に着目して、従来の書誌学に異分野融合の観点を加え、「総合書物学」という研究分野の構築を目指す。国文研が主導機関となり、歴博、国語研、日文研の3機関の共同研究を基礎に、分野横断的な研究の進展を促し、新たな研究分野である「総合書物学」を構築することを目標としている。

〈国語研ユニット〉表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化

・研究代表者：高田智和（言語変化研究領域准教授）

・研究期間：2016.4–2022.3.

・共同研究員数：15名

・共同研究員所属機関：

千葉大学、東京大学、富山大学、京都大学、高知大学、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、京都府立大学、専修大学、國學院大學、筑波大学、関西学院大学、情報処理推進機構、岐阜工業高等専門学校、人文情報学研究所

・文献学と言語計量の手法により、言語単位（単語、文節、句、文など）と表記・書記単位（仮名字体、漢字字体、連綿文字列、句読点等表記記号など）と書物や版面の形状（表紙、料紙、版型、頁遷移、行遷移など）との相関関係を明らかにする。また、国語研で構築している『日本語歴史コーパス』に表記情報と書誌形態情報を加え、言語・表記（文字）・書物の重層構造を精緻に記述した言語コーパスのプロトタイプを作成することを目標としている。

(2) ネットワーク型基幹研究プロジェクト

・日本関連在外資料調査研究・活用事業

欧米にある日本関連資料の中には、現地の日本文化研究者の不足や個人所蔵であることから、所在情報や資料価値の掌握がされていない貴重な資料が多数存在する。本事業はこうした文書、音声、実物資料を含む多様な資料の調査研究を進めると同時に、その成果を国内外で活用し、海外における日本研究者育成や日本文化理解を促進する。

〈国語研プロジェクト〉北米における日本関連在外資料調査研究・活用―言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築

・研究代表者：朝日祥之（言語変異研究領域准教授）

・研究期間：2016.4–2022.3.

・共同研究員数：10名

・共同研究員所属機関：

国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、東京都立大学（首都大学東京）、明治大学、桜美林大学、専修大学、名古屋外国語大学、海外移住資料館、シンガポール国立大学

・主として近現代に北米に移住した日本人、つまり北米の日系移民に注目し、言語史・社会史・生活史を基点としながら、日系社会に関連する資料についての資料調査・研究を行っている。劣化や廃棄リスクが高まっている日系人に関わる音声・映像資料について、データ救出と資料の評価を行うとともに、日系社会の歴史のうち、これまでの十分に光が当たってこなかった領域を取り扱い、移民をめぐる新たな資料論へとつなげることを目指す。

(3) 研究資源高度連携事業

人間文化研究機構を構成する6研究機関および国立国会図書館並びに京都大学地域研究統合情報センター等が開発・蓄積したデータベースの横断検索が可能な統合検索システム（nihuINT）に次のデータベースを提供している。また、国立国会図書館が運用するジャパンサーチ（試験版・2018年度公開）にも、人間文化研究機構を通じてメタデータを提供している。

- ・ことばに関する新聞記事見出しデータベース
- ・蔵書目録（図書）データベース
- ・蔵書目録（雑誌）データベース
- ・日本語研究・日本語教育文献データベース
- ・『日本言語地図』画像データベース
- ・『方言文法全国地図』画像データベース
- ・米国議会図書館本源氏物語翻字本文データベース
- ・国立国語研究所学術情報リポジトリ

(4) 博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業

機構の機関と大学等研究機関とが連携し、博物館および展示を活用して人間文化に関する最先端研究を可視化し、多分野協業や学界並びに社会との共創により研究を高度化する研究推進モデル「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化サイクル」を構築し、新領域創出を目指す。

〈国語研事業〉消滅危機言語・方言の展示を通した最先端研究の可視化・高度化

・代表者：木部暢子（言語変異研究領域教授）

・研究期間：2017.4–2022.3.

・地域の大学や博物館、市民と協業して当該地域の危機言語・方言の研究に取り組み、情報科学と連携して展示を制作し、その展示を各地域で巡回し、社会との共創による研究展示システムのモデル構築を行う。「言語・文化の多様性」を未来の目標に設定し、その実現に向けた「言語の展示」の企画、情報科学との連携、情報発信の仕方を検討し、実際に展示を制作・公開することを通じて研究を可視化・高度化し新たな研究領域である「言語・文化情報学」の創出に繋げることを目標とする。

3 外部資金による研究

科学研究費助成事業（科研費）

研究種目	研究代表者	研究課題名	直接経費 交付額 (千円)
国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化(B))	迫田久美子	日本語学習者コーパスによる教育と研究のグローバルネットワークの構築	2,100
新学術領域研究 (研究領域提案型)	麻生玲子	南琉球八重島諸語における伝播過程の解明と言語系統樹の構築	1,900
新学術領域研究 (研究領域提案型)	林由華	日琉諸語の歴史と発展についての総合的研究に向けて	500
基盤研究(A)	窪薙晴夫	消滅危機方言のプロソディーに関する実証的・理論的研究と音声データベースの構築	8,700
基盤研究(A)	小木曾智信	昭和・平成書き言葉コーパスによる近現代日本語の実証的研究	8,800
基盤研究(A)	野山広	基礎教育を保障する社会の基盤となる日本語リテラシー調査の開発に向けた学際的研究	8,200
基盤研究(A)	浅原正幸	日本語歴史コーパスに対する統語・意味情報アノテーション	6,900
基盤研究(A)	宇佐美まゆみ	語用論的分析のための日本語1000人自然会話コーパスの構築とその多角的研究	7,800
基盤研究(A)	木部暢子	日本語諸方言コーパスの構築とコーパスを使った方言研究の開拓	6,400
基盤研究(A)	迫田久美子	海外連携による日本語学習者コーパスの構築および言語習得と教育への応用	7,400
基盤研究(B)	松本曜	空間移動と状態変化の表現の並行性に関する統一的通言語的研究	3,200
基盤研究(B)	石黒圭	文脈情報を用いた日本語学習者の文章理解過程の実証的研究	3,200
基盤研究(B)	小磯花絵	コーパス言語学的手法に基づく会話音声の韻律特徴の体系化	4,200
基盤研究(B)	高田智和	訓点資料訓読文コーパスの構築と古代日本語史研究の革新	4,500
基盤研究(B)	田窪行則	言語使用と非言語的認知操作における空間指示枠の相関についての実験的研究	3,200
基盤研究(B)	Prashant Pardeshi	統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究:複文を中心に	2,200
基盤研究(B)	前川喜久雄	リアルタイムMRIおよびWAVEデータによる調音音声学の精緻化	4,000
基盤研究(B) (特設分野研究)	小磯花絵	地域社会の共在的記録に基づくコミュニケーションと記憶の活性化	3,300
基盤研究(C)	山崎誠	シソーラスの整備・拡張のための分類基準の作成と活用	900
基盤研究(C)	朝日祥之	北海道北見市常呂町岐阜方言の方言敬語に関する調査研究	1,400
基盤研究(C)	西内沙恵	多義語に対するプロトタイプ義の量的分析—クラウドソーシングによる大規模調査—	1,300
基盤研究(C)	鎌水兼貴	首都圏における言語資料の高密度収集と言語動態分析	1,900
基盤研究(C)	石本祐一	自発会話コーパスを用いた「会話の間合い」に関わる音声・言語特徴の解明	900
基盤研究(C)	窪田悠介	汎用的な範疇文法ツリーバンクの構築	1,000
基盤研究(C)	井上文子	地域的多様性の教材としての参加型方言データベースの構築	800
基盤研究(C)	鳥日哲	アカデミック・ライティング技術の習得を目指したピア・レスポンスの実証的研究	1,100

基盤研究 (C)	大島一	ハンガリー語の周辺方言における結合の複数に関する調査研究	800
基盤研究 (C)	神村初美	いきいきとした介護のオノマトペ使用のための学習映像教材の開発に関する研究	900
基盤研究 (C)	柏野和佳子	学術的文書作成のための文体差のある語の計量的分析	1,000
基盤研究 (C)	加藤祥	文体分析を目的としたコーパスの文書情報拡張及びその利用	500
基盤研究 (C)	近藤明日子	形態論情報付きコーパスを活用した近代日本語の位相の計量的研究 (延長)	359
基盤研究 (C)	西川賢哉	名詞句の飽和性と意味機能との相互関係についての理論的・実証的研究	1,000
基盤研究 (C)	飛田良文	近代小説 100 冊における外来語の研究	1,600
基盤研究 (C)	布施悠子	中国人日本語学習者の言語習得過程の実証的研究と教育的資源の提供	1,100
基盤研究 (C)	蒙韞	中国人日本語学習者のビジネス・コミュニケーションの困難点の解明	800
基盤研究 (C)	山口昌也	ビデオアノテーションを利用した協同型実習活動支援システムに関する研究	1,100
基盤研究 (C)	吉田夏也	日本語の母音無声化における心内処理に関する基礎的研究	700
基盤研究 (C)	渡邊美知子	日本語と英語のパラレルコーパスを用いた言い淀みの対照言語学的研究	1,400
挑戦的研究 (開拓)	小木曾智信	日本語コーパスに対する情報付与を核としたオープンサイエンス推進環境の構築	6,900
挑戦的研究 (萌芽)	前川喜久雄	定量的分析による条件異音存立基盤の再検討：音韻論スリム化の試み	2,300
挑戦的研究 (萌芽)	松井真雪	Exploring the re-emergence of grammar: The Russian new vocative in an interplay of morphology, phonology and phonetics	2,000
挑戦的研究 (萌芽)	浅原正幸	コーパスからの比喩表現収集とその分析	1,700
挑戦的研究 (萌芽)	石黒圭	クラウドソーシングを用いたビジネス文書のわかりやすさの言語学的研究	1,000
挑戦的研究 (萌芽)	宇佐美まゆみ	コミュニケーション能力を高める自然会話教材の高度共有化—共同体の構築に向けて—	1,900
挑戦的研究 (萌芽)	窪薙晴夫	促音(重子音)に関する学際的・国際的共同研究のためのネットワーク形成	1,500
挑戦的研究 (萌芽)	高田智和	漢文訓点資料の国際文書構造記述による共有化と書き下し文自動作成のための基礎研究	1,300
挑戦的研究 (萌芽)	野田尚史	日本語聴解用辞書の開発を目的とした日本語学習者の聴解実態の実証的研究	1,000
挑戦的研究 (萌芽)	山崎誠	日本語研究用オントロジーの設計と開発	1,888
挑戦的研究 (萌芽)	横山詔一	疫学的統計手法と人工知能学の融合活用による敬語の変化予測研究	1,000
若手研究	岡照晃	アクセント情報付き大規模単語データベースの構築	900
若手研究	鈴木彩香	属性叙述を含めた包括的なテンス・アスペクト体系の解明	800
若手研究	溝口愛	超音波診断装置を用いた日本語学習者における撥音の調音運動の研究	1,900
若手研究	大槻知世	青森県津軽方言の文末イントネーションの記述的研究	800
若手研究	Celik Kenan	南琉球宮古語の語彙体系の多様性を探る：通方言的な音声付の語彙データベースの構築	900
若手研究	宮崎早季	ハワイ日系人の戦時抑留体験をめぐる記憶のポリティクス	1,300
若手研究	片山久留美	コーパスを用いた近世読本のルビと漢字表記の研究	700
若手研究	服部紀子	蘭語学・英語学における文法用語の基礎的研究	1,900
若手研究	川端良子	多様な場面における参照の相互認識達成のための方略の研究	1,300
若手研究	八木下孝雄	明治期英語教科書の翻訳本データベース化による欧文の直訳的な表現の研究	1,200
若手研究	大村舞	日常対話コーパスにおける述語項構造アノテーションの作成と分析	1,200
若手研究	坂井美日	日本語諸方言の準体に関する類型論的研究	1,000
若手研究	麻生玲子	日本の消滅危機言語を対象とした大量の言語資料収集・蓄積方法に関する基礎研究	800

若手研究	井戸美里	日本語とりたて詞の複合における否定呼応現象の統語と意味	700
若手研究	佐藤久美子	日本語諸方言におけるイントネーションの対照研究	700
若手研究	新永悠人	奄美大島宇検村内の隣接する多地点方言間の体系的差異の解明	700
若手研究	平田秀	紀伊半島熊野灘沿岸地域諸方言アクセント類型論の形成	400
若手研究	中川奈津子	日本語・琉球語における情報構造と述語類型	300
若手研究	横山晶子	危機言語コミュニティにおける言語生態系と言語移行の関係—琉球沖永良部語を事例に—	1,200
若手研究 (B)	白田泰如	会話における対人関係の実証的研究：自然会話データを用いて	500
若手研究 (B)	林由華	宮古語諸方言の言語記録のための基礎的研究とデータ収集	800
若手研究 (B)	山田真寛	琉球諸語の記述と復興研究のためのプラットフォーム基盤構築研究	700
研究活動スタート支援	吳寧真	古代語複合動詞の敬語の研究	1,000
研究活動スタート支援	柳原恵津子	平安時代後半期記録語の記述的研究、および総論的考察	1,100
研究活動スタート支援	越智綾子	感情と態度を表す日本語語彙文法の研究：言語使用域の多様性を通じて	1,100
研究活動スタート支援	大槻知世	津軽方言の談話資料を用いた複数種の対格の使用動機の究明（縁越）	749
研究活動スタート支援	中澤光平	淡路方言の系統の解明と西日本方言の区画の再検討	1,100
研究活動スタート支援	間淵洋子	精緻な文字表記情報を持つ近代新聞コーパスの構築による表記・文体変遷の計量的研究	1,100
研究活動スタート支援	宮部真由美	日本語教育支援のための中学校社会科教科書の言語的困難点に関する基礎的研究	1,000
研究成果公開促進費（学術図書）	新野直哉	近現代日本語の「誤用」と言語規範意識の研究	900
研究成果公開促進費（学術図書）	平田秀	三重県尾鷲方言のアクセント研究	900
研究成果公開促進費（データベース）	井上文子	日本の消滅危機言語・方言データベース	5,200
特別研究員奨励費	山本恭裕	イロカノ語諸方言の空間表現の文法：意味と言語使用に基づく言語記述研究	1,300
特別研究員奨励費	下地美日	方言研究と古代日本語研究の融合による日本語格配列システムの解明	1,100
特別研究員奨励費	林由華	琉球諸語および八丈語の諸方言における係り結びの類型化と機能の解明	583
特別研究員奨励費	松井真雪	音声パタンの共時的不均衡性と通時変化の接点	1,000
特別研究員奨励費	横山晶子	危機言語の継承に向けた実践的研究—琉球沖永良部語を事例に—	1,100
特別研究員奨励費（外国人）	Prashant Pardeshi (Hmeljak Marija)	良質な用例を大規模なコーパスから自動的に抽出できるモデルの構築および試作版の開発	400

上記の表は、2019年度に交付のあった研究課題および2018年度が最終年度であり、補助事業期間を2019年度まで延長した研究課題を掲載している。

寄附金（2019年度受入金額）

該当なし

4

2019年度公開中のコーパス・データベース

Webサイトにおいて、共同研究の成果としてのコーパスおよびデータベース類を公開しているが、2019年度は、下記資料の公開（ないし公開の継続）をおこなった。

コーパス

国立国語研究所で構築したコーパス（言語を分析するための基礎資料として、書き言葉や話し言葉の資料を体系的に収集し、研究用の情報を付与したもの）を記す。

- ・現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)

現代日本語の書き言葉の多様性を把握するために構築したコーパスで、書籍、雑誌、新聞、白書、Web、法律などから無作為に抽出した約1億語のテキストに形態論情報、文書構造タグを付与し、オンラインおよびDVDで公開している。

- ・BCCWJ全文検索サイト『少納言』

国立国語研究所で開発されたWebアプリケーションで、初心者でも簡単にBCCWJ内の文字列を検索することができる。

- ・NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB)

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese: BCCWJ)を検索するために、国語研とLago言語研究所が共同開発したオンライン検索システムである。

- ・日本語話し言葉コーパス (CSJ)

日本語の自発音声を大量に集めて、多くの研究用情報を附加した話し言葉研究用のデータベースであり、国立国語研究所、情報通信研究機構（旧通信総合研究所）、東京工業大学が共同開発した、質・量ともに世界最高水準の話し言葉データベースであり、音声言語情報処理、自然言語処理、日本語学、言語学、音声学、心理学、社会学、日本語教育、辞書編纂など幅広い領域で利用されている。

- ・日本語歴史コーパス (CHJ)

日本語の歴史を研究するための資料を集めたコーパスであり、将来的に上代から近代までをカバーする通時コーパスとすることを目標に開発が進められている。現在は、構築済みの部分を公開している。

- ・国語研日本語ウェブコーパス

3か月間にわたり1億URLをクロールして構築した200億語規模のWebテキストのコーパスであり、形態素解析・係り受け解析済みテキストからなる。

- ・中国語・韓国語母語の日本語学習者縦断発話コーパス (C-JAS)

日本語学習者6名の3年間の縦断的発話データを公開している。

- ・多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS)

12言語の母語の学習者210名および日本語母語話者15名の第一次データを公開している。発話データ（ストーリーテリング、ロールプレイ、対話、絵描写）、作文データ（ストーリーライティング、エッセイとメール文（任意））、発話の音声データを所収。完成時には、学習者1000名、日本語母語話者50名のデータを公開する予定である。

- ・近代語のコーパス

明治・大正時代の日本語を研究するために構築されたコーパスであり、『太陽コーパス』、『近代女性雑誌コーパス』、『明六雑誌コーパス』、『国民之友コーパス』を公開している。

- ・コーパス検索アプリケーション『中納言』

国立国語研究所で開発されたコーパスを検索することができるWebアプリケーションで、短単位・長単位・文字列の3つの方法によって、コーパスに付与された形態論情報を組み合わせた高度な検索をおこなうことができる。

- ・アイヌ語口承文芸コーパス—音声・グロスつき—

木村きみさん（1900–1988、沙流川上流域のペナコリ出身）がアイヌ語で語った物語10編（ウエペケレ（散文説話）8編、カムイユカラ（神謡）2編）約3時間分の音声に、日本語と英語による訳とグロスや注解を付けた、初めてのアイヌ口承文芸デジタル集成である。

- ・統語・意味解析情報付き現代日本語コーパス (NPCMJ)

現代日本語の書き言葉と話し言葉のテキストに対し、文の統語・意味解析情報をタグ付けしたものであり、簡単にコーパス内のツリー（統語構造付き文）を検索、閲覧、ダウンロードすることが可能なウェブインターフェースとともに公開している。

- ・名大会話コーパス

129 会話、合計約 100 時間の日本語母語話者同士の雑談を文字化したコーパスである。

- ・オックスフォード・NINJAL 上代語コーパス

単語情報・統語情報などの包括的なアノテーションを施した上代日本語のフルテキストコーパスであり、現在のバージョンは「万葉集」など上代の全ての和歌のテキストを収録している。

- ・BTSJ 日本語自然会話コーパス

シナリオのない自発的な自然会話を、場面、年齢や性別を条件統制して収集した会話データ（トランスクリプトと音声・動画）をまとめた世界最大規模の母語話者・学習者双方を含む相互作用研究・話し言葉研究のための自然会話コーパスであり、現在、377 会話、754 名分が 2020 年版として公開されているが、2021 年度には、1,000 名を超えるインフォーマントの会話が含まれる『BTSJ 1000 人日本語自然会話コーパス』として完成予定である。

- ・NPCMJ Child Language Development Timeline

NPCMJ Child Language Development Timeline (NPCMJ-CLDT) はそよごツリーバンク（子供の日本語の統語解析情報付きコーパス）を時系列に沿って対話的に表示するインターフェースであり、大きな特徴として、子供の言語の形態・統語的分析を年齢・月齢フィルターを通じて、検索・精査することを可能にしている点が挙げられる。このインターフェースを利用することで、特定の語彙や構文に関して個人の習得過程に容易に焦点をあてることができ、日本語を習得しつつある子供の形態・統語的発達のパターンを発見するチャンスにつながる。

- ・危機言語データベース

日本の消滅危機言語・方言の音声データを紹介しており、様々な方言の基礎語彙に加え、生の方言で語られているたくさんのお話（談話資料）も公開している。

オンライン辞書

オンラインで検索できる辞書・用例集である。

- ・基本動詞ハンドブック

日本語学習者・日本語教師が基本動詞の理解を深めることができるように、基本動詞の多義的な意味の広がりを図解なども用いて分かりやすく解説したオンラインツールである。例文、コロケーションなどの執筆には、国立国語研究所の「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」（約 1 億語）や筑波大学の「筑波ウェブコーパス」（約 11 億語）などの大規模日本語コーパスを積極的に活用し、他のレファレンスには見られない生きた情報を提供している。

- ・複合動詞レキシコン（国際版）

「押し上げる、晴れ渡る」など、日常よく使われる日本語複合動詞（2,700 語以上）に意味や用法の情報を付与した、言語研究および日本語学習用のオンライン辞書である。英語・中国語・韓国語翻訳付きであり、研究教育目的での元データのダウンロードも可能である。

- ・トピック別 アイヌ語会話辞典

1898 年に刊行された『アイヌ語会話字典』を底本とし、口語訳や音声・ビデオ・写真などのデータを付与したオンライン辞典である。

- ・寺村誤用例集データベース

日本語教育研究の礎を築いた故寺村秀夫氏による、諸外国からの留学生が書いた作文に見られる日本語の誤用を収集・分類したデータベースである。

- ・Web データに基づく用例データベース

複合動詞、形容詞、サ变动詞の用例のデータベースである。用例は、語ごとに構築した専用の Web コーパスからおこなっている。構築に際しては、(1) 語ごとに一定量以上の用例を収集できること、(2) 収集用例の偏りの軽減に配慮している。

- ・語誌情報ポータル

コーパスからの統計情報、古辞書、言語地図、言語記事など日本語の歴史に関係する資料を一度に検索で

きるシステムである。

言語地図

言語の多様性・分布を地図に表現した資料である。

- 使役交替言語地図

世界の言語の形態的関連のある有対動詞を収集した地理類型論的なデータベースであり、日本語を含む諸言語の有対自他動詞の類型論的な情報を、世界地図およびチャート（表）上で可視化し、有対自他動詞を類型論的な視点から分析できるウェブアプリケーションである。

- 『日本言語地図』地図画像

各地の方言で、どのような語形や発音がどこに現れるかを表示した言語地図（方言地図）で、全国の方言の地理的分布を一望できる基礎資料である『日本言語地図』所載の地図の画像（全300図）を公開している。

- 『方言文法全国地図』地図画像

文法事象の全国的な分布を展望できる言語地図（方言地図）で、方言研究における基本的な資料である『方言文法全国地図』所載の地図の画像（全350図）を公開している。

- 言語地図データベース

日本で刊行されてきた方言地図・言語地図のデータベースである。地図集（アトラス）の書誌（著者・書名・刊行年・調査時期・調査対象地域などを含む）、地図集に収録されている各地図の内容（タイトル・内容の分類などを含む）、地図の画像（可能な限りジオタグを付与）から構成されている。

- 全国方言分布調査（FPJD）・新日本言語地図（NLJ）

全国方言分布調査（2010–2015年度実施、全国554地点）のデータおよび関連情報（調査項目、準備調査結果、調査マニュアルなど）に加え、調査結果を地図化した『新日本言語地図』関係のデータを公開している。

画像・PDF

方言地図や貴重書の画像ファイル、論文のPDFファイルなどである。

- 日本語史研究資料（国立国語研究所蔵）

国立国語研究所研究図書室蔵書のうち、日本語史資料として著名なものや、歴史コーパスの原材料として利用できるものを選定し、デジタル画像や翻字本文を順次公開している。

- 米国議会図書館蔵『源氏物語』画像

米国議会図書館アジア部日本課が所蔵する『源氏物語』（LC Control No.: 2008427768）のうち、桐壺・須磨・柏木の原本画像を閲覧できる。また、原本画像と翻字本文を対照表示させることも可能である。

- 大英図書館蔵天草版『平家物語』『伊曾保物語』『金句集』画像

大英図書館提供の天草版『平家物語』『伊曾保物語』『金句集』「言葉の和らげ」「難語句解」（Shelfmark: Or.59.aa.1）の画像をパブリックドメインにて公開している。

- 大英図書館蔵天草版『伊曾保物語』原本画像・翻字本文対照

大英図書館蔵天草版『伊曾保物語』の原本画像と翻字本文の対照表示システムを公開している。

- 国語研変体仮名字形データベース

変体仮名の字形画像を、読み・字母・Unicodeで層別したデータベースであり、出典元資料画像との相互リンク機能、資料画像と翻字本文との対照表示機能などがある。

ツール

言語資料を扱うためのプログラムやWeb上で利用するツールである。

- UniDic

形態論情報を付与した語彙資源であり、形態素解析器MeCabのモデルを同梱している。

- 形態素解析ツールWeb茶まめ

各種のUniDicを使って形態素解析を行うためのツールであり、形態素解析に必要な一連の作業を、Web上でわかりやすいインターフェイスによっておこなうことができる。

- ・(方言研究の部屋) データとプログラム
『方言文法全国地図』全データ(1-6集), 最新版PDF『方言文法全国地図』(1-6集), 方言文法全国地図作成の機械化(イラストレータ用プラグイン・白地図・記号), 準備調査(調査票と地図・データ), 言語地図データベースを公開している。
- ・全文検索システム『ひまわり』
コーパス, 用例集, 辞書といった言語資料を全文検索するために開発されたソフトウェアであり, XMLで記述された言語資料を全文検索し, 検索文字列に対する前後文脈や付与情報(書誌情報など)を表示することができる。
- ・教育活動観察支援システム FishWatchr
ディスカッション練習, ロールプレイなどの教育活動では, 学習者が互いの活動を観察, 評価するプロセスが存在する。FishWatchrは, リアルタイムに進行する活動や, ビデオ撮影された活動に対する注釈づけを実現するとともに, 注釈付け結果を用いて, グループでの振り返りを支援する。

カタログ

図書・研究資料などの書誌情報を中心とする資料である。

- ・雑誌『国語学』全文データベース
日本語学会の(旧)機関誌『国語学』全巻の全文テキストデータベースである。誌面のPDFファイルも公開している。
- ・日本語研究・日本語教育文献データベース
日本語学, 日本語教育研究に関する研究文献のデータベースであり, 1950年代から現在までに発行された関係論文・図書が検索できる。
- ・国立国語研究所蔵書目録データベース
国立国語研究所研究図書室の所蔵する図書約15万冊と雑誌約5,800タイトルに加え, 貴重書や視聴覚資料, 特殊文庫の目録・所蔵情報の検索ができる。
- ・ことばに関する新聞記事見出しデータベース
国立国語研究所が作成した1949年から2009年9月までのことばに関する新聞記事を集めた「切抜集」に所収の新聞記事の発行日・新聞名・見出し等を収録した「見出し(目録)データベース」である。
- ・国立国語研究所学術情報リポジトリ
国立国語研究所における学術研究・教育活動の成果および国立国語研究所が所蔵する学術資料を電子的形態で収集・保存し, Web上で公開している。国語研創立(1948年)から現在に至るまでの, 国語研の刊行物を検索可能なデータベースである「国立国語研究所刊行物データベース」のデータについても, 本レポジトリへの移管をおこなっている。
- ・国立国語研究所研究資料室収蔵資料
国立国語研究所がこれまでに実施した調査研究において収集・作成した研究資料の概要及び目録類を公開している。
- ・北米における日本関連在外資料目録
ハワイ・北米の日系社会で収集された資料(音声・映像資料, 写真等)を, 現地の所蔵機関別に目録として提供している。
- ・先駆的名論文翻訳シリーズ
日本語学的・言語学的にパイオニア的価値を持ち, その評価がほぼ確立した日本語論文を選定し, 英訳して公開している。

その他データ

各種言語調査データを含む種々のデータ類である。

- ・『分類語彙表 増補改訂版』研究用データ
分類語彙表とは, 「語を意味によって分類・整理したシソーラス(類義語集)」である。書籍版の『分類語

彙表一増補改訂版一』の元となったデータを、データベースソフトに取り込めるよう、CSV形式に加工したものである。レコード総数は101,070件である。

- ・現代雑誌200万字言語調査語彙表

2001年から2004年にかけておこなわれた「現代雑誌の語彙調査—1994年発行70誌—」の調査結果の語彙表である。

- ・「学校の中の敬語」アンケート調査データ

国立国語研究所が1989年から1990年にかけて中学生・高校生を対象に実施した敬語使用と敬語意識に関するアンケート調査で得られたデータである。中学生は、東京：2,456名、山形：339名、高校生は、東京：2,222名、大阪：1,004名が回答している。

- ・岡崎敬語調査データベース

国立国語研究所が中心となって、愛知県岡崎市でおこなった敬語調査のデータベースである。岡崎敬語調査(OSH)は、1953(昭和28)年、1972(昭和47)年、2008(平成20)年におこなわれ、戦後の55年という長いタイムスパンの実時間の変化が分かる。

- ・沖縄語辞典データ集

国立国語研究所資料集5『沖縄語辞典』の本文篇、索引篇、地名一覧表のデータである。

- ・『日本語教育のための基本語彙調査』データ

国立国語研究所報告78『日本語教育のための基本語彙調査』(1984)の「基本語彙五十音順表」、「意味分類体語彙表」、「分類項目一覧表」を電子化したものである。

- ・『幼児・児童の連想語彙表』データ

国立国語研究所報告69『幼児・児童の連想語彙表』(1981)の「全連想語彙調査表」および「頭音連想語彙調査表」を電子化したものである。

- ・甑島方言アクセントデータベース

推定話者数3,000人の危機方言である甑島(鹿児島県薩摩川内市)の方言音声(アクセント)を教育研究に資する目的で公開している。

- ・鶴岡調査データベース

国立国語研究所が中心となって、1950, 1971, 1991, 2011年の4回にわたって山形県鶴岡市でおこなった共通語化調査の回答データである。

- ・X線映画「日本語の発音」

日本語発音時の調音運動を撮影したX線映画(1965, 1967年撮影)である。

- ・寺村秀夫連体修飾論文英訳集

1970年代から1980年代にかけて日本語学・日本語教育の学術的基盤を築くのに大きく貢献した故・寺村秀夫教授(1928-1990)が残した学術論文の幾つかを英語に翻訳して提供している。

- ・日本語史研究用テキストデータ集

国立国語研究所共同研究プロジェクト等で作成したテキストデータ(TXT, XMLなど)を公開している。

- ・『方言談話資料』データ

『方言談話資料』全10巻(1978-1987年刊)の本文テキストデータと音声ファイルを公開している。

- ・『方言録音資料シリーズ』データ

『方言録音資料シリーズ』全15巻(1978-1987年刊)の本文テキストデータと音声ファイルを公開している。

- ・米国議会図書館蔵『源氏物語』翻字本文

米国議会図書館アジア部日本課が所蔵する『源氏物語』(全54冊, LC Control No.: 2008427768)の翻字本文(電子テキスト)を公開するとともに、全54巻を対象とした文字列検索も提供している。

- ・ヲコト点図データベース

漢文訓読の記号であるヲコト点図のデータベースであり、ヲコト点図の種類、付与位置、記号形状、読みなどをキーに、ヲコト点を検索することができる。

- ・尚書(古活字版第三種本)訓点情報データベース

国立国語研究所蔵尚書(古活字版第三種本)の訓点情報(ヲコト点、合符、声点、語順点など)のデータベー

スを公開している。

5 学術刊行物

(1) 所員による著書・編書

- 木部暢子 (監修)
『明解方言学辞典』, 三省堂, 2019.4.20, ISBN: 978-4-385-13579-3.
- Kimi Akita and Prashant Pardeshi (eds.)
Ideophones, Mimetics and Expressives, John Benjamins, 2019.5.6, ISBN: 9789027203113.
- 野田尚史, 迫田久美子 (編)
『学習者コーパスと日本語教育研究』, くろしお出版, 2019.5.30, ISBN: 978-4-87424-800-3.
- 中川奈津子, 寺崎智之, web Japanese 編集部
『ニホンゴ:「外」から見た日本語』, web Japanese, 2019.6.5.
- Prashant Pardeshi, Alistair Butler, Stephen Horn, Kei Yoshimoto, and Iku Nagasaki (eds.)
Linguistic Issues in Language Technology, Special Issue: Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing, CSLI Publications, 2019.8.
- 古賀良彦 (監修), 柏野和佳子, 西原志保, 平本智弥, 間瀬洋子 (著)
『前頭葉を刺激! 50歳からの1分音読でボケない脳になる』, PHP研究所, 2019.9.20, ISBN: 978-4-569-84508-1.
- 国立歴史民俗博物館 (朝日祥之が共編著者に含まれる)
『企画展示「ハワイ: 日系移民の150年と憧れの島のなりたち」』, 国立歴史民俗博物館, 2019.10.19.
- 窪塙晴夫 (編著)
『よくわかる言語学』, ミネルヴァ書房, 2019.10.31, ISBN: 978-4-623-08674-0.
- プラシャント・パルデシ, 粕山洋介, 砂川有里子, 今井新悟, 今村泰也 (編)
『多義動詞分析の新展開と日本語教育への応用』, 開拓社, 2019.11.16, ISBN: 978-4-7589-2277-7.
- 野田尚史 (編)
『日本語と世界の言語のとりたて表現』, くろしお出版, 2019.11.16, ISBN: 978-4-87424-812-6.
- 石黒圭 (編), 今村和宏, 烏日哲, 王麗莉, 木谷直之, Nguyen Thi Thanh Thuy, 熊田道子, 胡方方, 佐藤智照, 朱桂栄, 鈴木美加, 砂川有里子, 大工原勇人, Dang Thai Quynh Chi, 野田尚史, 藤原未雪, ポクロフスカ オーリガ, 蒙塙, 築島史恵, 楊秀娥
『日本語教師のための実践, 読解指導』, くろしお出版, 2019.11.21, ISBN: 978-4-8742-4816-4.
- 西尾実, 岩瀬悦太郎, 水谷静夫, 柏野和佳子, 星野和子, 丸山直子 (編)
『岩波国語辞典 第八版』, 岩波書店, 2019.11.22, ISBN: 978-4-00-080048-8.
- 村上征勝, 金明哲, 小木曾智信, 中園聰, 矢野桂司, 赤間亮, 阪田真己子, 宝珍輝尚, 芳沢光雄, 渡辺美智子, 足立浩平
『文化情報学事典』, 勉誠出版, 2019.12.20, ISBN: 978-4-585-20071-0.
- Hayato Aoi
Proceedings of International Symposium Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia—Poster Session—, アジア・アフリカ言語文化研究所, 2019.12, ISBN: 978-4-86337-305-1.
- 石黒圭 (編), 井伊菜穂子, 烏日哲, 赫楊, Nguyen Thi Thanh Thuy, 田中啓行, Dang Thai Quynh Chi, 張秀娟, 布施悠子, 宮内拓也, 蒙塙, 劉金鳳
『文脈情報を用いた文章理解過程の実証的研究—学習者の母語から捉えた日本語理解の姿—』, ひつじ書房, 2020.1.15, ISBN: 978-4-8234-1007-9.
- 大村舞, 柏野和佳子, 山崎誠
『『日本語日常会話コーパス』モニター公開版の語彙』, 国立国語研究所, 2020.2.10.

- ・新野直哉
『近現代日本語の「誤用」と言語規範意識の研究』, ひつじ書房, 2020.2.20, ISBN: 978-4-8234-1011-6.
- ・石黒圭 (編), 青木優子, 浅井達哉, 市江愛, 井上雄太, 岩崎拓也, 岩田一成, 赫楊, 喬曉筠, 熊野健志, 佐野彩子, 布施悠子, ベケシュ・アンドレイ, 蒙榎
『ビジネス文書の応用言語学的研究—クラウドソーシングを用いたビジネス日本語の多角的分析—』, ひつじ書房, 2020.2.20, ISBN: 978-4-8234-1016-1.
- ・石黒圭, 烏日哲 (編), 井伊菜穂子, 鎌田美千子, 胡艺群, 胡方方, 田佳月, 黄均鈞, 布施悠子, 村岡貴子
『どうすれば論文, レポートが書けるようになるか—学習者から学ぶピア, レスポンス授業の科学—』, ココ出版, 2020.2.28, ISBN: 978-4-8667-6020-9.
- ・石黒圭
『段落論—日本語の「わかりやすさ」の決め手—』, 光文社, 2020.2.29, ISBN: 978-4-334-04461-9.
- ・山田真寛, 森澤ケン
『与那国の人とことば 2019』, 言語復興の港, 2020.2.
- ・石黒圭 (編), 青木優子, 井伊菜穂子, 岩崎拓也, 赫楊, 田中啓行
『一目でわかる文章術—文章は「見た目」で決まる—』, ぱる出版, 2020.3.13, ISBN: 978-4-82721-221-1.
- ・田窪行則, 野田尚史 (編)
『データに基づく日本語のモダリティ研究』, くろしお出版, 2020.3.17, ISBN: 978-4-87424-828-7.
- ・加治工真市 (著), 中川奈津子 (編)
『鳩間方言辞典』, 国立国語研究所言語変異研究領域, 2020.3.31, ISBN: 978-4-910257-00-6.
- ・葉山茂, 麻生玲子 (編)
『追尋新地域文化研究的可能性』, 人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」, 2020.3.31.
- ・宇佐美まゆみ (編)
『自然会話分析への語用論的アプローチ: BTSJ コーパスを利用して』, ひつじ書房, 2020.3, ISBN: 978-4-8234-1039-0.
- ・野田尚史 (編)
『日本語学習者の読解過程』, ココ出版, 2020.3, ISBN: 978-4-86676-021-6.
- ・青井隼人, 木部暢子, 児倉徳和
『フィールドワーク事前研修報告書』, アジア・アフリカ言語文化研究所, 2020.3.
- ・青井隼人, 木部暢子 (監修)
『青森県むつ市方言調査報告書』, 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所, 2020.3.
- ・小池淳一, 丹羽謙治, 桑原季雄, 木部暢子, 添田仁, 中静透, 日高真吾, 渡辺浩一 (著), 麻生玲子 (編)
『地域文化の可能性』, 人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」, 2020.3.

(2) 『国立国語研究所論集』 (NINJAL Research Papers)

国立国語研究所における研究活動の活性化と成果の発表および所内若手研究者の育成を目的として, 各年度に2回(7月と1月), オンラインと冊子体の両形態で発刊している。

第17号 (2019年7月)

- ・Shoji AZUMA
“Beyond Objectivity: Local Newspaper and the Great East Japan Earthquake”, 1–13頁, DOI: [10.15084/00002221](https://doi.org/10.15084/00002221).
- ・山口昌也
「『Webデータに基づく複合動詞用例データベース』の構築と評価」, 15–34頁, DOI: [10.15084/00002222](https://doi.org/10.15084/00002222).

- ・周振, 吉本啓
「統語・意味情報付きコーパスの開発に関する研究—中国語名詞句の解析について—」, 35–65 頁, DOI: 10.15084/00002223.
- ・関川雅彦, 高田智和
「国立国語研究所研究資料室における個人情報の取り扱いについて」, 67–74 頁, DOI: 10.15084/00002224.
- ・野田尚史, 島津浩美
「中国語漢字による日本語音声表記」, 75–100 頁, DOI: 10.15084/00002225.
- ・上野善道
「北奥方言の動詞のアクセント資料(1)」, 101–130 頁, DOI: 10.15084/00002226.

第 18 号 (2020 年 1 月)

- ・入江さやか, 金明哲
「コーパスを用いた仮定形音融合使用に関する計量的研究」, 1–16 頁, DOI: 10.15084/00002539.
- ・小磯花絵, 天谷晴香, 居關友里子, 白田泰如, 柏野和佳子, 川端良子, 田中弥生, 伝康晴, 西川賢哉
「『日本語日常会話コーパス』モニター版の設計・評価・予備的分析」, 17–33 頁, DOI: 10.15084/00002540.
- ・上野善道
「北奥方言の動詞のアクセント資料(2)」, 35–75 頁, DOI: 10.15084/00002541.
- ・近藤明日子, 田中牧郎
「「分類語彙表番号–UniDic 語彙素番号対応表」の構築」, 77–91 頁, DOI: 10.15084/00002542.
- ・ダンタイ クインチー
「中級日本語学習者の視点は母語によって異なるか: I-JAS のストーリーテリングのデータの分析から」, 93–119 頁, DOI: 10.15084/00002543.
- ・高嶋由布子
「危機言語としての日本手話」, 121–148 頁, DOI: 10.15084/00002544.
- ・澤田淳
「日本語の直示授与動詞「やる／くれる」の歴史」, 149–180 頁, DOI: 10.15084/00002545.

6 研究成果の発信と普及

国立国語研究所では、研究成果を社会に発信・還元するために、各種のシンポジウムや研究会を開催している。ここでは、専門家向けのものをあげる。

(1) 国際シンポジウム

国立国語研究所が主体となって実施する研究や、他機関との連携研究による優れた研究成果のうち、時宜を得た課題を取り上げ、海外からの専門家も交えて、論旨を深めながら学術界に公表するため、国際シンポジウムの開催や国際学会の共催をおこなっている。

NINAJL 国際シンポジウム

NINJAL ICPP 2019 (6th NINJAL International Conference on Phonetics and Phonology)

[2019.12.13–15, 立川総合研究棟]

2019 年 12 月 13 日

- ・Session 1: Investigating Syntax-Prosody in Optimality Theory (SPOT)
Chair: Shigeto Kawahara (Keio University)
 - ・Junko Ito and Armin Mester (University of California, Santa Cruz)
“Introduction: Why SPOT?”

- Jennifer Bellik and Nick Kalivoda (University of California, Santa Cruz)
“SPOT App Tutorial, Demonstration, and Japanese case study”
- Discussion
- Nick Van Handel (University of California, Santa Cruz)
“Italian case study: Recursive Phrasing”
- Richard Bibbs (University of California, Santa Cruz)
“Chamorro case study: Pronoun Alignment”
- Session 2: Interface (1)
Chair: Manami Hirayama (Seikei University)
 - Junko Ito and Armin Mester (University of California, Santa Cruz)
“Issues in recursive prosody”
 - Shinichiro Ishihara (Lund University)
“On the relation between syntactic and phonological clauses”
- Session 3: Poster Session I
 - Junkai Li (Sun Yat-sen University, Crem – Université de Lorraine) and Xiao Chen (Guangzhou University)
“Double accentuation system in modern French”
 - Yufen Chang (Western Kentucky University) and Yunwen Su (University of Utah)
“A Cross-dialectal investigation of prosody of Mandarin ritual and sincere refusals: Cues and detectability”
 - Natalia Kuznetsova (University of Turin/ Institute for Linguistic Studies, Russian Academy of Sciences)
“Word stress or a foot-phasal prominence interaction in Estonian?”
 - Shigeto Kawahara (Keio University), Jason Shaw (Yale University), and Ishihara Shinichiro (Lund University)
“Assessing tonal specifications on a token-by-token basis”
 - Nomi Erteschik-Shir(Ben-Gurion University), Gunlög Josefsson(Lund University), and Björn Köhnlein (Ohio State University)
“Variation in Mainland Scandinavian Object Shift: A prosodic analysis”
 - Fabian Schubö (University of Stuttgart)
“Givenness and stress rejection in Optimality Theory”
 - Sabine Zerbian and Fabian Schubö (University of Stuttgart)
“The domain of pre-boundary lengthening in German”
 - Hiromu Tanji and Gakuji Kumagai (Meikai University)
“A sound symbolic analysis of the monster names of Monster Hunter”
 - Takuya Matsuhashi and Gakuji Kumagai (Meikai University)
“The sound-symbolic effect of voiced obstruents on the spell names of Final Fantasy”
 - Kazuaki Yoshitake and Gakuji Kumagai (Meikai University)
“How is evolution expressed sound-symbolically? An analysis of the monster names of Digital Monster”
 - Wenxi Fei, Mingyu Weng, and Albert Lee (The Education University of Hong Kong)
“Effect of language dominance on focus prosody: Evidence from Wu-Mandarin bilinguals”
 - Shoji Ishibashi, Shonosuke Koya, and Hajime Takeyasu (Fukuoka University)
“Control of speech timing in Korean: Durations of vowels in/after closed and open syllables”
 - Daiki Hashimoto (The University of Tokyo)
“Vowel classification using machine learning: Random forest analysis”
 - Seunghun J. Lee (International Christian University, University of Venda), Céleste Guillemot (International Christian University), Kunzang Namgyal (Nar Bhandari Degree College), and Jigmee Wangchuk

- Bhutia (Enchey Senior Secondary School)
 “Prosodic cues of polar questions in Drenjongke (Bhutia) ”
- Changyun Moon (University of Tsukuba)
 “Hierarchy of special morae in Japanese: Evidence from loanword compound truncation”
 - Nicholas Van Handel (University of California, Santa Cruz)
 “Recursivity and the definition of MATCH in Italian syntax-prosody”
 - Hisao Tokizaki (Sapporo University)
 “Prosody and morphosyntax in Basque and Japanese”
 - Jennifer Bellik, Nick Kalivoda, and Nick Van Handel (University of California, Santa Cruz)
 “A binarity binarity: Branch-counting vs. leaf-counting”
 - Céleste Guillemot (International Christian University), Tomoko Monoul (International Christian University), Shigeto Kawahara (Keio University), and Seunghun J. Lee (International Christian University, University of Venda)
 “Prosody comes first? Phonetic realization of long vowels in Drenjongke”
 - Markus A. Pöchtrager (University of Vienna)
 “Danish, Estonian, English: Variations on a theme”
 - Shu Hirata (NINJAL)
 “On the voiced obstruent geminates in the Owase dialect (Mie Prefecture, Japan)”
 - Thomas Schökler (University of Vienna)
 “Deriving accent from structure: The case of Japanese verbs”
 - Richard Bibbs (University of California, Santa Cruz)
 “Prosodic alignment of weak pronouns in Chamorro”
- Session 4: Interface (2)
- Chair: Mariko Sugahara (Doshisha University)
- Elisabeth Selkirk (University of Massachusetts Amherst)
 [Keynote] “Constituency matches from spellout, mismatches from Phonology”

2019年12月14日

- Session 5: Lexical Pitch Accent (1)
- Chair: Timothy Vance (Komatsu University)
- Carlos Gussenhoven (Radboud University (NL) and NCTU (TW))
 [Keynote] “On the location of pitch accents”
 - Sara Myrberg (Lund University)
 “Two-peakedness in Scandinavian—Evidence from South Swedish”
- Session 6: Poster Session II
- Tsung-Ying Chen (National Tsing Hua University)
 “From the learnability of tonal dissimilation to the representation of contour tones”
 - Chin-Ting Liu (R.O.C. Naval Academy)
 “Revisiting tone three sandhi acquisition: Insights from acoustical analysis”
 - Gakuji Kumagai (Meikai University) and Shigeto Kawahara (Keio University)
 “The sound symbolic value of Japanese lexical pitch accent: A case study of baby diaper names”
 - Albert Lee (The Education University of Hong Kong) and Yi Xu (University College London)
 “Predictive synthesis of Japanese word prosody using AMtrainer”
 - Hsiu-Min Yu (Chung Hua University) and Wen-Jun Huang (National Central University)
 “Acoustic analysis of tone sandhi in Northern Sixian Hakka”
 - Marco Fonseca (University of Illinois)
 “The perception of Japanese pitch accent and segmental contrasts by L2 learners”

- Maëlys Salingre (The University of Tokyo)
 - “Apophonic compounds: new evidence for prosodic word binarity in Japanese”
- Wu Qi and Zhu Chunyue (Kobe University)
 - “Perceptual boundaries of Mandarin tones: Level vs. rising and level vs. falling”
- Mingyu Weng, Wenxi Fei, and Albert Lee (The Education University of Hong Kong)
 - “Interviewer effects on speech production in Cantonese: A pilot study”
- Yukiko Sugiyama (Keio University), C. T. Justine Hui (Sophia University), and Takayuki Arai (Sophia University)
 - “The effect of lexical pitch accent and downstep on listeners’ word identification in Japanese”
- Concu Valentina and Bruno Staszkiewicz Garcia (Purdue University)
 - “The interaction between phonological neighborhood density, lexical status, and lexical competitors on production of Italian stops”
- Hayato Aoi (ILCAA / NINJAL)
 - “The Bantu-like tonal characteristics of Tarama (Miyako, Ryukyuan)”
- Kohei Nishimura (Iryo Sosei University)
 - “The paradox between phonological variety and optionality”
- Ho-hsien Pan and Hsiao-tung Huang (National Chiao Tung University)
 - “Morpho-syntactic and prosodic effects on Taiwanese Min sandhi and base tones”
- Andrew Angeles (University of California, Santa Cruz)
 - “Constraint induction in the historical development of initial accent in Kyoto Japanese trimoraic nouns”
- Maho Morimoto and Shigeko Okamoto (University of California, Santa Cruz)
 - “Gender construction and fundamental frequencies in Japanese”
- Sanae Matsui and Mafuyu Kitahara (Sophia University)
 - “Bilingual lexicon of phonologically different languages and similar languages”
- Anton Kukhto (MIT)
 - “Lexical accent in Lithuanian: Is tone enough?”
- Andrew Hedding (University of California, Santa Cruz)
 - “Asymmetric prominence of correlates of wh-words in San Martín Peras Mixtec”
- Wong Yee Ping (Sophia University)
 - “Categorization of Cantonese lexical tones by Japanese-speaking novice listeners and learners of Chinese Mandarin”
- Session 7: Lexical Pitch Accent (2)
 - Chair: Kiyoko Yoneyama (Daito Bunka University)
 - Gorka Elordieta (University of the Basque Country) and Elisabeth Selkirk (University of Massachusetts Amherst)
 - “Lexical lack of accent and dephrasing in Northern Bizkaian Basque”
 - José Hualde (University of Illinois)
 - “Accent shift in Basque”
 - Draga Zec (Cornell University) and Elizabeth Zsiga (Georgetown University)
 - “Tone and stress as agents of cross-dialectal variation: the case of Serbian”

2019年12月15日

- Session 8: Lexical and Postlexical Prosody (1)
 - Chair: Seunghun Lee (International Christian University)
 - Yosuke Igarashi (Hitotsubashi University)
 - “Dialect-specific prosodic phrasing in Japanese: With a focus on dialects without lexical tone contrasts”

- Haruo Kubozono (NINJAL)
“Interactions between lexical and postlexical tones: Evidence from Japanese”
- Session 9: Lexical and Postlexical Prosody (2)
Chair: Yuki Hirose (The University of Tokyo)
 - Ryan Bennett (University of California, Santa Cruz)
“The interaction of tone and intonation in Uspaneko”
 - Larry Hyman (University of California, Berkeley)
[Keynote] “Prosodic asymmetries in nominal vs. verbal phrases in Bantu”

国際シンポジウム

イマ、アジアノ言語ガ オモシロイ: Learning Sounds of Asian Languages

[2019.7.6, 東京大学駒場キャンパス]

- Reiko Mazuka (RIKEN CBS)
Opening Remark “Why Asian languages now?”
- Youngon Choi (Chung-Ang University)
“Learning unusual sound contrasts with diachronic changes: The case for Korean”
- Leher Singh (National University of Singapore)
“The Acquisition of lexical tones in infancy and early childhood”
- Mutsumi Imai (Keio University)
“The sound symbolism bootstrapping hypothesis: How children bootstrap themselves from multi-sensory mapping to languagespecific linguistic systems”
- Hyun Kyung Hwang (University of Tsukuba)
“Acoustic characteristics of motherese and early perceptual development: A case study of Japanese stops”
- Chutamanee Onsuwan (Thammasat University)
“Phonetic modifications of Thai stops’ Voice-Onset-Time, vowel duration, and lexical tones in Infant-Directed Speech”
- Katherine Demuth (Macquarie University)
“Learning the tones of Mandarin: Acoustic evidence from children with cochlear implants”

The 15th International Cognitive Linguistics Conference [2019.8.6–11, 関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス]

2019年8月6日

- Pre-event Lectures
 - Yo Matsumoto (NINJAL)
Topic 1: “Deixis and subjectivity in Japanese”
 - Kimi Akita (Nagoya University)
Topic 2: “Ideophones and iconicity in Japanese”
 - Prashant Pardeshi (NINJAL)
Topic 3: “Transitivity pairs and noun-modifying expressions in Japanese”
- Plenary 1
 - William Croft (University of New Mexico)
“Some contributions of typology to cognitive linguistics, revisited”
- General Session: Semantics (15:50–17:15, Room 101)
 - Chair: Natalia Beliaeva (MCLaSS: Multicultural Learning and Support Services / Victoria University of Wellington)
 - Suzanne Kemmer (Rice University)
“Lexical Blending: Opening a Window on the Nature of the Morphemes”

- Daniel Kjellander (Department of Language Studies, Umeå University, Sweden)
“Ambiguity at Work: Multistable Meaning Structures in Lexical Blending”
- Natalia Beliaeva (MCLaSS: Multicultural Learning and Support Services / Victoria University of Wellington) and Natalia Knoblock (Saginaw Valley State University / University of Michigan)
“Conceptual Blending in the Construction of Morphological Blends”
- General Session: Semantics (17:25–18:20, Room 101)
Chair: Dirk Geeraerts (Katholieke Universiteit Leuven)
 - Ilona Tragel and Jane Klavan (University of Tartu)
“Draw free, think aloud: The image schematic representation of Estonian abstract verbs”
 - Xiaolin Zhang (Hiroshima University)
“On the Semantic Restrictions of Monosyllabic Sensory Adjectives in Metaphorical Expressions: Evidence from Mandarin Chinese”
- General Session: Cognitive grammar (15:50–17:15, Room 103)
Chair: Toshiyuki Kumashiro (Keio University)
 - Guocai Zeng (Sichuan University, China)
“The Dynamic Focal Adjustments in Event Construal: A Case Study on English WH-Dialogic Constructions”
 - Toshiyuki Kumashiro (Keio University)
“The Semantic Basis of Syntax: The Case of Quantifier Float in Japanese”
 - Takashi Kobayashi (Gunma Prefectural Women’s University)
“(Discourse) Deictic Usages of Demonstrative Pronoun *that*: A Cognitive Linguistic Approach”
- General Session: Cognitive grammar (17:25–18:20, Room 103)
Chair: Susanne Flach (Université de Neuchâtel)
 - Astrid De Wit (University of Antwerp) and Philippe De Brabanter (Université Libre de Bruxelles)
“The use of the English progressive with verbs of communication: An epistemic analysis”
 - Shotaro Sasaki (Kochi University / Prefectural University of Kumamoto)
“An Analysis of *to*-Infinitives as Clausal Subjects”
- General Session: Construction (15:50–17:15, Room 104)
Chair: Naoki Otani (Tokyo University of Foreign Studies)
 - Lotte Sommerer (University of Vienna)
“Let’s talk *face to face* about N-P-N constructions in English”
 - Qingnan MENG and Weihua LUO (Dalian Maritime University)
“The Constructional Changes of English Catenative Constructions: A case study of seem to vs. appear to”
 - Naoki Otani (Tokyo University of Foreign Studies)
“A constructional analysis of the ‘*better off* construction’ in English”
- General Session: Construction (17:25–18:20, Room 104)
Chair: Reijirou Shibasaki (Meiji University)
 - Reijirou Shibasaki (Meiji University)
“The question remains is whether constructions are in the making: Constructionalization at work”
 - Yasuhiro Tsushima (Fuji Women’s University)
“The Constructionalization of Implicit Theme Resultative Constructions as a ‘Snowclone’ in English”
- General Session: Construction (15:50–17:15, Room 105)
Chair: John Newman (University of Alberta, Monash University)
 - Yuzhi Shi (National University of Singapore)
“THE DITRANSITIVE AS RESULTATIVE IN CHINESE”

- Mengmin Xu (Beihang University)
“The Grammatical Constructionalization and Cognitive Mechanisms of *Gei* (GIVE) Construction in Mandarin”
- Shujun Chen and Chanqing Zheng (Guangdong University of Foreign Studies, China)
“Diachronic Collostructional Analysis on the Chinese Construction “V lai V qu””
- General Session: Construction (17:25–18:20, Room 105)
Chair: Lotte Sommerer (University of Vienna)
 - Hsiao-Hsuan Hung (University of Oregon)
“Language Productivity and Representation: A Corpus-Based Study of [da - NP] Construction”
- General Session: Typology (15:50–17:15, Room 108)
Chair: Kaoru Horie (Nagoya University)
 - Jiachun Li (Heilongjiang University, China)
“Lexicalization Patterns of Events of Causative State Change in Mandarin Chinese -from a Diachronic Perspective”
 - Minna Kirjavainen (University of the West of England, England) and Yuriko Kite (Kansai university)
“Does native language affect a speaker’s ability to recall details from photos? A comparison between monolingual English and Japanese adults”
 - Naruadol Chancharu (Chulalongkorn University)
“The Carto-Conceptual Network models of indefinite pronouns and negation: Where linguistic typology meets cognitive linguistics”
- General Session: Metaphor (15:50–17:15, Room 204)
Chair: Kazuko Shinohara (Tokyo University of Agriculture and Technology)
 - Huei-Ling Lai (National Chengchi University, Taiwan)
“Playful Metaphors in Hakka Jokes and Pragmatic-Cultural Implications”
 - Eve Sweetser and Schuyler LaParle (University of California, Berkeley)
“War is war – or is it? Different genres show different metaphors for cancer”
 - Youngju Choi (Chosun University)
“Metonymy Affects Grammar: Korean Double Object Constructions”
- General Session: Metaphor (15:50–17:15, Room 205)
Chair: Kojiro Nabeshima (Kansai University)
 - Ewelina Wnuk (University College London) and Yuma Ito (Toyama University of International Studies)
“Heart-based emotion metaphors in Mlabri (Austroasiatic, Thailand)”
 - Laura Suárez-Campos (University of Zaragoza)
“Exploring the concept of anger in Bulgarian thought embodied metaphors”
- General Session: Metaphor (17:25–18:20, Room 205)
Chair: Karen Sullivan (The University of Queensland)
 - Tingting Xu (City University of Hong Kong) and Xiaolu Wang (Zhejiang University)
“Is Humor Embodied? —An empirical study of humor perception in Chinese”
- General Session: Pragmatics (15:50–17:15, Room 206)
Chair: Ryoko Uno (Tokyo University of Agriculture and Technology)
 - Yukio Hirose (University of Tsukuba)
“Where the awareness condition comes from: Cross-linguistic generalizations about viewpoint reflexives in English and Japanese”
 - Chen-Yu Chester Hsieh (National Taiwan University)
“Subject, Stance, and Sequence: An Interactional Construction Grammar Approach to the False-belief”

Verb *Yiwei* in Mandarin Conversation”

- Kobie van Krieken (Centre for Language Studies, Radboud University)

“Linguistic Patterns of Viewpoint Transfer in News Narratives”

- General Session: Pragmatics (17:25–18:20, Room 206)

Chair: Masako U. Fidler (Brown University)

- Liisa Vilkki (University of Helsinki)

“Epistemic and inferential expressions in linguistic research articles: A contrastive (English-Finnish) corpus-based analysis”

- Rodrigo Becerra (University of Alberta)

“A corpus-based analysis of two “mystery” discourse particles in Mapudungun”

- General Session: Multimodality (15:50–17:15, Room 207)

Chair: Geert Brône (KU Leuven)

- Hui-Chieh Hsu (KU Leuven)

“Speech-embedded non-verbal depictions: Embeddedness and structural complexities”

- Annelies Jehoul (KU Leuven)

“Filled pauses from a cognitive and pragmatic perspective: how eye-tracking improves our knowledge of linguistic elements”

- General Session: Multimodality (17:25–18:20, Room 207)

Chair: Tomoko Endo (The University of Tokyo)

- Tomoko Endo (The University of Tokyo)

“Bodily Behavior as Constructional Meaning: The Case of Benefactive Construction in Japanese Family Interaction”

- Jamin Pelkey (Ryerson University, Toronto)

“Kinesthetic Pattern Grammar in the Yama-Bhavacakra: Markedness, Blending and Bodily Midline Mimesis”

- General Session: Sociolinguistics (15:50–17:15, Room 208)

Chair: Gitte Kristiansen (Universidad Complutense de Madrid)

- Weiwei Zhang, Kris Heylen, and Dirk Geeraerts (KU Leuven)

“Analyzing lexical variation in regional varieties of Chinese: A concept-based approach”

- Gitte Kristiansen and Jesus Martin Tevar (Universidad Complutense de Madrid)

“Cognitive Grammar Matters: Revisiting Linguists’ Use of Question Types in Attitude Research”

- General Session: Sociolinguistics (17:25–18:20, Room 208)

Chair: Maarten Lemmens (Université de Lille and UMR 8163 STL, France)

- Maarten Lemmens, Mégane Lesuisse, and Océane Foubert (Université de Lille and UMR 8163 STL, France)

“Gender stereotypes, neologisms, and concept-formation”

- Gitte Kristiansen (Universidad Complutense de Madrid)

“Asymmetries in Pluricentric Language Perceptions”

- General Session: Applied linguistics (15:50–17:15, Room 209)

Chair: Teresa Molés-Cases (Universitat Politècnica de València)

- Daniel O. Jackson (Kanda University of International Studies)

“Pre-service English teachers’ dialogic descriptions of motion: Task effects and trouble sources”

- Daisuke Nakamura (Japan Women’s College of Physical Education)

“Effects of task procedural repetition on lexical diversity and clausal complexity in L2 written narrative production of motion events”

- Efstathia Soroli (University of Lille), Coralie Vincent (CNRS and University of Paris 8), Helen Engemann (Mannheim University), Henriette Hendriks (University of Cambridge), and Maya Hickmann (CNRS)

and University of Paris 8)

“Event integration mechanisms across languages and their psychological reality”

- General Session: Applied linguistics (17:25–18:20, Room 209)

Chair: Reyes Llopis-Garcia (Columbia University)

‣ Yiyun Liao, Katinka Dijkstra, and Rolf Zwaan (Erasmus University Rotterdam)

“Directional prepositions and the dynamics of motion event representation”

‣ Reyes Llopis-Garcia (Columbia University)

“Space, radial networks and prototypes: a cognitive approach to prepositions in Spanish/L2 pedagogy”

2019年8月7日

- Plenary 2

‣ Jeannette Littlemore (University of Birmingham)

“Sources of Variation in ‘Embodied’ Metaphor: Theoretical and Real-world Consequences”

- Theme Session: Stance-stacking in language and multimodal communication (10:50–15:10, Room 101)

Organizers: Barbara Dancygier (University of British Columbia), Sally Rice (University of Alberta), and Terry Janzen (University of Manitoba)

‣ Introduction

‣ Terry Janzen (University of Manitoba)

“When is an adjective not an adjective? Stance markers have to go somewhere!”

‣ Sally Rice (University of Alberta)

“Epistemics, evidentials, and other higher-order predicates in Dene Sųliné: Packing the post-verbal stance stack”

‣ Jennifer Hinnell and Sally Rice (University of Alberta)

“The embodied marking of stance in North American English: Stacked and idiomatic”

‣ Barbara Dancygier and Adrian Lou (University of British Columbia)

“*It's like if* constructions and stance off-loading in multimodal artifacts”

‣ Barbara Dancygier (University of British Columbia) and Jennifer Hinnell (University of Alberta)

“Communicative load-sharing: Stance construction in multimodal, multi-media contexts”

(to be continued)

- General Session: Construction (10:50–12:15, Room 103)

Chair: Russell Lee-Goldman (University of California, Berkeley)

‣ Lotte Sommerer (University of Vienna) and Eva Zehentner (University of York)

“A convent of sisters without a mother superior? – Discussing abstract nodes in the constructional network”

‣ Thomas Herbst and Peter Uhrig (FAU Erlangen-Nürnberg)

“The “mini-constructicon” – a first step towards designing a Reference Constructicon of English”

‣ Anna Endresen (UiT The Arctic University of Norway), Anna Klezovich (National Research University Higher School of Economics), Olga Lyashevskaya (National Research University Higher School of Economics / Vinogradov Institute of Russian Language (Russian Academy of Sciences)), Daria Mordashova (Lomonosov Moscow State University / Vinogradov Institute of Russian Language (Russian Academy of Sciences)), Maria Nordrum (UiT The Arctic University of Norway), Ekaterina Rakhilina (National Research University Higher School of Economics / Vinogradov Institute of Russian Language), Francis Tyers (Indiana University Bloomington), and Valentina Zhukova (National Research University Higher School of Economics)

“Building a Constructicon for Russian: How to identify families of constructions?”

- General Session: Frame (13:15–15:10, Room 103)
 - Chair: Tetsuya Kogusuri (Osaka University)
 - Karen Sullivan (University of Queensland, Australia)
 - “Anti-Muslim framing in Australian social media”
 - Tetsuya Kogusuri (Osaka University)
 - “A Frame-Constructional Approach to Emphatic Reflexives in Japanese”
 - Kevin Ezra Moore (San José State University (USA))
 - “Coextension-path fictive motion and metaphor typology”
 - General Session: Grammar (10:50–12:15, Room 104)
 - Chair: Elizaveta Tarasova (IPU New Zealand, Tertiary Institute)
 - Qianwen Cheng (Shanghai University)
 - “Trajector-object Variants in Chinese BA-construction—A Cognitive Approach”
 - Bing ZHU (Kwansei Gakuin University)
 - “On the Chinese insubordinate conditional clause formed by the particle NE: A constructionist perspective”
 - Elizaveta Tarasova (IPU New Zealand, Tertiary Institute) and José A. Sánchez Fajardo (University of Alicante (Spain))
 - “Exploring the evaluative nature of Adj+ie/y nominalisations in contemporary English”
 - Theme Session: Macro-events, Grammaticalization, and Typology (13:15–15:10, Room 104)
 - Organizer: Fuyin Thomas Li (Beihang University, Beijing)
 - Fuyin Thomas Li (Beihang University, Beijing)
 - “Evolutionary Order of Macro-events in Mandarin”
 - Liulin Zhang (Truman State University)
 - “The difficulty gradient of change-of-state events for human construal demonstrated in the expansion of Chinese framing satellites”
 - Jing Du and Fuyin Thomas Li (Beihang University, Beijing)
 - “The Conceptual Boundary Among *break*, *cut* and *open*: A Diachronic Semantic Perspective”
 - Lin Yu (School of Foreign Languages, Henan University)
 - “Beyond Typology: How Event Integration Works in Motion Events—A Case Study of “V + Dáo” Constructions in Mandarin”
- (to be continued)
- General Session: Motion (10:50–12:15, Room 105)
 - Chair: Fuyin Th. Li (Beihang University, Beijing)
 - Teresa Molés-Cases (Universitat Politècnica de València) and Paula Cifuentes-Férez (Universidad de Murcia)
 - “Some advances in the translation of Manner and boundary-crossing in motion events: An English-German/Spanish/Catalan experiment”
 - Ladina Stocker and Raphael Berthele (University of Fribourg)
 - “The roles of language dominance and language mode in bilingual motion event encoding”
 - General Session: Motion and space (13:15–15:10, Room 105)
 - Chair: Kyoko Inoue
 - Ponrawee Prasertsom (Chulalongkorn University)
 - “The Goal bias effects on frequencies of different path types and the (ir)relevance of animacy and literalness”
 - Bill Palmer (University of Newcastle), Jonathon Lum (University of Melbourne), and Jonathan Schlossberg

(University of Newcastle)

“Demographic diversity and variation in spatial behaviour within language communities”

- General Session: Categorization (10:50–12:15, Room 108)

Chair: Mariann Proos (University of Tartu)

‣ Dylan Glynn (Université Paris 8, St-Denis - Vincennes)

“The meaning of *time*. Polysemy, usage and conceptual structure”

‣ Daria Kosheleva (The Arctic university of Norway)

“A radial category model for future tense in Russian: when the future is not future”

‣ Avgustina Biryukova and Dylan Glynn (Université Paris 8, St-Denis - Vincennes)

“Boredom is sad: A behavioural case study of near-synonyms in Russian”

- General Session: Categorization (13:15–15:10, Room 108)

Chair: Iraide Ibarretxe-Antuñano (Universidad de Zaragoza)

‣ Thomas VAN HOEY (National Taiwan University)

“Radiant suns, burning fires and brilliant flowers: The onomasiology and radical support of Chinese literary LIGHT ideophones”

‣ Karin Zurbuchen and Mari Uusküla (Tallinn University)

“We do not talk much about smell here: A preliminary study of the semantics of olfaction in Estonian and German”

‣ Mariann Proos (University of Tartu)

“Letting meaning surface: a corpus-based study of Estonian perception verbs”

‣ John Campbell-Larsen (Kyoto Women’s University)

“Verbs of visual perception and category violations”

- General Session: Metaphor (10:50–12:15, Room 204)

Chair: Kevin E. Moore (San Jose State University)

‣ Chunfang Huang (Southwest University of Political Science and Law)

“A Cognitive Approach to Translating Conceptual Metaphors in Legal Language”

‣ Inesa Šeškauskienė (Vilnius University)

“Metaphor in legal translation: space as a source domain English and Lithuanian”

‣ Pongbodin Amarinthnukrowh (Department of Linguistics, Chulalongkorn University)

“Utilizing the USAS semantic tagger to analyze metaphor: A case study of the US legalization of same-sex marriage discourse”

- General Session: Metaphor (13:15–15:10, Room 204)

Chair: Kohei Suzuki (Kobe city university of foreign studies)

‣ LI Heng (College of International Studies, Southwest University, China)

“Moving at the Speed of Life: How Life Pace Influences Temporal Reasoning”

‣ CAO Yu (Zhognan University of Economics and Law) and LI Heng (Southwest University)

“Planning for the Future: The Relationship between Conscientiousness, Temporal Focus and Implicit Space-Time Mappings”

‣ Tao Zhang (School of Foreign Languages, Southwest Petroleum Universit, Chengdu, P.R. China / College of International Studie, Southwest University, Chongqing, P.R. China) and Jingyi Zhan (International Department of Shude High School, Chengdu, P.R. China)

“A cognitive approach to metaphors and metonymies: A case of the emotion “xì” (HAPPINESS) in Chinese”

- General Session: Change (10:50–12:15, Room 205)

Chair: Lihong Huang (Georgetown University)

- Lihong Huang and Andrea Tyler (Georgetown University)

“A Cognitive Linguistics Account of the Chinese Particle *Le*”

- Phuong Hoang Nguyen and Karen Sullivan (University of Queensland, Australia)

“When a polysemous word grammaticalizes, does it stay polysemous? Evidence from Vietnamese path verbs.”

- Susanne Flach (Université de Neuchâtel)

“From *movement into action* to *manner of causation*: Changes in argument mapping in the *into-causative*”

- General Session: Metaphor (13:15–15:10, Room 205)

Chair: Dezheng Feng (Hong Kong Polytechnic University)

- Shuping Huang (National Sun Yat-sen University, Taiwan)

“Metaphor mixing and domain integration: A case study on BODY metaphors”

- Dezheng (William) Feng (The Hong Kong Polytechnic University)

“Multimodal Metaphor in Chinese Dream Publicity Posters: Towards a Socio-functional Model of Analysis”

- Wen-Yi Huang (National Taiwan University)

“A Tale of Two Cities: A Multimodal Study of City Metaphors in Picture Books”

- Julia Salzinger (Technische Universität Dortmund)

“Black and green smells: Variation in synesthetic metaphors of smell”

- General Session: Corpus (10:50–12:15, Room 206)

Chair: Jane Klavan (University of Tartu)

- Cyril Grandin, Bert Cappelle and Ilse Depraetere (Université de Lille)

“What makes us choose which modal? Putting semantic, syntactic and lexical factors in the balance”

- Alvin Cheng-Hsien Chen (National Taiwan Normal University)

“Constituency, sequentiality, and prosody: A corpus-based analysis of phraseological sequences in Mandarin spontaneous speech production”

- Andreas Baumann, Theresa Matzinger and Kamil Kaźmierski (University of Vienna, Adam Mickiewicz University Poznań)

“Phonotactics is affected by statistical scaling laws less than the lexicon”

- General Session: Corpus (13:15–14:40, Room 206)

Chair: Keisuke Sanada (Sapporo Gakuin University)

- Václav Cvrček (Charles University) and Masako Fidler (Brown University)

“Up close and personal vs. birds-eye view” of discourse: a corpus study of perspective using Czech data”

- Alvin Cheng-Hsien Chen and Hung-Kuan Su (National Taiwan Normal University)

“A usage-based constructionist approach to grammar: Semantic network analyses of words, constructions, and alternations”

- Risako Azemoto (Lancaster University)

“How gender is described: An insight from a spoken corpus”

- General Session: Acquisition (10:50–12:15, Room 207)

Chair: Chiung-chih Huang (National Chengchi University, Taipei, Taiwan)

- Britta Juska-Bacher and Ladina Stocker (University of Teacher Education Bern)

“Assessing vocabulary depth in school beginners”

- Sophie de Pontonx (CNRS, MoDyCo, Paris Nanterre University) and Christophe Parisse (INSERM, MoDyCo, Paris Nanterre University)

“Children’s acquisition of the notion of reference time: constructing a world within language”

- Chiung-Chih Huang (National Chengchi University, Taipei, Taiwan)
“An incremental approach to referential accessibility in mother-child conversation”
- General Session : Pragmatics (13:15–15:10, Room 207)
 - Chair: Kuniyoshi Kataoka (Aichi University)
 - Catherine Cook (Monash University)
“Part of Your World: Linguistic Indicators of Immersion in Video Games”
 - Larissa Manenko and Anastasia Sharapkova (Lomonosov Moscow State University)
“Cognitive Dominance as a Driving Force of Concept Evolution in Arthurian Fiction”
 - Masashi Okamoto (Ritsumeikan University)
“Fictive interaction in prose text: An experiment on prose-to-dialogue conversion”
 - Łukasz Wiraszka (Jagiellonian University in Kraków, Poland)
“Viewpoint phenomena in academic discourse: A Cognitive Linguistics account”
- Theme Session : Roles of gesture and body movement in communication (10:50–15:10, Room 208)
 - Organizers: Harumi Kobayashi (Tokyo Denki University) and Sotaro Kita (University of Warwick)
 - Suzanne Aussems and Sotaro Kita (University of Warwick)
“The role of seeing gestures in children’s word learning and event memory”
 - Eriko Yamamoto and Kazuo Hiraki (The University of Tokyo)
“Does voluntary production of body movement have long-term effects on infants’ learning about others’ body movement?”
 - Yuka Ishizuka (Division of Disability Sciences, University of Tsukuba)
“Gesture imitation increases reciprocal communication in children with autism spectrum disorder”
 - Ulf Liszkowski (University Hamburg, Germany)
“Ontogeny of the human pointing gesture”
 - Tetsuya Yasuda (School of Science and Engineering, Tokyo Denki University)
“Coordination of pointing and eye gaze in adults teaching whole/part object labels”
 - Harumi Kobayashi (School of Science and Engineering, Tokyo Denki University)
“Children’s comprehension and production of different pointing gestures ”
 - Discussion
- General Session : Applied & Neuro Linguistics (10:50–12:15, Room 209)
 - Chair: Joseph Tomei (Kumamoto Gakuen University)
 - Rachel Luna Peralta (Tourism College, Institute for Tourism Studies, Macao), Henrique Fátima Boyol Ngan (Tourism College, Institute for Tourism Studies, Macao), and Chung-En Yu (Department of Innovation and Management in Tourism, Salzburg University of Applied)
“Reading Journal Abstracts: An Eye-tracking Study of University EFL Students’ Online Reading Behavior”
 - Helen Zhao (University of Melbourne) and Ruiming Wang (South China Normal University)
“Image Schemas in Second Language Learning of English Prepositions: An Event-Related Potential Study”
 - Rachel Hatchard (Birmingham City University)
“Linguistic storage beyond the word level: The effect of multiword frequency on well-formedness of spoken utterances in aphasia”
- General Session : Applied (13:15–15:10, Room 209)
 - Chair: Masahiro Takimoto (Aoyama Gakuin University)
 - Laura Janda (UiT The Arctic University of Norway) and Francis M. Tyers (Indiana University)
“Paradigms: cognitive plausibility and pedagogical application”
 - Reyes Llopis-Garcia and Irene Alonso-Aparicio (Columbia University)
“Cognitive approaches to L2 pedagogy: challenges and shortcomings of empirical testing”

- Masahiro Takimoto (Aoyama Gakuin University)
 - “The effects of primary metaphor on the development of EFL learners’ pragmatic proficiency”
- Poster session (15:30–16:50, Learning Commons [Basement of Central Auditorium])
 - Change
 - Shinya Hirasawa (University of Tokyo)
 - “*Side by side* as a preposition”
 - Tomoaki Hayashi (Kindai University)
 - “A Quantitative Perspective on Grammaticalization: The Case of Deverbal Prepositions in English”
 - Suhong Hu (Nagoya University)
 - “Discourse Functions of “Ke(re)do(mo)” and “Copula+Ke(re)do(mo)” at the Left Periphery (LP) in Spoken Japanese: A Functional Expansion Perspective”
 - Mayu Kawakita (University of Tokyo, Department of Language and Information Science)
 - “Relation between Japanese character types and grammaticalisation”
 - Mitsuko Takahashi (Nihon Institute of Medical Science)
 - “A Diachronic Dimension of Grammaticalization: With Historical Examples of Negative Adverbs in English and Japanese”
- Corpus
 - Shuqiong Wu (Sichuan International Studies University)
 - “A corpus-based study of the Chinese synonymous approximatives shangxia, qianhou and zuoyou”
 - Sachi Kato and Masayuki Asahara (NINJAL)
 - “Exploring metaphorical expressions in Japanese newspaper-article corpora”
 - Rei Kikuchi (Chuo University), Sachi Kato (NINJAL), and Masayuki Asahara (NINJAL)
 - “Collecting figurative expressions using indicators and a semantic tagged Japanese corpus”
 - Haerim Hwang, Hye Young Jung and Hyunwoo Kim (University of Hawai‘i at Mānoa)
 - “How Do Different Processes of Speaking and Writing affect Syntactic Complexity in Child Second Language Production?”
 - Giedrė Junčytė (Vilnius University)
 - “Middle marked intransitives and intransitives with the “complex formant” in Lithuanian: a corpus-based study”
 - Noriko Matsumoto (Kobe University)
 - “The Complex Interaction of Construal Operations: Multi-verb Sequences in World Englishes”
- Acquisition
 - Di Zhang (Cognitive Science and Linguistic Research Center, School of Foreign Language) and Qianli Xu (Linyi University, Linyi, China)
 - “A Study on Acquisition of Sentence-final Particles among Chinese-speaking Children”
 - Mary R. Espinosa-Ochoa (National Autonomous University of Mexico)
 - “The relevance of anchoring and the duration of events in the early acquisition of Spanish verb morphology and its tense-aspect meaning”
 - Stefan Hartmann (University of Bamberg), Antje Quick (University of Leipzig), Ad Backus (Tilburg University), and Elena Lieven (University of Manchester)
 - “Bilingual language acquisition from a usage-based perspective: A corpus study on the code-mixing of a German-English bilingual child”
 - Michael Pleyer (English Department, Universität Koblenz-Landau)
 - “Perspectivization and Pretend Play in Language Acquisition: A Corpus Study”
 - Miho Takanashi (Tama art university)
 - “L1 Acquisition of Japanese Deictic Verbs Iku Meaning ‘to Go’ and Kuru Meaning ‘to Come’: II 共同研究と共同利用

Focusing on Motion Event Description”

- Keiko Nakamura (Meikai University)

“The Expression of Motion Events in Japanese and English Narratives: A Developmental Approach”

‣ Motion

- Anna Bordilovskaya (Rikkyo University), Kiyoko Eguchi (University of Miyazaki), Miho Mano (Naruto University of Education), and Yuko Yoshinari (Gifu University)

“Inter- and Intra-Typological Variations of the Representations of Complex Trajectories”

- Kiyoko Eguchi (University of Miyazaki), Miho Mano (Naruto University of Education), Anna Bordilovskaya (Rikkyo University), Yuko Yoshinari (Gifu University), and Yo Matsumoto (NINJAL)

“Cross-linguistic tendency of Path encoding: A production experiment of 14 different Paths in English, Hungarian, Italian, Japanese, and Russian”

- Teresa Molés-Cases (Universitat Politècnica de València)

“The expression of Manner-of-motion in inter- and intratypological translation scenarios: a comic-based analysis”

- Chihkai Lin (Tatung University)

“Interaction of spatial prepositions ti7, tiām3 and tua3 and verbs in Taiwan Southern Min: From a corpus-based approach”

- Thomas Siu Ho Yau (The Chinese University of Hong Kong, Hong Kong)

“Conceptualization of motion event by Chinese-English Bilinguals: A study of difference between Cantonese and Mandarin”

- Jiashen Qu (Hiroshima University)

“How Japanese and Chinese advanced learners of English found the frog: A SLA study on rhetorical style of motion events”

‣ Applied

- Kent Hill (Nihon University)

“Applying Cognitive Linguistics to Content and Language Integrated Learning through L2 Polysemous Lexis Research”

- Yu-da Lai (Providence University)

“Relation between Perception of Sound Symbolism and Effects of a Cognitive Linguistics-based Approach to Vocabulary Learning by Taiwanese EFL Learners”

‣ Multimodality

- Chenxi Niu (Vrije Universiteit Amsterdam) and Alan Cienki (Moscow State Linguistic University)

“How we marginalised onomatopoeia: Evidence from a multimodal study on Chinese child language”

‣ Evolution

- Konstantina Margiotoudi (Brain Language Laboratory, Department of Philosophy and Humanities, Freie Universität, Berlin, Germany / Berlin School of Mind and Brain, Humboldt Universität zu Berlin, Berlin, Germany / Einstein Center for Neurosciences, Berlin, Germany), Matthias Allritz (School of Psychology & Neuroscience, University of St Andrews, St Andrews, Scotland), Manuel Bohn (Department of Psychology, Stanford University, Stanford, USA / Leipziger Forschungszentrum für frühkindliche Entwicklung, Universität Leipzig, Leipzig, Germany), and Friedemann Pulvermüller (Brain Language Laboratory, Department of Philosophy and Humanities, Freie Universität, Berlin, Germany / Berlin School of Mind and Brain, Humboldt Universität zu Berlin, Berlin, Germany / Einstein Center for Neurosciences, Berlin, Germany)

“Sound symbolic correspondences tested in human and non-human primates.”

- Typology
 - Masaru Kanetani (University of Tsukuba)

“So many ideophones in Japanese but less so in English: A three-tier model account”
 - Thomas Schlatter and Hsu-Hung Ke (National Taiwan University)

“Hidden Iconicity in Tones”
 - Evangelia Adamou (French National Centre for Scientific Research [CNRS]) and Yair Haendler (University Paris Diderot)

“Nominal tense: An experimental approach”
 - Takako Hisayoshi (Toyo University)

“The One Lexical Argument Constraint—A Comparative Study of Japanese and Korean”
 - Shuo Yu (Lancaster University)

“Semantic maps in typology: the case of resultative constructions”
 - Sociolinguistics
 - Xiaoyu Tian and Weiwei Zhang (Shanghai International Studies University)

“Chinese Causative Constructions with shi and ling: A Cross-variety Perspective”
 - Lou Hsuan Tsien (National Taiwan University, Department of International Business)

“Revisiting Sex and Love in Language and Culture: A Cognitive Linguistic Approach”
 - Metaphor
 - Atreyee Mukherjee (Indian Institute of Technology Kanpur)

“Metonymy: Underspecification and Reduction”
 - Jiaming Yang and Meichun Liu (City University of Hong Kong)

“How metaphor and metonymy are used in Chinese and English ceramic discourse?”
 - Rong Zhou, Wei Zhang, and Ying Cheng (South China Normal University)

“The Schematic Function of Conceptual Metaphor for Discourse Comprehension in Chinese and English Contexts”
 - M. Irfan Perdana (Independent)

“WINTER IS COMING’: A CORPUS-BASED APPROACH TO SPATIOTEMPORAL METAPHORS IN ENGLISH AND INDONESIAN DISCOURSE”
 - Kaoru Ito (Kyushu University)

“Emergence of Rhetorical Effect: Figurative Language and Systems Theory”
 - Ayumi Tamaru (Osaka Kyoiku University)

“Simile, metaphor, and their non-interchangeability: Beyond A is like B vs. A is B”
 - Plenary 3
 - Martin Hilpert (Université de Neuchâtel)

“Causation, Culture, and Constructional Change”
 - Board Meeting
 - Student Event
- 2019年8月8日
- Plenary 4
 - Nick Enfield (University of Sydney)

“Enchrony: An Essential Frame for Language and Cognition”

- Theme Session: Stance-stacking in language and multimodal communication (cont.) (10:50–15:10, Room 101)
 - Organizers: Barbara Dancygier (University of British Columbia), Sally Rice (University of Alberta), and Terry Janzen (University of Manitoba)
 - Dorothea Horst (European University Viadrina, Frankfurt (Oder), Germany)
 - “Stance as multimodal, dynamic, and intersubjective phenomenon in interaction”
 - Stef Spronck (University of Helsinki) and Aung Si (University of Cologne)
 - “Mistaken-belief expressions: a stance-stacking laboratory”
 - Lieven Vandelanotte (University of Namur & University of Leuven)
 - “Internet memes and the dynamics of stance”
 - Terry Janzen (University of Manitoba), Barbara Shaffer (University of New Mexico), and Lorraine Leeson (Trinity College Dublin)
 - “The embodiment of stance in narratives in two signed languages”
 - Sara Siyavoshi (University of New Mexico), Laura Ruth-Hirrel (California State University Northridge) and Sherman Wilcox (University of New Mexico)
 - “Facial Displays as Stance Markers in Multimodal Spoken and Signed Constructions”
 - Eve Sweetser (University of California, Berkeley)
 - “Embedded viewpoint and stance in gesture and speech: multimodal stance-stacking”
 - Discussion
- Theme Session: Ethnosyntax (10:50–14:10, Room 103)
 - Organizer: Kaoru Horie (Nagoya University)
 - Kaoru Horie (Nagoya University) and Joungmin Kim (Asia University)
 - “Negative politeness and the preference for nominalization strategies in Japanese: A contrastive study with Korean”
 - Seongha Rhee (Hankuk University of Foreign Studies)
 - “When crudity steps into grammar: The case of Korean auxiliary verbs”
 - Kuniyoshi Kataoka (Aichi University)
 - “Discursive management of *space* and *textual* deictics in Japanese spatial monologues (and beyond)”
 - Yukinori Kimoto (University of Hyogo)
 - “Morphological manifestations of hunter-gatherer lifestyle: Word formations and ethno-semantics in Philippine Negrito languages”
 - Discussion w/ Nick Enfield
- Theme Session: Macro-events, Grammaticalization, and Typology (cont.) (13:15–15:10, Room 104)
 - Organizer: Fuyin Thomas Li (Beihang University, Beijing)
 - Sabine De Knop and Manon Hermann (Université Saint-Louis Bruxelles)
 - “From lexical meaning to functional role: the case of complex noun-verb phrases”
 - Yiting Chen (Mie University)
 - “Macro-events in verb-verb compounds from the perspective of baseline and elaboration: Iconicity in typology and grammaticalization”
 - Guannan Zhao (Beihang University)
 - “The grammaticalization of Pleonastic negation—A case study of “chàdiānméi” in Mandarin Chinese”
 - Longbo Daniel Ren (Henan University of Science and Technology)
 - “Typology of English and Mandarin: Taking spatial stationary events as examples”
 - Na Liu (Beijing University of Technology)
 - “The Grammaticalization of Chinese Directional Verb ‘kāi’: A Constructional Approach”
 - Efstathia Soroli (University of Lille & CNRS ‘Savoirs, Textes & Langage’ Lab, UMR 8163)
 - “Typological differences influence motion event perception: Evidence from production, similarity

- judgment tasks and eye tracking”
- Discussion
- General Session: Motion (10:50–12:15, Room 105)
 - Chair: Kazuhiro Kawachi (National Defense Academy of Japan)
 - Kazuhiro Kawachi (National Defense Academy of Japan), Ikuko Matsuse (Center for Newar Studies) and Yo Matsumoto (NINJAL)
 - “Speaker’s territory as a factor in the use of deictic verbs and verb affixes: The cases of Kupsapiny and Newar”
 - Takahiro Morita (Kyoto University)
 - “Linguistic deictic meanings beyond gestures: A contrastive study on motion event descriptions in French and Japanese”
 - Clément Voirin, Jinke Song, and Anetta Kopecka (Laboratoire Dynamique du Langage & Université Lumière Lyon 2)
 - “The encoding of dynamic deixis in motion events: A crosslinguistic exploratory study”
- General Session: Translation (13:15–15:10, Room 105)
 - Chair: Keiko Tsuchiya (Yokohama City University)
 - Alberto Hijazo Gascón (University of East Anglia)
 - “Cognitive Linguistics and Interpreting in Police Interviews”
 - SHUXIAN SONG (The Hong Kong Polytechnic University, Qufu Normal University)
 - “Fluency Development in Simultaneous Interpreting Performance of Trainee Interpreters: The Perspective of Cognitive Fluency”
- General Session: Creativity (10:50–12:15, Room 108)
 - Chair: Vera Zabotkina (Centre for Cognitive Programs and Technologies, Russian State University for the Humanities)
 - Young-Min OH (Kansai University)
 - “Do too many linguists spoil the research? Creativity and fixedness in creative uses of proverbial idioms: A cross-linguistic, corpus-driven study”
 - Taro Okahisa (Kyoto University / JSPS Research Fellow) and Kaori Yamasaki (Ochanomizu University)
 - “The two ways to the same interpretation of a novel expression: metaphorical and metonymical categorization”
- General Session: Categorization (13:15–15:10, Room 108)
 - Chair: Juergen Bohnemeyer (University at Buffalo – SUNY)
 - Simon Devylder (Lund University), Christoph Bracks (University of Cologne), Soichi Kozai (Kansai Gaidai University), Misuzu Shimotori (Gothenburg University) and Poppy Siahaan (University of Cologne)
 - “Mapping the body”
 - Ieva Stasiūnaitė (Vilnius University, Lithuania)
 - “On the motivated polysemy of the Lithuanian PO and the English UNDER”
 - Keigo Ujiie and Masayuki Ishizuka (The University of Tokyo)
 - “When locational expressions are not locational: the case of Japanese demonstratives”
- General Session: Metaphor (10:50–12:15, Room 204)
 - Chair: Jamin Pelkey (Ryerson University, Toronto)
 - Shon Shum (York University, Toronto) and Jamin Pelkey (Ryerson University, Toronto)
 - “Cultured Meat or Frankenfood? Toward an Expanded Account of the Education-Persuasion Tension Intrinsic to Conceptual Integration”
 - Xing Liu (Department of English, Zhejiang University of Technology)
 - “The Cultural Models of “Happiness” in Chinese: Metaphor, language and identity”

- General Session: Metaphor (13:15–15:10, Room 204)
 - Chair: Jurga Cibulskienė (Vytautas Magnus University)
 - Jurga Cibulskienė (Vytautas Magnus University) and Inesa Šeškauskienė (Vilnius University)
 - “Constructing attitudinal stance via metaphors: a multi-perspective cognitive approach toward politically contested events”
 - Soumyadeep Mukherjee (Indian Institute of Technology Kanpur)
 - “Metaphorization in Grammatical Gender”
 - Jurga Cibulskienė (Vytautas Magnus University)
 - “Cross-linguistic metaphorical representation of the #MeToo movement: Communicating attitudes”
- General Session: Change (10:50–12:15, Room 205)
 - Chair: Graeme Trousdale (The University of Edinburgh)
 - Hidehiko NEGI (Toyo University)
 - “Grammaticalization of temporal meanings in Japanese and Spanish With special reference to the antonymy in “EARLINESS” and “LATENESS””
 - Yuki Takahashi (Nagoya University of Foreign Studies)
 - “Old English subject-verb word order: An intertextual comparison”
 - Yoshiaki Sato (Kyoto University)
 - “From Manner to Temporal Uses: Historical Changes of the English Subordinator *As*”
- General Session: Change (13:15–15:10, Room 205)
 - Chair: Masaru Kanetani (University of Tsukuba)
 - Ethan Wei-Chien Shih (Graduate Institute of Linguistics, National Taiwan University)
 - “A pragmatic construction of two constructions: A corpus-based case study on *just because*”
 - Wataru Kono (Kyoto University)
 - “Constructionalization of *Have it (PP) that* Construction as English Evidential Strategies”
 - Eri Mizokami (Kyoto University)
 - “The Current Usage of the Quotative *be like* in British English”
- General Session: Acquisition (10:50–12:15, Room 206)
 - Chair: Nikolas Koch (Ludwig-Maximilians-University Munich)
 - Maija Surakka (University of Eastern Finland)
 - “Temporally extended self in children. Linguistic and psychological views on the development of future time references.”
 - Jekaterina Mažara and Sabine Stoll (University of Zurich)
 - “The Role of Aspect During the Acquisition of Verb Morphology in Russian: From Item-Specificity to Proficient Use”
 - Nikolas Koch (Ludwig-Maximilians-University Munich)
 - “Schemas in first language acquisition: A German traceback study”
- General Session: Pragmatics (13:15–15:10, Room 206)
 - Chair: Kyoko Masuda (Georgia Institute of Technology / J.F. Oberlin University)
 - Kate Beeching (University of the West of England) and Ludivine Crible (University of Edinburgh)
 - “Crosslinguistic paths of pragmatic development: *actually* and *en fait* in British and French children”
 - Kyoko Masuda (Georgia Institute of Technology / J.F. Oberlin University)
 - “The prosodic features of the interactional particle *yo* in student-professor conversation”
 - Masataka Yamaguchi (Kobe City University of Foreign Studies) and Chikako Sakurai (Musashino University)
 - “A Study of Reported Speech by Preschool Japanese Children: Implications for Theory of Mind”
 - Patricia Palacios (Universidad Autónoma de Querétaro) and Ricardo Maldonado (Universidad Nacional

Autónoma de México / Universidad Autónoma de Querétaro)

“*Tipo* (Like) ... do you get me?”

- Theme Session: Socio-cognitive approaches to analyzing spontaneous interactions (10:50–15:10, Room 207)
Organizers: Mirjam Fried (Department of Linguistics, Charles University, Prague), Eva Lehečková (Institute of Czech Language and Theory of Communication, Charles University, Prague), and Jakub Jehlička (Department of Linguistics, Charles University, Prague)
 - Mirjam Fried and Pavel Machač (Charles University, Prague)
“Sound patterns as interpretive clues in spontaneous interaction”
 - Thierry Chaminade (Institut de Neurosciences de la Timone), Birgit Rauchbauer (Institut de Neurosciences de la Timone), and Laurent Prévot (Laboratoire Parole et Langage)
“Artificial Conversational Agents to Investigate the Neural Bases of Conversation with fMRI”
 - Manon Lelandais and Gaëlle Ferré (University of Nantes, France)
“A parametric multimodal approach to subordination in conversation”
 - Eva Lehečková (Institute of Czech Language and Theory of Communication, Charles University, Prague), Jakub Jehlička (Department of Linguistics, Charles University, Prague), and Magdalena Zíková (Department of Linguistics, Charles University, Prague)
“Interplay of information structure, pitch contour, and gesture in spontaneous interactions”
 - Bracha Nir (University of Nantes, France)
“Constraining Constructions: Resonance and Structure in Interaction”
 - Discussion
- General Session: Evolinguistics (10:50–12:15, Room 208)
Chair: Michael Pleyer (Universität Koblenz-Landau)
 - Jonas Nölle, Jennifer Culbertson, Simon Kirby, and Kenny Smith (Centre for Language Evolution, University of Edinburgh, UK)
“Using virtual reality to study language evolution”
 - Theresa Matzinger (Department of English and Department of Cognitive Biology, University of Vienna), Magdalena Schwarz (Department of English, University of Vienna), Nikolaus Ritt (Department of English, University of Vienna), and W. Tecumseh Fitch (Department of Cognitive Biology, University of Vienna)
“The effects of prosodic cues on word segmentation in an artificial language learning task”
 - Michael Pleyer and Monika Pleyer (English Department, Universität Koblenz-Landau)
“A Cognitive-Interactional Approach to the Evolution of Linguistic Impoliteness”
- General Session: Sociolinguistics (13:15–15:10, Room 208)
Chair: Ingie Zakaria (University of Innsbruck)
 - Geidi Kilp (Tallinn University)
“Usage-based approach to computer-mediated Estonian-English-Japanese communication”
 - Ingie Zakaria (University of Innsbruck)
“Self-Perception, Hegemony, and Postcolonial Background: English outside its Natural Environment”
 - Agnieszka Libura (Wrocław University), Maria Libura (University of Warmia and Mazury in Olsztyn), and Maria Kmita (Wroclaw Medical University)
“Healthcare challenges in memes. A comparative analysis of American, British and Polish humor”
- General Session: Construction (10:50–12:15, Room 301)
Chair: Laurence Romain (University of Birmingham)
 - Tobias Ungerer (University of Edinburgh)
“Using structural priming to test links between constructions: Caused-motion sentences prime resultatives”

- Stefan Hartmann (University of Bamberg)
 - “Empirical approaches to competing future constructions: Converging evidence from corpus and experimental studies”
- Laurence Romain and Maarten Lemmens (Université de Lille, UMR 8163 STL)
 - “The status of alternations: a lexical-constructional interface”
- General Session: Construction (13:15–14:40, Room 301)
 - Chair: Seiko Fujii (University of Tokyo)
 - Jaakko Leino (University of Helsinki)
 - “Ordered and unordered constructions: The role and representation of word order in Construction Grammar”
 - Thomas Herbst (Friedrich-Alexander-Universität Erlangen-Nürnberg)
 - “Constructionists are not at all easy to please”
 - Seiko Fujii and Russell Lee-Goldman (University of Tokyo)
 - “Frame-based constructional approach to argument structure satisfaction via unselected adjuncts”
- Poster session (15:30–16:50, Learning Commons [Basement of Central Auditorium])
 - Categorization
 - Motomi Kajitani (The University of New Mexico)
 - “Similative Plurality and Its Related Functions: A Case of Japanese X *toka*”
 - Soumyadeep Mukherjee and Atreyee Mukherjee (Indian Institute of Technology Kanpur)
 - “Highlightedness in Conceptual System”
 - Cognitive grammar
 - Chaojun YANG (School of Foreign Languages, Henan University)
 - “A Cognitive Study of Nominal Predicate Constructions in Mandarin”
 - Yasumi Soda (Kyoto University)
 - “A Cognitive Analysis of Japanese Cause/Purpose Expressions: Contrast with English and Thai”
 - Taichi Tanaka and Woojin Jeong (The University of Tokyo)
 - “The semantics of Japanese passives: When and why do they have adversative meanings?”
 - Savithry Namboodiripad (University of Michigan, Ann Arbor)
 - “A gradient approach to flexible constituent order”
 - Construction
 - Meili Liu (Ningbo College of Health Sciences, China)
 - “On the argument realization of Mandarin Chinese inverted resultative constructions and its motivation”
 - Tsi-Chuen Tsai and Hsiao-Ling Hsu (National Chengchi University, Taiwan, R.O.C.)
 - “‘It is important but not necessary’: Investigating but constructions in native vs non-native corpora”
 - Chuzhuo Sun (Beijing Language and Culture University)
 - “The Characteristic of Chinese Popular Constructions from a Cross-linguistic Perspective”
 - Takashi Ishida (Doctoral Programme in Literature and Linguistics, University of Tsukuba)
 - “Frame-Based Adjectives: A Proposal for the Third Type of Adjective”
 - Chiharu Uda Kikuta (Doshisha University)
 - “A Diachronic Constructional Analysis of the Word Order Restriction Japanese: A Mismatch in Grammatical Constituency”
 - Frame
 - Hsu-Hung Ke and Sean Key (National Taiwan University)
 - “Pictures of age: Multimodal frame semantics and different age stages”

- Processing
 - Hiromi Tsuji (Osaka Shoin Women's University)
 - “Does language interfere with mentalising?: The role of language processing during the false-belief task”
 - Faisal Aljasser (Department of English language and Translation Qassim University KSA)
 - “Root and pattern effects in the processing of spoken non-words in Arabic”
- Multimodality
 - Ewelina Prażmo (Maria Curie-Skłodowska University in Lublin)
 - “Multimodal fictive interaction in verbo-pictorial configurations”
- Sign language
 - Benjamin Anible (Western Norway University of Applied Sciences) and Lindsay Ferrara (Norwegian University of Science and Technology)
 - “Depicting new referents in Norwegian Sign Language”
 - Kyoko Masuda (Georgia Institute of Technology) and Angela Labarca (J.F. Oberlin Universit / Georgia Institute of Technology)
 - “Developing conceptualization of JSL difficult aspect items through a Cognitive Linguistics—Sociocultural Theory approach”
- Semantics
 - Ruben Polo-Sherk (Hiroshima University)
 - “Basics of a Theory of the Expression of Thought in Language”
 - Cheng Qian (Université Paris Nanterre - UMR 7114 - (MoDyCo) Head: Prof. Frédéric Isel)
 - “An Ontology-based Cognitive Model of the Mental Lexicon”
 - Haruka Shimura, Naoaki Wada, and Hiroko Wakamatsu (University of Tsukuba)
 - “The indefinite use of the Present Perfect Progressive and its emotional effects”
- Pragmatics
 - Ludivine Crible (University of Edinburgh) and Vera Demberg (Saarland University)
 - “Production and perception of underspecified connectives: the effect of genre”
 - Shihong Zhou (Beijing Normal University)
 - “Confirmation/agreement Seeking in Talk-in-interaction: with special reference to the interrogative particle “HAO” (嚎) in northeastern Mandarin Chinese”
 - Minoru Yamaizumi (Osaka University)
 - “A Cognitive-pragmatic Account of Specification Sentences”
 - Shun KUDO (Komazawa Women's University)
 - “The Interpersonal Function of the Japanese Teen Slang Mazi manzi”
 - Nami Arimitsu (Toyo University)
 - “In-out orientation for expressing the self and others in Japanese, a case of “uchi” vs. “soto””
 - Rie Mukai (Takaoka University of Law)
 - “A Cognitive Linguistic Approach to *Ma* in Japanese Haiku”
 - Ekaterina Rakhilina and Polina Bychkova (National Research University Higher School of Economics, Moscow, Russia)
 - “Linguistic Means for Marking Speech Acts: Discourse Formulae”
 - Mai Kuha and Elizabeth M. Riddle (Ball State University)
 - “Apologies by Individual Citizens for Political Situations”
- Metaphor
 - Yuting Xu (Faculty of English Language and Culture, Guangdong University of Foreign Studies, Guangzhou, China)
 - “Corpus-based Comparative Study of PLANT Metaphor in English and Chinese”

- Brian Birdsell, Natsuko Tatsuta, and Hiroaki Nakamura (Hirosaki University)
“Curiosity is [image]: A crosslinguistic analysis of metaphor production and interpretation using a multimodal task”
- Hsiao-Ling Hsu, Huei-Ling Lai, and Jyi-Shane Liu (National Chengchi University)
“ECONOMY metaphors in political discourse”
- Pongbordin Amarinthnukrowth (Chulalongkorn University) and Yanin Sawanakunanon (independent researcher)
““The way we corrupt”: an experimental approach to metaphorical framing”
- Aleksandra Sopina (St. Petersburg Electrotechnical University), Elaine Sigette (Fluminense Federal University), Fábio Kryktine (Labfuzzy COPPE UFRJ), Xiaoben Yuan (Tohoku University), and Aleksandr Volosiuk (St. Petersburg Electrotechnical University)
“Metaphor Interpretation: a Quest for Cross-cultural Variation”
- Youngju Choi, Euisan Kim, and Yeseul Jeong (Chosun University)
“How do Mirror Images in Editorial Cartoons Reflect the SELF Metaphor?”
- Yanan Jin (Department of Language and Communication, Technical University of Berlin)
“A Synchronic Comparative Analysis of Emotion Metaphors of 悲 (bei) /SADNESS in Chinese and German memorial texts”
- Cultural event (17:00–18:00, Central Auditorium [125th Anniversary Auditorium]): Noh (能 Nō)

2019年8月9日

- Plenary 5
 - Sotaro Kita (University of Warwick)
“Gesture, metaphor, and spatial language”
- Theme Session: Language at the mid-level of understanding: The curious case of linguistic representations (13:15–16:55, Room 101)

Organizers: Petar Milin and Dagmar Divjak (University of Birmingham)

 - Introduction
 - John Newman (University of Alberta, Monash University)
“Questioning the lemma in usage-based linguistics”
 - Dagmar Divjak and Petar Milin (University of Birmingham)
“(The) unbearable lightness of (the) English articles”
 - Jane Klavan (University of Tartu)
“Linguistic representations of constructional alternations: A case study from Estonian”
 - Nick C Ellis (University of Michigan)
“Essentials of a Theory of Language Cognition”
 - Discussion
- Theme Session: Evolinguistics (13:15–17:25, Room 103)

Organizer: Koji Fujita (Kyoto University)

 - Koji Fujita (Kyoto University)
“Syntax, Cooperation and Self-Domestication”
 - Koji Hoshi (Keio University)
“A Possible Link between Cognitive Linguistics and the Lennebergian View on Biological Evolution of Language”
 - Kazumi Taniguchi (Kyoto University)
“On the Emergence of Grammar and Image Schemas: A Cognitive Linguistic View”
 - Haruka Fujita (Kyoto University)
“On the Co-evolution of Internalization and Externalization in Human Language”

- Franklin Chang (Kobe City University of Foreign Studies)
“Using the P-Chain to understand the Evolution of Language”
- Ryoko Uno (Tokyo University of Agriculture and Technology)
“Shared Intentionality and the Emergence of Sentence Types in Natural and Artificial Languages”
- Takashi Hashimoto (School of Knowledge Science, Japan Advanced Institute of Science and Technology)
“Filling a gap between pre-linguistic and linguistic pragmatics: An experimental semiotic approach to the formation of symbolic communication systems with intention sharing”
- discussion
- General Session: Categorization (10:50–11:45, Room 104)
Chair: Verena Minow (Ruhr-Universität Bochum)
 - Verena Minow (Ruhr-Universität Bochum) and Julia Salzinger (Technische Universität Dortmund)
“‘Wen hassen wir? #dasperfektedinner’ Conceptualization and categorization of in-group and out-group belonging on Twitter”
 - Terry Shortall (Jinan University–University of Birmingham Joint Institute, China)
“Saussure revisited: the delineation of *langue* and *parole* using a prototype-category model”
- General Session: Motion (13:15–15:10, Room 104)
Chair: Yukinori Kimoto (University of Hyogo)
 - Ali Alshehri (University at Buffalo)
“Use and Understanding of Intrinsic Frames of Reference”
 - Léna Masson-Collin (Laboratoire LLING—University of Nantes)
“Motion events across languages: a parallel-corpus investigation of English, French and Japanese spatial expressions”
 - Yu Deng and Juanjuan Chen (Sichuan International Studies University, Chongqing, China 400031)
“Move or not Move: An ERP Study on the Processing of Fictive and Actual Motion Events”
 - Gaïdig Dubois (University of Helsinki, Sorbonne University)
“A force-dynamic account of the Finnish verbs of REMAINING: when staying can involve a shift in force dynamics”
- General Session: Motion (15:30–16:55, Room 104)
Chair: Joel Olofsson (University West, Sweden)
 - Kyosuke Yamamoto (Kyoto University, JSPS) and Kiyoko Takahashi (Kanda University of International Studies)
“Segmentation of complex motion events in two verb-serializing languages”
 - Joel Olofsson (University West, Sweden)
“Cough and joke. Concomitance co-event in Swedish motion constructions.”
 - Natalya I. Stolova (Colgate University)
“Motion Events from Latin to Romance: Role of Linguistic Resources in Typological Shift”
- Theme Session: Causation in discourse and cognition: Crosslinguistic perspectives (13:15–16:25, Room 105)
Organizers: Kazuhiro Kawachi (National Defense Academy of Japan), Anja Latrouite (Heinrich Heine Universität Düsseldorf), and Jürgen Bohnemeyer (State University of New York at Buffalo)
 - Introduction
 - Erika Bellingham (University at Buffalo)
“Integrating event descriptions in multi-predicate constructions: frame semantics and construal in the English means construction”
 - Guanghao You, Moritz Daum, and Sabine Stoll (University of Zurich)
“Extracting lexical causatives from discourse”

- Françoise Gallez (Université catholique de Louvain) and Sabine De Knop (Université Saint-Louis Bruxelles)
 - “The caused motion construction revisited: theoretical and cross-linguistic perspectives”
- Ilona Tragel and Kairit Tomson (University of Tartu)
 - “Estonian causatives from the construction grammar perspective”
- Anja Latrouite and Robert D. Van Valin, Jr. (Heinrich Heine University Düsseldorf, University at Buffalo, SUNY)
 - “Causational Interpretation based on Immediate and General Common Ground Frames”
- Natalia M. Zaika (Institute for Linguistic Studies (Russian Academy of Sciences), Saint Petersburg State University)
 - “Additional meanings of causal markers in polyadic constructions”
- Dmitry Gerasimov (Institute for Linguistic Studies of the Russian Academy of Sciences, Saint Petersburg)
 - “Causal markers derived from speech act verbs in the languages of the world”
- Sergey Say (Institute for linguistic studies, Russian Academy of Sciences; St. Petersburg State University)
 - “Nominal causal constructions: causal chains and syncretism (a typological study)”
- (to be continued)
- Theme Session: Cross-theoretical Perspectives on Frame-based Lexical and Constructional Analyses: Bridging Qualitative and Quantitative Studies (13:15–17:25, Room 108)
 - Organizers: Toshio Ohori and Kyoko Hirose Ohara (Keio University)
 - Introduction
 - Paul Sambre (University of Leuven)
 - “Multilingual FrameNet and Calabria’s mafia: Italian video documentaries as conceptual windows on a transnational economic crime scenario”
 - Paul Sambre, Geert Brône, and Cornelia Wermuth (University of Leuven)
 - “Verbal genericity and null instantiation in Italian and German cut and break sequences: a multimodal socio-cognitive approach”
 - Nathan Hamlitsch (Mie University)
 - “A constructional approach to borrowed bound morphemes in Japanese: With an emphasis on cultural frames”
 - Mana Kitazawa and Kyoko Hirose Ohara (Keio University)
 - “Interpretation predicates and contents in frame integration: the case of *sasou* in Japanese”
 - Miriam R. L. Petrucc (International Computer Science Institute) and Lori Levin (Carnegie Mellon University)
 - “Frame Semantic Parsing Needs Constructions”
 - Daisuke Nonaka (NINJAL)
 - “When alternating verbs fail to alternate: the case of the locative alternation in English”
 - Kyoko Ohara (Keio University)
 - “Frames-and-Construction Analysis of Japanese and English Bilingual Children’s Books”
 - Collin Baker (International Computer Science Institute)
 - “Beyond N, V, and Adj: Frame Semantics and the Closed-class Lexicon”
 - Discussion w/ M. Hilpert
- General Session: Corpus (11:20–12:15, Room 204)
 - Chair: Bert Cappelle (Université de Lille)
 - Michael Barlow (University of Auckland) Suzanne Kemmer (Rice University)
 - “Subjective/Objective Construal and Individual Preferences”

- Bert Cappelle (Université de Lille), Pascal Denis, and Mikaela Keller (Université de Lille, Inria Lille – Nord Europe)
 - “Making sense of *fake*’s fickleness: The role of context”
- General Session: Change (13:15–15:10, Room 204)
 - Chair: Kiyoko Toratani (York University)
 - Kiyoko Toratani (York University)
 - “Naturalization of the Japanese loanword *sushi* in English”
 - Kayo Danjo (Johannes Gutenberg University Mainz)
 - “Pejorative derivation from spatiality: A comparative case study of Japanese *burabura*, *daradara* and German *herum*”
 - Yoshikata Shibuya (Kanazawa University)
 - “A corpus-based diachronic analysis of register variation in English comparatives”
 - Vladimir Glebkin (Russian Presidential Academy of National Economy and Public Administration)
 - “Semantic change from sociocultural perspective”
- General Session: Construction (16:00–17:25, Room 204)
 - Chair: Diego Oliveira (Federal University of Rio de Janeiro)
 - Ayako Shiba (Nagoya University)
 - “Interaction Between Text Genres and Constructions”
 - Satu Siltaloppi (University of Helsinki)
 - “Greetings from the festival — how listing is used in a signed postcard”
 - Diego Leite de Oliveira (Federal University of Rio de Janeiro)
 - “Transitive constructions under negation in Russian: a usage-based approach to the genitive-accusative competition”
- General Session: Metaphor (10:50–12:15, Room 205)
 - Chair: Antonio Barcelona (University of Córdoba, Spain)
 - Antonio Barcelona (University of Córdoba, Spain)
 - “Metonymy-guided discourse inferencing. A qualitative study”
 - Tetsuta Komatsubara (Ritsumeikan University)
 - “Cognitive and cultural preferences of metonymy in Japanese”
 - Chiarung Lu (National Taiwan University)
 - “Dynamic Metonymy: perspectives from lexical semantics and Blending theory”
- General Session: Metaphor (13:15–15:10, Room 205)
 - Chair: Tetsuta Komatsubara (Ritsumeikan University)
 - Tore Næsset (UiT The Arctic University of Norway)
 - “Two stars in the bassoon sky: metaconstructional compounds and metaphor extraction in Norwegian”
 - KJ Nabeshima (Kansai University)
 - “The legacy of Primary Metaphor Theory: What to take home and what to build on”
 - Xuri Tang (Huazhong University of Science and Technology)
 - “Developing Metaphoric Concepts with Constructions: A Corpus Based Analysis”
 - Ning Yu (The Pennsylvania State University) and Jie Huang (Huazhong University of Science and Technology)
 - “Difficulty as Weight and Solidity in English and Chinese”
- General Session: Metaphor (15:30–17:25, Room 205) Chair: Ning Yu (The Pennsylvania State University)
 - Krista Teeri-Niknammoghadam (University of Turku)
 - “Why ‘ahead of Christmas’ but not ‘ahead of Friday’? On semantics of Finnish FRONT adposition constructions in SEQUENCE IS RELATIVE POSITION ON A PATH metaphor of time”

- Yuichiro Ogami (Osaka University)
 - “On the Experiential Bases of the Two Meanings of Temporal “*Saki*” in Japanese”
- Gede Primahadi Wijaya Rajeg (Universitas Udayana, Indonesia) and Poppy Siahaan (University of Cologne, Germany)
 - “Linguistic and co-speech gestural patterns of spatiotemporal metaphors in Indonesian”
- Jie Fu and Gerard Steen (University of Amsterdam)
 - “Metaphor Use in Aphasia, Evidence from AphasiaBank (Mandarin)”
- General Session: Applied linguistics (10:50–12:15, Room 206)
 - Chair: Maki Kubota (University of Edinburgh)
 - Kun Yang and Min Wang (Xi'an Jiaotong University, Shaanxi, China)
 - “Developmental trajectory of L2 syntactic representation: Evidence from structural priming”
 - Maki Kubota (University of Edinburgh)
 - “The effect of individual factors on second language lexical attrition in bilingual returnee children”
 - General Session: Applied linguistics (13:15–15:10, Room 206)
 - Chair: Mutsumi Ogawa (Nihon University)
 - Ying-Hsueh Hu (English Department, Tamkang University, Taiwan)
 - “Cross-linguistic Effects in the Teaching and Learning of English Count/Mass Nouns by Mandarin Chinese Speakers”
 - Mutsumi Ogawa (Nihon University), Tomohiko Shirahata (Shizuoka University), Koji Suda (University of Shizuoka), Takako Kondo (University of Shizuoka), and Hideki Yokota (Shizuoka University of Art and Culture)
 - “Language Proficiency and Instructional Effects: A Cognitive Linguistic Approach to the Count-Mass Distinction”
 - Thomas Siu Ho Yau (The Chinese University of Hong Kong, Hong Kong) and Helen Zhao (The University of Melbourne, Australia)
 - “Bi-directional Transfer in Second Language Idiom Comprehension”
 - Robert H. Taferner (Hiroshima University)
 - “The Effects of Conceptual and Semantic Crosslinguistic Influence in Explicit L2 Instruction of Temporal Adpositions”
 - General Session: Applied linguistics (15:30–16:55, Room 206) Chair: Katrin Kohl (University of Oxford)
 - Diego Dardon (Tohoku University)
 - “Can Verbal Short-Term Memory Training Lead to Greater Gains in L2 Vocabulary Learning?”
 - Ana Werkmann Horvat, Marianna Bolognesi, Katrin Kohl, and Aditi Lahiri (University of Oxford)
 - “Demolishing walls and myths: Cognitive salience of literal and metaphorical meanings in L1 and L2 speakers”
 - Vera Zabotkina (Prof. Dr., Vice-Rector for International Cooperation, Director, Centre for Cognitive Programs and Technologies, Russian State University for the Humanities)
 - “Cognitive mechanisms of linguistic creativity”
 - General Session: Multimodality (10:50–12:15, Room 207) Chair: Masaaki Kamiya (Hamilton College)
 - Rafał Augustyn (Maria Curie-Skłodowska University)
 - “Creating an aura of mystery in multimodal film setting: A cognitive analysis of Denis Villeneuve's *Arrival* and *Blade Runner 2049*”
 - Sabina Tabacaru (Université Paris 8 Vincennes – Saint-Denis, France) and Ray Becker (RWTH University, Germany)
 - “I'm surprised to hear you say that: The use of *raised eyebrows* in oral and written contexts”

- Sabina Tabacaru (Université Paris 8 Vincennes – Saint-Denis, France) and Sheena Van Der Mark (BNU-HKBU United International College, China)
 - “Crosslinguistic perspectives on the use and meaning of emoji in Asia and Europe”
- General Session: Multimodality (13:45–15:10, Room 207)
 - Chair: Elise Stickles (Stanford University)
 - Amanda Brown (Syracuse University) and Masaaki Kamiya (Hamilton College)
 - “The Role of Gesture in Scopal Ambiguity: A Comparison of Japanese and English”
 - Maíra Avelar, André Lisboa, and Beatriz Graça (Universidade Estadual do Sudoeste da Bahia)
 - “Spatial deixis and gestures in Brazilian Portuguese and American English: a crosslinguistic multimodal analysis”
 - Elise Stickles (Stanford University), Tasha N. Lewis (Loyola University Maryland), and Matthew Kirkhart (Loyola University Maryland)
 - “The effects of spatial manipulation and mental imagery skills on gesture production”
- General Session: Multimodality (15:30–17:25, Room 207)
 - Chair: Keiko Abe (Kyoritsu Women’s University)
 - Iju Hsu (Graduate Institute of Linguistics, National Taiwan University)
 - “Watch! The Olfactory Time Machine!—A Study of Synesthetic Metaphors in Japanese Winespeak-themed Manga”
 - Sayaka Abe (Middlebury College)
 - “Connecting language, vision and force: Analyzing emotional forces of FRUSTRATION in Japanese manga”
 - Xiufeng ZHAO (China University of Petroleum, Beijing)
 - “A Multimodal Cognitive Poetic Study of Postmodern Picturebook: *The Stinky Cheeseman and Other Fairly Stupid Tales*”
 - Cameron Romney (Doshisha University)
 - “Online image searches as indicators of lexical nuance between Japanese and English”
- Theme Session: Minority Languages & Cognitive Linguistics: towards a two way relationship (10:50–17:25, Room 208)
 - Organizers: Simon Devylder (Lund University) and Alice Gaby (Monash University)
 - Introduction
 - Evangelia Adamou (French National Centre for Scientific Research [CNRS]), Eréndira Calderón (INALCO, KU Leuven), and Stefano De Pascale (INALCO, KU Leuven)
 - “How to speak “geocentric” in an “egocentric” language: A multimodal study among Ngigua-Spanish bilinguals and Spanish monolinguals in a rural community of Mexico”
 - Sherman Wilcox (University of New Mexico), Yufuko Takashima (Tokyo Gakugei University/JSPS), and Eikoh Kuroda (Japanese Sign Language Teacher Center)
 - “Signed Languages as Minority Languages”
 - Alice Gaby (Monash University) and Lesley Woods (Australian National University)
 - “Ethics and collaboration between cognitive linguists and speakers of minority languages”
 - Laura A. Janda and Lene Antonsen (UiT The Arctic University of Norway)
 - “North Sámi Possessive Constructions in the Era of Truth and Reconciliation”
 - Simon Devylder (Lund University)
 - “Paameese sand drawings: insights into the polysemiotic nature of human communication and revitalization efforts of an endangered practice”

- Maïa Ponsonnet (The University of Western Australia), James Bednall (Australian National University / Université Paris-7), and Isabel O'Keeffe (The University of Sydney)
 - “The respective roles of culture and grammar in shaping emotion metaphors The case of the Gunwinyguan family (Australian, non-Pama-Nyungan) Forename Surname”
- Stef Spronck (University of Helsinki)
 - “Finding a new place for pragmatics in CL through minority languages”
- Discussion
- Theme Session: Integrating iconicity: recent work and future directions (13:15–17:25, Room 301)
 - Organizers: Mark Dingemanse (Radboud University) and Arie Verhagen (Leiden University and Antwerp University)
 - Thomas Schwaiger (University of Graz)
 - “The not so self-evident iconicity of reduplicative word-class derivation”
 - Thomas VAN HOEY and Chiarung LU (National Taiwan University)
 - “Reduplication as a trigger of intersubjectivity: Mandarin Chinese ideophones and reduplication in the CHILDES corpora”
 - Mutsumi Imai (Faculty of Environment and Information Studies, Keio University) and Junko Kimura (Graduate school Media and Governance, Keio University)
 - “Sensitivity to sound symbolism in Japanese Hard-of-Hearing children”
 - Aleksandra Ćwiek (Leibniz-Zentrum Allgemeine Sprachwissenschaft, Berlin), Christoph Draxler (IPS, Ludwig Maximilian University of Munich), Susanne Fuchs (Leibniz-Zentrum Allgemeine Sprachwissenschaft, Berlin), Shigeto Kawahara (Keio University), Bodo Winter (University of Birmingham), and Marcus Perlman (University of Birmingham)
 - “Comprehension of Non-Linguistic Vocalizations across Cultures”
 - Andrew D.M. Smith (University of Stirling) and Stefan Hoefler (Universität Zürich)
 - “Iconicity and the origins of symbolism and grammar”
 - Jonas Nölle (University of Edinburgh, UK), Riccardo Fusaroli (Aarhus University, Denmark), and Kristian Tylén (Aarhus University, Denmark)
 - “Beyond iconicity: aspects of metonymy and indexicality in sign groundin”
 - Irene Mittelberg (RWTH Aachen University)
 - “Iconicity – embodiment – image schemas: Towards a spectrum of different sources and levels of gesturally enacted schematicity”
 - Thomas Van Hoey (National Taiwan University) Jonas Nölle (University of Edinburgh, UK)
 - “Integrating Iconicity (general discussion)”

2019年8月10日

- Theme Session: Cognitive perspectives on Linguistic Creativity (09:00–12:10, Room 101)
 - Organizers: Thomas Hoffmann (KU Eichstätt) and Alexander Bergs (Universität Osnabrück)
 - Introduction
 - Graeme Trousdale (University of Edinburgh)
 - “Linguistic creativity and musical improvisation: some similarities and differences”
 - Peter Uhrig (FAU Erlangen-Nürnberg)
 - “Creative Intentions: The thin line between ‘creative’ and ‘wrong’”
 - Mark Turner (Case Western Reserve University)
 - “Conceptual Blending as a Source of Creativity in Constructions”
 - Thomas Hoffmann (Catholic University Eichstätt-Ingolstadt)
 - “Constructionist Approaches to Creativity”
 - Discussion

- General Session: Phonology (09:00–10:25, Room 103)
 - Chair: Yoshihiko Asao (National Institute of Information and Communications Technology)
 - Clemens Poppe (Waseda University)
 - “Cognitive phonology and the accented-unaccented opposition in Japanese”
 - Xizhuo Chen and Yun Nan (State Key Laboratory of Cognitive Neuroscience and Learning & IDG/McGovern Institute for Brain Research, Beijing Normal University, Beijing, China)
 - “Modularity or non-modularity of pitch deficits in Congenital Amusics? A developmental perspective is the key”
 - Saeed Rahandaz (PhD Candidate in Linguistics, Bu-Ali Sina University)
 - “Progressive Assimilation in Cognitive Phonology: A Case from Iranian Azerbaijani”
- General Session: Grammar and semantics (10:45–12:10, Room 103)
 - Chair: Naoaki Wada (University of Tsukuba)
 - Svetlana Sokolova (UiT The Arctic University of Norway, Tromsø, Norway)
 - “From lexical triggers to contextual cues: Sentence complexity and aspectual choice in Russian narrative sequences”
 - Dandan Zhang (LATTICE-UMR 8094 CNRS-ENS-Université Sorbonne Nouvelle Paris 3 ED 268)
 - “[YAO + V] in Chinese / [Aller + V] in French: prospective aspect or tense of future?”
 - Naoaki Wada (University of Tsukuba)
 - “On the so-called volitional use of *will*: Semantic or pragmatic or both?”
- General Session: Cognitive grammar (09:00–10:25, Room 104)
 - Chair: Akira Machida (Hirosima University)
 - Abhisek Sarkar (Indian Institute of Technology, Kanpur)
 - “Understanding Control and Modality: Comparative study between English and Bangla Modals”
 - Li Yapei (Zhengzhou University of Aeronautics)
 - “The syntactic realizations of the epistemic predicate *likely* and its Chinese equivalent *ke’neng*: A corpus-based cognitive study”
 - Yi-Na Wang and Yinmei Li (Beihang University, North China University of Technology)
 - “Subjectivity of Chinese and English Topic Constructions: A Grounding Analysis”
- General Session: Grammar (10:45–12:10, Room 104)
 - Chair: Seongha Rhee (Hankuk University of Foreign Studies)
 - Charlotte Maekelberghe (KU Leuven)
 - “A cross-linguistic perspective on ‘nominal’ vs. ‘verbal’ construal in English and German.”
 - Lan Wu (Yamagata University)
 - “Crossover Effects in English and Chinese”
- Theme Session: Causation in discourse and cognition: Crosslinguistic perspectives (2nd day) (09:00–12:10, Room 105)
 - Organizers: Kazuhiro Kawachi (National Defense Academy of Japan), Anja Latrouite (Heinrich Heine Universität Düsseldorf), and Jürgen Bohnemeyer (State University of New York at Buffalo)
 - Andrea Ariño-Bizarro and Iraide Ibarretxe-Antuñano (University of Zaragoza)
 - “Causality in Spanish”
 - Kazuhiro Kawachi (National Defense Academy of Japan), Erika Bellingham (State University of New York at Buffalo), Jürgen Bohnemeyer (State University of New York at Buffalo), and Sang-Hee Park (State University of New York at Buffalo)
 - “Iconicity in usage: A cross-linguistic study of causative event descriptions”
 - Natalia Levshina (Leipzig University)
 - “Causatives of the world, unite! How efficiency can explain cross-linguistic generalizations”

- Jürgen Bohnemeyer (Department of Linguistics, University at Buffalo – SUNY)
“Predictability and informativeness in iconicity of complexity: A Gricean perspective”
- Discussion
- General Session: Construction (09:00–10:25, Room 108) Chair: Yoshikata Shibuya (Kanazawa University)
 - Hyunwoo Kim and Gyu-Ho Shin (University of Hawai‘i at Mānoa)
“Effects of verb frequency and L1 transfer in L2 processing of English dative constructions”
 - Kim Ebensgaard Jensen (University of Copenhagen) and Yoshikata Shibuya (Kanazawa University)
“Variation in constructional productivity: The case of English modal constructions”
 - Olli O. Silvennoinen (University of Helsinki)
“Not only contrastive but also mirative? Additive negation constructions in English”
- General Session: Construction (10:45–12:10, Room 108)
Chair: Toshio Ohori (Keio University)
 - Haowen Jiang (Peking University)
“Speaking of speaking: Construction-coerced change of semantic roles for verbs of speaking in Puyuma (Austronesian)”
 - Yvon Keromnes (Université de Lorraine & ATILF-CNRS)
“As simple as that? A corpus-based contrastive analysis of the [ADJ as NP] and related constructions in English, French and German”
 - Dan McColm (The University of Edinburgh)
“Exploring recent changes to the Dutch *way*-construction using a web-based corpus”
- General Session: Semantics (09:00–10:25, Room 204)
Chair: Emiko Kihara (Kobe University)
 - Esther Serwaah Afreh and Harriet Appiah Kyeremeh (Kwame Nkrumah University of Science and Technology, Ghana)
“METAPHORS OF FORMAL LEARNING, EDUCATION AND KNOWLEDGE AMONG GHANAIAN STUDENTS: THE CASE OF KNUST”
 - Yusuke Sugaya (Mie University)
“Cross-Linguistic Differences in Taking Another’s Perspective: The Case of Adjectives Production”
 - Yusuke Tanaka (Kyoto University)
“How Do People Understand Linguistic Empathy? The Case of Japanese Giving Verbs”
- General Session: Semantics (10:45–12:10, Room 204)
Chair: Nathan Hamlitsch (Mie University)
 - Thomas Poulton (Monash University)
“Smelling in English: From perception to description”
 - Katie Hoemann (Northeastern University), Margherita de Luca (Sapienza University of Rome), and Lisa Feldman Barrett (Northeastern University)
“Network Analysis as a Means of Assessing Translatability of Emotion Words”
 - Mai Kumamoto (University Paris 8)
“Conceptualization of negative social emotions in French. A Behavioral Profile Approach to *honte*, *honteux*, *culpabilité* and *coupable*.”
- General Session: Corpus (09:00–10:25, Room 205)
Chair: Laura Janda (UiT The Arctic University of Norway)
 - Mariana Montes, Dirk Geeraerts, Dirk Speelman, and Kris Heylen (KU Leuven)
“Checking the adequacy of second-order vector space models of meaning”
 - Mayuki Matsui (NINJAL/JSPS/UvA) and Tore Nesset (University of Tromsø)
“Addressing the address function: A corpus study of the Russian new vocative”

- Michal Láznička and Vojtěch Janda (Charles University, Prague)
“Grammatical profiling of Czech nouns: what do cases tell us about nouns’ meanings”
- General Session: Corpus (10:45–11:40, Room 205)
Chair: Sadayuki Okada (Osaka University)
‣ Sadayuki Okada (Osaka University)
“On the rise of truncated causal adjuncts in English”
- General Session: Pragmatics (09:00–10:25, Room 206)
Chair: Dennis Tay (The Hong Kong Polytechnic University)
 - M. Sandra Peña-Cervel and Francisco J. Ruiz de Mendoza-Ibáñez (University of La Rioja, Spain)
“On hyperbolic scenarios, hyperbolic load, and the potential communicative impact of hyperbolic uses of language”
 - Yuichi Asai (Tokyo University of Agriculture and Technology)
“Onomatopoeia as Signs of Naturalness: Semiotics on the Language and Environment Nexus”
 - Dennis Tay (The Hong Kong Polytechnic University)
“A factor analysis of metaphor functions in psychotherapy”
- General Session: Metaphor (10:45–12:10, Room 206)
Chair: María Sandra Peña-Cervel (University of La Rioja, Spain)
‣ Anu Kalda and Mari Uusküla (Tallinn University)
“Culture and context in translating perception metaphors: Using eye-tracking methodology in English-Estonian empirical research”
- Carina Rasse (Alpen-Adria-Universität Klagenfurt, Austria)
“Conceptual metaphors in poetry interpretation: A psycholinguistic approach”
- M. Sandra Peña-Cervel (University of La Rioja, Spain)
“Exploring some metonymy-related figures of thought in the light of cognitive modeling”
- General Session: Pragmatics (09:00–10:25, Room 207) Chair: Elizabeth Riddle (Ball State University)
 - Mai Kuha, Elizabeth M. Riddle, and Mary Theresa Seig (Ball State University)
“The Social Construction of Public ‘Apologies’”
 - Xiaoben Yuan (Tohoku University) and Aleksandra Sopina (St. Petersburg Electrotechnical University)
“FRAMES, METAPHORS AND MORALITY: MULTIMODAL DISCOURSE ANALYSIS OF THE WHALING CONFLICT”
 - Julien Perrez (Liège University [ULiège]), François Randour (UCLouvain), and Min Reuchamps (UCLouvain)
“The evolution of metaphors over time: a longitudinal analysis of metaphor usage by Belgian politicians over the period 1980–2017”
- General Session: Pragmatics (10:45–11:40, Room 207)
Chair: Kyoko Ohara (Keio University)
‣ Bin Zhang (University of Göttingen)
“Interaction of Metaphor and Political Frames in the Language Critique Activity ‘Unwort des Jahres’ (the Non-Word of the Year)”
- General Session: Multimodality (09:00–10:25, Room 208)
Chair: Sabina Tabacaru (Université Paris 8 Vincennes – Saint-Denis, France)
‣ Min-Yi Kuo (University of Edinburgh [former])
“A Multimodality Analysis of The Taiwanese History Textbook From 1985 To 2018: The Developing Representation of Colonial Japan”

- Molly Xie Pan (Department of English, The Hong Kong Polytechnic University)
“A Comparative Study of Two Approaches to Metaphor Identification in Video Ads”
- Kukka-Maaria Wessman (University of Turku)
“Multimodal and verbal Finnish internet memes”
- General Session: Sign language (10:45–12:10, Room 208)
Chair: Inez Beukelaers (KU Leuven)
 - Yufuko TAKASHIMA (Tokyo Gakugei University/JSPS) and Eikoh KURODA (Japanese Sign Language Teachers Center)
“The MEAN constructions in Japanese Sign Language: from causality to inferred evidentiality”
 - Lindsay Ferrara (NTNU, Norwegian University of Science and Technology)
“Linking conversational moves through pointing actions in signed language interaction”
 - Inez Beukelaers and Myriam Vermeerbergen (KU Leuven)
“On the role of eye gaze in depicting and enacting: A case study of Flemish Sign Language narratives”
- Theme Session: Cross-linguistic perspectives on gesture: Recurrency as a basis for comparison (09:00–12:10, Room 301)
Organizers: Simon Harrison (City University of Hong Kong) and Cornelia Müller (European University Viadrina, Frankfurt [Oder])
 - Keiko Tsuchiya (Yokohama City University)
“Open hand oblique in female Japanese politicians’ speech”
 - Simon Harrison (City University of Hong Kong)
“Exploring bodily, collaborative, and coupled contexts for recurrent gestures associated with negation: Insights from communicative events in Chinese”
 - Dominique Boutet (University of Rouen), Aliyah Morgenstern (Sorbonne Nouvelle University), and Christophe Parisse (Paris Nanterre & CNRS)
“A cross-linguistic approach to the formal and functional features of recurrent gestures: shrugging in 5 languages.”
 - Lopez-Ozieblo Renia (Hong Kong Polytechnic University)
“Gesturing to indicate time in L2 speakers of English”
 - Lena Hotze (European University Viadrina, Frankfurt [Oder])
“Recurrent gestures and multimodal patterns in kindergarten children”
 - Discussion w/ S. Kita
- Plenary 6
 - Sally Rice (University of Alberta)
“Cognitive Linguistics and the Study of Indigenous Languages”

日本語学習者向けコーパスの構築と応用研究 [2019.10.19, 北京外国语大学 北京日本学研究センター]

- 基調講演「コーパス構築と学習者のための応用研究」(日中同時通訳)
 - 張宝林 (北京語言大学)
「中国語学習者横断コーパスの構築と応用研究」
 - 衛乃興 (北京航空航天大学)
「中国語学習者英語音声コーパスの構築と応用研究」
 - 迫田久美子 (国立国語研究所 / 広島大学)
「多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS) の構築と応用研究」
 - 曹大峰 (北京外国语大学)
「日本語学習者のためのコーパス構築と応用研究」

- ・講演「北京日本語学習者縦断コーパス (B-JAS) プロジェクト」
 - ・徐一平 (北京外国语大学)
 - 「コーパス構築共同プロジェクトの内容と意義」
 - ・野山広 (国立国語研究所)
 - 「北京日本語学習者縦断コーパス (B-JAS) の構築と成果報告」
 - ・柏野和佳子 (国立国語研究所)
 - 「日本語の書き言葉と話し言葉コーパスの構築と活用—学習者コーパスとの比較利用のために—」
- ・研究発表会「日本語学習者向けのコーパスを応用した研究」

北京日本語学習者縦断コーパス (B-JAS) の構築と応用研究

[2019.10.20, 北京師範大学 後主楼 914 学術報告ホール]

- ・基調講演「学習者コーパスから見た習得過程と成長」
 - ・石黒圭 (国立国語研究所)
 - 「話し言葉に見る学習者の成長—フィラーを中心に—」
 - ・林洪 (北京師範大学)
 - 「授業や教材に遡って B-JAS を見る」
 - ・学生代表
 - 「コーパスの構築とともに成長してきた私たち」
- ・研究発表会「北京日本語学習者縦断コーパス (B-JAS) の応用研究」
 - ・布施悠子 (国立国語研究所)
 - 「学習者コーパスから見た「～と思う」の習得過程」
 - ・張林 (北京師範大学)
 - 「コーパスの動詞活用形のアクセントの習得研究—「～て/た」のアクセントを例に—」
 - ・費曉東 (北京外国语大学)
 - 「学習者コーパスから見た「漢字語彙」の習得過程」
 - ・野山広 (国立国語研究所)
 - 「学習者に対する縦断的ビリーフ調査の結果から見えてきたこと」
 - ・朱桂栄 (北京外国语大学)
 - 「ロールプレイから見た学習者の成長」
 - ・曹大峰 (北京外国语大学)
 - 「学習者コーパスから見た「でしょう/ていた」の習得過程」

手話言語と音声言語に関する民博フェスタ 2019 / SSLL2019 [2019.12.7, 国立民族学博物館]

- ・開会の挨拶
 - ・菊澤律子 (国立民族学博物館 / 総合研究大学院大学) (日本手話)
- ・館長挨拶
 - ・吉田憲司 (国立民族学博物館) (日本語)
- ・招待講演
 - ・Julie HOCHGESANG (Gallaudet University, US) (アメリカ手話)
 - “Sign Language Description: A Deaf Retrospective and Application of Best Practices from Language Documentation”
 - ・Monica Xiao WEI and Yim Bin Felix SZE (The Chinese University of Hong Kong, Hong Kong) (英語)
 - “Phonological Parameters and Their Effects on Phonological Variation in Hong Kong Sign Language”
 - ・Jane TSAY (National Chung Cheng University, Taiwan), Keiko SAGARA (National Museum of
- ・発表

- Ethnology, Japan), and Ritsuko KIKUSAWA (National Museum of Ethnology, Japan) (英語)
 “Arbitrary Signs Are More Stable Than Iconic Signs: Evidence from Taiwan Sign Language and Japanese Sign Language”
- James TAI (National Chung Cheng University, Taiwan) (英語)
 “Re-examining Iconicity as a Modality Effect”
 - 平英司 (関西学院大学) (日本手話)
 「複モード児におけるモード・スイッチング」
 - 招待講演
 - Samantha RARRICK (Griffith University, Australia) (英語)
 “*Aksen tasol*: Identifying & documenting sign language use in Papua New Guinea”
 - 閉会の挨拶

国際ワークショップ・講演会

言語科学会第 21 回年次国際大会 (JSLS 2019) ワークショップ “Development of a parsed corpus and its applications to linguistic research and education” [2019.7.7, 東北大学川内キャンパス]

- Prashant PARDESHI (NINJAL) and YOSHIMOTO Kei (Tohoku University)
 - Introduction
- MIYATA Susanne (Aichi Shukutoku University)
 - “Recent directions in CHILDES Japan and its role in NPCMJ”
- TAKEUCHI Koichi (Okayama University)
 - “Constructing Japanese predicate-argument thesaurus and annotating NPCMJ with semantic role labels”
- KISHIMOTO Hideki (Kobe University) and Prashant PARDESHI (NINJAL)
 - “Developing a Japanese syntax textbook as part of NPCMJ Project”

Kobe-NINJAL-Oxford 言語学コロキウム 「日本語研究の最前線」 [2019.7.21, 神戸大学六甲台第 2 キャンパス]

- 開催の挨拶
- 岸本秀樹 (神戸大学)
 - 「日本語の断片化感嘆表現」
- 窪瀬晴夫 (国立国語研究所)
 - 「日本語におけるアクセントと母音長の中和について」
- Bjarke FRELLESVIG (University of Oxford)
 - “From pre-verbal to post-verbal in the early history of the Japanese language: Constituent order changes in Pre-Old and Old Japanese”
- 閉会の挨拶

Workshop on modality and related matters [2019.9.19, 国立国語研究所]

- Opening
- AKUZAWA Koyo
 - “Syntax and semantics of finite control: focusing on the predicates involving *tumori*”
- YAMADA Akitaka
 - “Bayesian Dyanmic Pragmatics: Pragmatics and semantics of Japanese politeness encodings”
- Joseph TABOLT
 - “Do *must* and *ni chigainai* mean the same thing?”
- HIRAYAMA Yuto
 - “On the interaction between the embedded tense and the matrix existential”
- MIZUTANI Kenta
 - “Some Notes on Comparison Classes in Japanese”

- IHARA Shun and MIZUTANI Kenta
“Hurford Conditionals in Japanese”
- Lightning talks for posters
- Poster Session
 - IDO Misato
“The distribution and meaning of the Japanese evaluative particle *nanka*”
 - HASEGAWA Takuya
“The external specification of an argument by two-character Sino-Japanese verbs”
 - Hui LI
“What can be expressed by verbal compounds: Semantics and word formation of dvandva compound words in Japanese”
 - CAO Rui
“Locative Alternation in Mandarin Chinese: A New Verb Type and A Comparison with Resultative Construction”
 - MITA Hiromasa
“How to depict things with words: The interface of meaning and perception”
 - MAEDA Kotaro
“Towards a Contrastive Study of Inchoative/Causative Alternation in English and Japanese”
- Closing

JK 27 Satellite Meeting: the 1st NINJAL-SNU Joint Workshop [2019.10.17, Seoul National University]

- Opening remarks
- Talk 1
 - Stuart DAVIS and HWANG Young (Indiana University)
“Patterned community sound change in progress: American ay-raising and North Kyungsang Korean loanword tone change”
- Talk 2
 - KUBOZONO Haruo (NINJAL)
“Word accent and vowel length in the postlexical phonology of Japanese”
- Talk 3
 - JUN Jongho and PARK Nayoung (Seoul National University)
“Learning the sonority sequencing principle in English and Korean”
- Talk 4
 - HWANG Hyun Kyung (University of Tsukuba) and MAZUKA Reiko (RIKEN)
“Learning the laryngeal contrast in Japanese”
- Talk 5
 - Adam ALBRIGHT (Massachusetts Institute of Technology)
“Exceptional and unexceptional gradience in English and Korean”
- General Discussion

IYIL 2019 Perspectives Conference panel discussion [2019.10.30–11.2, Purdue University Fort Wayne]

- Endangered languages in Japan: Focus on the Ryukyuan languages and dialects of Tohoku districts (Panel)
 - AOI Hayato (NINJAL/Tokyo University of Foreign Studies) and NAKAYAMA Toshihide (Tokyo University of Foreign Studies)
“Actions for revitalizing the endangered languages and dialects in Japan”

- KIBE Nobuko (NINJAL), KIKU Hidenori, and KIKU Rintaro
“Report on language revitalization in Yoron Island”
- YAMADA Masahiro (NINJAL), MAEDA Takuya, and MAEDA Yurika
“Language revitalization at home via “fun” activities”
- OTSUKI Tomoyo (Tokyo University of Foreign Studies) and SHIRAIWA Hiroyuki (Rissho University)
“Attempts to describe a mother tongue in Aomori and Fukushima, the northeastern region of Japan”

「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」プロジェクト基本動詞ハンドブック班特別講演

[2019.10.31, 中国人民大学]

- Prashant PARDESHI
「言語類型論・対照研究の知見を援用した日本語教育に向けて」

「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」プロジェクト基本動詞ハンドブック班特別講演

[2019.11.1, 北京外国语大学北京日本学研究センター]

- Prashant PARDESHI
「コーパスに基づく日本語研究・学習」
 - NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB)
 - NINJAL-LWP for Tsukuba Web Corpus (NLT)
- Prashant PARDESHI
「日本語教育・学習に役立つウェブ教材」
 - 『基本動詞ハンドブック』
 - 『日本語文型バンク』

Second International Workshop on Noun Modifying Constructions and Nominalizations

[2019.12.19–20, Deccan College, Main Campus]

2019年12月19日

- WORKSHOP INAUGURATION: Prasad Joshi (Vice Chancellor (A), Deccan College)
- ACADEMIC SESSION-1
 - Prashant PARDESHI (NINJAL)
“On mapping NMCs”
 - Pritha CHANDRA (Indian Institute of Technology Delhi)
“On the form and function of Meiteilon Nominalizers”
 - Rajendran Sankaravelyuthan
“Lexicalization, Grammaticalization and Nominalization of NMEs in Tamil”
 - General Discussion

2019年12月20日

- ACADEMIC SESSION-2
 - SHIBATANI Masayoshi (Rice University)
“What is nominalization? Towards the theoretical foundations of nominalization”
- ACADEMIC SESSION-3
 - KIRYU Kazuyuki (Mimasaka University)
“Grammatical nominalizations and their uses in Meche”
 - Sung-Yeo CHUNG (Osaka University)
“On the relationship between nominalization and NP-use markers—Japanese-Korean contrastive and historical perspective”
 - Prashant PARDESHI (NINJAL)
“Rethinking noun complement and relative clauses in Marathi”

- ・General discussion and wrap up

Lecture-cum-workshop [2019.12.24, University of Mumbai]

- ・SHIBATANI Masayoshi (Rice University)

“What is nominalization?—Towards the theoretical foundations of nominalization—”

公開シンポジウム コミュニケーションのための日本語学習辞書を求めて—中国人学習者のための新しい辞書の構想と開発— [2020.1.18, 北京外国语大学北京日本学研究センター]

- ・挨拶

- ・基調講演

- ・野田尚史 (国立国語研究所 教授)

「コミュニケーションのための日本語学習辞書の構想」

- ・庵功雄 (一橋大学 教授)

「産出のための文法記述を考える—ボイスとアスペクトを例に—」

- ・曹大峰 (北京外国语大学 教授)

「学習型日本語教育文法辞典の構築研究—内容と作り方の工夫」

- ・研究報告

- ・王星 (青島理工大学)

「学習辞書の用例記述について考える」

- ・李琚宁 (对外經濟貿易大学)

「学習辞書の用例の選定方法について—「ばかり」の場合—」

- ・鄧超群 (湖南大学)

「文法学習辞書における誤用記述の試み—「である」の場合—」

- ・崔広紅 (西安電子科学技術大学)

「学習辞書における使い分けの記述について」

- ・白曉光 (西安外国语大学)

「文法学習辞書における意味解釈の試み」

- ・質疑討論

- ・曾艷 (湘潭大学)

「アウトプットに役立つ学習辞書をめざして—「受け身」の場合—」

- ・黃毅燕 (福建師範大学)

「学習者目線の文法用法記述の試み—「ものを」「ものの」の場合—」

- ・徐蓮 (信息工程大学)

「認知言語学の視点から学習辞書の図表と標識を考える」

- ・陳燕青 (福建師範大学)

「学習辞典の用法記述における言語学理論応用の試み」

- ・王鵬 (北京第二外国语学院)

「学習辞典の用法記述へのブルーム学習理論応用—「させる」の場合—」

- ・質疑討論

- ・総括

(2) 合同シンポジウム・研究発表会

複数のプロジェクトが共同でおこなうシンポジウムや研究発表会。

Computational Psycholinguistics Tokyo [2019.5.24, 早稲田大学西早稲田キャンパス]

- Tal LINZEN (Johns Hopkins University)
“What can psycholinguistics and deep learning contribute to each other?”
- Jonathan RAWSKI (Stony Brook University)
“Subregular morphology: Structures, grammars, and learning”

Computational Psycholinguistics Tokyo [2019.6.21, 早稲田大学西早稲田キャンパス]

- 菅原朔 (東京大学)
「機械読解タスクのベンチマーク的観点からの評価」

創立 70 周年・移管 10 周年公開講演会 「言語史の計量的研究—宮島達夫の言語史研究—」

[2019.6.22, 国立国語研究所]

- 司会挨拶: 鈴木泰 (東京大学名誉教授)
- 発表 1
 - 山崎誠 (国立国語研究所教授)
「科学的方法論の探索」
- 発表 2
 - 石井久雄 (国立国語研究所名誉所員 / 同志社大学名誉教授)
「『日本古典対照分類語彙表』および『雑誌用語の変遷』」
- 発表 3
 - 松本泰丈 (別府大学客員教授)
「個別言語学から言語間言語学へ—宮島達夫の言語研究—」
- 発表 4
 - 野村雅昭 (国立国語研究所名誉所員 / 早稲田大学名誉教授)
「語彙史・表記史と漢語・漢字」

講演会・ワークショップ 「日本語非母語話者の読解コーパスからわかること」 [2019.7.6, 国際基督教大学]

- 講演
 - 野田尚史
「日本語学習者の読解コーパスの調査方法と分析結果」
- ワークショップ
 - 野田尚史
「日本語学習者の読解コーパスを使ってみよう」

Computational Psycholinguistics Tokyo [2019.7.19, 早稲田大学西早稲田キャンパス]

- 谷中瞳 (理化学研究所革新知能統合研究センター)
「自然言語処理と形式意味論の知見に基づく含意関係認識」

東洋学へのコンピュータ利用 第 31 回研究セミナー [2019.7.26, 国立国語研究所]

- 開会挨拶
- 安岡孝一 (京都大学), 安岡素子 (京都外国語大学)
「日本の人名用漢字と漢字コードの翻訳」
- 大久保克彦 (SIS エンジニアリング)
「『大漢和辞典』専用 OCR の開発と語彙索引作成」

- 高田智和 (国立国語研究所)
「米海軍日本語学校の漢字教材 “Kanji Book”」
- 守岡知彦 (京都大学)
「漢字字体の包摂規準の衝突評価の試み」
- 當山日出夫
「Unicode 変体仮名と東寺百合文書」
- 間淵洋子 (国立国語研究所), 福井尚子 (凸版印刷)
「Unicode を利用した変体仮名字形データベースの構築」
- 柳原恵津子 (国立国語研究所)
「『金光明最勝王經』平安初期点の形態素解析用本文作成—その方法と問題点—」
- 李媛 (京都大学)
「古写本古辞書翻刻における包摂問題について—篆隸万象名義の玉篇残巻対応部分を中心に—」
- 山田太造 (東京大学)
「オープンな歴史的データを横断的に検索していく」
- 鎌水兼貴 (国立国語研究所)
「国立国語研究所による大規模経年調査データの活用と意義」
- 石本祐一 (国立国語研究所), 生永匠 (国立国語研究所 / 東京電機大学), 高田智和 (国立国語研究所)
「国立国語研究所研究資料室収蔵音声・映像資料のデジタル化と試視聴システムの構築」
- 閉会挨拶

言語資源活用ワークショップ 2019 [2019.9.2–4, 国立国語研究所]

2019年9月2日

- オープニング
- 口頭発表グループ1
 - 泉大輔 (東京外国语大学)
「文を包摂する名詞の形式的な特徴に関する考察」
 - 西内沙恵 (筑波大学)
「多義語のプロトタイプ的意味認定における脱文脈化の活用—クラウドソーシングを用いた量的調査から—」
 - 松下晶子 (専修大学), 丸山岳彦 (専修大学 / 国立国語研究所)
「複数の脚本コーパスに現れた終助詞の比較分析」
- ポスター発表グループ1
 - 佐藤大和 (東京外国语大学)
「自発発話におけるアクセント音調の動態分析」
 - 宮嶋由美 (明治大学)
「共働き家庭の児童のLINE使用—実例とフォローアップインタビューから—」
 - 沖本与子 (一橋大学)
「日本語学習者の助詞・動詞選択の傾向—自動詞他動詞の比較を中心に—」
 - 井上直美 (埼玉大学)
「「お／ご～おき(下さい)」について」
 - 陳曦 (立命館大学), 松本理美 (立命館大学), 小椋秀樹 (立命館大学)
「校歌の歌詞の言語的特徴に関する計量的研究—滋賀県公立学校を対象として—」
 - 加藤恵梨 (大手前大学)
「発話の冒頭で使われる「まあ(ね)」について」
 - 本多由美子 (一橋大学)
「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における複合助詞の表記—動詞の漢字表記に着目して—」

- ▶ 田中弥生 (神奈川大学 / 国立国語研究所), 小磯花絵 (国立国語研究所)

「家庭での幼児の発話の修辞機能—脱文脈化の観点からの検討—」
- ▶ 近藤明日子 (国立国語研究所)

「明治・大正期の口語体会話文の位相差—語種率・品詞率を観点として—」
- ポスター発表グループ 2
 - ▶ 高橋圭子 (明治大学), 東泉裕子 (明治大学)

「「勿論」考」
 - ▶ 川端良子 (国立国語研究所)

「地図課題対話における参照導入方法の特徴」
 - ▶ 太田守洋 (琉球大学), 山本健 (琉球大学)

「漢字の形における統計則」
 - ▶ 加藤祥 (国立国語研究所), 森山奈々美 (津田塾大学 / 国立国語研究所), 浅原正幸 (国立国語研究所)

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』書籍サンプルの NDC 情報増補」
 - ▶ 山崎誠 (国立国語研究所), 相良かおる (西南女学院大学), 小野正子 (西南女学院大学), 東条佳奈 (目白大学), 麻子軒 (大阪大学)

「実践医療用語の語構成要素への分割と意味ラベル付与の試み」
 - ▶ 欧陽恵子 (茨城大学), 田中裕隆 (茨城大学), 曹銳 (茨城大学), 白静 (茨城大学), 馬ブン (茨城大学), 新納浩幸 (茨城大学)

「文書領域情報を有する BERT の階層位置に関する考察」
 - ▶ 中渡瀬秀一 (国立情報学研究所), 加藤文彦 (国立情報学研究所), 大向一輝 (国立情報学研究所)

「データ引用による言語資源活用文献の把握の可能性: BCCWJ の分析から」
- 口頭発表グループ 2
 - ▶ 柳沼大輝 (茨城大学), 古宮嘉那子 (茨城大学), 新納浩幸 (茨城大学)

「All-words WSD と fine-tuning を利用した分類語彙表の語義の分散表現の構築」
 - ▶ 岡照晃 (国立国語研究所)

「UniDic 非コアデーター解析用 UniDic の ID 情報にひも付く追加情報の公開について—」

2019年9月3日

- 口頭発表グループ 3
 - ▶ 太田博三 (放送大学)

「ポライトネス及び配慮表現コーパス作成と分析手法の一考察～対人関係を考慮した対話システムの適用に向けて～」
 - ▶ 庵功雄 (一橋大学)

「コーパスを用いて「は」と「が」に関する三上説を検証する試み」
 - ▶ 前川喜久雄 (国立国語研究所), 西川賢哉 (国立国語研究所)

「『日本語話し言葉コーパス』への声質情報付与と予備的分析」
 - ▶ 劉時珍 (東洋大学)

「類義副詞の文体を測る試み—「まったく」・「ぜんぜん」・「すこしも」・「ちっとも」を例に—」
- ポスター発表グループ 3
 - ▶ 春木良且 (フェリス女学院), 田中弥生 (神奈川大学 / 国立国語研究所)

「政策ニュース映画における否定的な表現の考察—戦後の社会課題と行政施策の可視化の試み—」
 - ▶ 西川賢哉 (国立国語研究所), 渡邊友香 (国立国語研究所)

「『日本語日常会話コーパス』の短単位解析: 作業工程を中心に」
 - ▶ 陳朝陽 (湖北第二師範学院 / 国立国語研究所), 宇佐美まゆみ (国立国語研究所)

「『BTSJ 日本語自然会話コーパス』における反論ストラテジーの分析」
 - ▶ 山元一晃 (国際医療福祉大学), 浅川翔子 (慶應義塾大学)

「手本として示される実習記録の語彙の特徴の分析」

- ・曹銳(茨城大学), 田中裕隆(茨城大学), 白静(茨城大学), 馬ブン(茨城大学), 新納浩幸(茨城大学)
「BERTを利用した教師あり学習による語義曖昧性解消」
- ・居關友里子(国立国語研究所), 小磯花絵(国立国語研究所)
「子どもによるやり取りへの参与の振る舞い—両親との会話の事例分析から—」
- ・谷田部梨恵(茨城大学), 佐々木稔(茨城大学)
「半教師あり語義曖昧性解消における各ジャンルの語義なし用例文の利用」
- ・夏目和子(名古屋大学), 佐藤理史(名古屋大学)
「発話文表現文型辞書の設計と編纂」
- ・山崎誠(国立国語研究所), 柏野和佳子(国立国語研究所), 宮嶋由美(明治大学)
「BCCWJ 小説会話文への話者情報の付与とその活用」
- ・ポスター発表グループ4
 - ・山口昌也(国立国語研究所)
「国会会議録における言語表現の出現頻度に関する時間的変化モデルの検証」
 - ・天谷晴香(国立国語研究所)
「美容院におけるマルチアクティビティ: 鏡越しの視線と発話」
 - ・吳佩珣(筑波大学), 近藤森音(東京大学), 森山奈々美(津田塾大学/国立国語研究所), 萩原亜彩美(津田塾大学/国立国語研究所), 加藤祥(国立国語研究所), 浅原正幸(国立国語研究所)
「『分類語彙表』と『岩波国語辞典第五版タグ付きコーパス 2004』の対応表」
 - ・馬ブン(茨城大学), 田中裕隆(茨城大学), 曹銳(茨城大学), 白静(茨城大学), 新納浩幸(茨城大学)
「BERTを利用した単語用例のクラスタリング」
 - ・クリスティナ・フメリヤク寒川(リュブリヤナ大学)
「日本語非母語話者の読解コーパス」から見える非漢字圏日本語学習者の辞書使用
 - ・渡辺美知子(国立国語研究所), 白旗悠真(東京大学)
「節中のフィラー「エー」「アノー」「マー」の出現確率に影響する要因」
 - ・柏野和佳子(国立国語研究所)
「『日本語日常会話コーパス』モニター公開版に見られる応答表現」
 - ・石本祐一(国立国語研究所)
「日常会話音声に対する基本周波数推定の課題」

2019年9月3日

- ・口頭発表グループ4
 - ・小磯花絵(国立国語研究所)
「『日本語日常会話コーパス』モニター公開版: 研究の可能性」
 - ・丸山岳彦(専修大学/国立国語研究所)
「『通時音声コーパス』の可能性と問題点—『昭和話し言葉コーパス』の構築と分析—」
- ・優秀発表賞表彰式・クロージング
- ・Universal Dependencies セッション
 - ・浅原正幸(国立国語研究所)
趣旨説明「Universal Dependencies の概要」
 - ・金山博(日本IBM)
「Universal Dependencies における日本語」
 - ・伊藤薰(九州大学)
「Universal Dependencies に基づく言語学研究の射程」
 - ・村脇有吾(京都大学)
「統語的語の認定問題」
 - ・大村舞(国立国語研究所)
「現代日本語書き言葉均衡コーパスの Universal Dependencies—UD Japanese コーパスの一例—」

- ・松田寛 (Megagon)

「GiNZA で始める日本語依存構造解析 – CaboCha, UDPipe, StanfordNLP との比較」

令和元年度 コーパス合同シンポジウム 「コーパスに見る日本語のバリエーション—くだけた表現—」

[2019.9.5, 国立国語研究所]

- ・挨拶: 木部暢子 (国立国語研究所)

- ・発表 1

- ・小磯花絵 (国立国語研究所)

「日常会話における縮約の特徴」

- ・発表 2

- ・中澤光平 (国立国語研究所)

「助詞の縮約形の地域差と歴史—COJADS から—」

- ・発表 3

- ・小木曾智信 (国立国語研究所), 村山実和子 (福岡女子短期大学)

「日本語の歴史と縮約形」

- ・発表 4

- ・迫田久美子 (国立国語研究所), 蘇鷹 (湖南大学), 川崎千枝見 (広島国際学院大学)

「日本語学習者の引用表現の「と」と「って」の使用」

- ・まとめ

司会: 木部暢子 (国立国語研究所)

Computational Psycholinguistics Tokyo [2019.10.25, 早稲田大学西早稲田キャンパス]

- ・能地宏 (国立研究開発法人産業技術総合研究所)

「非文を利用した言語モデルの文法能力の向上」

Computational Psycholinguistics Tokyo [2019.11.22, 早稲田大学西早稲田キャンパス]

- ・山田彬堯 (ジョージタウン大学/駿河台大学)

「理論言語学としての語用論を越えて: 表出的意味に関する動的語用論とその幾何的解釈について」

Computational Psycholinguistics Tokyo [2020.1.31, 早稲田大学西早稲田キャンパス]

- ・橋本大樹 (東京大学)

“Message-Oriented Phonology in Japanese: Word Duration and Pitch Peak”

(3) プロジェクトのシンポジウム・ワークショップ・研究発表会

プロジェクト等の主催で、公開研究発表会や学術シンポジウム等を日本各地を会場として開催している。

「日本語から生成文法理論へ: 統語理論と言語獲得」第6回ワークショップ [2019.4.20-21, 南山大学]

2019年4月20日

- ・TAKITA Kensuke (Doshisha University)

“The Ins and Outs of Syntactic Amalgams in Japanese”

- ・OCHI Masao (Osaka University)

“Adnominal Quantifiers (Anti-)labeling, and pro-form *no* in Japanese”

- ・FUJII Tomohiro (Yokohama National University)

“On Some Alleged Negative Evidence for Some ECP Effects in Japanese”

- ・MURASUGI Keiko (Nanzan University)

“Parametric Variations Viewed through the Acquisition of Labeling”

2019年4月21日

- KISHIMOTO Hideki (Kobe University)
“On the Syntax of the ECM Construction in Japanese”
- SAITO Mamoru (Nanzan University)
“Variation in Transfer Domains and the Presence/Absence of ϕ -feature Agreement”

「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」2019年度第1回プロジェクト研究発表会

[2019.5.11, 国立国語研究所]

- クレメンス・ポッペ (早稲田大学)
「自立分節理論による日本語の「弱モーラ」の統一的分析」
- 小川晋史 (熊本県立大学), 金アリン (九州大学)
「徳之島金見 (かなみ) 方言のイントネーションと名前呼びかけ時に生じる長母音について」
- 窪薙晴夫 (国立国語研究所)
「鹿児島方言のアクセント句拡張と型の転換について」

「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」2019年度第1回研究発表会 [2019.5.12, 弘前大学]

- MIYATA Susanne (Aichi Shukutoku University) and Alastair BUTLER (Hirosaki University)
“Syntactic annotation for Japanese CHILDES data”
- TAKEUCHI Koichi (Okayama University)
“Results of annotating semantic role labels and frames for the NPCMJ”
- 大久保弥 (東京外国語大学)
「重文の主語句標識の選択と節の関係性」

「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」2019年度第2回研究発表会 [2019.6.15, お茶の水女子大学]

- プラシャント・パルデシ (国立国語研究所), 吉本啓 (東北大学)
「NPCMJ コーパスの現状と今後の課題」
- 窪田悠介 (国立国語研究所), 峯島宏次 (お茶の水女子大学)
「前提投射のNPCMJ コーパスでの検索」
- 三好伸芳 (筑波大学)
「統語情報付きコーパスから見た名詞句と述語の共起関係」
- 井戸美里 (国立国語研究所)
「NPCMJ コーパスによる名詞述語文の名詞修飾節に現れる副詞の研究」
- 大久保弥 (東京外国語大学)
「並列構文の意味解釈と主語句標識の選択」
- 吉本啓 (東北大学)
「研究へのコメント, 総括」
- 討論

「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」令和元年度第1回研究発表会「格・情報構造 (琉球諸語)」[2019.6.16, 国立国語研究所]

- 研究発表
- 占部由子 (九州大学)
「南琉球八重山語西表島船浮方言における焦点標識の使用」
- 中川奈津子 (国立国語研究所)
「琉球八重山諸方言の主格標示と特定性」
- 又吉里美 (岡山大学)
「沖縄県うるま市津堅方言の格」

- ▶ サルバトーレ・カルリノ (国立国語研究所/一橋大学)
「北琉球沖縄語伊平屋方言の情報構造」
- ▶ 當山奈那 (琉球大学)
「与論方言の格=とりたてについて」
- ▶ 重野裕美 (広島経済大学)
「北琉球奄美大島方言の格標識について—龍郷町浦方言を中心に—」
- ディスカッション

第1回 語用論コーパス科研成果発表会 「『語用論的分析のための1000人自然会話コーパス』構築の趣旨と活用法」 [2019.6.29, 国立国語研究所]

- ▶ 開会挨拶: 宇佐美まゆみ (国立国語研究所)
- ▶ 宇佐美まゆみ (国立国語研究所)
「語用論的分析に適したコーパスとは?」
- ▶ 宇佐美まゆみ (国立国語研究所), 山崎誠 (国立国語研究所)
「『BTSJ 自然会話コーパス』の全体的な特徴と今後のデータ拡充について」
- ▶ 大塚容子 (岐阜聖徳学園大学), 宇佐美まゆみ (国立国語研究所)
「小学生と成人の会話の収集と今後の研究可能性」
- ▶ 重光由加 (東京工芸大学), 宇佐美まゆみ (国立国語研究所)
「インドの観光コミュニケーション会話の収集とその活用法」
- ▶ 山崎誠 (国立国語研究所), 宇佐美まゆみ (国立国語研究所)
「『BTSJ 自然会話コーパス』の形態素解析のための補助ツールの開発について」
- ▶ 石川慎一郎 (神戸大学)
「『BTSJ 自然会話コーパス』を用いた話者属性研究の方法について」
- ▶ 片上大輔 (東京工芸大学), 宮本友樹 (東京工芸大学)
「『BTSJ 自然会話コーパス』に基づいた対話システムの構築にむけて」
- ▶ パネリスト間, フロアとの討論, 質疑応答
コーディネーター: 宇佐美まゆみ (国立国語研究所)
- ▶ 全体の総括
- ▶ 閉会挨拶

「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」研究発表会 通時コーパス活用班合同研究発表会 (近世・近代グループ, 文体・資料性グループ) [2019.6.29, 明治大学中野キャンパス]

- ▶ 市村太郎 (常葉大学)
「『古今集遠鏡』コーパス構築の試み」
- ▶ 櫻井豪人 (茨城大学)
「洋学辞書・単語集の概略とその電子テキスト化について」
- ▶ 間淵洋子 (国立国語研究所/人間文化研究機構)
「『読売新聞』コーパスの概要と表記特徴」
- ▶ 村上謙 (関西学院大学)
「CHJ 江戸時代編 (京都・大坂) を利用した動詞待遇表現化のコロケーション」
- ▶ 近藤明日子 (国立国語研究所)
「明治・大正期の書き言葉における文体と語彙—接続詞を例に—」

関西言語学会 第44回大会シンポジウム「高度文法情報付きコーパスとその日本語研究への応用」

[2019.7.14, 関西大学千里山キャンパス]

- ・第I部: 概要とウェブ・インターフェースを用いた検索の例

- ・プラシャント・パルデシ (国立国語研究所), 吉本啓 (東北大学)

- 「イントロダクション」

- ・窪田悠介 (国立国語研究所), 峯島宏次 (お茶の水女子大学)

- 「前提投射の統語コーパスでの検索」

- ・第II部: 統語コーパスを用いた文法研究

- ・三好伸芳 (実践女子大学)

- 「名詞句と述語の共起関係から見たコーパス研究」

- ・井戸美里 (国立国語研究所)

- 「NPCMJ コーパスをとおしてみる特定の統語環境における語彙の偏り」

- ・第III部: プログラミングを伴う言語研究

- ・大久保弥 (東京外国語大学)

- 「並列構文における主語句標識と文の意味解釈」

- ・結び

- ・研究へのコメント, 討論: 吉本啓

「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」プロジェクト「とりたて表現の対照研究」共同研究発表会

[2019.7.28, 石川県政記念しいのき迎賓館]

- ・開会挨拶: 野田尚史

- ・野田尚史

- 「日本語と世界の言語のとりたて表現」

- ・井上優

- 「中国語のとりたてと焦点」

- ・デロワ中村弥生

- 「フランス語のとりたて表現」

- ・狩俣繁久

- 「琉球語の焦点化」

「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」研究発表会 [2019.8.3, 国立国語研究所]

- ・シャーマン・ウィルコックス (ニューメキシコ大学)

- 「手話の談話における指示と空間使用」

「議会会議録を活用した日本語のスタイル変異研究」研究発表会 [2019.8.27, 高知大学朝倉キャンパス]

- ・研究発表

- ・二階堂整 (福岡女学院大学)

- 「福岡県議会にみる定型表現について」

- ・高丸圭一 (宇都宮共和国大学)

- 「地方議会と国会における同一議員による発言の観察—政治課題への言及とスタイルに着目して」

- ・山際彰 (関西大学)

- 「議会会議録における婉曲表現—「～ふうに+思考動詞」を中心に—」

- ・須崎市議会関係者講演

シンポジウム「話し言葉の多様性」 [2019.8.30, 国立国語研究所]

- ・挨拶
 - 山崎誠
「主旨説明」
 - 小磯花絵
「プロジェクトの紹介」
- ・第1部 研究発表 (口頭発表)
 - 石井久美子
「話し言葉の外来語」
 - 山崎誠
「BCCWJ 小説会話文の話者情報を利用した分析」
 - 高崎みどり, 星野祐子, 田嶋明日香
「日本語日常会話コーパスを利用した指示語と身振りの研究」
 - 前川喜久雄
「話し言葉のマイクロコスモス：調音運動の個人間多様性」
- ・第2部 パネル「生の話し言葉から見えてくるもの」
 - 柏野和佳子
「生の応答詞」
 - 丸山直子
「無助詞について」
 - 金青華
「「挿入構造」の冒頭部分に用いられる「私は」と「私」の役割」
 - 茂木俊伸
「「なければならない」のバリエーション」
 - 飯間浩明
「〔話〕の話」
 - ディスカッション
 - 全体討論

方言コーパス研究発表会 2019 「方言コーパスを活用した方言研究の開拓」 [2019.9.6, 国立国語研究所]

- ・『日本語諸方言コーパス (COJADS)』利用講習会
 - COJADS の概要
 - COJADS のデータ構築の方法 1 標準語訳における省略タグ
 - COJADS のデータ構築の方法 2 助詞省略と文節区切り
 - COJADS のデータ構築の方法 3 方言テキストと標準語訳
- ・『日本語諸方言コーパス (COJADS)』を活用した方言の分析
 - 日高水穂
「方言談話の叙述の文末表現 (仮)」
 - 木部暢子
「COJADS に見るモダリティ形式のバリエーション」
 - ディスカッション

「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」研究発表会通時コーパス活用班合同研究発表会 (語彙・意味グループ, 中古・中世グループ, 文体・資料性グループ) [2019.9.9, 東洋大学白山キャンパス]

- 竹内史郎 (成城大学), 萩原咲 (銚子商業高等学校)
「「さらば」の日本語史」

- 宮地朝子（名古屋大学）
「中古中世の副詞「ただ」と副助詞・係助詞」
- 岡崎友子（東洋大学）
「接続表現「ソレ・ソコ+助詞」の歴史的変化」
- 山本真吾
「『今昔物語集』における仮名書自立語と欠字該当語との関係について—「すがる」の存否をめぐる—」

「会話における創発的参与構造の解明と類型化」公開研究会 [2019.9.11, 国立国語研究所]

- ・趣旨説明：遠藤智子（東京大学）
- ・研究発表 1
 - 坂井田瑠衣（国立情報学研究所）
「「一緒にやる」と「1人でやる」：共同作業における創発的参与」
- ・研究発表 2
 - 遠藤智子（東京大学）
「誰が誰にいつどう話すのか：家族というメンバーシップと参与の仕方」
- ・全体討論

「議会会議録を活用した日本語のスタイル変異研究」研究発表会 [2019.9.12, 国立国語研究所]

- 二階堂整（福岡女学院大学）
「地方議会の行政側回答における定型表現について」
- 朝日祥之（国立国語研究所）
「名古屋市長の演説にみるスタイル変異：市議会会議録を活用して」

フレーム意味論プロジェクト研究発表会 [2019.9.21, 貸し会議室イールーム名古屋駅前 A]

- 有薗智美（名古屋学院大学）
「多義動詞分析と付加詞要素」
- 加藤祥（国立国語研究所）
「分類語彙表と分類語彙表番号付与コーパスを用いた調査」

「日本語の間接発話理解：第一言語、第二言語、人工知能における習得メカニズムの認知科学的比較研究」研究発表会 [2019.9.22, 国立国語研究所]

- 宇佐美まゆみ（国立国語研究所）
「「日本語の間接発話理解」研究の方法論的問題点について：第一言語習得と第二言語習得の比較研究を例として」
- 松井智子（東京学芸大学）
「間接発話理解とその認知的基盤」
- 中村太戯留（慶應義塾大学）
「間接的な発話における発話者の意味の調節：皮肉やユーモアの理解をめぐって」
- 重光由加（東京工芸大学） 大塚容子（岐阜聖徳学園大学） 宇佐美まゆみ（国立国語研究所）
「日本語学習者の間接発話の習得：質問紙調査報告（2）」
- 内海彰（電気通信大学）
「皮肉理解への計算論的アプローチ」
- 指定討論：田中廣明（京都工芸繊維大学）
‣ ディスカッション

「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」研究発表会 ワークショップ：鹿児島県甑島方言の音声と文法
[2019.11.17, 名古屋学院大学名古屋キャンパスしろとり]

- ・企画・司会：窪瀬晴夫
- ・発表 1
 - 窪瀬晴夫
「甑島方言のアクセント」
- ・発表 2
 - 久保瀬愛
「甑島方言のニ格・バ格標示の形容詞」
- ・発表 3
 - 酒井雅史
「九州方言における甑島方言の敬語運用」
- ・討論者：木部暢子

計算言語学の現在 [2019.12.6, お茶の水女子大学]

- イントロ
- 宮尾祐介
「自然言語のグラウンドィング研究の概観」
- 戸次大介, 峯島宏次
「計算意味論の最前線—理論・実装・検証」
- 春田和泉
「比較表現の計算意味論—CCG と自動定理証明によるアプローチ」
- 渡邊知樹
「依存型意味論による選言文と疑問文の分析」
- 折田奈甫, 大関洋平
「心理言語学における計算論的転回」
- 全体討論

計算意味論研究会 [2019.12.17, 国立国語研究所]

- Jan WISLICKI (University of Warsaw)
“Modal aspects of quotation: A cross-typological analysis”

「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」通時コーパス活用班 近世グループ 第1回研究発表会

[2019.12.22, 白百合女子大学]

- 高谷由貴 (東亜大学)
「CHJ 江戸時代編に見られる接続表現トテ/ジャトテの使用差」
- 片山久留実 (国立国語研究所), 村上謙 (関西学院大学)
「基本語彙に時代差, 地域差, ジャンル差が与える影響」
- 常盤智子 (白百合女子大学)
「ローマ字資料を用いたコーパス作成における諸問題」

「発達障害児の聞き取りの困難さの要因を探る実証研究」研究発表会 [2020.1.25, 国立国語研究所]

- 藤野博 (東京学芸大学 教職大学院)
「発達障害児の認知特性と言語の問題: 本プロジェクトの計画と展望」
- 松井智子, 内田真理子 (東京学芸大学 国際教育センター)
「発達障害児の音韻カテゴリ知覚」

- ・三浦優生 (愛媛大学 教育・学生支援機構)
「児童における取り立て詞に基づく発話解釈」
- ・林安紀子 (東京学芸大学 特別支援教育・教育臨床サポートセンター)
「幼児期の対人認知の発達に関する実験的検討」
- ・池田一成 (東京学芸大学 特別支援教育・教育臨床サポートセンター)
「認知発達の障害を解析するミスマッチ陰性電位」
- ・窪蘭晴夫 (国立国語研究所)
「コメントと助言」

「移動と状態変化の意味論」研究会 [2020.2.6, 東京大学本郷キャンパス]

- ・挨拶
- ・Andrew FORREST (University of Newcastle)
“Semantics of Associated Path in Kaytetye”
- ・河内一博 (防衛大学校), Jürgen BOHNEMEYER (State University of New York at Buffalo), Erika BELLINGHAM (State University of New York at Buffalo)
「国際共同研究プロジェクト “Causality across languages” の研究方法とこれまでの成果の概要」
- ・松本曜 (国立国語研究所)
「状態変化表現の通言語的研究」
- ・山本恭祐 (国立国語研究所 / JSPS), 諸隈夕子 (国立国語研究所 / 東京大学)
「イロカノ語とケチュア語における状態変化表現」
- ・討議

Prosody & Grammar Festa 4 [2020.2.15–16, 神戸大学六甲台第2キャンパス]

2020年2月15日

- ・シンポジウム 「日本語と言語類型論」
 - ・開会のことば: 奥村弘 (神戸大学大学院人文学研究科長)
 - ・田中雄 (同志社大学)
「最適性理論と言語類型論」
 - ・守田貴弘 (京都大学)
「認知言語学と言語類型論」
 - ・岸本秀樹 (神戸大学)
「生成文法と言語類型論」
 - ・窪田悠介 (国立国語研究所)
「計算言語学と言語類型論」
 - ・山本秀樹 (弘前大学)
「日本語の語順と言語類型論」

2020年2月16日

- ・研究発表
 - ・田中真一 (神戸大学)
「名古屋方言における疑問文の音調と言語構造」
 - ・今村泰也 (麗澤大学)
「ヒンディー語のとりたて表現」
 - ・木戸康人 (神戸大学)
「日本語名詞修飾構文の獲得」

- ポスター発表
 - 宮田瑞穂 (東京大学)
「時間的用法からモーダル用法への拡張—日本語「もう」とドイツ語 *schon* の対照研究—」
 - 宮岸哲也 (安田女子大学/大阪府立大学)
「授受動詞の使役的用法の類型論的研究」
 - 薮媛媛 (名古屋大学)
「ペアマッチした中国人および韓国人日本語学習者によるプロソディの知覚の比較」
 - LEE Seunghun (International Christian University / University of Venda), GUILLEMOT Céleste (International Christian University), Le Xuan CHAN (International Christian University), and ASHIDA Mana (International Christian University)
“Intonation of questions in Drenjongke”
 - 何秋林 (筑波大学)
「日本語と中国語の「連体修飾語+抽象名詞」を含む属性叙述構文について」
 - 黒木邦彦 (神戸松蔭女子学院大学)
「現代日本語方言間に認められる語類豫測度の差異: 忠實性および發話効力の面であひ反する方言を資料として」
 - 松浦年男 (北星学園大学)
「天草地方の方言類型論を目指して」
 - 石田崇 (筑波大学)
「*Dolphin-Safe Can* は「イルカに安全な缶」?—概念統合からみる日英語の A-N 表現—」
 - 萩澤大輝 (神戸市外国語大学)
「ゆずすこ, ポリタン, ボナーラフェア: 創造的語形成の日英対照」
 - 渡部直也 (東京大学)
「英語からの [æ] の受容: 日本語とロシア語の比較」
 - 森山倭成 (神戸大学)
「動詞エコー返答文の派生に関する不定主語テストの妥当性と pro 脱落型言語について」
 - MOROKUMA Yuko and AOYAMA Kazuki (The University of Tokyo)
“Differential subject marking in Japanese, Quechua, and Mee: A comparative study of Japanese-like languages”
 - 氏家啓吾, 石塚政行 (東京大学)
「「X は Y が Z だ」の対照: 日本語とバスク語の二重主語コピュラ文」
 - 李慧 (東京大学)
「日本語における 2 つのパターンの V1V2 型複合動名詞の項の実現に関する一考察」
 - 氏家洋子 (北京日本学研究センター)
「日本語の主体的・モーダルな表現の特質: 副詞的表現を中心に」
- 研究発表
 - 松本曜, 吉成祐子, 長屋尚典, 他
「複数局面経路の言語表示類型: 日本語と他言語の比較から」
 - 澤田治 (神戸大学)
「日本語のモーラに基づく最小詞の(非)字義的用法について: 形式意味論・対照言語学的アプローチ」
 - プラシャント・パルデシ (国立国語研究所)
「名詞修飾表現の地理類型論: 日本語と世界諸言語の対照から見えてくるもの」
 - 閉会のことば

「移動と状態変化の意味論」研究会 [2020.2.17, 神戸大学]

- 挨拶

- ・松本曜 (国立国語研究所)
「状態変化表現の通言語的研究」
- ・諸隈夕子 (国立国語研究所 / 東京大学)
「ケチュア語アヤクーチョ方言における状態変化表現：移動表現との比較」
- ・山本恭祐 (国立国語研究所 / JSPS)
「イロカノ語の状態変化事象の表現」
- ・全体的討議

シンポジウム「ビジネスと日本語の接点」 [2020.3.20, Web 開催]

- ・Session 「ビジネス文書の分析と課題」 [司会：岩崎拓也 (国立国語研究所)]
 - ・石黒圭 (国立国語研究所)
「本シンポジウムの枠組み」
 - ・井上雄太 (国立国語研究所)
「分析用データベースの設計と活用」
 - ・青木優子 (東京福祉大学)
「発注文書の表現の分析」
 - ・浅井達哉, 柳瀬隆史 (株式会社 富士通研究所)
「Wide Learning を用いた発注文書の分析」
 - ・佐野彩子 (一橋大学)
「発注文書に見られる語彙の問題」
 - ・蒙齋 (国立国語研究所)
「発注文書に見られる敬語の問題」
 - ・布施悠子, 岩崎拓也 (国立国語研究所)
「発注者と受注者の意図のずれ」
- ・Panel Discussion 「“よいビジネス文書”とはなにか？ —伝達力が仕事を変える—」
 - ・司会：熊野健志 (富士通株式会社)
 - ・登壇者：
 - ・アンドレイ・ベケシュ (リュブリヤナ大学)
 - ・成田修造 (株式会社 クラウドワークス)
 - ・穴井宏和 (株式会社 富士通研究所)
 - ・小田淳 (ロジ代表)
 - ・コメント：庵功雄 (一橋大学)

(4) NINJAL コロキウム・ミニ講義

日本語学・言語学・日本語教育の様々な分野における最先端の研究をテーマとした国内外の優れた研究者による講演会および講義を NINJAL コロキウムおよびミニ講義としておこなっている。原則として月1回、国立国語研究所にて開催し、研究者・大学院学生のみならず、一般にも公開している。2019年度は、NINJAL コロキウムを7回、ミニ講義を1回開催した。

NINJAL コロキウム

- ・第106回 (2019年4月2日)
 - ・Jane TSAY (蔡素娟) (台湾、国立中正大学語言学研究所教授)
“Historical Relationship between Japanese Sign Language and Taiwan Sign Language”
- ・第107回 (2019年7月2日)
 - ・白井恭弘 (アメリカ、ケースウエスタンリザーブ大学教授)
「第一・第二言語習得におけるアスペクト仮説の現状—テンス・アスペクト習得の普遍性はどこから来るのか」

- ・第108回(2019年7月9日)
 - ・荻原俊幸(アメリカ, ワシントン大学教授)
“English Tense Morphemes in Complement Clauses: Are Cessation and Parentheticality Relevant?”
「補文の時制: 状態の停止や挿入的表現との関係性について」
- ・第109回(2019年9月24日)
 - ・鳥飼玖美子(立教大学名誉教授)
「国語教育と英語教育を考える—大学入試改革を中心に」
- ・第110回(2019年11月12日)
 - ・Susan FISCHER(アメリカ, ロチェスター工科大学名誉教授/ニューヨーク市立大学大学院センターAdjunct Professor)
“Syntactic and Morphosyntactic Variation Across Sign Languages”
- ・第111回(2020年1月7日)
 - ・上垣渉(イギリス, エдинバラ大学Lecturer)
「疑問文を頂にとる日本語終助詞の分析」
- ・第112回(2020年2月25日)
 - ・George TSOULAS(外来研究員/イギリス, ヨーク大学教授)
“A Comparative Perspective on the Grammar of Particles”

ミニ講義

- ・2019年12月16日
 - ・傍士元(アメリカ, 南カリフォルニア大学准教授)
“Language Faculty Science as a Categorical Science: Experimental Illustration”

(5) NINJAL サロン

国立国語研究所の研究者(共同研究員を含む)を中心として、おのれの研究内容を紹介することによって、情報交換をおこなう場である。外部からの聴講も歓迎している。2019年度は、第181回から第203回まで、23回開催した。

- ・第181回(2019年5月7日)
 - ・中川奈津子(言語変異研究領域プロジェクト非常勤研究員), セリック・ケナン・チボ(言語変異研究領域プロジェクト非常勤研究員)
「琉球八重山白保方言のアクセント体系は三型であって、二型ではない」
- ・第182回(2019年5月14日)
 - ・ダン・タイ・クイン・チー(日本語教育研究領域プロジェクト非常勤研究員)
「中級日本語学習者の視点は母語によって異なるか—I-JASのストーリーテリングの分析から—」
- ・第183回(2019年5月21日)
 - ・前川喜久雄(音声言語研究領域教授)
「リアルタイムMRI音声データベースによる発話末撥音の分析」
- ・第184回(2019年5月28日)
 - ・佐野彩子(日本語教育研究領域プロジェクト非常勤研究員), 岩崎拓也(理論・対照研究領域プロジェクト非常勤研究員), 浅井達哉(国立国語研究所共同研究員/富士通研究所シニアリサーチャー)
「クラウドソーシング表現分析の一試論—Wide Learningの活用—」
- ・第185回(2019年6月4日)
 - ・カルリノ・サルバトーレ(言語変異研究領域プロジェクト非常勤研究員)
「北琉球沖縄語伊平屋方言の動詞・形容詞」

- ・第 186 回 (2019 年 6 月 11 日)
 - ・林由華 (外来研究員 / 日本学術振興会 特別研究員)
「琉球諸方言における係結び関連現象について」
- ・第 187 回 (2019 年 6 月 18 日)
 - ・窪田悠介 (理論・対照研究領域 准教授)
「カテゴリ文法と言語学 (と生成文法)」
- ・第 188 回 (2019 年 7 月 16 日)
 - ・陳朝陽 (外来研究員 / 湖北第二師範学院 准教授)
「友人同士の討論場面における反論ストラテジー—BTSJ 日本語自然会話コーパスのデータより—」
- ・第 189 回 (2019 年 7 月 23 日)
 - ・浅原正幸 (コーパス開発センター 教授)
「読み時間とアノテーションの統計分析」
- ・第 190 回 (2019 年 7 月 30 日)
 - ・浅原正幸 (コーパス開発センター 教授)
「『分類語彙表』を中心とした言語資源整備」
- ・第 191 回 (2019 年 10 月 8 日)
 - ・青井隼人 (言語変異研究領域 特任助教)
「プレゼンを生かすスライドのデザイン: (記述) 言語学の場合」
- ・第 192 回 (2019 年 10 月 29 日)
 - ・柳原恵津子 (言語変化研究領域 プロジェクト非常勤研究員)
「平安初期訓点資料における不読字の再検討—コーパス・電子化テキストを用いた訓点語研究の試みとして—」
- ・第 193 回 (2019 年 11 月 19 日)
 - ・Thomas SCHÖKLER (特別共同利用研究員 / ウィーン大学大学院生)
“New Perspectives on Complex Predicate Constructions in Japanese: Prosody, Structure, Variation”
- ・第 194 回 (2019 年 12 月 3 日)
 - ・吳寧真 (言語変化研究領域 プロジェクト非常勤研究員)
「中世語の複合動詞の敬語形」
- ・第 195 回 (2019 年 12 月 17 日)
 - ・Daniel PLESNIAK (アメリカ 南カリフォルニア大学大学院生)
“From Chaos to Order: What Correlations of Judgements Tell Us About “Weak Crossover” in English”
※ 傍士先生の「ミニ講義」の関連発表
- ・第 196 回 (2019 年 12 月 24 日)
 - ・横山晶子 (外来研究員 / 日本学術振興会特別研究員 (PD))
「ウェールズ、マン島における言語継承／言語復興の現況～機構若手研究者海外派遣の成果報告～」
- ・第 197 回 (2019 年 1 月 14 日)
 - ・中川奈津子 (言語変異研究領域 特任助教)
「青森県南部野辺地方言の音韻」
- ・第 198 回 (2020 年 1 月 21 日)
 - ・山本恭裕 (外来研究員 / 日本学術振興会特別研究員 (PD))
「アイク語 (パプアニューギニア) の分節音韻論／A」

- ・第199回(2020年1月28日)
 - 浅原正幸(コーパス開発センター教授)
「NWJC-BERTとBERTed BCCWJ: 文脈化単語埋め込みに基づく分布意味論的分析」
- ・第200回(2020年2月4日)
 - Tamara RATHCKE(外来研究員/イギリス, ケント大学 Senior Lecturer)
“Does Language Hit the Beat?”
- ・第201回(2020年2月18日)
 - ズラズリ美穂(外来研究員/イギリス, ロンドン大学東洋アフリカ研究院博士課程)
「琉球諸島におけるマスター・アプレンティス・イニシアティブ」
- ・第202回(2020年3月3日)
 - 大島一(言語変異研究領域プロジェクトPDフェロー)
「茨城方言における「ら」の複数性」
- ・第203回(2020年3月24日)
 - 王慧雠(日本語教育研究領域プロジェクト非常勤研究員)
「テレビドラマのシナリオの用例からみる(サ)セル表現の意味論的機能と語用論的機能の生成メカニズム—コーパスでは観察しきれない全体像を捉える試み—」
※Web開催

(6) 講習会・セミナー

統語・意味解析コーパス(NPCMJ)チュートリアル[2019.5.11, 弘前大学]

- プラシャント・パルデシ
「NPCMJコーパスの理念と概要、および初心者向けインターフェース」
- 吉本啓
「データの概要とタグの検索」
- 鈴木彩香
「グラフィカルインターフェースを使った検索式の作成」
- 鈴木彩香
「TGrep-lite検索式1」
- 吉本啓
「TGrep-lite検索式2」
- 長崎郁
「TGrep-lite検索式3」
- 長崎郁
「ローカル環境での利用法について」

第11回, 第12回 BTSJ活用方法講習会[2019.5.18, 国立国語研究所]

- 第11回 BTSJ活用方法講習会(初心者向け)
- 第12回 BTSJ活用方法講習会(既習者向け)

第13回, 第14回 BTSJ活用方法講習会[2019.6.2, 名古屋大学東山キャンパス]

- 第13回 BTSJ活用方法講習会(初心者向け)
- 第14回 BTSJ活用方法講習会(既習者向け)

第7回コーパス利用講習会[2019.7.27, 国立国語研究所]

- 全文検索システム『ひまわり』講習会
既存資料(テキストデータ)を全文検索システム『ひまわり』で活用することを目的として、以下の方法を学ぶ。今回は、検索などの各種機能の操作手順を説明するものではなく、実際に『ひまわり』

用資料を作成する、ワークショップ型の講習を予定している。

- 研究用情報の人手タグ付け
- 形態素解析システムによる解析結果のタグ付け
- 『ひまわり』へのインポート
- 『ひまわり』用資料としてのパッケージ化

第8回コーパス利用講習会 [2019.8.30, 国立国語研究所]

- オンライン検索システム「中納言」講習会
中納言の操作方法とその検索結果を使って、表やグラフの作成などを学ぶ。
講師：柏野和佳子（音声言語研究領域）、山崎誠（言語変化研究領域）

第9回コーパス利用講習会 [2019.8.31, 国立国語研究所]

- 共通：コーパスの概要
講師：小磯花絵（音声言語研究領域）
『日本語日常会話コーパス』ハードディスク版のデータの仕様や構成などについて概説する。
- コース1：Praat・ELAN 講習会
講師：小磯花絵（音声言語研究領域）
『日本語日常会話コーパス』ハードディスク版で提供する Praat 用、ELAN 用のファイルを利用するための方法を実習する。分析には踏み込みます、ツール（Praat・ELAN）の使い方の学習を中心とする。
- コース2：全文検索システム「ひまわり」講習会
講師：山口昌也（音声言語研究領域）
『日本語日常会話コーパス』を全文検索システム『ひまわり』で検索・分析する方法を実習する。また、観察支援システム FishWatchr で『日本語日常会話コーパス』の映像・転記テキストを閲覧する方法についても説明する。

令和元年度国立国語研究所日本語教師セミナー（海外）「世界諸言語からみた日本語」

[2019.9.17-18, サマルカンド国立外国语大学、ウズベキスタン]

- 講師：プラシャント・パルデシ（理論・対照研究領域 教授）
 - 「世界諸言語の文字からみた日本語の文字体系」
 - 「言語類型論・対照研究の知見を援用した日本語教育に向けて」
 - 「日本語学習に役立つウェブ教材—「基本動詞ハンドブック」と「日本語文型バンク」—」
 - 「日本語学習に役立つウェブ教材—NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB) —」

令和元年度国立国語研究所日本語教師セミナー（海外）「世界諸言語からみた日本語」

[2019.9.21-22, ウズベキスタン・日本センター、ウズベキスタン]

- 講師：プラシャント・パルデシ（理論・対照研究領域 教授）
 - 「世界諸言語の文字からみた日本語の文字体系」
 - 「言語類型論・対照研究の知見を援用した日本語教育に向けて」
 - 「日本語学習に役立つウェブ教材—「基本動詞ハンドブック」と「日本語文型バンク」—」
 - 「日本語学習に役立つウェブ教材—NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB) —」

国立国語研究所日本語学講習会 [2019.11.2, 北京師範大学、中国]

- Prashant PARDESHI
「日本語は特殊な言語、普通の言語？：世界の言語から見た日本語」
- Prashant PARDESHI
「「寒い」と「冷たい」はどう違うか：温度表現の類型論」
- Prashant PARDESHI
「A が座って、B を書いて、C に B を送った：動詞の分類について」

- Prashant PARDESHI

「なぐった, なぐられた, なぐらせた: ヴォイス (voice) 表現の体系」

国立国語研究所日本語学講習会

[2019.12.21-22, Symbiosis Institute of Foreign and Indian Languages (SIFIL), インド]

2019年12月21日

- Opening ceremony
- プラシャント・パルデシ (国立国語研究所 教授)
「世界諸言語の文字からみた日本語の文字体系」
- 今村泰也 (麗澤大学客員研究員)
「アカサタナハマヤラワの順番の意味: 母音と子音」
- 今村泰也 (麗澤大学客員研究員)
「「にわにわとりがいる」をどう読むか: アクセントとイントネーション」
- 今村泰也 (麗澤大学客員研究員)
「夫, 主人, ダーリン, 結婚相手をどう呼ぶか? : 語種」

2019年12月22日

- 桐生和幸 (美作大学 教授)
「「試験に不合格にならないこともない」は, どんな意味?」
- 桐生和幸 (美作大学 教授)
「アメリカに行くとき靴を買います: 靴を買うのはアメリカ? それとも?」
- 桐生和幸 (美作大学 教授)
「子供が木に登っている: 子供のいるところはどこ?」
- 柴谷方良 (ライス大学 教授)
「「の」の話し」

統語・意味解析コーパス (NPCMJ) チュートリアル [2020.2.1, 品川インターシティ ホール&貸会議室]

- コーパスの理念と概要、および初心者向けインターフェース
- データとアノテーションの概要
- 検索インターフェース、tregex 検索式
- ローカル環境での利用

国立国語研究所日本語学講習会 [2020.2.9, ヤンゴン外国語大学, ミャンマー]

- 野田尚史 (国立国語研究所 教授)
「日本語の文はどのような成分でできているか: 文の基本的な構造」
- 野田尚史 (国立国語研究所 教授)
「「は」と「が」と「も」はどう違うか: 主題ととりたて」
- プラシャント・パルデシ (国立国語研究所 教授)
「言語類型論・対照研究の知見を援用した日本語教育に向けて」
- プラシャント・パルデシ (国立国語研究所 教授)
「日本語学習に役立つウェブ教材」

国立国語研究所日本語学講習会 [2020.2.12, マンダレー外国語大学, ミャンマー]

- 野田尚史 (国立国語研究所 教授)
「日本語の文はどのような成分でできているか: 文の基本的な構造」
- 野田尚史 (国立国語研究所 教授)
「「は」と「が」と「も」はどう違うか: 主題ととりたて」

- ・ プラシャント・パルデシ (国立国語研究所 教授)
「言語類型論・対照研究の知見を援用した日本語教育に向けて」
- ・ プラシャント・パルデシ (国立国語研究所 教授)
「日本語学習に役立つウェブ教材」

令和元年度国立国語研究所日本語教師セミナー (国内) 「顕在化する多言語社会日本と日本語教育」

[2020.2.15, 立川総合研究棟]

- ・ 趣旨説明: 石黒圭 (国立国語研究所)
- ・ 福永由佳 (国立国語研究所)
「日本語学習者の多言語使用のリアリティに対峙する日本語教育」
- ・ 磯野英治 (名古屋商科大学)
「多言語景観を活用した日本語教育—教材開発と教育実践について—」
- ・ 福村真紀子 (早稲田大学, 「多文化ひろばあいあい」主宰)
「結婚移住女性の Life に寄り添う地域日本語教育—「母語話者支配のイデオロギー」を乗り越えるために—」
- ・ 高橋朋子 (近畿大学)
「多様化する母語教育—日本の現状と課題」
- ・ ディスカッション
- ・ 閉会挨拶: 福永由佳 (国立国語研究所)

国立国語研究所日本語学講習会

[2020.2.29, 国際日本文化学園 (International Japanese Culture Institution), カンボジア]

- ・ プラシャント・パルデシ (国立国語研究所 教授)
「世界諸言語の文字からみた日本語の文字体系」
- ・ プラシャント・パルデシ (国立国語研究所 教授)
「言語類型論・対照研究の知見を援用した日本語教育に向けて」

7 センター・研究図書室の活動

(1) 研究情報発信センター

情報発信に関わる研究開発や、研究資料の収集・管理をおこなっている。各プロジェクトやコーパス開発センターと連携し、ウェブページや研究資料室を通して研究情報の公開を推進している。

- ・ 所蔵資料の配信システムや公開コンテンツについて研究発表を 9 件おこない、論文公表を 1 件おこなった。また、所蔵する音声・映像資料をめぐり、所内の複数のプロジェクトと連携し、共同利用体制を強化した。
- ・ 所管するデータベース類について、コンテンツの再配置をおこない、合理化に寄与した。また、Web ページをスマートフォン・タブレット端末にも対応したレスポンシブデザインに改修したことでアクセス数が倍増した (2019 年 1 月期と 2020 年 1 月期との比較)。
- ・ 「日本語研究・日本語教育文献データベース」への新規データの追加、研究資料室収蔵の音源・映像のデジタル化及びデータベース化、「研究資料室収蔵資料データベース」の充実を、当初の予定を上回るペースで積極的に推進した。特に、「日本語研究・日本語教育文献データベース」では、台湾の主要学会誌・主要大学紀要掲載論文の採録に着手した。
- ・ 「国立国語研究所学術情報リポジトリ」について、本年度のオープンアクセス方針施行に伴い、案内・登録申請を呼びかけ、所員の個人著作物の登録を推進した。
- ・ 2019 年度共同利用型研究 (公募型) の採択課題 (全 12 件中 10 件が研究資料室収蔵資料の活用研究) に対して研究資料を提供し、共同利用に基づく共同研究体制を強化した。
- ・ 京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター主催「東洋学へのコンピュータ利用第 31 回

- 研究セミナー」に共催し、共同利用・共同研究拠点と連携活動をおこなった。
- ・『人間文化研究機構の情報関連事業第三期後半における基本方針』に基づく高度連携システムのデータ構築計画の募集（代表機関：国文研、連携機関：国語研）に採択された。
 - ・『国立国語研究所論集』を2回、オンラインと冊子体の両形態で発行した。担当委員制を導入し、編集体制を強化とともに、外注内容を見直し、編集校正作業を効率化した。
 - ・日本語学的・言語学的にパイオニア的価値を持ち、その評価がほぼ確立した日本語論文を英訳し、オープンアクセスで公開した。
 - ・ネットワーク・サーバ運用保守業務およびサポートデスク業務を、本年度から情報基盤室に移管した。

（2）コーパス開発センター

研究系と連携して言語資源の開発整備および基礎研究を進め、言語資源に関する共同利用の利便性を高めることを目的としている。具体的には、言語コーパスに加え、形態素解析用電子化辞書、コーパス検索ツールなどの研究開発を進めている。

- ・共同利用・共同研究について、以下を実施した。
 - ・コーパス開発センター専任職員・研究員で、ジャーナル論文10本（解説論文1本、紀要論文2本含む）、国際会議発表16件（うち9件が査読付き論文）発表。
 - ・「言語資源活用ワークショップ2019」を9月に開催。また、Academia Sinicaとともに国際会議LPSS 2019を11月に共催。
 - ・形態素解析用辞書（UniDic）、係り受けツリーバンク（Universal Dependencies）、シソーラス（分類語彙表）を中心とした研究を共同研究者と推進。
 - ・所内のコーパス開発プロジェクトの支援。
- ・コーパスの整備について、以下を実施した。
 - ・「少納言」「中納言」「梵天」および包括的検索系「KOTONOHA」の開発維持管理。
 - ・「中納言」に新たに『昭和話し言葉コーパス』を搭載。
 - ・「中納言」上の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に話者情報を新たに追加。
- ・コーパスの利用促進について、以下を実施した。
 - ・検索系の講習会を3回実施するとともに教員免許状更新講習に協力。また、情報処理学会セミナーに登壇。
 - ・『現代日本語書き言葉均衡コーパス』と『日本語話し言葉コーパス』の頒布を継続。
 - ・2019年10月に形態素解析用辞書UniDic-3.0を公開。日本語語彙の分散表現データを配布。
- ・他機関等との連携について、以下を実施した。
 - ・台湾Academia Sinicaと国際的協業を推進。
 - ・国際的な係り受けツリーバンク構築プロジェクトUniversal Dependenciesに参画。
 - ・高エネルギー加速器研究機構の機構間連携プロジェクトに参画参画。

（3）研究図書室

全国で唯一の日本語に関する専門図書館で、日本語研究および日本語に関する研究文献・言語資料を中心に、日本語教育、言語学など、関連分野の文献・資料を収集・所蔵している。

閲覧室には、新着コーナーを設け、新着雑誌・図書を利用しやすい環境を整えている。

カードキーによる入退室の管理および照明の人感センサーを整備し、所内教職員は夜間・休日も利用可能である。

- ・開室日時：月曜日～金曜日9時30分～17時（土曜日・日曜日・祝日・夏季休業・年末年始・毎月最終金曜日は休室）
- ・主なコレクション：
 - ・東条操文庫（方言）
 - ・大田栄太郎文庫（方言）
 - ・保科孝一文庫（言語問題）
 - ・見坊豪紀文庫（辞書）
 - ・カナモジカイ文庫（文字・表記）
 - ・藤村靖文庫（音声科学）

- ・林大文庫（国語学）
- ・輿水実文庫（国語教育）
- ・中村通夫文庫（国語学）
- ・「国立国語研究所蔵書目録データベース」をウェブ検索できる。
- ・図書館間相互協力サービス（NACSIS-ILL）により、所属機関の図書館を通して複写物の取り寄せや図書の貸出を受けることができる。
- ・所蔵資料数（2020年4月1日現在）

	図 書	雑 誌
日本語	125,283 冊	5,394 種
外国語	32,590 冊	524 種
計	157,873 冊	5,918 種

※ 視聴覚資料など 7,575 点を含む。

III

國際的研究協力

国立国語研究所全体の研究テーマである「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」をグローバルな観点から推進するため、国際的な研究連携体制の多様化を図っている。

1 世界の大学・研究機関との提携

世界各地の大学や研究機関等と、共同研究の促進や研究者の交流等を目的とした学術交流協定を締結している。協定先は、海外で日本語や日本語教育を研究している機関に加え、言語学や情報科学の研究機関にも及び、これらの協定により、日本語研究から世界の言語研究へ、世界の言語研究から日本語研究へ、という両方向の交流を強化し、世界規模で研究を促進することをめざしている。

協定締結先（2020年3月31日時点）

- ・中央研究院（台湾）：2014.3-
- ・北京外国语大学北京日本学研究センター（中国）：2014.6-
- ・オックスフォード大学人文科学部（イギリス）：2015.7-
- ・ネール大学言語学科（インド）：2017.7-
- ・ミシガン大学日本研究センター（アメリカ）：2017.8-
- ・東吳大学日本語文學系（台湾）：2018.1-
- ・ハワイ大学マノア校（アメリカ）：2018.2-
- ・ティラク・マハラシュトラ大学日本語学科（インド）：2018.5-
- ・インド工科大学マドラス校人文社会科学部（インド）：2018.6-
- ・韓国日語教育学会（韓国）：2018.7-
- ・韓國日本語學會（韓国）：2018.7-
- ・ダッカ大学現代語研究所（バングラデシュ）：2018.9-
- ・ソウル大学人文学部（韓国）：2018.10-
- ・ケラニア大学日本学研究センター（スリランカ）：2019.5-
- ・オーストリア科学アカデミー・デジタル人文学センター（オーストリア）：2020.3-

2 国際シンポジウム・国際会議の開催

世界における日本語・日本語教育研究の発展のため、国際シンポジウムを毎年数回開催すると同時に、海外に拠点を持つ国際学会を国語研に招致している（2018年度開催のものは44ページに掲載）。

3 日本語研究英文ハンドブック

言語学関係の出版社として傑出した出版活動で世界をリードする De Gruyter Mouton（ドゥ・グロイター・ムートン社：ベルリン／ボストン）からの申し出により、国立国語研究所の優れた研究成果を英文で出版する包括的な協定を2012年7月に締結した。この協定に基づき、2014年から、日本語および日本言語学の研究に関する包括的な日本語研究英文ハンドブック、Handbooks of Japanese Language and Linguisticsシリーズ（全12巻予定）を順次刊行している。

このシリーズは、それぞれの領域におけるこれまでの重要な研究成果を俯瞰し、現在における最先端の研究状況をまとめるとともに、今後の研究方向にも示唆を与えるもので、国語研関係者（専任教員および客員教員、諸大学の共同研究員）だけでなく、各領域における国内外の第一線の研究者が執筆を担当し、国語研が中心となって編集をおこなう大規模な国際的プロジェクトである。これにより大学共同利用機関としての国語研の知名度を世界的に高めるだけでなく、日本語研究の成果ならびに動向を世界に広く問うことによつ

て言語学の発展に資するとともに、日本語研究自体の進展にも寄与することとなる。

編集主幹

柴谷方良 (ライス大学教授) Masayoshi Shibatani (Professor, Rice University)

影山太郎 (国立国語研究所前所長・名誉教授) Taro Kageyama (Former Director-General and Professor Emeritus, NINJAL)

シリーズの構成 (全巻英文、各巻 600–700 ページ)

Vol. 1: *Handbook of Japanese Historical Linguistics*

Edited by Bjarke Frellesvig, Satoshi Kinsui, and John Whitman

Vol. 2: *Handbook of Japanese Phonetics and Phonology* (既刊, ISBN: 978-1-61451-198-4)

Edited by Haruo Kubozono

Vol. 3: *Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation* (既刊, ISBN: 978-1-61451-209-7)

Edited by Taro Kageyama and Hideki Kishimoto

Vol. 4: *Handbook of Japanese Syntax* (既刊, ISBN: 978-1-61451-661-3)

Edited by Masayoshi Shibatani, Shigeru Miyagawa, and Hisashi Noda

Vol. 5: *Handbook of Japanese Semantics and Pragmatics*

Edited by Wesley Jacobsen and Yukinori Takubo

Vol. 6: *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics* (既刊, ISBN: 978-1-61451-407-7)

Edited by Prashant Pardeshi and Taro Kageyama

Vol. 7: *Handbook of Japanese Dialects*

Edited by Nobuko Kibe and Tetsuo Nitta

Vol. 8: *Handbook of Japanese Sociolinguistics*

Edited by Fumio Inoue, Mayumi Usami, and Yoshiyuki Asahi

Vol. 9: *Handbook of Japanese Psycholinguistics* (既刊, ISBN: 978-1-61451-121-2)

Edited by Mineharu Nakayama

Vol. 10: *Handbook of Japanese Applied Linguistics* (既刊, ISBN: 978-1-61451-183-0)

Edited by Masahiko Minami

Vol. 11: *Handbook of the Ryukyuan Languages* (既刊, ISBN: 978-1-61451-115-1)

Edited by Nobuko Kibe and Tetsuo Nitta

Vol. 12: *Handbook of the Ainu Languages*

Edited by Anna Bugaeva

4 海外の研究者の招聘・受入

海外の研究者を専任や客員教員として招聘すると同時に、研究プロジェクトに共同研究員として多数の参画を得ている。また、海外の研究者や大学院生が国語研に滞在して研究をおこなう、外来研究員 (2019 年度海外機関からの受入 13 名) や特別共同利用研究員 (2019 年度海外機関からの受入 4 名) として受け入れている。

IV

社会連携と広報

1

消滅危機言語・方言の調査・保存・分析

2009年にユネスコが発表した世界各地の消滅危機言語（話者が非常に少なくなってきた言語）には、日本国内の8つの言語（方言）が含まれている。国語研ではこれらの諸方言を集中的に記録し、言語学的に分析するプロジェクトを進めている。これによって、世界の危機言語研究に貢献すると同時に、方言を使用している地域社会とその文化の活性化に寄与することを目的としている。

2

日本語コーパスの拡充

ある言語の全貌を正確に把握するためには、その言語を大量に収集し、分析する必要がある。書き言葉や話し言葉の資料を、大量かつ体系的に収集し、それを詳細に検索できるようにしたものを、「コーパス」といい、国語研では日本語コーパスの整備を進め、現代の標準的な日本語に加え、方言や歴史的な日本語、学習者の日本語等、様々なコーパスを構築・公開し、日本語研究だけではなく、情報処理産業や教育界等、多方面に提供している。

3

第二言語（外国語）としての日本語教育研究

近年、日本で生活している外国人や留学生の増加とともに日本語学習に対するニーズが拡大・多様化している中で、国語研では、日本語を母語としない人の学習・習得について基礎的な研究をおこない、国内外の日本語教育を学術的に支援している。

4

地方自治体との連携

- ・地方自治体の協力を得て、研究成果を分かり易く説明する NINJAL セミナーを各地で開催した（内容は 98-101 ページに掲載）。
- ・立川市歴史民俗資料館との相互協力に関する合意書による活動
 - ・子ども向け一般公開イベント「ニホンゴ探検」において、歴史民俗資料館職員による所蔵品の展示及び説明をおこなった（2019.7.20）。
 - ・立川市女性総合センター・アイムにおいて、高田智和准教授による共同企画講演会「中世多摩の文字づかい—板碑と経典文字からわかること—」を開催した（2020.1.18）。

5

見学・研修・視察等

研修対応：2件（文科省関係機関職員研修生実地研修・立川市教育委員会初任者研修）

視察対応：2件（文科省学術機関課学術研究調整官・連携推進専門官）

6

学会等の後援・共催

- ・計量国語学会第63回大会（2019.9.21）

主催者：計量国語学会、国立国語研究所

開催地：国立国語研究所

- ・岩淵悦太郎と国立国語研究所の白河言語調査（2019.9.29）
 - 主催者：専修大学文学部日本語学科
 - 後援者：白河市、白河市教育委員会、国立国語研究所
 - 開催地：白河市立図書館
- ・2019年度日本語教育能力検定試験（2019.10.27）
 - 主催者：日本国際教育支援協会
 - 後援者：文化庁、日本語教育学会、国立国語研究所、国際交流基金、日本語教育振興協会、国際日本語普及協会
 - 開催地：各試験会場
- ・東京外国語大学 大学院国際日本学研究院 講演会「リアルタイム MRI 動画による音声研究の可能性」（2019.11.8）
 - 主催者：東京外国語大学 大学院国際日本学研究院、東京外国語大学 語学研究所、国立国語研究所
 - 後援者：日本音声学会
 - 開催地：東京外国語大学語学研究所
- ・日本語ボランティアシンポジウム 2019 「増え続ける外国人～どうなる？ わたしたちの日本語学習支援～」（2019.12.7）
 - 主催者：名古屋国際センター、東海日本語ネットワーク
 - 後援者：愛知県、愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会、愛知県国際交流協会
 - 開催地：名古屋国際センター
- ・第18回全養協公開講座（2020.2.1）
 - 主催者：全国日本語教師養成協議会
 - 後援者：外国人雇用協議会、外国人留学生高等教育協会、国際協力機構、国際交流基金、国際日本語研修協会、国立国語研究所、大学日本語教員養成課程研究協議会、東京都専修学校各種学校協会、東京日本語ボランティア・ネットワーク、日本語学校ネットワーク、日本語教育学会
 - 協賛者：アスク出版、アルク、イカロス出版、スリーエーネットワーク、凡人社
 - 開催地：東京富士大学
- ・令和元年度 危機的な状況にある言語・方言サミット（奄美大会）・奄美大島（2020.2.22）
 - 主催者：文化庁、鹿児島県、奄美市、奄美市教育委員会、国立国語研究所、琉球大学、北海道アイヌ・先住民研究センター
 - 開催地：奄美市 AiAi ひろば、奄美文化センター

7 広報

（1）刊行物

『国語研 ことばの波止場』（NINJAL Research Digest）

国立国語研究所の研究活動及び研究成果に関する情報を研究者コミュニティだけでなく、大学生から一般市民の方までが読んで楽しめる研究情報誌。2019年度は第6号、第7号を発行した。

- ・Vol. 6 (2019.9)
 - ・特集：対照言語学と音声言語（「世界の言語を実験で比べてみる」「コーパスを通して話し言葉をながめる」）
 - ・周年記念企画
 - ・歴史的刊行物紹介・著書（近刊）紹介
- ・Vol. 7 (2020.3)
 - ・特集：国立国語研究所創立70周年 人間文化研究機構移管10周年記念事業
 - ・研究者紹介
 - ・刊行物紹介・著書（近刊）紹介

『国立国語研究所要覧 2019/2020』

国語研の特色や研究系・センターの活動、共同研究プロジェクト等の紹介冊子。

『国立国語研究所リーフレット』
『国立国語研究所英文リーフレット』

(2) Web 発信等

国立国語研究所ウェブサイト (<https://www.ninjal.ac.jp/>)

各種催し物、データベース等、国立国語研究所の最新情報からこれまでに蓄積された研究成果まで、幅広いコンテンツを紹介している。

国立国語研究所ポータルサイト『ことば研究館』 (<https://kotobaken.jp/>)

ことばに関する一問一答式の記事『ことばの疑問』や、各種催し物、メディア掲載情報など、一般の方を対象に、ことば・日本語に関する様々なコンテンツをわかりやすく紹介している。

国立国語研究所公式 Twitter 『こくごけん (公式)』 (<https://twitter.com/kokugoken>)

各種催し物、各種データベース、公式サイトの更新情報など、最新の情報を紹介している。

メールマガジン『国語研からの御案内』

シンポジウム、コロキウム等のイベント、データベース紹介、職員公募など国語研からお知らせしたい事項について登録者に発信している。原則として月2回発行。

「国語研ムービー」

国立国語研究所の研究を分かりやすく紹介した動画を制作し、Web配信(Youtube)やイベント時の上映をおこなっている。2019年度は以下の動画を制作・公開した。

- ・NINJAL フォーラム
 - ・パネルディスカッション「日本語の変化を探る」
 - ・講演「ことばの調査に見る現代日本語の変化」
 - ・講演「録音資料から知る、20世紀の日本語の変化」
 - ・講演「コーパスで見る現代語の確立過程—江戸・明治・大正—」
 - ・講演「平安時代語の話し手の言語感覚」
 - ・講演「日本語歴史コーパスと上代語」
- ・国立国語研究所創立70周年・人間文化研究機構移管10周年シンポジウム
 - ・開会挨拶、将来計画委員会による中間報告
 - ・ジョン・ホイットマン教授講演
 - ・ロバート・キャンベル館長講演
 - ・田中ゆかり教授講演
 - ・田中牧郎教授講演
 - ・新井紀子教授講演
 - ・パネルディスカッション(司会:前川喜久雄(国立国語研究所教授))
- ・NINJAL フォーラム
 - ・講演「私の日本学び～アラビア語母語話者の効果的日本語習得の多面的アプローチ～」
 - ・講演「障碍と言語習得:外国人視覚障害者からみた日本語学習の可能性と課題」
 - ・講演「なぜ、演劇で日本語教育?」
 - ・講演「『生活者としての外国人』の日本語学習—調査から見える多様な学び—」
 - ・講演「地域の住民として学び、協働し、貢献するということ—縦断調査の結果から」
 - ・パネルディスカッション「私の日本語の学び方」

(3) 一般向けイベント

NINJAL フォーラム

国立国語研究所が主体となって実施する研究や、他機関との連携研究による優れた成果を学術界だけでなく、広く一般の方々に知っていただくとともに、社会との連携を積極的に推進して社会貢献に資するという観点からフォーラムを開催している。

第14回「私の日本語の学び方」 [2019.11.30, 一橋大学 講堂]

- ・講演
 - ・アルモーメン・アブドーラ (東海大学)
「私の日本学び～アラビア語母語話者の効果的日本語習得の多面的アプローチ～」
 - ・モハメド・オマル・アブディン (学習院大学)
「障碍と言語習得：外国人視覚障害者からみた日本語学習の可能性と課題」
 - ・平田オリザ (劇作家/演出家/大阪大学)
「なぜ、演劇で日本語教育？」
 - ・福永由佳 (国立国語研究所)
「『生活者としての外国人』の日本語学習—調査から見える多様な学び—」
 - ・野山広 (国立国語研究所)
「地域の住民として学び、協働し、貢献するということ—縦断調査の結果から」
- ・パネルディスカッション [司会: 石黒圭 (国立国語研究所)]

オープンハウス 2019 [2019.7.20, 国立国語研究所]

所員がどのような研究をしているのかを専門外の方や学部・大学院の学生にわかりやすく伝えることを目的として、開催するイベント。国立国語研究所の創立70周年および人間文化研究機構移管10周年の記念事業の一環として、ニホンゴ探検と同日開催した。

プログラム

- ・ポスター発表 (全教員・特任研究員が研究活動を紹介)
- ・研究資料室中央資料庫見学ツアー (先着30名)

その他

- ・大学共同利用機関シンポジウム2019 (出展) [2019.10.20, 日本科学未来館]
- ・「ことば」展示 (「立川体験スタンプラリー」対象イベント) [2019.11.9, 国立国語研究所]

(4) 児童・生徒向けイベント

NINJAL 職業発見プログラム

中学生や高校生向けに、言語学や日本語あるいは日本語教育を研究することを通じて、学問のたのしさや素晴らしさを知つてもらうためのプログラム。

- ・2019年度受入校
 - ・愛知教育大学付属岡崎中学校 (2019.4.25)
 - ・愛知県立明和高等学校 (2019.7.24)
 - ・宮城県仙台第二高等学校 (2019.8.6)
 - ・Institut de Vic (2019.8.16)
 - ・宮城県宮城野高等学校 (2019.10.17)
 - ・神奈川県立座間総合高等学校 (2020.1.21)
 - ・宮城県仙台第一高等学校 (2019.7.11)
 - ・兵庫高校 (2019.7.31)
 - ・富山県立富山高校 (2019.8.8)
 - ・立川市立立川第五中学校 (2019.9.27)
 - ・早稲田大学系属早稲田実業学校中等部 (2019.10.23)
 - ・開智高等学校 (2020.2.20)

NINJAL ジュニアプログラム

主に小学生を対象に、子どもたちの身近にある題材を取り上げ、楽しみながら普段使つてゐる日本語について考えられるような、ワークショップや出前授業などを実施した。

- ・「語彙力がつく！辞書の活用」 [2019.5.30, 府中市立府中第二中学校]
対象: 中学校1年生5クラス、講師: 柏野和佳子 (音声言語研究領域准教授)
- ・「めざせ！辞書引きの達人」 [2019.9.19, 水俣市立水俣第一小学校]
対象: 小学校6年生3クラス、講師: 柏野和佳子 (音声言語研究領域准教授)
- ・「つくってあそんで辞書カルタ ことば博士になろう」 [2019.12.18, 横須賀市立明浜小学校ことばの教室]
対象: 小学校2-4年生、講師: 柏野和佳子 (音声言語研究領域准教授)

ニホンゴ探検 2019 —1 日研究員になろう— [2019.7.20, 国立国語研究所]

児童・生徒・一般を対象に研究所を公開し、「日本語」「ことば」の魅力と不思議に触れられるプログラムが人気のイベント。

プログラム

- ・全国ことばの旅
- ・辞書引きコーナー
- ・にほんごスタンプラリーキズ
- ・れきみんワークショップ
- ・ことばシアター

その他

- ・令和元年度子ども霞が関見学デー（出展）[2019.8.7-8, 文部科学省]

V

大学院教育と若手研究者育成

1 連携大学院

一橋大学大学院言語社会研究科・東京外国语大学大学院総合国際学研究科

2005年度から、一橋大学との連携大学院プログラムを実施している。この連携大学院（日本語教育学位取得プログラム）は、日本語教育学、日本語学、日本文化に関する専門的な知識を備えた研究者や日本語教育者を育成することを目指している。また、2016年度から東京外国语大学大学院総合国際学研究科との連携大学院を開始した。これらの連携大学院において、国立国語研究所は日本語学やコーパス言語学等の分野を担当している。

2 特別共同利用研究員制度

国立国語研究所では、国内外の大学の要請に応じて、日本語研究・日本語教育研究などの分野を専攻する大学院生を特別共同利用研究員として受け入れている。国立国語研究所の設備、文献等の利用や、国立国語研究所の研究者から研究指導を受けることができる制度である。

- ・2019年度受入：4名
 - ・パヴィア大学（イタリア）
 - ・ウィーン大学（オーストリア）
 - ・ロシア国立人文大学（ロシア）
 - ・ロンドン大学（イギリス）

3 NINJAL チュートリアル

日本語学・言語学・日本語教育研究の諸分野における最新の研究成果や研究方法を、第一線の教授陣によって、大学院生を中心とした若手研究者等に教授する講習会で、若手研究者の育成・サポートを目的としている。大学共同利用機関である国立国語研究所の特色を活かしたテーマを積極的に取り上げ、年数回、各地で実施している。2019年度は台湾において実施した。

受講対象：原則として、大学院学生レベル

- ・大学院学生（修士課程または博士課程に在籍する者）
 - ・修士課程または博士課程を修了後、原則として6年未満の者
 - ・当該諸分野を専門とした職務に従事している者
 - ・大学院進学を目指す学部学生等
- ・第33回 [2019.11.9-10, 台湾・東吳大学]
「日本の言語の多様性/日本語の自然会話とディスコース・ポライトネス理論」
講師：木部暢子（言語変異研究領域教授）、宇佐美まゆみ（日本語教育研究領域教授）

4 優れたポストドクターの登用

若手のポストドクターが、各種共同研究プロジェクトの運営を補助するとともにプロジェクトに関連する研究を自らおこなうことで、研究者としての自立性を向上させ、若手研究者のキャリアパスになる制度としてプロジェクト研究員（プロジェクトPDフェロー）制度を設け、公募により積極的に採用している（2019年度在籍者は10ページを参照）。

VI

教員の研究活動と成果

田窪 行則 (たくば ゆきのり) 所長

【学位】博士（文学）（京都大学, 2006）

【学歴】京都大学文学部言語学専攻卒業（1975），同修士課程修了（1977）

【職歴】大韓民国東国大学校慶州分校日語日文科招聘専任講師（国際交流基金教員拡充プログラムによる）（1980），神戸大学教養部専任講師（日本語日本事情担当）（1982），同助教授（1984），九州大学文学部助教授（言語学講座）（1991），同教授（1996），九州大学大学院人文科学研究院教授（大学院重点化に伴う措置）（2000），京都大学大学院文学研究科教授（2000），京都大学名誉教授（2016），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所所長（2017）

【専門領域】理論言語学，韓国語，琉球諸，言語ドキュメンテーション，危機言語

【所属学会】日本言語学会，日本語学会，日本語文法学会，日本音声学会，東アジア日本学会（韓国），アメリカ言語学会

【学会等の役員・委員】言語学会 会長，言語学会 評議員，日本国際教育支援協会 理事，東アジア日本学会 委員，日本語学会 評議員，言語資源協会 理事，Associate Editor of Asian Languages and Linguistics

【受賞歴】

1991：認知科学会論文賞（談話管理理論からみた日本語の指示詞）

【2019年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」：メンバー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学からみた日本語の音声と文法」：アドバイザリーボードメンバー

【2019年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究(B)「言語使用と非言語的認知操作における空間指示枠の相関についての実験的研究」, 17H02333: 研究代表者
- ・基盤研究(C)「条件文と位相空間の相関—条件文が非単調推論になるメカニズムの解明」, 17K02699: 研究分担者
- ・基盤研究(B)「比較言語学的方法による日本語・琉球諸語諸方言の祖語の再建および系統樹の構築」, 17H02332: 研究分担者
- ・基盤研究(B)「終助詞に関する類型論的研究—日本語と韓国語を中心に—」, 19K00618: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

田窪行則, 野田尚史

『データに基づく日本語のモダリティ研究』, くろしお出版, 2020.3.17.

《論文・ブックチャプター》

田窪行則

「従属節における係りの深さと受けの広さの相関について」, *KLS Selected Papers*, 1号, 220–225頁, 2019, DOI: 10.15084/00003011.

田窪行則

「統語論・意味論」, 中島秀之, 浅田稔, 橋田浩一, 松原仁, 山川宏, 粟原聰, 松尾豊 (編) 『人工知能 AI 事典』, 近代科学社, 314–315頁, 2019.12.21.

【講演・口頭発表】

Yukinori Takubo

“How to derive concessive meaning from (nin-)shift in time”, 招待講演, "NINJAL-UHM Linguistics Workshop on Syntax-Semantics Interface, Language: Acquisition, and Naturalistic Data Analysis, University of Hawai‘i at Mānoa (ハワイ・米国), 2019.10.12.

Natsuko Nakagawa, Masahiro Yamada, Kenan Celik, Nobuko Kibe, and Yukinori Takubo

“Archiving system of endangered languages in Japan: A preliminary report”, ポスター発表, International Conference on Language Technology for All, UNESCO (パリ・フランス), 2019.12.5.

【研究調査】

- ・空間指示枠に関するジェスチャー実験 (国立国語研究所), 2019.10.1.
- ・基盤研究 (C) 「条件文と位相空間の相関—条件文が非単調推論になるメカニズムの解明」 調査・打ち合わせ (ウイーン大学 (オーストリア) 他), 2020.3.4, 6, 7.

【一般向けの講演・セミナーなど】

田窪行則

「日本語時間名詞の構造について」, 東京外国语大学語学研究所講演会, 2020.1.30.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・NHK 放送研修センター理事
- ・Asian Languages and Linguistics 編集会議 (北京師範大学珠海分校), 2019.11.30–12.2.

窪園 晴夫 (くぼぞの はるお) 研究系 (理論・対照研究領域) 教授, 領域代表, 副所長

【学位】 Ph.D. (言語学) (エジンバラ大学, 1988)

【学歴】 大阪外国语大学外国语学部卒業 (1979), 名古屋大学大学院文学研究科博士課程前期修了 (1981), 名古屋大学大学院文学研究科博士課程後期中退 (1982), 英国・エジンバラ大学大学院博士課程修了 (1986)

【職歴】 南山大学外国语学部 助手 (1982), 同 講師 (1984), 同 助教授 (1990), 大阪外国语大学外国语学部 助教授 (1992), カリフォルニア大学サンタクルズ校 客員研究員 (フルブライト若手研究員) (1994-1995), マックスプランク心理言語学研究所 客員研究員 (1995), 神戸大学文学部 助教授 (1996), 同 教授 (2002), 人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 教授, 研究系長 (2010-2016), 同 研究系 (理論・対照研究領域) 教授, 領域代表, 副所長, 國際連携室長, IR 推進室長 (2016-), 東京大学客員教授 (2017-2018)

【専門領域】 言語学, 日本語学, 音声学, 音韻論, 危機方言

【所属学会】 日本言語学会, 日本音声学会, 日本音韻論学会, 日本語学会, 関西言語学会, 日本音響学会, Association for Laboratory Phonology

【学会等の役員・委員】 日本言語学会 顧問・評議員, 日本音声学会 理事・評議員, 日本学術会議 連携会員, 理化学研究所脳科学研究センター 客員研究員, 東京言語研究所 運営委員長, Oxford Studies in Phonology and Phonetics Series (OUP) Advisory Editor, International Congress of Phonetic Sciences (ICPhS) Permanent Council Member, Association for Laboratory Phonology Editorial Board Member

【受賞歴】

2018: 2017 年度早稲田大学ティーチングアワード総長賞

2017: 国立国語研究所第 15 回特別所長賞

2015: 国立国語研究所第 10 回所長賞

2013: 国立国語研究所第 6 回所長賞

2010: 国立国語研究所第 1 回所長賞

1997: 第 25 回金田一京助博士記念賞 (金田一賞)

1995: 市河三喜賞

1988: 名古屋大学英文学会 IVY Award

1985: イギリス政府 Overseas Research Student Award

【2019 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学的観点から見た日本語の音声と文法」: リーダー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」: メンバー
- ・新領域創出型共同研究プロジェクト「語用論的推論に関する比較認知神経科学的研究」: コーディネーター
- ・領域指定型共同研究プロジェクト「日本語から生成文法理論へ: 統語理論と言語獲得」: コーディネーター
- ・領域指定型共同研究プロジェクト「発達障害児の聞き取りの困難さの要因を探る実証研究」: コーディネーター

【2019 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・科研費基盤研究 (A) 「消滅危機方言のプロソディーに関する実証的・理論的研究と音声データベースの構築」, 19H00530: 研究代表者
- ・科研費挑戦的研究 (萌芽) 「促音 (重子音) に関する学際的・国際的共同研究のためのネットワーク形成」, 17K18502: 研究代表者
- ・科研費基盤研究 (S) 「乳児音声発達の起源に迫る: アジアの言語から見た発達メカニズムの解明」, 16H06319: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

窟蘭晴夫

『よくわかる言語学』, ミネルヴァ書房, 2019.10.31.

《論文・ブックチャプター》

Haruo Kubozono

“The phonological structure of Japanese mimetics and motherese”, Kimi Akita and Prashant Pardeshi (eds.) *Ideophones, Mimetics and Expressives*, pp. 35–56, John Benjamins, 2019.5.1, DOI: 10.1075/ill.16.03kub.

神谷祥之介, 竹安大, 窪蘭晴夫

「日本語母語話者による英語の語末曖昧母音の知覚」, 『音韻研究』, 22号, 35–42頁, 2019.8.31.

Haruo Kubozono and Ai Mizoguchi

“The phonetics and phonology of vocative intonation in Tokyo Japanese”, *Proceedings of the 19th International Congress of Phonetic Sciences*, pp. 497–501, 2019.8.

Jungyun Seo, Sahyang Kim, Haruo Kubozono, and Taehong Cho

“Interaction between rhythmic structure and preboundary lengthening in Japanese”, *Proceedings of the 19th International Congress of Phonetic Sciences*, pp. 637–641, 2019.8.

Jungyun Seo, Sahyang Kim, Haruo Kubozono, and Taehong Cho

“Preboundary lengthening in Japanese: To what extent does lexical pitch accent and moraic structure matter?”, *The Journal of the Acoustical Society of America*, 146 (3), pp. 1817–1823, 2019.9.

窟蘭晴夫

「語形成とアクセント」, 岸本秀樹(編)『レキシコンの現代理論とその応用』, 49–71頁, くろしお出版, 2019.11.27.

窟蘭晴夫

「モダリティとイントネーション」, 田窪行則, 野田尚史(編)『データにもとづく日本語のモダリティ研究』, 125–142頁, くろしお出版, 2020.3.17.

Haruo Kubozono

“Neutralizations in vowel length and word accent in Japanese”, 『神戸言語学論叢』, 12号, 69–79頁, 2020.3.

【講演・口頭発表】

窟蘭晴夫

「日本語のデフォルト韻律構造と単純語の短縮」, 招待講演, 関西音韻論研究会, 神戸大学, 2019.4.14.

窟蘭晴夫

「鹿児島方言のアクセント句拡張と型の転換について」, 国語研プロジェクト対照言語学プロジェクト研究成果発表会, 国立国語研究所, 2019.5.11.

窟蘭晴夫

「日本語におけるアクセントと母音長の中和について」, Kobe-NINJAL-Oxford 言語学コロキウム「日本語研究の最前線」, 神戸大学, 2019.7.21.

Jungyun Seo, Sahyang Kim, Haruo Kubozono, and Taehong Cho

“Interaction between rhythmic structure and preboundary lengthening in Japanese” 19th International Congress of Phonetic Sciences, メルボルン(オーストラリア), 2019.8.6.

Haruo Kubozono and Ai Mizoguchi

“The phonetics and phonology of vocative intonation in Tokyo Japanese”, メルボルン(オーストラリア), 2019.8.6.

Haruo Kubozono

“Word accent and vowel length in the postlexical phonology of Japanese”, JK27 Satellite Workshop, Seoul National University (ソウル・韓国), 2019.10.17.

窟園晴夫

「甑島方言のアクセント」, パネル, 日本言語学会第159回大会ワークショップ「甑島方言の音声と文法」, 名古屋学院大学, 2019.11.17.

Haruo Kubozono

“Interactions between lexical and postlexical tones: Evidence from Japanese”, 6th International Conference on Phonetics and Phonology, 立川総合研究棟, 2019.12.15.

【研究調査】

- 甑島方言のプロソディー調査(鹿児島県薩摩川内市上甑島), 2019.7.
- 東京方言のイントネーション調査(国立国語研究所), 2019.7.
- 甑島方言のプロソディー調査(鹿児島県薩摩川内市下甑島), 2019.10.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- 「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」研究発表会(主催: 国語研対照言語学プロジェクト音声研究班), 国立国語研究所, 2019.5.11.
- Learning Sounds of Asian Languages(主催: 理化学研究所脳神経科学研究センター, 共催: 国語研対照言語学プロジェクト), 東京大学駒場キャンパス, 2019.7.6.
- Kobe-NINJAL-Oxford 言語学コロキウム「日本語研究の最前線」(主催: 神戸大学人文学研究科, 共催: 国語研対照言語学プロジェクト), 神戸大学瀬戸会館, 2019.7.21.
- JK 27 Satellite Meeting and the 1st NINJAL-SNU Joint Workshop(主催: 国語研対照言語学プロジェクト, 共催: ソウル大学人文学部), ソウル大学(ソウル・韓国), 2019.10.17.
- 日本言語学会第159回大会ワークショップ「鹿児島県甑島方言の音声と文法」(主催: 国語研対照言語学プロジェクト), 名古屋学院大学, 2019.11.17.
- Pre-ICPP Workshop: Introduction to pitch accent systems around the world(主催: 国語研対照言語学プロジェクト, 共催: 日本音声学会), 国立国語研究所, 2019.12.12.
- The 6th International Conference on Phonetics and Phonology(主催: 国語研対照言語学プロジェクト, 共催: カリフォルニア大学サンタクララ校), 立川総合研究棟, 2019.12.13-15.
- Prosody and Grammar Festa 4(主催: 国語研対照言語学プロジェクト, 共催: 神戸大学人文学研究科), 神戸大学, 2020.2.15-16.

【一般向けの講演・セミナーなど】

窟園晴夫

「甑島方言の大切さ」, 薩摩川内市甑島方言講演会, 鹿児島県薩摩川内市立里小学校, 2019.7.13.

窟園晴夫

「甑島方言の大切さ」, 薩摩川内市甑島方言講演会, 鹿児島県薩摩川内市立中津小学校, 2019.7.13.

窟園晴夫

「教科横断的なことばの教育」, 第9回教師のためのことばワークショップ, 東京言語研究所, 2019.8.17.

窟園晴夫

「甑島方言の大切さ」, 薩摩川内市甑島方言講演会, 鹿児島県薩摩川内市甑島長浜小学校, 2019.10.11.

窟園晴夫

「甑島方言の大切さ」, 薩摩川内市甑島方言講演会, 鹿児島県薩摩川内市手打小学校, 2019.10.11.

窟園晴夫

「甑島方言の大切さ」, 薩摩川内市甑島方言講演会, 鹿児島県薩摩川内市鹿島小学校, 2019.10.12.

【その他の学術的・社会的活動】

- 取材記事: 「ASMR動画の快楽は、胎児が羊水で聞く音に近いから? 音声学の権威に聞く、オノマ

トペの面白さ」, Zing!, 2019.4.2.

・取材記事:「スマホ・AI, 言語を変える」, 朝日新聞, 2019.8.27.

・取材記事:「略語の法則無視した「りょ」 話し言葉化する書き言葉」, 朝日新聞デジタル, 2019.8.30.

・取材記事:「甑島の方言大ににして一手打小で講演」, 南日本新聞, 2019.11.3.

・取材記事:「日本語とオノマトペの深い関係—創造性に満ちた音の世界」, 望星, 2020.2.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

窪薙晴夫

「音韻論—音と文法・意味の接点—」, 東京言語研究所春期講座, 東京言語研究所, 2019.4.21.

《大学院非常勤講師(集中講義)》

・南山大学大学院(2019.8)

・早稲田大学大学院(2020.1)

《若手研究者の受入》

・国立国語研究所 PD フェロー: 1名

・日本学術振興会 PD: 1名

Prashant Vijay Pardeshi (プラシャント ウィジャイ パルデシ)

研究系（理論・対照研究領域）教授

【学位】博士（学術）（神戸大学, 2000）

【学歴】ジャワハルラル・ネル大学文学日本語専攻修士課程修了（1993），神戸大学大学院文化学研究科修了（2000）

【職歴】神戸大学文学部 講師（2005），同 人文学研究科 講師（2007），人間文化研究機構国立国語研究所言語対照研究系 准教授（2009），同 教授（2011），同 研究系長（2014–2016），同 研究系（理論・対照研究領域）教授，研究情報発信センター長（2016–2018.3）

【専門領域】言語学，言語類型論，対照言語学

【所属学会】日本言語学会，日本語文法学会，関西言語学会

【学会等の役員・委員】日本言語学会 評議員（2016.4–2018.3）

【受賞歴】

2019: 国立国語研究所第 29 回所長賞

2018: 国立国語研究所第 16 回特別所長賞

2016: 国立国語研究所第 12 回特別所長賞

2010: 国立国語研究所第 1 回所長賞

2007: 第 1 回『博報「ことばと文化・教育」研究助成』優秀賞: パルデシ・プラシャント, 桐生和幸, 石田英明, 小磯千尋(編) 2007. 『日本語-マラーティー語基本動詞用法事典』, 財団法人博報児童教育振興会 2005 年度第 1 回『博報「ことばと文化・教育」研究助成』の研究助成支援による「日・マラーティー語の対照研究・日本語教育用基本動詞用法事典の作成」プロジェクト報告書

2000: The Chatterjee-Ramanujan Prize for outstanding student contribution to *The Yearbook of South Asian Languages and Linguistics 2000*, Sage Publications. New Delhi, Thousand Oaks, & London. Paper title: "The Passive and Related Constructions in Marathi."

【2019 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」：リーダー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」：サブリーダー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」：サブリーダー

【2019 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究(B)「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究: 複文を中心に」15H03210: 研究代表者
- ・基盤研究(C)「マルチメディアが外国語学習者のイメージ・スキーマ形成に及ぼす影響とメカニズム」, 15K01076: 研究分担者
- ・基盤研究(A)「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」, 18H03575: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

Kimi Akita and Prashant Pardeshi (eds.)

Ideophones, Mimetics and Expressives, John Benjamins, 2019.5.6.

Prashant Pardeshi, Alistair Butler, Stephen Horn, Kei Yoshimoto, and Iku Nagasaki (eds.)

Linguistic Issues in Language Technology, Special Issue: Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing, CSLI Publications, 2019.8.

プラシャント・パルデシ, 粕山洋介, 砂川有里子, 今井新悟, 今村泰也(編)

『多義動詞分析の新展開と日本語教育への応用』, 開拓社, 2019.11.16.

《論文・ブックチャプター》

Kimi Akita and Prashant Pardeshi

“Introduction: Ideophones, mimetics, and expressives: Theoretical and typological perspectives.”, Kimi Akita and Prashant Pardeshi (eds.) *Ideophones, mimetics, and expressives*, pp. 1–9, John Benjamins, 2019.5.6, DOI: 10.1075/ill.16.01aki.

竹内孔一, Alastair Butler, 長崎郁, Prashant Pardeshi

「NPCMJ に対する述語項構造シソーラスの意味役割と概念フレームの付与」, 『研究報告自然言語処理 (NL)』, 2019-NL-241 卷 4 号, 1–4 頁, 2019.8.22.

Hideki Kishimoto and Prashant Pardeshi

“Parsed corpus as a source for testing generalizations in Japanese”, *Linguistic Issues in Language Technology, Special Issue: Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing*, 18 (2), pp. 1–24, 2019.8.

今村泰也, プラシャント・パルデシ

「ヒンディー語のとりたて表現」, 野田尚史 (編) 『日本語と世界の言語のとりたて表現』, くろしお出版, 165–181 頁, 2019.11.16.

プラシャント・パルデシ

「多義語の教育・学習の課題とその解決方法の一提案—「基本動詞ハンドブック」作成・公開の取り組みー」, プラシャント・パルデシ, 粕山洋介, 砂川有里子, 今井新悟, 今村泰也 (編) 『多義動詞分析の新展開と日本語教育への応用』, 開拓社, 2–13 頁, 2019.11.16.

Prashant Pardeshi

“Benefaction & Malefaction: Two-in-One—A subtle interplay of “Volitionality” & “Transitivity” in Indic Languages.”, 于一楽, 江口清子, 木戸康人, 真野美穂 (編) 『統語構造と語彙の多角的研究—岸本秀樹教授還暦記念論文集—』, 開拓社, 105–117 頁, 2020.3.26.

《コーパス・データベース類》

統語・意味コーパスの開発と言語研究プロジェクト

「NINJAL Parsed Corpus of Modern Japanese (NPCMJ)」 (更新: 10,000 文のツリーを追加), <http://nlpmj.ninjal.ac.jp/>, 2019.4.2.

プラシャント・パルデシ

「日本語基本動詞ハンドブック」, <https://verbhandbook.ninjal.ac.jp/>, 2020.3.

プラシャント・パルデシ

「日本語文型バンク」 (データ追加), <http://bunkeibank.ninjal.ac.jp/>, 2020.3.

【講演・口頭発表】

Prashant Pardeshi, Kei Yoshimoto, Susanne Miyata, Koichi Takeuchi, and Hideki Kishimoto

“Development of a parsed corpus and its applications to linguistic research and education”, シンポジウムパネル, 言語科学会第 21 回国際年次大会 (JSLS 2019), 東北大学, 2019.7.7.

Prashant Pardeshi and Kei Yoshimoto

“Introduction”, シンポジウムパネル, 言語科学会第 21 回国際年次大会 (JSLS 2019), 東北大学, 2019.7.7.

Hideki Kishimoto and Prashant Pardeshi

“Developing a Japanese Syntax textbook as part of NPCMJ project.”, シンポジウムパネル, 言語科学会第 21 回国際年次大会 (JSLS 2019), 東北大学, 2019.7.7.

プラシャント・パルデシ, 吉本啓, 窪田悠介, 峯島宏次, 三好伸芳, 井戸美里, 大久保弥

「高度文法情報付きコーパスとその日本語研究への応用」, シンポジウムパネル, 関西言語学会第 44 回大会, 関西大学, 2019.7.14.

プラシャント・パルデシ, 吉本啓

「イントロダクション」, シンポジウムパネル, 関西言語学会第 44 回大会シンポジウム「高度文法情報

付きコーパスとその日本語研究への応用」，関西大学，2019.7.14.

Peter Hook, Prashant Pardeshi, and S. Rajendran

“Marathi’s Prenominal Noun-modifying Constructions: Dravidian influence on their functional scope.”, シンポジウムパネル, SOUTH ASIAN LANGUAGES ANALYSIS ROUNDTABLE(SALA-35), INALCO-PARIS (フランス), 2019.10.29–31.

Pardeshi Prashant

“On Mapping Noun Modifying Constructions”, ワークショップパネル, The Second International Workshop on Noun Modifying Constructions and Nominalizations, Deccan College Post Graduate and Research Institute (Pune・インド), 2019.12.19.

Pardeshi Prashant

“Rethinking noun complement and relative clauses in Marathi”, ワークショップパネル, The Second International Workshop on Noun Modifying Constructions and Nominalizations, Deccan College Post Graduate and Research Institute (Pune・インド), 2019.12.20.

プラシャント・パルデシ

「名詞修飾表現の地理類型論：日本語と世界諸言語の対照から見えてくるもの」, シンポジウムパネル, Prosody and Grammar Festa 4, 神戸大学, 2020.2.16.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・統語・意味解析コーパス (NPCMJ) チュートリアル (主催: 統語・意味コーパスの開発と言語研究プロジェクト), 弘前大学創立 50 周年記念会館, 2019.5.11.
- ・「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」2019 年度第 1 回研究発表会 (主催: 統語・意味コーパスの開発と言語研究プロジェクト), 弘前大学創立 50 周年記念会館, 2019.5.12.
- ・「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」2019 年度第 2 回研究発表会 (主催: 統語・意味コーパスの開発と言語研究プロジェクト), お茶の水女子大学, 2019.6.15.
- ・JSLS 2019 workshop: Development of a parsed corpus and its applications to linguistic research and education, 東北大学, 2019.7.7.
- ・関西言語学会第 44 回大会シンポジウム「高度文法情報付きコーパスとその日本語研究への応用」, 関西大学, 2019.7.14.
- ・統語・意味解析コーパス (NPCMJ) チュートリアル (主催: 統語・意味コーパスの開発と言語研究プロジェクト), 晶川インターナシティ, 2020.2.1.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・国立国語研究所日本学講習会の企画・実施:
中国 (北京師範大学, 2019.11.2), インド (Symbiosis International University, 2019.12.21–22), ミャンマー (ヤンゴン外国語大学, 2020.2.9, マンダレー外国語大学, 2020.2.12), カンボジア (国際日本文化園, 2020.2.29).
- ・国立国語研究所日本語教師セミナー (海外) の企画・実施:
ウズベキスタン (サマルカンド国立外国語大学, 2019.9.17–18, ウズベキスタン日本センター, 2019.9.21–22).

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

プラシャント・パルデシ

「NPCMJ コーパスの理念と概要、および初心者向けインターフェース」, 統語・意味解析コーパス (NPCMJ) チュートリアル, 弘前大学創立 50 周年記念会館, 2019.5.11.

プラシャント・パルデシ

「世界諸言語の文字からみた日本語の文字体系」, 国立国語研究所日本語教師セミナー (海外), サマルカンド国立外国語大学 (サマルカンド・ウズベキスタン), 2019.9.17.

プラシャント・パルデシ

「言語類型論・対照研究の知見を援用した日本語教育に向けて」, 国立国語研究所日本語教師セミナー(海外), サマルカンド国立外国語大学(サマルカンド・ウズベキスタン), 2019.9.17.

プラシャント・パルデシ

「日本語学習に役立つウェブ教材—「基本動詞ハンドブック」と「日本語文型バンク」—」, 国立国語研究所日本語教師セミナー(海外), サマルカンド国立外国語大学(サマルカンド・ウズベキスタン), 2019.9.18.

プラシャント・パルデシ

「日本語学習に役立つウェブ教材—NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB)—」, 国立国語研究所日本語教師セミナー(海外), サマルカンド国立外国語大学(サマルカンド・ウズベキスタン), 2019.9.18.

プラシャント・パルデシ

「世界諸言語の文字からみた日本語の文字体系」, 国立国語研究所日本語教師セミナー(海外), ウズベキスタン・日本センター(Tashkent・ウズベキスタン), 2019.9.21.

プラシャント・パルデシ

「言語類型論・対照研究の知見を援用した日本語教育に向けて」, 国立国語研究所日本語教師セミナー(海外), ウズベキスタン・日本センター(Tashkent・ウズベキスタン), 2019.9.21.

プラシャント・パルデシ

「日本語学習に役立つウェブ教材—「基本動詞ハンドブック」と「日本語文型バンク」—」, 国立国語研究所日本語教師セミナー(海外), ウズベキスタン・日本センター(Tashkent・ウズベキスタン), 2019.9.22.

プラシャント・パルデシ

「日本語学習に役立つウェブ教材—NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB)—」, 国立国語研究所日本語教師セミナー(海外), ウズベキスタン・日本センター(Tashkent・ウズベキスタン), 2019.9.22.

Prashant PARDESHI

「日本語は特殊な言語、普通の言語？：世界の言語から見た日本語」, 国立国語研究所日本語学講習会, 北京師範大学(北京・中国), 2019.11.2.

Prashant PARDESHI

「「寒い」と「冷たい」はどう違うか：温度表現の類型論」, 国立国語研究所日本語学講習会, 北京師範大学(北京・中国), 2019.11.2.

Prashant PARDESHI

「Aが座って, Bを書いて, CにBを送った：動詞の分類について」, 国立国語研究所日本語学講習会, 北京師範大学(北京・中国), 2019.11.2.

Prashant PARDESHI

「なぐった, なぐられた, なぐらせた：ボイス(voice)表現の体系」, 国立国語研究所日本語学講習会, 北京師範大学(北京・中国), 2019.11.2.

プラシャント・パルデシ

「世界諸言語の文字からみた日本語の文字体系」, 国立国語研究所日本語学講習会, Symbiosis Institute of Foreign and Indian Languages (Pune・インド), 2019.12.21.

プラシャント・パルデシ

「NPCMJ コーパスの理念と概要、および初心者向けインターフェース」, 統語・意味解析コーパス(NPCMJ)チュートリアル, 品川インターナシティ, 2020.2.1.

プラシャント・パルデシ

「言語類型論・対照研究の知見を援用した日本語教育に向けて」, 国立国語研究所日本語学講習会, ヤンゴン外国語大学(ヤンゴン・ミャンマー), 2020.2.9.

プラシャント・パルデシ

「日本語学習に役立つウェブ教材」, 国立国語研究所日本語学講習会, ヤンゴン外国語大学(ヤンゴン・

ミャンマー), 2020.2.9.

プラシャント・パルデシ

「言語類型論・対照研究の知見を援用した日本語教育に向けて」, 国立国語研究所日本語学講習会, マンダレー外国語大学 (マンダレー・ミャンマー), 2020.2.12.

プラシャント・パルデシ

「日本語学習に役立つウェブ教材」, 国立国語研究所日本語学講習会, マンダレー外国語大学 (マンダレー・ミャンマー), 2020.2.12.

プラシャント・パルデシ

「世界諸言語の文字からみた日本語の文字体系」, 国立国語研究所日本語学講習会, 国際日本文化学園 (Province・カンボジア), 2020.2.29.

プラシャント・パルデシ

「言語類型論・対照研究の知見を援用した日本語教育に向けて」, 国立国語研究所日本語学講習会, 国際日本文化学園 (Province・カンボジア), 2020.2.29.

《若手研究者の受入》

- ・外国人特別研究員: Dr. Marija HMELJAK (University of Ljubljana, Slovenia), 2018.11.27–2019.11.26.
- ・外来研究員: Ms. SOLOMKINA Natalia (ロシア国立人文大学 言語学部言語類型論学料 博士課程), 2020.1–2020.3.

松本 曜 (まつもと よう) 研究系 (理論・対照研究領域) 教授

【学位】 Ph D (言語学) (米国スタンフォード大学, 1992)

【学歴】 上智大学外国語学部英語学科卒業 (1983), 上智大学外国語学研究科博士課程前期課程修了 (1985), スタンフォード大学言語学科博士課程修了 (1992)

【職歴】 東京基督教大学神学部 専任講師 (1992), 明治学院大学文学部 専任講師 (1995), 明治学院大学文学部 助教授 (1996), 明治学院大学文学部 教授 (2002), 神戸大学文学部 教授 (2004), 神戸大学人文学研究科 教授 (2007), 国立国語研究所理論・対照研究領域教授 (2017)

【専門領域】 意味論, 認知言語学

【所属学会】 日本言語学会, 日本英語学会, 日本認知言語学会, 関西言語学会, アメリカ言語学会, 国際認知言語学会

【学会等の役員・委員】 日本言語学会 評議員, 関西言語学会 運営委員, 国際認知言語学会 理事

【2019年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学的観点から見た日本語の音声と文法」: サブリーダー・班長 (動詞の意味構造班)

【2019年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (B) 「空間移動と状態変化の表現の並行性に関する統一的通言語的研究」, 19H01264: 研究代表者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

松本曜

「認知意味論」, 辻幸夫, 楠見孝, 菅井三実, 野村益寛, 堀江薰, 吉村公宏 (編) 『認知言語学大事典』, 朝倉書店, 152–161 頁, 2019.10.15.

松本曜

「認知言語学と語用論」, 加藤重之, 澤田淳 (編) 『はじめての語用論: 基礎から応用まで』, 研究社出版, 126–141 頁, 2020.3.16.

Yasuyo Ichikawa (Yoshida) and Yo Matsumoto

“Real-time and Apparent-time Changes in Semantics: Japanese Classifiers Tested across Generations and after a Quarter Century,” *ICU Working Papers in Linguistics*, 10, pp. 37–44, 2020.3.19.

Yo Matsumoto and Yasuyo Ichikawa (Yoshida)

“Japanese classifiers and the pragmatic reduction of lexical meanings,” 『神戸言語学論叢』, 12, pp. 92–103, 2020.3.26.

【講演・口頭発表】

Yo Matsumoto

“A closer look into the fictive motion of vision: A crosslinguistic study,” 基調講演, NAMED 2019 (Neglected Aspect of Motion Events Description), ENS (Ecole Normale Supérieur) (パリ・フランス), 2019.5.24.

Yuko Yoshinari, Miho Mano, Kiyoko Eguchi, Anna Bordilovskaya, and Yo Matsumoto

“Cross-linguistic Varieties in Coding Multiply-specified Trajectory Motion Events,” ポスター発表, 日本認知言語学会第 20 回全国大会, 関西学院大学, 2019.8.5.

Kiyoko Eguchi, Miho Mano, Anna Bordilovskaya, Yuko Yoshinari, and Yo Matsumoto

“Cross-linguistic tendency of Path encoding: A production experiment of 14 different Paths in English, Hungarian, Italian, Japanese, and Russian,” ポスター発表, The 15th International Cognitive Linguistics Conference, 関西学院大学, 2019.8.7.

Yo Matsumoto, Anna Bordilovskaya, Kiyoko Eguchi, Kazuhiro Kawachi, Miho Mano, Takahiro Morita,

Naonori Nagaya, Kiyoko Takahashi, and Yuko Yoshinari

“A crosslinguistic experimental study of fourteen different paths: Toward a scale-based typology of motion event descriptions,” ALT 2019, University of Pavia (イタリア), 2019.9.4.

松本曜, 吉成祐子, 長屋尚典, 他

「複数局面経路の言語表示類型: 日本語と他言語の比較から」, Prosody & Grammar Festa 4, 神戸大学, 2020.2.16.

松本曜

「諸言語における移動経路の表現: 共通性と差異」, 招待講演, 『外国語と日本語との対照言語学的研究』第30回研究会, 東京外国語大学, 2020.2.29.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- The 15th International Cognitive Linguistics Conference (主催: 国際認知言語学会, 共催: 日本認知言語学会, 国立国語研究所対照言語学プロジェクト, ほか), 関西学院大学, 2019.8.6–11.
- Lectures on the Japanese language from cognitive/typological perspectives (主催: 国立国語研究所対照言語学プロジェクト, 共催: 国際認知言語学会), 関西学院大学, 2019.8.6.
- 移動と状態変化の意味論研究会 (主催: 国立国語研究所対照言語学プロジェクト), 東京大学, 2020.2.6.
- 移動と状態変化の意味論研究会 (主催: 国立国語研究所対照言語学プロジェクト), 神戸大学, 2020.2.17.
- フレーム意味論研究会 (主催: 国立国語研究所対照言語学プロジェクト), 国立国語研究所, 2020.3.27.

【一般向けの講演・セミナーなど】

松本曜

「移動事象の言語化: 実験調査による英語と日本語との対照」, 言語系学会連合・日本英語学会共催 2019年度公開シンポジウム「ことばは現実をどう捉えるか—ことばの対照研究のおもしろさ—」, 関西学院大学, 2019.11.9.

【その他の学術的・社会的活動】

- 第15回国際認知言語学会組織委員長

【大学院教育・若手研究者育成】

《大学院非常勤講師》

- 関西大学大学院

《博士論文審査委員》

- 神戸大学大学院: 副査, 2019.7.
- オックスフォード大学大学院: 副査, 2019.10.

《若手研究者の受入》

- 日本学術振興会特別研究員: 1名

窪田 悠介 (くぼた ゆうすけ) 研究系 (理論・対照研究領域) 准教授

【学位】 Ph.D. (Linguistics) (オハイオ州立大学, 2010)

【学歴】 東京大学教養学部超域文化科学科言語情報科学分科卒業 (2002), 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻修士課程修了 (2004)

【職歴】 日本学術振興会特別研究員 (PD) (2010–2013), 日本学術振興会特別研究員 (海外特別研究員) (2013–2015), 筑波大学人文社会系 助教 (2014–2019), 人間文化研究機構国立国語研究所 (理論・対照領域) 准教授 (2019)

【専門領域】 理論言語学 (統語論, 意味論)

【所属学会】 日本言語学会, 日本英語学会, 日本語文法学会, 言語処理学会, Linguistic Society of America

【学会等の役員・委員】 言語処理学会大会プログラム委員

【受賞歴】

2016: 日本言語学会第 151 回大会発表賞

【2019 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」: 班長 (名詞修飾班)
- ・基幹型共同研究プロジェクト「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」: メンバー
- ・フィージビリティスタディ「構成的意味論情報を付与した多言語資源の構築」: リーダー

【2019 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (C) 「汎用的な範疇文法ツリーバンクの構築」, 18K00523: 研究代表者
- ・基盤研究 (B) 「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究: 複文を中心に」, 15H03210: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Yusuke Kubota, Koji Mineshima, Robert Levine, and Daisuke Bekki

“Underspecification and interpretive parallelism in Dependent Type Semantics”, *Proceedings of the IWCS 2019 Workshop on Computing Semantics with Types, Frames and Related Structures*, pp. 1–9, 2019.5.

Yusuke Kubota and Ai Kubota

“Probing the nature of an island constraint with a parsed corpus: A case study on the Coordinate Structure Constraint in Japanese”, *Linguistic Issues in Language Technology*, 18 (3), pp. 1–24, 2019.7.

Yusuke Kubota and Robert Levine

“Modal auxiliaries and negation: A type-logical account”, *Proceedings of WoLLIC 2019*, pp. 415–432, 2019.7.

谷中瞳, 峯島宏次, 山田彬堯, 山口悠, 窪田悠介, Lasha Abzianidze, Johan Bos

「多言語統語・意味情報コーパス Parallel Meaning Bank 日本語版の構築」, 『言語処理学会第 26 回年次大会予稿集』, 1145–1148 頁, 2020.3.

【講演・口頭発表】

Yusuke Kubota

“Treebanks and grammatical research: A case study on the Coordinate Structure Constraint in Japanese”, 招待講演, 2019 Joint Conference of Linguistic Societies in Korea and the 26th Joint Workshop on Linguistics and Language Processing (JWLLP-26), Kyung Hee University (ソウル・韓国), 2019.5.11.

Yusuke Kubota, Koji Mineshima, Robert Levine, and Daisuke Bekki

“Underspecification and interpretive parallelism in Dependent Type Semantics”, IWCS 2019 Workshop on Computing Semantics with Types, Frames and Related Structures, イエーテボリ (スウェー

デン), 2019.5.24.

窪田悠介

「カテゴリ文法・意味計算・文処理」, ワークショップパネル, ワークショップ「計算心理言語学—概要と展望—」日本言語学会第158回大会, 一橋大学, 2019.6.23.

Yusuke Kubota and Robert Levine

“Modal auxiliaries and negation: A type-logical account”, WoLLIC 2019, Utrecht University (ユトレヒト・オランダ), 2019.7.5.

窪田悠介, 峯島宏次

「前提投射の統語コーパスでの検索」, 関西言語学会第44回大会シンポジウム「高度文法情報付きコーパスとその日本語研究への応用」, 関西大学, 2019.7.14.

Yusuke Kubota

“Connectionism is coming back, but Old AI is also coming back (and why all this matters for linguistics)”, ワークショップパネル, NINJAL-UHM Linguistics Workshop on Syntax-Semantics Interface, Language Acquisition, and Naturalistic Data Analysis, University of Hawai‘i at Mānoa (ハワイ・米国), 2019.10.13.

窪田悠介, 阿久澤弘陽

“A semantic analysis of embedded tense in finite control in Japanese”, Japanese and Korean Linguistics 27, Sogang University (ソウル・韓国), 2019.10.19.

山田彬堯, 窪田悠介

「「曖昧」な潜在意味概念の明示的な分析にむけて: ノ・コトの間のバリエーションについての統計的アプローチ」, 日本言語学会第159回大会, 名古屋学院大学, 2019.11.16.

窪田悠介

「理論言語学に未来はあるか?」, シンポジウムパネル, 日本言語学会第159回大会シンポジウム「AIによって大きく揺さぶられる言語理論—意味論の観点から—」, 名古屋学院大学, 2019.11.17.

窪田悠介

「計算言語学と言語類型論」, Prosody and Grammar Festa 4, 神戸大学, 2020.2.15.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- Workshop on modality and related matters (主催: 国立国語研究所), 国立国語研究所, 2019.9.19.
- 計算言語学の現在 (主催: 国立国語研究所), お茶の水女子大学, 2019.12.6.

木部暢子

(きべ のぶこ) 研究系(言語変異研究領域)教授, 領域代表, 副所長

【学位】博士(文学)(九州大学, 1998)

【学歴】九州大学文学部文学科卒業(1978), 九州大学大学院文学研究科修士課程修了(1980)

【職歴】純真女子短期大学助手(1980), 同講師(1981), 福岡女学院短期大学講師(1985), 鹿児島大学法文学部助教授(1988), 同教授(1999), 同副学部長(2004), 同学部長(2006), 人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系教授, 副所長(2010), 同研究系長(2010-2016), 同研究系(言語変異研究領域)教授, 領域代表(2016)

【専門領域】日本語学, 方言学, 音声学, 音韻論

【所属学会】日本語学会, 日本言語学会, 日本音声学会, 日本方言研究会, 西日本国語国文学会

【学会等の役員・委員】日本学術会議会員, 日本語学会評議員, 日本音声学会会計監査, 文化庁国語課平成31年度危機的な状況にある言語・方言に関する研究協議会委員, 国文学研究資料館古典籍共同研究事業センター日本語歴史的典籍ネットワーク委員会委員, 独立行政法人大学改革支援・学位授与機構国立大学教育研究評議会専門委員, 東京大学大学院人文社会系研究科外部審査委員

【受賞歴】

2013: 国立国語研究所第8回所長賞

1990: 新村出財団研究助成

【2019年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」: リーダー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」: メンバー
- ・広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」国語研ユニット「方言の記録と継承による地域文化の再構築」: リーダー
- ・「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」国語研ユニット「消滅危機言語・方言の展示を通した最先端研究の可視化・高度化」: リーダー
- ・文理融合研究プロジェクト調査研究(FS)「日本列島人の進化とその言語文化の起源」: 共同研究員

【2019年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・科研費基盤研究(A)「日本語諸方言コーパスの構築とコーパスを使った方言研究の開拓」, 16H01933: 研究代表者
- ・科研費基盤研究(S)「言語系統樹を用いた琉球語の比較・歴史言語学的研究」, 17H06115: 研究分担者
- ・科研費基盤研究(A)「日本語諸方言のプロソディーとプロソディー体系の類型」, 26244022: 研究分担者
- ・科研費基盤研究(B)「比較言語学的方法による日本語・琉球諸語諸方言の祖語の再建および系統樹の構築」, 17H02332: 研究分担者
- ・科研費新学術領域研究(研究領域提案型)「日本語と関連言語の比較解析によるヤポネシア人の歴史の解明」総括班, 18H05505: 研究分担者
- ・科研費新学術領域研究(研究領域提案型)「日本語と関連言語の比較解析によるヤポネシア人の歴史の解明」言語班, 18H05510: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

木部暢子(編)

『明解方言学辞典』, 三省堂, 2019.4.20.

青井隼人, 木部暢子, 児倉徳和

『フィールドワーク事前研修報告書』, アジア・アフリカ言語文化研究所, 2020.3.

青井隼人, 木部暢子

『青森県むつ市方言調査報告書』, 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所, 2020.3.

小池淳一, 丹羽謙治, 桑原季雄, 木部暢子, 添田仁, 中静透, 日高真吾, 渡辺浩一 (著) 麻生玲子 (編)
『青森県むつ市方言調査報告書』, 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所, 2020.3.

《論文・ブックチャプター》

木部暢子

「インフォームドコンセント」, 木部暢子 (編) 『明解方言学辞典』, 13 頁, 三省堂, 2019.4.20.

木部暢子

「親族名称」, 木部暢子 (編) 『明解方言学辞典』, 86–87 頁, 三省堂, 2019.4.20.

木部暢子

「フェイスシート」, 木部暢子 (編) 『明解方言学辞典』, 126–127 頁, 三省堂, 2019.4.20.

木部暢子

「方言のアクセント」, 木部暢子 (編) 『明解方言学辞典』, 136–137 頁, 三省堂, 2019.4.20.

木部暢子

「四つ仮名」, 木部暢子 (編) 『明解方言学辞典』, 152 頁, 三省堂, 2019.4.20.

木部暢子

「諸方言コーパスに見るモダリティ形式のバリエーション—推量表現の地域差」, 野田尚史, 田窪行則 (編) 『データに基づく日本語のモダリティ研究』, 41–61 頁, くろしお出版, 2020.3.22.

木部暢子

「九州方言のゴトアルについて—COJADS のデータより—」, 『坂口至教授退職記念 日本語論集』, 50–62 頁, ホープ印刷株式会社, 2020.3.

《コーパス・データベース類》

木部暢子, 佐藤久美子, 中澤光平, 上村健太郎, 青山和輝, 吉川佳見, 黃海萍

「日本語諸方言コーパス (COJADS)」, <https://chunagon.ninjal.ac.jp/cojads/search>, 2020.3.31.

木部暢子, セリック・ケナン

「危機言語 DB」, <http://kikigengo.ninjal.ac.jp/>, 2020.3.31.

《その他の出版物・記事》

木部暢子

「大阪弁は「消滅危機言語」という意外な事実」, 講談社現代ビジネス, 2019.11.1.

【講演・口頭発表】

中澤光平, 大槻知世, 上村健太郎, CARLINO Salvatore, 佐藤久美子, 木部暢子

「日本語諸方言における助詞との縮約形の地域差: COJADS に基づく分析から」, 日本方言研究会第 108 回研究発表会, 大阪大学, 2019.5.17.

大槻知世, 上村健太郎, カルリノ・サルバトーレ, 佐藤久美子, 中澤光平, 木部暢子

「コーパスを使った方言研究の開拓—『日本語諸方言コーパス (COJADS) モニター版』を使って—」, ポスター発表, 日本語学会 2019 年度春季大会, 甲南大学, 2019.5.19.

木部暢子

“Reporting on endangered languages and dialects in Japan: Their recording, conservation, and transmission”, 招待講演, 21st Biennial Conference of Japanese Studies Association of Australia, Monash University (メルボルン・オーストラリア), 2019.7.2.

木部暢子

「COJADS に見るモダリティ形式のバリエーション」, 方言コーパス研究発表会 2019 「方言コーパスを活用した方言研究の開拓」, 国立国語研究所, 2019.9.6.

Nobuko Kibe, Hidenori Kiku, and Rintaro Kiku

“A Report on Language Revitalization on Yoron Island”, The International Year of Indigenous Languages 2019: Perspectives Conference, Purdue University Fort Wayne (米国), 2019.10.31.

Hanae Koiso, Masayuki Asahara, Salvatore Carlino, Ken'ya Nishikawa, Kazuki Aoyama, Yuichi Ishimoto,

Aya Wakasa, Michiko Watanabe, Yoshimi Yoshikawa, Nobuko Kibe, and Kikuo Maekawa

“Demonstration of Corpus Concordance Systems: Chunagon and Kotonoha”, The 3rd International Symposium on Linguistic Patterns in Spontaneous Speech (LPSS 2019), Academia Sinica (台北・台湾), 2019.11.21.

木部暢子

「『日本語学大辞典』が拓く世界」, 招待講演, 『日本語学大辞典』刊行1周年記念公開講演会, 東京大学, 2019.11.23.

Natsuko Nakagawa, Masahiro Yamada, Kenan Celik, Nobuko Kibe, and Yukinori Takubo

“Archiving system of endangered languages in Japan: A preliminary report”, ポスター発表, International Conference on Language Technology for All, UNESCO (フランス), 2019.12.5.

木部暢子

“Corpus based study of Japanese dialects; Regional differences in case marking system”, 新学術領域・ヤポネシアゲノム・言語班 2019年度研究集会, 千葉大学, 2020.1.12.

【研究調査】

- ・方言調査(宮崎県椎葉村(尾手納・向山日当)), 2019.4.
- ・動画制作のための調査(東京都八丈島), 2019.6, 2019.7, 2019.10, 2019.11.
- ・方言調査(宮崎県椎葉村(仲塔・梅尾)), 2019.7.
- ・方言調査(青森県八戸市), 2019.8.
- ・沖永良部方言調査(鹿児島県大島郡和泊町), 2020.2.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・令和元年度第1回研究発表会「格・情報構造(琉球諸語)」(主催: 危機言語・方言プロジェクト), 国立国語研究所, 2019.6.16.
- ・令和元年度コーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—くだけた表現—」(主催: 危機言語・方言プロジェクト, 日常会話コーパスプロジェクト, 通時コーパスプロジェクト, 学習者のコミュニケーションプロジェクト, 共催: 科研費基盤研究(A)「日本語諸方言コーパスの構築とコーパスを使った方言研究の開拓」, 科研費基盤研究(A)「昭和・平成書き言葉コーパスによる近現代日本語の実証的研究」, 科研費基盤研究(A)「海外連携による日本語学習者コーパスの構築および言語習得と教育への応用研究」, 科研費基盤研究(B)「コーパス言語学的手法に基づく会話音声の韻律特徴の体系化」), 国立国語研究所, 2019.9.5.
- ・方言コーパス研究発表会 2019「方言コーパスを活用した方言研究の開拓」(主催: 危機言語・方言プロジェクト, 共催: 科研費基盤研究(A)「日本語諸方言コーパスの構築とコーパスを使った方言研究の開拓」), 国立国語研究所, 2019.9.6.
- ・八戸市合同調査(主催: 広領域連携型共同研究「地域社会」), 八戸市鮫生活館, 2019.8.26-29.
- ・手話言語と音声言語に関する民博フェスタ 2019/SSLL2019(主催: 国立民族学博物館, 共催: 危機言語・方言プロジェクト), 歴史民族学博物館, 2019.12.7.

【一般向けの講演・セミナーなど】

青井隼人, 籠宮隆之, 木部暢子, 中川奈津子

「モバイルミュージアム「日本の危機言語・危機方言」展」, モバイルミュージアム「日本の危機言語・危機方言」展 講演会, 東京外国語大学 AA 研, 2020.1.28.

木部暢子

「研究機関の社会に魅せる研究力を測るための客観的な指標の策定は可能か, 可能であれば, どうあるべきで, どのようなものか」, 国立国語研究所 IR シンポジウム「社会に魅せる研究力を測る—論文では見えてこない社会に貢献する研究を評価する指標—」, 国立国語研究所, 2020.2.13.

木部暢子

「危機的な状況にある言語・方言の現状報告(八丈・奄美・琉球)」, 危機的な状況にある言語・方言サミッ

ト（奄美大島），奄美文化センター，2020.2.23.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ムートン社 HANDBOOKS OF JAPANESE LANGUAGE AND LINGUISTICS Series, *Handbook of Japanese* 編集委員
- ・三省堂『明解方言学辞典』編集委員
- ・博報堂教育財団 第14回「日本研究フェローシップ」受入担当教員

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

木部暢子

「東北方言の音韻・音声の特徴とその書き起こし方法について」，フィールドワーク事前ワークショップ，国立国語研究所 2019.8.19.

木部暢子

「日本の言語の多様性」，NINJAL チュートリアル，東吳大学（台北・台湾），2019.11.9.

《若手研究者の受入》

- ・日本学術振興会特別研究員：3人

《職業発見プログラム》

- ・仙台第一高校，2019.7.

朝日 祥之 (あさひ よしゆき) 研究系 (言語変異研究領域) 准教授

【学位】博士 (文学) (大阪大学, 2004)

【学歴】関西外国語大学外国語学部英米語学科卒業 (1997), エセックス大学大学院言語・言語学研究科社会言語学専攻修士課程修了 (1998), 大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻博士課程後期課程修了 (2004)

【職歴】独立行政法人国立国語研究所情報資料部門第二領域 研究員 (2004), 同 研究開発部門言語生活グループ 研究員 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 准教授 (2009), 同 研究系 (言語変異研究領域) 准教授 (2016)

【専門領域】社会言語学, 言語学, 日本語学

【所属学会】International Congress for Dialectologists and Geolinguists, METHODS, Foundation for Endangered Languages, 関西言語学会, 日本言語政策学会, 日本方言研究会, 日本語学会, 社会言語科学会, マイグレーション研究会

【学会等の役員・委員】変異理論研究会 世話人, NWAU-AP Steering committee member, *Asia-Pacific Language Variation* Editorial board member, *International Journal of the Sociology of Language* Editorial board member, 北海道方言研究会 副会長

【受賞歴】

2013: 国立国語研究所第6回所長賞

2010: 第9回徳川宗賢優秀賞 (社会言語科学会)

2010: 国立国語研究所第1回所長賞

【2019年度に参画した共同研究】

- ・ネットワーク型日本関連在外資料調査研究・活用事業「北米における日本関連在外資料調査研究・活用—言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築—」: 共同研究代表者
- ・領域指定型共同研究プロジェクト「議会会議録を活用したスタイル変異研究」: 共同研究員

【2019年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (C) 「北海道北見市常呂町岐阜方言の尊敬語に見られる言語変容の研究」, 19K00639: 研究代表者

【研究業績】

《著書・編書》

国立歴史民俗博物館 (共編著)

『企画展示「ハワイ：日系移民の150年と憧れの島のなりたち」』, 国立歴史民俗博物館, 2019.10.29.

《論文・ブックチャプター》

朝日祥之

「北見市常呂町岐阜における敬語法について」, 『北海道方言研究会会報』, 96号, 10-13頁, 2020.2.10.

朝日祥之, 尾崎喜光

「北海道における方言使用の現状と実時間変化 その6」, 『北海道方言研究会会報』, 96号, 20-28頁, 2020.2.10.

朝日祥之

「日本人による海外への移動に関する歴史記述を精緻化させる—日系関係在外資料を活用して—」, 『異文化へのあこがれ：国際海洋都市平戸とマカオを舞台に在外資料が変える日本研究』, 37-48頁, 2020.3.31.

《コーパス・データベース類》

朝日祥之, 宮崎早季

「移民資料館アワー」, <https://rnavi.ndl.go.jp/kensei/entry/ve701-88.php>, 2020.3.11.

【講演・口頭発表】

Yoshiyuki Asahi

“Picture brides and their language in Hawai‘i: Role of Japanese, Ryukyuan and Hawaiian in their discourse”, International Pragmatics Association Conference 2019, The Hong Kong Polytechnic University (香港), 2019.6.10.

Yoshiyuki Asahi

“Role of stylistic variation in a city: evidence from a real-time study in Hokkaido Japan”, Symposium on sociolinguistic variation in signed and spoken languages of the Asia-Pacific region, University of Central Lancashire (Preston・英國), 2019.7.12.

朝日祥之

「北海道方言に見られる経年変化—道内4都市における調査結果から—」, ポスター発表, 国立国語研究所オープンハウス 2019, 国立国語研究所, 2019.7.20.

朝日祥之

「なぜあの市長は名古屋弁で話すのか—政治家の言語使用に見るスタイル変異—」, 第165回変異理論研究会, 関西大学彦根セミナーハウス, 2019.7.27.

Yoshiyuki Asahi

“Long-term results of dialect contact in Hokkaido: Koineization, standardization and stylistic variation”, 基調講演, ULS17, Tianyu Gloria Grand Hotel Xian (西安・中国), 2019.8.24.

Yoshiyuki Asahi, Eveline Eveline Wandl-Vogt, and Jose Luis Preza Diaz

“Implementation of a Nisei Japanese American Biography and Open Innovation in Science: A Collaborative Approach.”, BD2019, Cherno More (Varna・ブルガリア), 2019.9.5.

朝日祥之

「名古屋市長の演説にみるスタイル変異: 市議会議録を活用して」, 国立国語研究所共同研究プロジェクト「議会議録を活用した日本語のスタイル変異研究」研究発表会, 国立国語研究所, 2019.9.12.

朝日祥之

「ハワイの日系移民史における日本語の役割」, 特別講演, 東京外国語大学特別講演会, 東京外国語大学, 2019.9.24.

Yoshiyuki Asahi

“Proposal of loanword paraphrase in Japan: NINJAL’s attempt and its effect”, ワークショップパネル, Second workshop of the Language Strategies, Nanjing University (Nanjing・中国), 2019.11.27.

Yoshiyuki Asahi

“Language policy on Japanese honorifics NINJAL survey on honorifics and National Language Council’s activities”, 基調講演, 4th Forum of National Language Strategies, Nanjing University (Nanjing・中国), 2019.11.28.

朝日祥之

「ハワイの日本語形成における社会ネットワークと宗教の役割」, シンポジウムパネル, 移住と伝播—アジア太平洋地域におけるキリスト教関連資料、およびその活用, 京都大学, 2020.1.11.

【研究調査】

- ・資料調査 (アメリカ合衆国 ハワイ州), 2019.6, 2020.2.
- ・資料調査 (北海道 北見市), 2020.1.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・ターコフを知る、ターコフから学ぶ: ペルシア語と日本語の待遇表現に見られる面白い関係性 (主催: 東京外国語大学), 東京外国語大学, 2020.2.8.

【一般向けの講演・セミナーなど】

朝日祥之

「比嘉太郎に関する資料から見えてくること」, 比嘉太郎ふるさとシンポジウム, 北中城村中央公民館, 2019.10.6.

朝日祥之, 原山浩介

「ギャラリートーク」, 企画展示「ハワイ: 日系移民の 150 年と憧れの島のなりたち」, 国立歴史民俗博物館, 2019.10.17.

朝日祥之, 原山浩介

「ギャラリートーク」, 企画展示「ハワイ: 日系移民の 150 年と憧れの島のなりたち」, 国立歴史民俗博物館, 2019.12.15.

朝日祥之, 原山浩介

「ギャラリートーク」, 企画展示「ハワイ: 日系移民の 150 年と憧れの島のなりたち」, 国立歴史民俗博物館, 2019.12.22.

朝日祥之

「劉セイラ氏の講演を受けてのコメント」, 2019 年度連続講演会 身近な世界から学問へ: 第 4 回 海を越えて活躍する声優—2 か国で、声で演じるということ—, 東京外国語大学, 2020.1.23.

朝日祥之

「コンピュータが読む写真」, 第 38 回人文機構シンポジウム 「～コンピュータがひもとく歴史の世界～デジタル・ヒューマニティーズってなに？」, 日比谷図書文化館日比谷コンベンションホール, 2020.1.25.

【その他の学術的・社会的活動】

- *Language Variation and Change* 査読委員

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

朝日祥之

「戦時中のアメリカで刊行された語学書」, NINJAL セミナー, 啓明大学校(大邱・韓国), 2019.5.9.

《連携大学院》

- 東京外国語大学大学院国際日本学研究科 准教授

井上 文子 (いのうえ ふみこ) 研究系 (言語変異研究領域) 准教授

【学位】 修士 (文学) (大阪大学, 1992)

【学歴】 高知女子大学文学部国文学科卒業 (1984), 大阪大学大学院文学研究科博士前期課程日本学専攻修了 (1992), 大阪大学大学院文学研究科博士後期課程日本学専攻中退 (1994)

【職歴】 大阪大学文学部 助手 (1994), 国立国語研究所情報資料研究部第二研究室 研究員 (1995), 同 主任研究官 (1997), 独立行政法人国立国語研究所情報資料部門第一領域 主任研究員 (2001), 同 情報資料部門資料整備グループ グループ長 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 准教授 (2009), 同 研究系 (言語変異研究領域) 准教授 (2016)

【専門領域】 方言学, 社会言語学

【所属学会】 日本方言研究会, 日本語学会, 社会言語科学会, 日本語文法学会

【受賞歴】

1993: 第 11 回新村出記念財団研究助成

【2019 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」: メンバー

【2019 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・研究成果公開促進費 (データベース) 「日本の危機言語・方言データベース」, 19HP8005: 作成代表者
- ・基盤研究 (C) 「地域的多様性の教材としての参加型方言データベースの構築」, 17K02801: 研究代表者
- ・基盤研究 (A) 「日本語諸方言コーパスの構築とコーパスを使った方言研究の開拓」, 16H01933: 研究分担者

【研究業績】

《コーパス・データベース類》

井上文子

「方言ロールプレイ会話データベース」(更新), <http://hougen-db.sakuraweb.com/>, 2019.5.20.

【研究調査】

- ・会話収録 (フェリス女学院大学), 2019.6.7.
- ・会話収録 (大東文化大学), 2019.7.15.
- ・会話収録 (國學院大學), 2019.10.10, 2019.10.15, 2019.10.17.
- ・会話収録 (立命館大学), 2019.10.28.
- ・会話収録 (岡山県), 2019.12.16.

熊谷 康雄 (くまがい やすお) 研究系 (言語変異研究領域) 准教授

【学位】修士 (文学) (埼玉大学, 1984)

【学歴】埼玉大学教養学部教養学科社会システムコース卒業 (1976), 埼玉大学大学院文化科学研究所修士課程言語文化論専攻修了 (1984)

【職歴】国立国語研究所言語行動研究部第二研究室 研究員 (1988), 同 情報資料研究部第二研究室 研究員 (1989), 同 主任研究官 (1993), 同 室長 (1998), 同 情報資料部門 部門長 (2001), 国立国語研究所時空間変異研究系 准教授 (2009), 同 研究系 (言語変異研究領域) 准教授 (2016)

【専門領域】言語学, 日本語学

【所属学会】日本語学会, 日本言語学会, 計量国語学会, 社会言語科学会, 日本行動計量学会, 言語処理学会, 情報処理学会, 電子情報通信学会, American Dialect Society, International Society for Dialectology and Geolinguistics

【2019年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」: サブリーダー

【2019年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (A) 「日本諸方言コーパスの構築とコーパスを使った方言研究の開拓」, 16H01933: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Yasuo Kumagai

“Contact, network, people, and geographical space: Perspectives on the S&K network method and the Linguistic Atlas of Japan Database”, *Dialectologia* (Special issue), 8, pp. 117–144, 2019.12.

《総説・解説など》

熊谷康雄

「柴田武」, 『日本語学』, 39巻1号, 98–101頁, 2020.3.10.

《コーパス・データベース類》

熊谷康雄

「『日本言語地図』データベース」(追加25項目), <https://www.lajdb.org>, 2020.3.31.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・記事執筆: 「「言語と人間」の探求に惹かれて」, 『国語研 ことばの波止場』, 7, 2020.3.

山田 真寛 (やまだ まさひろ) 研究系 (言語変異研究領域) 准教授

【学位】 Ph.D. (言語学) (デラウェア大学, 2010)

【学歴】 国際基督教大学教養学部語学科卒業 (2005), 米国デラウェア大学大学院言語学・認知科学研究科博士課程修了 (2010)

【職歴】 日本学術振興会特別研究員 (PD) ／京都大学 (2010), 広島大学教育学研究科言語と認知の脳科学プロジェクトセンター ポスドク研究員 (2013), 京都大学学際融合教育研究推進センターアジア研究教育ユニット 特定助教 (2014), 立命館大学衣笠総合研究機構 専門研究員 (2016), 人間文化研究機構国立国語研究所 IR 推進室 特任助教 (2016), 同 研究系 (言語変異研究領域) 准教授 (2018)

【専門領域】 言語学, 形式意味論, 言語復興

【受賞歴】

2019: 日本音声学会学術研究奨励賞 (小川晋史, 山田真寛, 林由華)

2014: 京都大学学際研究着想コンテスト奨励賞

【2019年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」: メンバー
- ・平成31年度博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業連携活動「大学との連携による参加型展示手法の開発」: 連携活動実施メンバー
- ・フィージビリティースタディ「フィールドデータのオープンサイエンス化」: 研究代表者

【2019年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・若手研究 (B) 「琉球諸語の記述と復興研究のためのプラットフォーム基盤構築研究」, 16K16824: 研究代表者
- ・基盤研究(B)「言語使用と非言語的認知検査における空間指示枠の相関についての実験的研究」17H02333: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

山田真寛, 森澤ケン

『与那国の人とことば 2019』, 言語復興の港, 2020.2.

《論文・ブックチャプター》

山田真寛

「消滅危機言語」, 木部暢子 (編) 『明解方言学辞典』, 三省堂 2019.4.

山田真寛

「再活性化」, 木部暢子 (編) 『明解方言学辞典』, 三省堂, 2019.4.

山田真寛

「意味論」, 木部暢子 (編) 『明解方言学辞典』, 三省堂, 2019.4.

山田真寛

「語用論」, 木部暢子 (編) 『明解方言学辞典』, 三省堂, 2019.4.

Masahiro Yamada

“A Formal Description of Dunan (Yonaguni-Ryukyuan) Honorifics”, *ICU Working Papers in Linguistics*, 7, pp. 63–78, 2019.6.

《コーパス・データベース類》

琉球朝日放送, 国立国語研究所

「くとうばどう宝 消滅危機言語を守る人」, <https://www.qab.co.jp/sp/languages-in-danger/>, 2019.12.26.

《その他の出版物・記事》

山田真寛

「沖永良部語の世代間継承の測定」, 『和泊町歴史民俗資料館掲示資料』, 2019.7.

山田真寛

「親の世代からの言語復興」, 言語復興の港ウェブサイト: <https://plrminato.wixsite.com/webminato/iyil2019oyakara01>, 2019.11.20.

山田真寛

「『いま何もしなければ』なくなってしまう琉球諸語の絵本を出版」, クラウドファンディング READYFOR ウェブサイト: <https://readyfor.jp/projects/minato>, 2019.11.27.

山田真寛

「与那国語絵本『ディラブディ』の紹介」, クラウドファンディング READYFOR ウェブサイト: <https://readyfor.jp/projects/minato/announcements/117899>, 2019.11.30.

山田真寛

「『ディラブディ』作話・朗読のえつこ先生」, クラウドファンディング READYFOR ウェブサイト: <https://readyfor.jp/projects/minato/announcements/118089>, 2019.12.7.

山田真寛

「与那国語歌『ディラブディ』」, クラウドファンディング READYFOR ウェブサイト: <https://readyfor.jp/projects/minato/announcements/118491>, 2019.12.16.

山田真寛

「絵本出版プロジェクトを大きな文脈で」, クラウドファンディング READYFOR ウェブサイト: <https://readyfor.jp/projects/minato/announcements/122336>, 2020.1.27.

山田真寛

「しまむにプロジェクト発表会のお誘い(と絵本を大きな文脈での続き)」, クラウドファンディング READYFOR ウェブサイト: <https://readyfor.jp/projects/minato/announcements/122430>, 2020.1.28.

山田真寛

「ことばを忘れることは。」, クラウドファンディング READYFOR ウェブサイト: <https://readyfor.jp/projects/minato/announcements/122734>, 2020.1.31.

【講演・口頭発表】

Masahiro Yamada

“A Formal Description of Dunan (Yonaguni-Ryukyuan) Honorifics”, 招待講演, NINJAL-UHM Linguistics Workshop on Syntax-Semantics Interface, Language Acquisition, and Naturalistic Data Analysis, University of Hawai‘i at Mānoa (ハワイ・米国), 2019.10.13.

Masahiro Yamada, Takuya Maeda, and Yurika Maeda

“Language Revitalization at Home”, シンポジウムパネル, International Year of Indigenous Languages 2019: Perspectives Conference 2019, Purdue University Fort Wayne (Fort Wayne・米国), 2019.10.31.

Natsuko Nakagawa, Celik Kenan, and Masahiro Yamada

“Archiving System of Endangered Languages in Japan: A Preliminary Report”, ポスター発表, Language Technology for All, UNESCO Headquarter (パリ・フランス), 2019.12.6.

【研究調査】

- ・沖永良部語フィールドワーク (鹿児島県大島郡知名町, 和泊町), 2019.5.9–26, 6.28–7.14, 8.18–9.2.
- ・ワークショップ (沖縄県八重山郡竹富町), 2019.8.15–17.
- ・与那国語フィールドワーク (沖縄県八重山郡与那国町), 2019.12.19–23.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・全国ことばの旅 (ニホンゴ探検内企画), 国立国語研究所, 2019.7.10.

- ・ことばと絵のワークショップ・夏のテードウンムニ教室（主催：竹富小中学校 PTA, 危機言語プロジェクト, 共催：言語復興の港），竹富公民館，2019.8.16.
- ・方言版異言語脱出ゲーム「紡がれるもの～おじいとおばあと僕の物語～」（主催：国立国語研究所, 共催：一般社団法人異言語 lab.），成城大学，2020.2.9.
- ・わどうまいしまむにプロジェクト 2019 年度発表会（主催：危機言語プロジェクト, 共催：和泊町, 言語復興の港），国立国語研究所，2020.2.16.

【一般向けの講演・セミナーなど】

山田真寛

「しまむにを次の世代に残すために」，知名町中央公民館講座「しらゆり大学」，知名町中央公民館，2019.5.23.

青井 隼人 (あおい はやと) 研究系 (言語変異研究領域) 特任助教

【学位】博士（学術）（東京外国语大学, 2016）

【学歴】東京外国语大学外国语学部日本課程卒業（2009），東京外国语大学大学院総合国際学研究科博士前期課程修了（2011），東京外国语大学大学院総合国際学研究科博士後期課程単位取得満期退学（2014）

【歴歴】日本学術振興会特別研究員（DC）（2011–2014），日本学術振興会特別研究員（PD）（2014–2017），東京外国语大学アジアアフリカ言語文化研究所 特任研究員（2017），人間文化研究機構国立国語研究所 言語変異研究領域 特任助教（2017）

【専門領域】言語音声学，音韻論，琉球語学

【所属学会】日本言語学会，日本音声学会，日本音韻論学会，方言研究会

【受賞歴】

2019：国立国語研究所第19回所長賞（若手研究者奨励賞）

2019：日本言語学会第157回大会（2018年秋季）大会発表賞：「北琉球沖縄語伊江方言の破裂音」

2018：国立国語研究所第17回所長賞（若手研究者奨励賞）

2018：2018年度仲宗根政善記念研究奨励賞（沖縄言語研究センター）

2014：日本言語学会2014年度論文賞：「宮古多良間方言における『中舌母音』の音声的解釈」

2012：日本音声学会第26回全国大会優秀発表賞：「宮古多良間方言の三型アクセント体系」

2012：日本言語学会第144回大会（2012年春季）大会発表賞：「宮古における『中舌母音』の音韻解釈」

【2019年度に参画した共同研究】

・基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」：メンバー

・基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」：メンバー

【研究業績】

《著書・編書》

Hayato Aoi

Proceedings of International Symposium Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia—Poster Session—, アジア・アフリカ言語文化研究所, 2019.12.

青井隼人, 木部暢子, 児倉徳和

『フィールドワーク事前研修報告書』, アジア・アフリカ言語文化研究所, 2020.3.

青井隼人, 木部暢子

『青森県むつ市方言調査報告書』, 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所, 2020.3.

《論文・ブックチャプター》

青井隼人

「音響分析」, 木部暢子(編)『明解方言学辞典』, 三省堂, 22頁, 2019.4.20.

青井隼人

「音声学」, 木部暢子(編)『明解方言学辞典』, 三省堂, 23頁, 2019.4.20.

青井隼人

「音声記号」, 木部暢子(編)『明解方言学辞典』, 三省堂, 24頁, 2019.4.20.

青井隼人

「子音」, 木部暢子(編)『明解方言学辞典』, 三省堂, 74–75頁, 2019.4.20.

青井隼人

「中舌母音」, 木部暢子(編)『明解方言学辞典』, 三省堂, 102頁, 2019.4.20.

青井隼人

「調音器官」, 木部暢子(編)『明解方言学辞典』, 三省堂, 103頁, 2019.4.20.

青井隼人

「半母音」，木部暢子（編）『明解方言学辞典』，三省堂，119頁，2019.4.20.

青井隼人

「母音」，木部暢子（編）『明解方言学辞典』，三省堂，130–131頁，2019.4.20.

青井隼人

「モーラ（拍）」，木部暢子（編）『明解方言学辞典』，三省堂，144頁，2019.4.20.

青井隼人

「南琉球宮古多良間方言の欠性的低音調」，『音韻研究』，22号，3–10頁，2019.8.5.

【講演・口頭発表】

Hayato Aoi

“How can nomaintive and genitive be distinguished in the Tarama variety of Miyako Ryukyuan?: Syntactic, semantic, and prosodic cues”，21st Biennial Conference of Japanese Studies Association of Australia, Monash University (オーストラリア)，2019.7.2.

青井隼人

「琉球列島の珍しい音声を記録する：フィールド音声学の実際」，ポスター発表，国立国語研究所オープントーナメント2019，国立国語研究所，2019.7.20.

Hayato Aoi and Toshihide Nakayama

“Actions for revitalizing the endangered languages and dialects in Japan”，シンポジウムパネル，The International Year of Indigenous Languages 2019: Perspectives Conference, Purdue University (Fort Wayne・米国)，2019.10.31.

青井隼人

「珍しい音を求めてフィールドへ：琉球列島をめぐる言語音声学的調査」，ポスター発表，「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」2019年度ポスター展示，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，2019.11.23–24.

Hayato Aoi

“The Bantu-Like Tonal Characteristics of Tarama (Miyako, Ryukyuan)”，ポスター発表，NINJAL ICPP 2019 (6th International Conference on Phonetics and Phonology)，立川総合研究棟，2019.12.24.

【研究調査】

- ・南琉球宮古語多良間方言に関する調査（沖縄県宮古郡多良間村），2019.6.3–7.
- ・八戸市方言に関する調査（青森県八戸市），2019.8.26–29.
- ・北琉球沖縄語伊江方言に関する調査（沖縄県国頭郡伊江村），2020.2.17–21.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・フィールド言語学ワークショップテクニカルワークショップ「フィールドノート（2）：デジタルツールの活用」（主催：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築（LingDy3）」），東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，2019.5.29.
- ・モバイル・ミュージアム「日本の危機言語・危機方言」（主催：人間文化研究機構，国立国語研究所「消滅危機言語・方言の展示を通した最先端研究の可視化・高度化」プロジェクト，共催：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築（LingDy3）」），東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，2020.1.14–2.13.
- ・フィールド言語学ワークショップテクニカルワークショップ「フィールド言語学のためのデータマネジメント」（主催：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築（LingDy3）」），東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，2020.1.15.
- ・日本の消えて失くなってしまいそうな言葉たち（主催：人間文化研究機構，国立国語研究所「消滅危機言語・

方言の展示を通した最先端研究の可視化・高度化」プロジェクト, 共催: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2020.1.28.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

青井隼人

「問い合わせの立て方」, 岡山大学, 2019.4.16.

青井隼人

「プレゼン・クリニック」, 九州大学, 2019.6.18.

青井隼人

「Praat ワークショップ」, 九州大学, 2019.6.19.

青井隼人

「論文の読み方」, 岡山大学, 2019.6.25.

青井隼人

「伝わるポスター発表にするために心がけたいこと」, フィールド言語学ワークショップ テクニカルワークショップ「伝わるポスタープレゼン」, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2019.7.10.

青井隼人

「言語(音声)学的調査の方法論」, 八戸方言調査事前研修, 国立国語研究所, 2019.8.19.

青井隼人

「プレゼンセミナー」, リテラシー入門 II, 沖縄国際大学, 2019.10.23.

青井隼人

「論文の書き方」, 岡山大学, 2019.11.13.

青井隼人

「楽しくてタメになる授業のつくり方」, 学術スキルワークショップ, 九州大学, 2019.12.25.

青井隼人

「アクティブな学びを促す講読のススメ」, 学術スキルワークショップ, 九州大学, 2019.12.25.

青井隼人

「プレゼンテーションを成功に導く3つの鍵」, 学術スキルワークショップ, 九州大学, 2019.12.27.

青井隼人

「アカデミック・プレゼンテーション」, 岡山大学, 2020.2.5.

麻生 玲子 (あそう れいこ) 研究系 (言語変異研究領域) 特任助教

【学位】博士 (学術) (東京外国語大学, 2020)

【学歴】東京外国語大学外国語学部学部東アジア課程モンゴル語専攻卒業 (2004), 東京大学大学院人文社会系研究科修士課程修了 (2010), 東京外国語大学大学院国際学研究科博士後期課程 単位取得退学 (2017)

【職歴】日本学術振興会特別研究員 (DC1) (2010–2013), 人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター研究員 (特任助教)・国立国語研究所研究系 (言語変異研究領域) 特任助教 (2017)

【専門領域】言語学, 記述言語学, 琉球諸語, 八重山語, 波照間方言

【所属学会】日本言語学会

【受賞歴】

2019: 第 16 回 ドゥナンスンカニ大会・作詞の部: 最優秀賞

2018: 国立国語研究所第 16 回数券所長賞

2017: 日本言語学会論文賞

【2019 年度に参画した共同研究】

- ・広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」: コーディネーター, メンバー
- ・広領域連携型基幹研究プロジェクト国語研ユニット「方言の記録と継承による地域文化の再構築」: コーディネーター, メンバー, 「椎葉村方言辞書編纂プロジェクト」プロジェクトマネージャー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」: メンバー
- ・東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究「アルタイ型言語に関する類型的研究 (2)」: メンバー

【2019 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・若手研究「日本の消滅危機言語を対象とした大量の言語資料収集・蓄積方法に関する基礎研究」18K12390: 研究代表者
- ・新学術領域研究 (研究領域提案型) 公募研究「南琉球八重山諸語における伝播過程の解明と言語系統樹の構築」, 19H05353: 研究代表者

【研究業績】

《著書・編書》

葉山茂, 麻生玲子 (編)

『追尋新地域文化研究的可能性』, 人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」, 2020.3.31.

《論文・ブックチャプター》

Lee, Seunghun J. and Aso, Reiko

“The *Long-C Constraint and Word-Initial Aspirates in Hateruma Yaeyama, a Southern Ryukyuan Language”, 『教育研究』, 62 号, 2020.3.31.

【講演・口頭発表】

麻生玲子, 中澤光平, セリック・ケナン, 中川奈津子

「複数の辞書データに基づく八重山諸方言の系統樹作成の試み」, 招待講演, くにうみミーティング, 淡路島夢舞台, 2019.9.25.

Natsuko Nakagawa, Kohei Nakazawa, Reiko Aso, and Kenan Celik

“Linguistic phylogeny of Yaeyama Ryukyuan: preliminary results based on a small sample”, 招待講演, Meeting of the linguistic group, B02, Yaponesian genome project, grant-in-aid, MEXT, 千葉大学, 2020.1.13.

【研究調査】

- ・椎葉村方言の調査（宮崎県東臼杵郡椎葉村），2019.4.22–23.
- ・地域の方言意識に関する調査（鹿児島県大島郡宇検村），2019.5.28–31.
- ・新城方言および川平方言の調査（沖縄県石垣市），2019.6.9–12, 2019.10.2–3.
- ・資料収集方法に関する実験（鹿児島県大島郡宇検村久志小中学校），2019.7.16.
- ・椎葉村方言の調査（宮崎県東臼杵郡椎葉村），2019.7.22–23.
- ・波照間方言の資料収集（沖縄県那覇市），2019.10.1.
- ・与那国方言の調査（沖縄県八重山郡与那国町），2020.2.29–3.1.
- ・波照間方言の調査（沖縄県八重山郡竹富町波照間），2020.3.3–5.

【一般向けの講演・セミナーなど】

麻生玲子

「方言研究は宝さがし」，なりきり！方言研究者プロジェクト，鹿児島県大島郡宇検村久志小中学校，
2019.7.16.

籠宮 隆之 (かごみや たかゆき) 研究系 (言語変異研究領域) 特任助教

【学位】博士 (学術) (神戸大学, 2008)

【学歴】東京都立大学人文学部卒業 (1995), 東京都立大学大学院人文科学研究科修士課程修了 (1999), 神戸大学大学院総合人間科学研究科博士後期課程修了 (2008)

【職歴】国立国語研究所 非常勤職員 (1999), 国立国語研究所 特別奨励研究員 (2002), 独立行政法人産業技術総合研究所 特別研究員 (2008), 人間文化研究機構国立国語研究所研究情報資料センター 特任助教 (2013), 千葉大学フロンティア医工学センター 特任助教 (2016), 人間文化研究機構国立国語研究所言語変異研究領域 特任助教 (2017)

【専門領域】音声科学

【所属学会】日本音声学会, 日本音響学会, 社会言語科学会, International Speech Communication Association, 聴覚医学会

【学会等の役員・委員】日本音声学会 評議員・庶務委員・企画委員・100周年記念事業委員, 社会言語科学会 広報委員, 日本音響学会 編集委員

【2019年度に参画した共同研究】

- ・「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」国語研ユニット「消滅危機言語・方言の展示を通した最先端研究の可視化・高度化」: メンバー
- ・コーパス基礎研究「コーパスアノテーションの拡張・統合・自動化に関する基礎研究」: メンバー
- ・「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」連携活動採択事業「展示効果の高度化とその検証」: 研究分担者

【2019年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (C) 「音響的クラスタリングによる骨伝導音の明瞭性改善に関する研究」, 15K00245: 研究分担者
- ・基盤研究 (B) 「リアルタイム MRI および WAVE データによる調音音声学の精緻化」, 17H02339: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「発達障害における音声プロソディの解析的研究」, 18K00552: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

横山晶子, 篠宮隆之

「言語実験に基づく言語衰退の実態の解明」, 『方言の研究』, 5巻, 353–376 頁, 2019.9.30.

Takayuki Kagomiya

“Statistical studies on Japanese sonority by using loudness calibration scores”, *Proceedings of Oriental COCOSDA 2019*, pp. 1–5, 2019.10.26.

《展示など》

- ・モバイルミュージアム「方言の世界」「日本海のことばと文化」(歴博メディアルームリニューアル特別展示), 国立歴史民俗博物館, 2019.3.14–6.8.
- ・モバイルミュージアム「アイヌ語とアイヌの民話」「日本海のことばと文化」「日本語の歴史と方言」(れきはく出開帳), 成田市文化芸術センター, 2019.7.18–8.18.
- ・モバイルミュージアム「与論のことばと文化」(与論町生涯学習フェア・文化祭), 与論町砂美地来館, 2019.11.23.
- ・モバイルミュージアム「与論のことばと文化」(モバイルミュージアム「与論のことばと文化」展), 与論民俗村, 2019.11.24–2020.1.4.
- ・モバイルミュージアム「方言の世界」「沖縄のことばと文化」「アイヌ語とアイヌの民話」「危機に瀕した言語」「与論のことばと文化」(モバイルミュージアム「日本の危機言語・危機方言」展), 東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2020.1.14–2.13.

【研究調査】

- ・聴覚補助器による非言語・パラ言語情報伝達に関する聴取実験 (国立国語研究所), 2019.4–2020.3.
- ・リアルタイム調音運動計測 (国立国語研究所), 2019.4–2020.3.
- ・工内耳装用者による非言語・パラ言語情報伝達に関する聴取実験 (国際医療福祉大学), 2019.4–2020.3.
- ・八丈方言に関する映像作品収録のための調査収集 (東京都八丈町), 2019.4–2020.3.

【一般向けの講演・セミナーなど】

籠宮隆之

「聴覚補助器による非言語・パラ言語情報の伝達性能を評価する尺度の構築」, 国立国語研究所オープンハウス 2019, 国立国語研究所, 2019.7.20.

青井隼人, 篠宮隆之, 木部暢子, 中川奈津子

「日本の消えてなくなってしまいそうな言葉たち」, モバイルミュージアム「日本の危機言語・危機方言」展 講演会, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2020.1.28.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・『日本音響学会誌』編集委員
- ・*Acoustical Science and Technology* Editorial board member

【大学院教育・若手研究者育成】

《大学院非常勤講師》

- ・名古屋外国語大学大学院国際コミュニケーション研究科
 - ・国際コミュニケーション総合研究 XI (統計学入門), 2019.8.5–8.
 - ・国際コミュニケーション総合研究 X (統計学), 2020.1.21–24.

新永 悠人 (にいなが ゆうと) 研究系 (言語変異研究領域) 特任助教

【学位】博士 (文学) (東京大学, 2014)

【学歴】東京大学文学部言語文化学科言語学専修課程卒業 (2006), 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻修士課程修了 (2008), 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻博士課程修了 (2014)

【職歴】日本学術振興会 特別研究員 DC2 (2010), 日本学術振興会 特別研究員 PD (2012), 成城大学文芸学部 非常勤講師 (2015–2018), 大東文化大学国際交流センター 非常勤講師 (2015–2016), 東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所 非常勤講師 (2016), 神田外語大学 非常勤講師 (2017), 人間文化研究機構国立国語研究所広報室 特任助教 (2017–2017), 同 研究系 (言語変異研究領域) 特任助教 (2017), 立教大学非常勤講師 (2019–2020)

【専門領域】記述言語学, 琉球諸語

【所属学会】日本言語学会, 日本方言研究会, 琉球諸語記述研究会

【学会等の役員・委員】琉球諸語記述研究会 運営委員

【受賞歴】

2015: 第 26 回沖縄言語研究センター仲宗根政善記念研究奨励金

【2019 年度に参画した共同研究】

- ・「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」連携活動採択事業「大学との連携による参加型展示手法の開発」(通称: 方言脱出ゲーム): 代表者

【2019 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・若手研究「奄美大島宇検村内の隣接する多地点方言間の体系的差異の解明」, 18K12394: 研究代表者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

新永悠人

「音素」, 木部暢子 (編) 『明解方言学辞典』, 三省堂, 26 頁, 2019.4.20.

新永悠人

「句・節」, 木部暢子 (編) 『明解方言学辞典』, 三省堂, 49–50 頁, 2019.4.20.

新永悠人

「形態素」, 木部暢子 (編) 『明解方言学辞典』, 三省堂, 54 頁, 2019.4.20.

新永悠人

「接語」, 木部暢子 (編) 『明解方言学辞典』, 三省堂, 93 頁, 2019.4.20.

新永悠人

「接辞」, 木部暢子 (編) 『明解方言学辞典』, 三省堂, 94 頁, 2019.4.20.

新永悠人

「代名詞」, 木部暢子 (編) 『明解方言学辞典』, 三省堂, 98 頁, 2019.4.20.

新永悠人

「文法化」, 木部暢子 (編) 『明解方言学辞典』, 三省堂, 128–129 頁, 2019.4.20.

新永悠人

「文法数」, 木部暢子 (編) 『明解方言学辞典』, 三省堂, 129–130 頁, 2019.4.20.

新永悠人

「有生性の階層」, 木部暢子 (編) 『明解方言学辞典』, 三省堂, 149 頁, 2019.4.20.

【研究調査】

- ・湯湾方言・須古方言の語彙調査, 代名詞の調査 (鹿児島県宇検村), 2019.5.7–31.
- ・須古方言の語彙調査, 自然談話の収録 (大阪府大阪市), 2019.7.1–13.

- ・湯湾方言・須古方言の語彙調査, 須古方言の自然談話の書き起こし (鹿児島県宇検村), 2019.9.11–20.
- ・須古方言の自然談話の書き起こし (鹿児島県宇検村), 2019.10.5–11.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・方言版異言語脱出ゲーム「紡がれるもの～おじいとおばあと僕の物語～」(主催: 国立国語研究所), 成城大学, 2020.2.9.

【一般向けの講演・セミナーなど】

新永悠人

「奄美方言が教えてくれる人間の言語能力」, 令和元年大島地区文化協会連絡協議会理事会(総会)及び市町村文化行政担当者等合同研修会, 宇検村生涯学習センター「元気の出る館」, 2019.6.27.

新永悠人

「わーきやー島ぬ方言の未来を考える教室」, 第18回宇検村生涯学習推進大会, 宇検村生涯学習センター「元気の出る館」, 2019.11.14.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

新永悠人

「自分の研究の面白さはどこまで届くのか? ~非専門家に「面白さ」を伝える理由と実践例~」, 筑波大学連携講座, 筑波大学, 2019.10.26.

中川 奈津子 (なかがわ なつこ) 研究系 (言語変異研究領域) 特任助教

【学位】 博士 (人間・環境学)

【学歴】 同志社大学文学部 文化学科 国文学専攻学部卒業 (2005), 京都大学大学院人間・環境学研究科共生人間学専攻言語情報科学講座修士課程修了 (2007), 京都大学大学院人間・環境学研究科共生人間学専攻言語情報科学講座博士課程単位認定退学 (2013), ニューヨーク州立大学バッファロー校言語学科博士課程修了 (2013)

【職歴】 State University of New York at Buffalo Part-time lecturer (2010–2012), 京都大学大学院人間・環境学研究科共生人間学専攻言語情報科学講座 研修員 (2013–2015), 同志社大学文学部英文学科 嘴託講師 (2014–2015), 同志社大学全学共通教養教育センター 嘴託講師 (2014–2018), 同志社大学グローバル・コミュニケーション学部 嘴託講師 (2014–2018), 京都大学国際高等教育院 非常勤講師 (2014–2021), 日本学術振興会・千葉大学融合科学研究科 特別研究員 (PD) (2015–2019), 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 共同研究員 (2015–2019), 国立国語研究所 共同研究員 (2016–2019), 青森公立大学 非常勤講師 (2017–2022), 千葉大学人文科学研究院 特任研究員 (2018–), 国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員 (2019), 国立国語研究所研究系 (言語変異研究領域) 特任助教 (2019)

【専門領域】 コーパス言語学, 方言学

【所属学会】 日本言語学会, 日本語学会, 琉球諸語記述研究会

【学会等の役員・委員】 琉球諸語記述研究会 編集委員

【受賞歴】

2019: 日本語学会春季大会発表賞 (発表題目: 「琉球八重山白保方言のアクセント体系は三型であって、二型ではない」)

【2019年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」: メンバー
- ・「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」国語研ユニット「消滅危機言語・方言の展示を通した最先端研究の可視化・高度化」: メンバー

【2019年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・若手研究「日本語・琉球語における情報構造と述語類型」, 18K12360: 研究代表者

【研究業績】

《著書・編書》

中川奈津子, 寺崎智之, web japanese 編集部
『ニホンゴ:「外」から見た日本語』, web Japanese, 2019.6.4.

中川奈津子 (編)
『鳩間方言辞典』, 国立国語研究所言語変異研究領域, 2020.3.20.

中川奈津子
『むつ市方言の格と情報構造』, 国立国語研究所 (調査報告書), 2020.3.31.

《論文・ブックチャプター》

中川奈津子, セリック・ケナン
「南琉球八重山語白保方言の語彙リスト: 名詞を中心に」, 『琉球の方言』, 44巻, 283–306頁, 2020.3.

【講演・口頭発表】

中川奈津子, セリック・ケナン
「琉球八重山白保方言のアクセント体系は三型であって、二型ではない」日本語学会, 甲南大学, 2019.5.18.

Kenan Celik and Natsuko Nakagawa
“Two types of falling word-tone in Shiraho, Yaeyama, Southern Ryukyuan”, ポスター発表, the International Congress of Phonetic Sciences 2019, Melbourne Convention and Exhibition Centre (メルボルン, オーストラリア)

ルボルン・オーストラリア), 2019.8.7.

Natsuko Nakagawa

“Information structure of relative clause in Japanese and Mandarin”, ポスター発表, NINJAL-UHM workshop, University of Hawai‘i at Mānoa (ハワイ・米国), 2019.10.13.

Natsuko Nakagawa, Masahiro Yamada, Kenan Celik, Nobuko Kibe, and Yukinori Takubo

“Archiving system of endangered languages in Japan: A preliminary report”, ポスター発表, International Conference on Language Technology for All, UNESCO (パリ・フランス), 2019.12.5.

【研究調査】

- ・八丈島の映像づくりのための下見, 打ち合わせ (八丈島), 2019.6.10–11.
- ・八重山系統樹のための語彙調査 (沖縄県石垣市), 2019.7.3–7.
- ・八丈島の映像撮影, 打ち合わせ (八丈島), 2019.7.28–29.
- ・危機方言調査票の調査 (格, 情報構造に関する調査) (沖縄県石垣市, 八重山郡), 2019.8.15–24.
- ・危機方言合同調査 (青森県八戸市, 野辺地町), 2019.8.26–9.1.
- ・語彙調査 (青森県野辺地町, むつ市), 2020.1.17–20.
- ・動詞のアクセント調査 (沖縄県石垣市), 2020.2.13–18.

【一般向けの講演・セミナーなど】

山田真寛, 中川奈津子, 山本史

「ことばと絵のワークショップ「夏のてーどうんむに教室」, ことばと絵のワークショップ「夏のてーどうんむに教室」, 竹富まちなみ館 (公民館, 沖縄県竹富町), 2019.8.16.

中川奈津子

「つさぶむにって何語なの?」, 白保ゆらいく祭り 方言ワークショップ, 白保公民館 (沖縄県石垣市), 2020.2.16.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・取材記事
 - ・「てーどうんむにと親しむ 竹富小中Pがワークショップ」, 八重山毎日新聞, 2019.8.22.
 - ・「沖永良部の民話も題材 絵本出版プロジェクト 言語復興の港」, 南海日日新聞, 2019.11.28.
 - ・「挑戦、クラウドファンディング」, 南海日日新聞, 2019.12.4.
 - ・「島の言葉で絵本制作」, 琉球新報, 2019.12.4.
 - ・「島の言葉で絵本制作」, 宮古新報, 2019.12.4.
 - ・「琉球諸語 繙承へ絵本作り」, 朝日新聞朝刊都内版, 2019.12.25.
 - ・「琉球の島ことば、絵本で子へ孫へ 消滅危機、「読み聞かせ」で救う」, 每日新聞, 2021.12.26.
 - ・「琉球の島ことば、絵本で子へ孫へ 消滅危機、「読み聞かせ」で救う」, 每日小学生新聞, 2019.12.29.
 - ・「島ことばで絵本制作へ」, 八重山日報, 2020.2.6

小木曾 智信 (おぎそ としのぶ) 研究系 (言語変化研究領域) 教授, 領域代表

【学位】博士 (工学) (奈良先端科学技術大学院大学, 2014)

【学歴】東京大学文学部第3類 (語学文学) 卒業 (1995), 東京大学大学院人文社会系研究科修士課程日本文化研究専攻修了 (1997), 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得退学 (2001), 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士後期課程修了 (2014)

【歴歴】明海大学外国語学部 講師 (2001), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門 研究員 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 准教授 (2009), 同 研究系 (言語変化研究領域) 准教授, 領域代表 (2016), 同 教授, 領域代表 (2017), 東京外国语大学大学院国際日本学研究院准教授 (クロスアポイントメント) (2016), 同 教授 (2017)

【専門領域】日本語学, 自然言語処理

【所属学会】日本語学会, 言語処理学会, 情報処理学会, 日本語文法学会, 近代語学会, 東京大学国語国文学会

【学会等の役員・委員】日本語学会 評議員, 日本語学会 編集委員

【受賞歴】

2011: 国立国語研究所第2回所長賞

2011: 情報処理学会山下記念研究賞

【2019年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」: リーダー
- ・フィージビリティスタディ「ニューラル機械翻訳による古文の現代語訳の研究」: リーダー
- ・領域指定型共同研究プロジェクト「古文教育に資する, コーパスを用いた教材の開発と学習指導法の研究」: 共同研究員・コーディネーター
- ・人間文化研究機構連携研究「異分野融合による総合書物学の構築」サブプロジェクト「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」: 共同研究員
- ・Oxford Corpus of Old Japanese Project: 共同研究員
- ・人文学オープンデータ共同利用センター n2i プロジェクト: 共同研究員

【2019年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (A) 「昭和・平成書き言葉コーパスによる近現代日本語の実証的研究」, 19H00531: 研究代表者
- ・挑戦的研究 (開拓) 「日本語コーパスに対する情報付与を核としたオープンサイエンス推進環境の構築」, 19H05477: 研究代表者
- ・基盤研究 (B) 「訓点資料訓読文コーパスの構築と古代日本語史研究の革新」, 18H00674: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

村上征勝, 金明哲, 小木曾智信, 中園聰, 矢野桂司, 赤間亮, 阪田真己子, 宝珍輝尚, 芳沢光雄, 渡辺美智子, 足立浩平

『文化情報学事典』, 勉誠出版, 2019.12.20.

《論文・ブックチャプター》

小木曾智信

「A2-1 言語」, 村上征勝, 金明哲, 小木曾智信, 中園聰, 矢野桂司, 赤間亮, 阪田真己子, 宝珍輝尚, 芳沢光雄, 渡辺美智子, 足立浩平 (編) 『文化情報学事典』, 勉誠出版, 96–101 頁, 2019.12.20.

OGISO Toshinobu

“Stylistic differences across time and register in Japanese texts: a quantitative analysis based on the NINJAL corpora”, Andrej Bekeš and Irena Srđanović (eds.) *The Japanese Language from an Empirical Perspective: Corpus-based studies and studies on discourse*, pp. 197–218, Ljubljana University Press, Faculty of Arts, 2020.1.30.

白井良介, 松村雪桜, 小木曾智信, 小町守

「近代の歴史的資料を対象とした機械学習による文境界推定」, 『情報処理学会論文誌』, 61 (2), pp. 152–161, 2020.2.15

小木曾智信

「通時コーパスに見るモダリティ形式の変遷」, 田瀬行則, 野田尚史 (編) 『データに基づく日本語のモダリティ研究』, くろしお出版, 63–82 頁, 2020.3.20.

《コーパス・データベース類》

小木曾智信

「『日本語歴史コーパス』中古「る」「らる」用法分類アノテーションデータ ver.0.5」, https://researchmap.jp/multidatabases/multidatabase_contents/detail/228595/1af08dfb08f421f4d6e0a39f528fed96, 2019.5.19

小木曾智信, 河内昭浩

「ことねり:『日本語歴史コーパス』簡易検索ツール」, <https://cotoneri.ninjal.ac.jp/>, 2019.12.28.

松崎安子ほか

「日本語歴史コーパス 和歌集編」, https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/wakashu.html, 2019.12.28.

小木曾智信, 堤智昭ほか

「Web 茶まめ (更新版)」, <https://chamame.ninjal.ac.jp/>, 2020.3.31.

片山久留美, 上野左絵ほか

「日本語歴史コーパス 江戸時代編 III 近松淨瑠璃」, https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/edo.html, 2020.3.31.

吳寧真, 池田幸恵, 須永哲矢ほか

「日本語歴史コーパス 奈良時代編 II 宣命」, https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/nara.html, 2020.3.31.

【講演・口頭発表】

小木曾智信, 松崎安子, 村山実和子, 近藤明日子, 南雲千賀子, 高田智和, 片山久留美

「『日本語歴史コーパス』の今とこれから」, 日本語学会 2019 年度春季大会, 甲南大学, 2019.5.19.

小木曾智信

「『日本語歴史コーパス』への追加情報の付与と共有一中古和文の「る」「らる」を例に—」, ポスター発表, 日本語学会 2019 年度春季大会, 甲南大学, 2019.5.19.

小木曾智信

「『日本語歴史コーパス』の今」, 日本語学会 2019 年度春季大会, 甲南大学, 2019.5.19.

Kurumi Katayama, Toshinobu Ogiso, and Yuki Watanabe

“Construction of a Corpus of “Christian Materials” for the Study of Colloquial Japanese of the Muromachi Period”, ポスター発表, Digital Humanities Conference 2019, TivoliVredenburg, Utrecht (オランダ), 2019.7.11.

小木曾智信, 村山実和子

「日本語の歴史と縮約形」, 令和元年度コーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—くだけた表現—」, 国立国語研究所, 2019.9.5.

小木曾智信

「大規模研究資源の構築・整備の評価: 国語研のコーパスを例に」, 招待講演, Wiley Research Seminar Japan 2019, 東京コンベンションホール, 2019.9.13.

小木曾智信

「『日本語歴史コーパス』Ver.2019.3 の万葉集と八代集」, 第 30 回日本資料専門家欧州協会年次大会, ソフィア大学 (ブルガリア), 2019.9.20.

Ogiso Toshinobu and Takada Tomokazu

“Resource providers workshop—National Institute for Japanese Language and Linguistics”, 第30回日本資料専門家欧州協会年次大会, ソフィア大学(ブルガリア), 2019.9.20.

小木曾智信

「国立国語研究所の言語資源とオープンデータ・オープンサイエンス」, 招待講演, 第1回 SPARC Japanセミナー 2019, 国立情報学研究所, 2019.10.24.

高橋雄太, 服部紀子, 小木曾智信

「明治・大正期の文学作品コーパスの設計とその課題」, ポスター発表, 日本語学会 2019 年度秋季大会, 東北大学, 2019.10.27.

松崎安子, 中村壮範, 小木曾智信

「『日本語歴史コーパス 和歌集編』Ver.1.0 の公開」, ポスター発表, 日本語学会 2019 年度秋季大会, 東北大学, 2019.10.27.

小木曾智信

「『日本語学大辞典』とコーパス・言語処理」, 招待講演, 『日本語学大辞典』刊行1周年記念公開講演会ミニシンポジウム『日本語学大辞典』が拓く世界, 東京大学本郷キャンパス, 2019.11.23.

小木曾智信

「オープンサイエンスとしてのコーパス日本語学の可能性」, 招待講演, 名古屋大学大学院人文学研究科日本語学分野公開講演会, 名古屋大学, 2020.2.4.

相田太一, 小町守, 小木曾智信, 高村大也, 坂田綾香, 小山慎介, 持橋大地

「単語分散表現の結合学習による単語の意味の通時的変化の分析」, 言語処理学会第26回年次大会(NLP2020), オンライン, 2020.3.17.

【研究調査】

- ・キリストン資料(天草版平家物語・伊曾保物語・金句集)調査(大英図書館), 2019.7.8.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・『日本語歴史コーパス』の今とこれから(日本語学会春季大会ワークショップ), 甲南大学, 2019.5.19.
- ・創立70周年・移管10周年公開講演会「言語史の計量的研究—宮島達夫の言語史研究—」(主催: 通時コーパスプロジェクト, 共催: コーパス開発センター), 国立国語研究所, 2019.6.22.
- ・『日本語歴史コーパス』活用ワークショップ2019(主催: 通時コーパスプロジェクト), 国立国語研究所, 2019.8.20.
- ・通時コーパスシンポジウム2020(主催: 通時コーパスプロジェクト), (新型コロナウイルス感染症対策のため中止).

【一般向けの講演・セミナーなど】

小木曾智信

「コーパスで日本語の歴史を探る—「通時コーパス」プロジェクトの取り組み—」, 国立国語研究所オープンハウス2019, 国立国語研究所, 2019.7.20.

小木曾智信

「コーパスでさぐる日本語の歴史」, NINJAL 職業発見プログラム, 統計数理研究所セミナー室, 2019.9.13.

小木曾智信

「コーパスで日本語の歴史を探る—「通時コーパス」プロジェクトの取り組み—」, 大学共同利用機関シンポジウム, 日本科学未来館, 2019.10.20.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

小木曾智信, 松崎安子

「『日本語歴史コーパス』CHJ講習会」, 『日本語歴史コーパス』CHJ講習会, 九州大学, 2019.4.18.

小木曾智信

「形態論情報 DB と SQL」, CHJ 活用ワークショップ, 国立国語研究所, 2019.8.20.

小木曾智信

「R を使ってみよう」, CHJ 活用ワークショップ, 国立国語研究所, 2019.8.21.

小木曾智信, 片山久留美

「『日本語歴史コーパス』CHJ 講習会」, 『日本語歴史コーパス』CHJ 講習会, 京都大学, 2019.9.30.

小木曾智信

「日本語歴史コーパス (CHJ)」, NINJAL セミナー「日本語研究の基盤としての言語資源」, 上海外国语大学松江キャンパス (中国), 2019.11.7.

小木曾智信, 服部紀子, 高橋雄太

「『日本語歴史コーパス』CHJ 講習会」, 『日本語歴史コーパス』CHJ 講習会, 名古屋大学, 2020.2.5.

《若手研究者の受入》

• 特別共同利用研究員の受け入れ: 1名

パヴィア大学大学院学生: 黄珊瑚 (ファン・シャンシャン), 研究テーマ: “Japanese passive constructions between syntax and semantics—a contrastive study in diachrony”

大西 拓一郎 (おおにしたくいちらう) 研究系 (言語変化研究領域) 教授

【学位】修士 (文学) (東北大学, 1987)

【学歴】東北大学文学部卒業 (1985), 東北大学大学院文学研究科博士課程前期 2 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻修了 (1987), 東北大学大学院文学研究科博士課程後期 3 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻単位取得退学 (1989)

【職歴】東北大学文学部 助手 (1991), 国立国語研究所言語変化研究部第一研究室 研究員 (1993), 同 主任研究官 (1996), 同 室長 (1999), 人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 教授 (2009), 同 研究系 (言語変化研究領域) 教授 (2016)

【専門領域】方言学, 言語地理学, 日本語学

【所属学会】日本方言研究会, 日本語学会, International Society for Dialectology and Geolinguistics (SIDG), 日本地理言語学会, 變異理論研究会, 日本言語学会, 日本音声学会, 日本語文法学会, 中日理論言語学研究会, 九州方言研究会, 日本文芸研究会

【学会等の役員・委員】日本方言研究会 世話人, 日本語学会 評議員, SIDG committee of accountants

【受賞歴】

2016: 国立国語研究所第 13 回所長賞

【2019 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」: メンバー

【2019 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (B) 「語史再構における言語地理学的解釈の再検討—類型的定式化の試み—」, 16H03415: 研究分担者
- ・挑戦的研究 (萌芽) 「日本語研究オントロジーの設計と開発」, 17K18505: 研究分担者
- ・基盤研究 (B) 「『瀬戸内海言語図巻』の追跡調査による音声言語地図の作成と言語変容の研究」, 17H02340: 研究分担者
- ・基盤研究 (B) 「日本語敬語形成モデルの構築—生成・運用・伝播に注目して—」, 19H01266: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

大西拓一郎

「言語地理学」, 木部暢子 (編) 『明解方言学辞典』, 三省堂, 62 頁, 2019.4.20.

大西拓一郎

「波状仮説」, 木部暢子 (編) 『明解方言学辞典』, 三省堂, 117 頁, 2019.4.20.

大西拓一郎

「方言周囲論」, 木部暢子 (編) 『明解方言学辞典』, 三省堂, 134 頁, 2019.4.20.

大西拓一郎

「方言地図」, 木部暢子 (編) 『明解方言学辞典』, 三省堂, 135 頁, 2019.4.20.

大西拓一郎

「『ひつつき虫』方言の変化を探る」, 『BIOSTORY』, 31 卷, 72–73 頁, 2019.6.1.

Takuichiro Onishi

“On the Relationship of the Degrees of Correspondence of Dialects and Distances”, *Languages*, 4 (2), pp. 1–15, 2019.6.14, DOI: 10.3390/languages4020037.

大西拓一郎

「方言から考える動詞否定辞中止形」, 『日本語文法』, 19 卷 2 号, 3–17 頁, 2019.9.30.

大西拓一郎

「言語変化・方言分化が起こりにくいところ—方言地図からさぐる—」, 『日本語学』, 38 卷 12 号, 48–56 頁, 2019.12.10.

大西拓一郎

「方言地図と GIS」, 村上正勝 (編) 『文化情報学事典』, 勉誠出版, 161–168 頁, 2019.12.20.

Takuichiro Onishi

“Basic Thoughts on Geolinguistics: A Response to the Papers by Sawaki and Fukushima”, *Dialactologia* (Special issue), 8, pp. 29–33, 2019.12.

《コーパス・データベース類》

大西拓一郎, 外山善朗

「国立国語研究所言語地図データベース」, http://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/1adp/1adb_index.html, 2020.3.

【講演・口頭発表】

大西拓一郎

「日本におけるじやがいも方言の分布と変化—弱い固有名詞の強い力—」, 招待講演, The 2nd The Northeast Asian Sea Region and Humanities Networks International Conference, 釜慶大学校 (釜山・韓国), 2019.4.27.

大西拓一郎

「方言における言語的距離と空間的距離」, ポスター発表, 国立国語研究所オープンハウス 2019, 国立国語研究所, 2019.7.20.

大西拓一郎

「地名と人名の地理的関係—行政域名と名字に基づく検証—」, 日本地理言語学会第1回大会, 青山学院大学, 2019.10.6.

【研究調査】

- 茅野市方言に関する方言調査 (長野県茅野市), 2020.1.27–2.21.

【一般向けの講演・セミナーなど】

大西拓一郎

「方言の変化と語源」, 茅野市高齢者大学, 茅野市公民館, 2019.5.25.

大西拓一郎

「富山県方言の特徴とその動態」, となみ散居村ミュージアム公開講座, となみ散居村ミュージアム, 2019.11.22.

大西拓一郎

「方言学入門—にほんごの地理と歴史—」, 早稲田大学オープンカレッジ, 早稲田大学, 2020.1.11–25.

【その他の学術的・社会的活動】

- 日本方言研究会編集委員

山崎 誠 (やまざき まこと) 研究系 (言語変化研究領域) 教授

【学位】博士 (学術) (東京学芸大学, 2015)

【学歴】埼玉大学教養学部教養学科卒業 (1980), 筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科言語学専攻第5学年中退 (1984), 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科修了 (2015)

【職歴】国立国語研究所言語計量研究部 研究員 (1984), 同 言語体系研究部第一研究室 研究員 (1988), 同 主任研究官 (1993), 同 室長 (1995), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 主任研究員 (2001), 同 第一領域長 (2003), 同 グループ長 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 准教授 (2009), 同 教授 (2015), 同 研究系 (言語変化研究領域) 教授 (2016)

【専門領域】日本語学, 計量日本語学, 計量語彙論, コーパス, シソーラス

【所属学会】日本語学会, 計量国語学会, 言語処理学会, 語彙研究会, 日本語教育学会, 社会言語科学会, 情報知識学会, 日本語文法学会, 日本行動計量学会, 情報処理学会, 表現学会

【学会等の役員・委員】計量国語学会 理事, 言語処理学会 代議員

【受賞歴】

2007: 言語処理学会第12回年次大会優秀発表賞

【2019年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」: 班長 (語誌データベース班)
- ・基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」: 班長 (レジスター班)
- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」サブプロジェクト「日本語学習者の日本語使用の解明」: メンバー
- ・コーパス基礎研究「コーパスアノテーションの拡張・統合・自動化に関する基礎研究」: メンバー
- ・共同利用型 (公募型) プロジェクト「難解用語の言語問題に対応する言い換え提案の検証とその応用」: コーディネーター

【2019年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (C) 「シソーラスの整備・拡張のための分類基準の作成と活用」, 19K00655: 研究代表者
- ・挑戦的研究 (萌芽) 「日本語研究用オントロジーの設計と開発」, 17K18505: 研究代表者
- ・基盤研究 (A) 「語用論的分析のための日本語1000人自然会話コーパスの構築とその多角的研究」, 18H03581: 研究分担者
- ・基盤研究 (A) 「日本語歴史コーパスに対する統語・意味情報アノテーション」, 17H00917: 研究分担者
- ・基盤研究 (B) 「語形成および意味的情報を付加した実践医療用語辞書の築」, 18H03499: 研究分担者
- ・基盤研究 (B) 「「昭和話し言葉コーパス」の構築による話し言葉の経年変化に関する実証的研究」, 16H03426: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「データサイエンスに基づいた日本文體変化分析とその構造のモデリング」, 18K00627: 研究分担者
- ・挑戦的研究 (萌芽) 「コミュニケーション能力を高める自然会話教材の高度共有化—共同体の構築に向けて—」, 18K18685: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

大村舞, 柏野和佳子, 山崎誠

『『日本語日常会話コーパス』モニター公開版の語彙』, 国立国語研究所, 2020.2.10.

《論文・ブックチャプター》

山崎誠

「国立国語研究所コーパスの統計情報—BCCWJ語数表・語彙表ほか—」, 『計量国語学』, 32巻1号,

山崎誠

「現代のテキストコーパス」, 『電子情報通信学会誌』, 102 卷 6 号, 549-553 頁, 2019.6.

加藤祥, 浅原正幸, 山崎誠

「分類語彙表番号を付与した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の書籍・新聞・雑誌データ」, 『日本語の研究』, 2 号, 134-141 頁, 2019.8.1, DOI: 10.20666/nihongonokenkyu.15.2_134.

山崎誠

「日本語コーパスの紹介とその利用」, 『ヨーロッパ日本語教育』, 23 号, 222-232 頁, 2019.6.

山崎誠

「語彙の組織」, 石井正彦 (編) 『語彙の原理—先人たちが切り開いた言葉の沃野— (シリーズ日本語の語彙 1)』, 朝倉書店, 46-56 頁, 2019.10.1.

山崎誠

「計量文体論」, 金明哲, 小木曾智信, 中園聰, 矢野桂司, 赤間亮, 阪田真己子, 宝珍輝尚, 芳沢光雄, 渡辺美智子, 足立浩平 (編) 『文化情報学事典』, 勉誠出版, 17-22 頁, 2019.12.20.

山崎誠

「シソーラス」, 金明哲, 小木曾智信, 中園聰, 矢野桂司, 赤間亮, 阪田真己子, 宝珍輝尚, 芳沢光雄, 渡辺美智子, 足立浩平 (編) 『文化情報学事典』, 勉誠出版, 149-154 頁, 2019.12.20.

《コーパス・データベース類》

山崎誠, 柏野和佳子, 宮嶋由美

「BCCWJ 図書館サブコーパスの小説に対する話者情報」, 2020.3.16.

【講演・口頭発表】

加藤祥, 浅原正幸, 山崎誠

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』新聞・書籍・雑誌データの助動詞に対する用法情報付与」, ポスター発表, 日本語学会 2019 年度春季大会, 甲南大学, 2019.5.19.

山崎誠

「科学的方法論の探索」, 言語史の計量的研究-宮島達夫の言語史研究-, 国立国語研究所, 2019.6.22.

宇佐美まゆみ, 山崎誠

「『BTSJ 自然会話コーパス』の全体的な特徴と今後のデータ拡張について」, 第 1 回語用論コーパス科 研成果発表会, 国立国語研究所, 2019.6.29.

山崎誠, 宇佐美まゆみ

「『BTSJ 自然会話コーパス』の形態素解析のための補助ツールの開発について」, 第 1 回語用論コーパス科 研成果発表会, 国立国語研究所, 2019.6.29.

山崎誠

「話し言葉における代名詞「あれ」の用法—母語話者と学習者の違い—」, ポスター発表, 国立国語研究所オープンハウス 2019, 国立国語研究所, 2019.7.20.

山崎誠

「BCCWJ 小説会話文の話者情報を用いた分析」, シンポジウム「話し言葉の多様性」, 国立国語研究所, 2019.8.30.

山崎誠, 柏野和佳子, 宮嶋由美

「BCCWJ 小説会話文への話者情報の付与とその活用」, ポスター発表, 言語資源活用ワークショップ 2019, 国立国語研究所, 2019.9.2.

山崎誠, 相良かおる, 小野正子, 東条佳奈, 麻子軒

「実践医療用語の語構成要素への分割と意味ラベル付与の試み」, ポスター発表, 言語資源活用ワーク ショップ 2019, 国立国語研究所, 2019.9.3.

山崎誠

「意味分類の客觀性を探る：『分類語彙表増補改訂版』と『新明解類語辞典』との比較」，2019年語彙研究会大会，明治大学駿河台キャンパス，2019.9.14.

相良かおる，小野正子，山崎誠

「実践医療用語の語構造に関する考察—医療記録に含まれる合成語の妥当な細分割を目指して—」，ポスター発表，第20回日本医療情報学会学術大会，幕張メッセ，2019.11.22.

山崎誠

「「BTSJ 日本語自然会話コーパス 2018年版」における母語話者と学習者の語彙的比較」，ポスター発表，2019年度日本語教育学会秋季大会，くにびきメッセ，2019.11.24.

相良かおる，山崎誠，麻子軒，東条佳奈，小野正子，内山清子

「実践医療用語の語構成要素—意味を基準とした分割」，ポスター発表，人文科学とコンピュータシンポジウム 2019，立命館大学大阪いばらきキャンパス，2019.12.14.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・シンポジウム「話し言葉の多様性」（主催：日常会話コーパス），国立国語研究所，2019.8.30.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・NINJAL 職業発見プログラム（対象者：Institut de Vic [スペイン]）講師，国立国語研究所，2019.8.16.
- ・『三省堂国語辞典』編集委員
- ・日本語教育学会審査・運営協力員

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

柏野和佳子，山崎誠

「『日本語話し言葉コーパス』（CSJ），『名大会話コーパス』概説」，第8回コーパス利用講習会，国立国語研究所，2019.8.30.

山崎誠

「現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）」，NINJAL セミナー「日本語研究の基盤としての言語資源」，上海外国语大学松江キャンパス（上海・中国），2019.11.7.

山崎誠

オンライン検索システム「中納言」講習会，2019.8.30.

《連携大学院》

- ・一橋大学大学院言語社会研究科 連携教授

《博士論文審査委員》

- ・日本女子大学大学院（副査），2020.3

《若手研究者の受入》

- ・外来研究員：1名

横山 詔一 (よこやま しょういち) 研究系 (言語変化研究領域) 教授

【学位】博士 (心理学) (筑波大学, 1991)

【学歴】横浜国立大学教育学部卒業 (1981), 筑波大学大学院博士課程心理学研究科修士号取得 (1983), 筑波大学大学院博士課程心理学研究科退学 (1985)

【職歴】上越教育大学学校教育学部 助手 (1985), 国立国語研究所情報資料研究部・電子計算機システム開発研究室 研究員 (1991), 同 情報資料研究部 主任研究官 (1995), 独立行政法人国立国語研究所情報資料部門 領域長 (2001), 同 研究開発部門 グループ長 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 教授 (2009), 同 研究情報資料センター長 (2009–2013), 同 研究系 (言語変化研究領域) 教授 (2016)

【専門領域】認知科学, 心理統計, 日本語学

【所属学会】日本心理学会, 社会言語科学会, 計量国語学会, 日本語学会, 日本教育工学会, 行動計量学会

【学会等の役員・委員】計量国語学会 理事

【受賞歴】

2019: 国立国語研究所第 18 回所長賞

2010: 社会言語科学会第 9 回徳川宗賢賞 (優秀賞)

2010: 国立国語研究所第 1 回所長賞

1997: 日本教育工学会第 11 回日本教育工学会論文賞

【2019 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」: メンバー

【2019 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・挑戦的研究 (萌芽) 「疫学的統計手法と人工知能学の融合活用による敬語の変化予測研究」, 17K18501: 研究代表者
- ・基盤研究 (B) 「海外日本語教育指導者との協働による学術論文執筆支援プログラムの開発とその評価」, 17H01994: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

横山詔一

「語彙の獲得」, 石井正彦 (編) 『語彙の原理: 先人たちが切り開いた言葉の沃野』, 朝倉書店, 126–139 頁, 2019.10.1.

横山詔一

「社会言語学調査」, 村上征勝 (監修) 『文化情報学事典』, 勉誠出版, 168–176 頁, 2019.12.17.

《総説・解説など》

横山詔一

「新刊・寸感」, 『日本語学』, 38 卷 6 号, 68–69 頁, 2019.6.10.

横山詔一

「新刊・寸感」, 『日本語学』, 38 卷 11 号, 76–77 頁, 2019.11.10.

【講演・口頭発表】

横山詔一

「数式ナシの統計入門」, 招待講演, 日本語歴史コーパス活用ワークショップ 2019, 国立国語研究所, 2019.8.21.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・大学共同利用機関法人情報・システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設 運営会議委員
- ・大学共同利用機関法人情報・システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設 人事委員会委員
- ・筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語・日本事情遠隔教育拠点事業運営委員

- ・博報堂財団「児童教育実践についての研究助成」審査委員

【大学院教育・若手研究者育成】

《大学院非常勤講師（集中講義）》

- ・一橋大学大学院言語社会研究科

高田 智和 (たかだともかず) 研究系(言語変化研究領域)准教授

【学位】博士(文学)(北海道大学, 2004)

【学歴】北海道大学文学部卒業(1999), 北海道大学大学院文学研究科国文学専攻修士課程修了(2001), 北海道大学大学院文学研究科言語文学専攻博士後期課程修了(2004)

【歴歴】独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 研究員(2005), 同 言語資源グループ 研究員(2006), 同 言語生活グループ 研究員(2007), 人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 准教授(2009), 同 研究系(言語変化研究領域)准教授(2016)

【専門領域】日本語学, 国語学, 文献学, 文字・表記, 漢字情報処理

【所属学会】日本語学会, 訓点語学会, 計量国語学会, 情報処理学会

【学会等の役員・委員】日本語学会 事務局長, 計量国語学会 理事, 訓点語学会 委員, 情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会 運営委員, 情報処理学会情報規格調査会 SC2 専門委員会 委員

【受賞歴】

2019: 2019年度山下記念研究賞

2016: 2016年度日本語学会春季大会発表賞

2013: 北海道大学文学部同窓会榆文賞

2010: 情報処理学会情報規格調査会標準化貢献賞

2010: 国立国語研究所第1回所長賞

2007: 日本規格協会標準化貢献賞

【2019年度に参画した共同研究】

- ・広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による「総合書物学」の構築」国語研ユニット「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」: 代表者
- ・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」: 共同研究員
- ・ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北米における日本関連在外資料調査・研究活用—言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築」: 共同研究員

【2019年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究(B)「訓点資料訓読文コーパスの構築と古代日本語史研究の革新」, 18H00674: 研究代表者
- ・挑戦的研究(萌芽)「漢文訓点資料の国際文書構造記述による共有化と書き下し文自動生成のための基礎研究」, 17K18506: 研究代表者
- ・基盤研究(S)「木簡等の研究資源オープンデータ化を通じた参加誘発型研究スキーム確立による知の展開」, 18H05221: 研究分担者
- ・基盤研究(A)「統合史資料画像データの生成と駆動方式の確立による人文科学研究基盤の創出」, 18H03576: 研究分担者
- ・基盤研究(C)「字体記述の精密化手法の確立による歴史的漢字字体情報アーカイブズ構築」, 18K00611: 研究分担者
- ・基盤研究(C)「資料横断的な漢字音・漢語音データベース構築・公開に向けた基礎的研究」, 19K00650: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

関川雅彦, 高田智和

「国立国語研究所研究資料室における個人情報の取り扱いについて」, 『国立国語研究所論集』, 17号, 67-74頁, 2019.7.31, DOI: 10.15084/00002224.

高田智和

「鶴岡調査データベース」, 『計量国語学』, 32卷2号, 96-101頁, 2019.9.20.

斎藤達哉, 王伸子, 高田智和

「ハワイ教育会『にっぽんごのほん』の編纂事情—国語教育と日本語教育とのはざま—」, 『専修国文』, 105号, 2019.9.20.

高田智和

「文字コード」, 村上征勝(監修), 金明哲, 小木曾智信, 中園聰, 矢野桂司, 赤間亮, 阪田真己子, 宝珍輝尚, 芳沢光雄, 渡辺美智子, 足立浩平(編)『文化情報学事典』, 勉誠出版, 154–160頁, 2019.12.20.

田島孝治, 堤智昭, 高田智和

「訓点資料の書き下し文自動生成を目的としたヲコト点を中心とする訓点の計量分析」, 『情報処理学会論文誌』, 61卷2号, 162–170頁, 2020.2.15.

《コーパス・データベース類》

高田智和

「大英図書館蔵天草版『伊曾保物語』原本画像・翻字本文対照」, https://dglb01.ninjal.ac.jp/BL_amakusa_view/esopo/, 2019.9.18.

田島孝治, 高田智和, 堤智昭

「尚書(古活字版第三種本)訓点情報データベース」, <https://cid.ninjal.ac.jp/kunten-syousyo3/>, 2020.1.31.

《展示など》

- ・国立歴史民俗博物館企画展示「ハワイ:日本人移民の150年と憧れの島のなりたち」, 国立歴史民俗博物館, 2019.10.29–12.26.

【講演・口頭発表】

高田智和, 早田美智子, 八木下孝雄

「日本語研究・日本語教育文献データベースによる研究動向分析」, 韓國日本研究總聯合會第8回國際學術大會, 啓明大學校(大邱・韓国), 2019.4.19.

守岡知彦, 劉冠偉, 高田智和

「漢字字体規範史データセット用従来型UI再生の試み」, 第120回人文科学とコンピュータ研究会, 京都大学人文科学研究所, 2019.5.11.

田島孝治, 堤智昭, 高田智和, 小助川貞次

「移点ツールの仮名点・語順点への拡張」, 第120回人文科学とコンピュータ研究会, 京都大学人文科学研究所, 2019.5.11.

高田智和, 石本祐一, 関川雅彦

「国立国語研究所収蔵音声・映像資料と試聴視システム」, ポスター発表, 日本語学会2019年度春季大会, 甲南大学, 2019.5.18.

小木曾智信, 松崎安子, 村山実和子, 近藤明日子, 南雲千香子, 高田智和, 片山久留美

「『日本語歴史コーパス』の今とこれから」, シンポジウムパネル, 日本語学会2019年度春季大会, 甲南大学, 2019.5.18.

高田智和

「米海軍日本語学校の漢字教材“Kanji Book”」, 招待講演, 東洋学へのコンピュータ利用第31回研究セミナー, 国立国語研究所, 2019.7.26.

石本祐一, 生永匠, 高田智和

「国立国語研究所研究資料室収蔵音声・映像資料のデジタル化と試聴視システムの構築」, 招待講演, 東洋学へのコンピュータ利用第31回研究セミナー, 国立国語研究所, 2019.7.26.

Koji Tajima, Tomoaki Tsutsumi, and Tomokazu Takada

“Digitized Method for Wokototen Marks used for Classical Chinese Textbooks in Japan”, The 3rd EAJS Conference in Japan(第3回EAJS日本会議), 筑波大学, 2019.9.15.

高田智和

「大英図書館蔵天草版『平家物語』『伊曾保物語』『金句集』の画像公開」, The 30th EAJRS Conference
(第30回日本資料専門家欧州協会年次大会), ソフィア大学(ソフィア・ブルガリア), 2019.9.20.

守岡知彦, 劉冠偉, 高田智和

「漢字字体規範史データセットと単字検索」, ポスター発表, 日本語学会2019年度秋季大会, 東北大学, 2019.10.27.

鎌水兼貴, 高田智和

「共通語化最終段階における方言使用状況—第1~4回鶴岡共通語化調査データの公開—」, ポスター発表, 日本語学会2019年度秋季大会, 東北大学, 2019.10.27.

堤智昭, 田島孝治, 高田智和, 小助川貞次

「ヲコト点図共有・比較プラットフォームの実装」, ポスター発表, 人文科学とコンピュータシンポジウム2019, 立命館大学, 2019.12.14.

田島孝治, Baptiste Jannequin, 堤智昭, 高田智和

「IIIF Viewerと連携可能な訓点資料の加点情報データベースの試作」, ポスター発表, 人文科学とコンピュータシンポジウム2019, 立命館大学, 2019.12.14.

高田智和

「話し言葉調査の「可逆性」」, シンポジウムパネル(招待), 第15回人間文化研究情報資源共有化研究会, 日比谷図書文化館, 2020.1.25.

田島孝治, Tan Jun Liang, 堤智昭, 高田智和

「国立国語研蔵『尚書(古活字版)』の訓点情報データベース」, 招待講演, 東洋学へのコンピュータ利用第32回研究セミナー, 京都大学人文科学研究所, 2020.3.6.

【研究調査】

- ・ハワイ日本語教科書調査(日本ハワイ移民資料館), 2019.12.3.
- ・ハワイ日本語教科書調査(ハワイ大学マノア校図書館), 2020.2.13-14.
- ・ハワイ日本語教科書調査(ハワイ日系人センター), 2020.2.15.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・東洋学へのコンピュータ利用第31回研究セミナー(主催: 京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター, 共催: 国立国語研究所研究情報発信センター, 「異分野融合による「総合書物学」の構築」国立国語研究所ユニット「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」, 「訓点資料訓読文コーパスの構築と古代日本語史研究の革新」(科研費18H00674), 「字体記述の精密化手法の確立による歴史的漢字字体情報アーカイブズ構築」(科研費18K00611)), 国立国語研究所, 2019.7.26.
- ・多摩郷土誌フェア講演会(主催: 東京都市社会教育課長会文化財部会), 立川市女性総合センター・アイム, 2020.1.18.
- ・第15回人間文化研究情報資源共有化研究会「人文系研究データの生成と管理—「可逆性」の実現のために」(主催: 人間文化研究機構総合情報発信センター), 日比谷図書文化館, 2020.1.25.

【一般向けの講演・セミナーなど】

高田智和

「表記辞書とコーパス」, NINJALセミナー「言語資源から導く日本のすがた」, 啓明大学校(大邱・韓国), 2019.5.9.

高田智和

「ヲコト点(訓点記号)の整数座標表現」, 国立国語研究所オープンハウス2019, 国立国語研究所, 2019.7.20.

高田智和

「漢字字体規範史データセット単字検索」, NINJALセミナー「日本語研究の基盤としての言語資源」, 上海外国语大学(上海・中国), 2019.11.7.

高田智和

「中世多摩の文字づかい—板碑と經典文字からわかること—」，多摩郷土誌フェア，立川市女性総合センター・アイム，2020.1.18.

新野 直哉 (にいの なおや) 研究系 (言語変化研究領域) 准教授

【学位】博士 (文学) (東北大学, 2010)

【学歴】東北大学文学部文学科卒業 (1984), 東北大学大学院文学研究科博士課程前期 2 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻修了 (1986), 東北大学大学院文学研究科博士課程後期 3 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻中退 (1988)

【職歴】宮崎大学教育学部 助手 (1988), 同 講師 (1989), 同 助教授 (1992), 国立国語研究所情報資料研究部 主任研究官 (1996), 独立行政法人国立国語研究所情報資料部門第一領域 主任研究員 (2001), 同 文献情報グループ 主任研究員 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 助教 (2009), 同 准教授 (2011), 同 研究系 (言語変化研究領域) 准教授 (2016)

【専門領域】言語学, 日本語学

【所属学会】日本近代語研究会, 表現学会, 日本語学会

【学会等の役員・委員】日本近代語研究会 運営委員, 日本語学会 大会企画運営委員

【受賞歴】

2011: 国立国語研究所第 2 回所長賞

【2019 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」: メンバー

【2019 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・挑戦的萌芽研究「日本語研究用オントロジーの設計と開発」, 17K18505: 研究分担者
- ・研究成果公開促進費(学術図書)「近現代日本語の「誤用」と言語規範意識の研究」, 19HP5054: 研究代表者

【研究業績】

《著書・編書》

新野直哉

『近現代日本語の「誤用」と言語規範意識の研究』, ひつじ書房, 2020.2.20.

《論文・ブックチャプター》

新野直哉

「言語生活史資料としての大正 6 年『読売新聞』記事—「新聞記事データベース」活用の一例として」,
『近代語研究』, 21 号, 171–190 頁, 2019.9.30.

新野直哉

「昭和前期の言語生活・言語意識研究のための一資料—『文藝春秋』「目・耳・口」—」, 『国語語彙史の研究』, 39 号, 37–54 頁, 2020.3.31.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・NINJAL 職業発見プログラム (対象: 仙台第一高校) 講師, 国立国語研究所, 2019.7.11.
- ・取材協力: 「グッド! モーニング」, テレビ朝日, 2018.4–

【大学院教育・若手研究者育成】

《大学院非常勤講師》

- ・目白大学大学院

間淵 洋子 (まぶち ようこ) 研究系 (言語変化研究領域) 特任助教

【学位】 博士 (国際日本学) (明治大学, 2018)

【学歴】 東京学芸大学教育学部中等教育教員養成課程国語科卒業 (1995), 東京都立大学大学院人文科学研究科日本語・日本文学専攻修士課程修了 (1997), 東京都立大学大学院人文科学研究科日本語・日本文学専攻博士課程単位取得退学 (2005), 明治大学大学院国際日本学研究科国際日本学専攻博士後期課程修了 (2018)

【職歴】 国立国語研究所研究開発部門第二領域 非常勤研究員 (2000–2005), 東京学芸大学教育学部 講師 (2002–2003), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 非常勤研究員 (2005–2011), 人間文化研究機構国立国語研究所コーパス開発センター 非常勤研究員 (2013–2016), 日本学術振興会特別研究員 DC2 (2016–2018), 人間文化研究機構国立国語研究所研究系 (言語変化研究領域) 特任助教 (2018)

【専門領域】 日本語学, 日本語史, 計量言語学, コーパス言語学

【所属学会】 日本語学会, 計量国語学会, 社会言語科学会, 言語処理学会, 日本デジタル・ヒューマニティーズ学会

【学会等の役員・委員】 日本語学会 事務局委員

【受賞歴】

- 2017: 国立国語研究所コーパス開発センター優秀発表賞 (「近代漢語の品詞性に見る多様性の画一化—形容詞用法を中心に—」)
- 2016: 第12回国立国語研究所所長賞 (若手研究者奨励賞)
- 2015: 情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん2015」ベストポスター賞 (「異なる文体の混在するテキストに対する複数辞書切り替えによる解析手法の提案」, 受賞者: 間淵洋子, 小木曾智信)
- 2006: 言語処理学会第12回年次大会優秀賞 (「代表性を有する現代日本語書き言葉コーパスの設計」, 受賞者: 山崎誠, 前川喜久雄, 田中牧郎, 小椋秀樹, 柏野和佳子, 小磯花絵, 間淵洋子, 丸山岳彦, 山口昌也, 秋元祐哉, 稲益佐知子, 吉田谷幸宏)

【2019年度に参画した共同研究】

- ・広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による「総合書物学」の構築」: 国語件ユニットメンバー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」: メンバー

【2019年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・研究活動スタート支援「精緻な文字表記情報を持つ近代新聞コーパスの構築による表記・文体変遷の計量的研究」, 19K20819: 研究代表者
- ・基盤研究(A)「昭和・平成書き言葉コーパスによる近現代日本語の実証的研究」, 19H00531: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

間淵洋子

「書き言葉コーパス」, 村上征勝, 金明哲, 小木曾智信, 中園聰, 矢野桂司, 赤間亮, 阪田真己子, 宝珍輝尚, 芳沢光雄, 渡辺美智子, 足立浩平 (編) 『文化情報学事典』, 勉誠出版, 111–123 頁, 2019.12.20.

《その他の出版物・記事》

間淵洋子

「異分野融合で発展する研究インフラ—大規模コーパス構築の裏側」, 『きざし 人間文化研究機構基幹研究プロジェクトニュースレター』, 2020.3.

【講演・口頭発表】

間淵洋子, 福井尚子

「Unicode を利用した変体仮名字形データベースの構築」, 「東洋学へのコンピュータ利用」第31回研究セミナー, 国立国語研究所, 2019.7.26.

間淵洋子

「精緻な表記情報を有する「延喜式祝詞」コーパスの構築」, 第25回公開シンポジウム「人文科学とデータベース」, 図書館流通センター本社ビル, 2020.2.29.

【一般向けの講演・セミナーなど】

間淵洋子

「読売新聞に見る近代の語彙・表記」, 国立国語研究所オープンハウス 2019, 国立国語研究所, 2019.7.20.

間淵洋子

「読売新聞に見る近代の語彙・表記」, 大学共同利用機関シンポジウム, 日本科学未来館, 2019.10.20.

【その他の学術的・社会的活動】

・取材記事

・「「ヴ」の消滅後 世界で何が」, NHK 政治マガジン, 2019.4.17.

・「(ニュース Q3) 「ヴ」は国名から消えても…捨てがたい魅力」, 朝日新聞(朝刊), 2019.5.23.

・朝日放送テレビからの取材, 接辞「全」の歴史について(「そんなコト考えた事なかったクイズ トリニクって何の肉!?」), 放送日: 2019.5.21.

・NINJAL 職業発見プログラム(対象: 座間総合高校)講師, 国立国語研究所, 2020.1.21

・杉並区立東田中学校学校運営協議会委員, 2017.10.1-.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

間淵洋子

「コーパスに基づく日本語史研究」, NINJAL セミナー「言語資源から導く日本語のすがた」, 啓明大学校(大邱広域市・韓国), 2019.5.7.

小磯 花絵 (こいそ はなえ) 研究系(音声言語研究領域)教授、領域代表

【学位】博士(理学)(奈良先端科学技術大学院大学, 1998)

【学歴】千葉大学文学部卒業(1994), 千葉大学大学院文学研究科修士過程修了(1996), 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究所博士後期課程修了(1998)

【職歴】ATR知能映像通信研究所研修研究員(1996), 国立国語研究所言語行動研究部研究員(1998), 同主任研究員(2009), 人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系准教授(2009), 同研究系(音声言語研究領域)准教授, 領域代表(2016), 同研究系(音声言語研究領域)教授, 領域代表(2018)

【専門領域】コーパス言語学, 談話分析, 認知科学

【所属学会】社会言語科学会, 日本認知科学会, 人工知能学会, 言語処理学会, 日本言語学会, 日本音声学会, 日本語教育学会

【学会等の役員・委員】社会言語科学会監事, 言語処理学会大会賞選考審査員, 言語処理学会代議員, 日本言語学会大会委員, 日本言語学会倫理委員会

【受賞歴】

2002: 情報処理学会山下記念研究賞

1996: 人工知能学会大会論文賞

1996: 人工知能学会研究奨励賞

【2019年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」:リーダー
- ・領域指定型共同研究プロジェクト「会話における創発的参与構造の解明と類型化」:コーディネーター

【2019年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究(B)「コーパス言語学的手法に基づく会話音声の韻律特徴の体系化」, 16H03421: 研究代表者
- ・基盤研究(B)「地域社会の共在的記録に基づくコミュニケーションと記憶の活性化」, 18KT0035: 研究代表者
- ・基盤研究(A)「日常場面と特定場面の日本語会話コーパスの構築と言語・相互行為研究の新展開」, 17H00914: 研究分担者
- ・基盤研究(A)「手話翻訳システム構築を目指した手話対話における文単位の認定」, 18H03580: 研究分担者
- ・基盤研究(B)「日常会話の韻律モデル構築に向けた話者混在音声の分析基盤」, 19H01252: 研究分担者
- ・機構間連携・異分野連携研究プロジェクト「知性と認識の情報神経物理学」:研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

小磯花絵

「話し言葉コーパスの構築と公開」, 『電子情報通信学会誌』, 102巻6号, 554-557頁, 2019.6.

小磯花絵

「『日本語話し言葉コーパス』モニター公開版の構築」, 『計量国語学』, 32巻2号, 133-141頁, 2019.9.

Hanae Koiso, Masayuki Asahara, Salvatore Carlino, Ken'ya Nishikawa, Kazuki Aoyama, Yuichi Ishimoto, Aya Wakasa, Michiko Watanabe, Yoshimi Yoshikawa, Nobuko Kibe, and Kikuo Maekawa

“Speech corpora in NINJAL, Japan demonstration of corpus concordance systems: Chunagon and Kotonoha”, *Proceedings of the 3rd International Symposium on Linguistic Patterns in Spontaneous Speech (LPSS 2019)*, pp. 8-12, 2019.11.21.

Yuichi Ishimoto and Hanae Koiso

“Prosodic diversity according to relationship among participants in everyday Japanese conversation”, *Proceedings of the 3rd International Symposium on Linguistic Patterns in Spontaneous Speech (LPSS 2019)*, pp. 62-66, 2019.11.21.

小磯花絵

「話し言葉コーパス」, 村上征勝(監), 金明哲, 小木曾智信, 中園聰, 矢野桂司, 赤間亮, 阪田真己子, 宝珍輝尚, 芳沢光雄, 渡辺美智子, 足立浩平(編)『文化情報学事典』, 勉誠出版, 2019.12.

小磯花絵

「現代文におけるジャンル別の文体的特徴」, 村上征勝(監), 金明哲, 小木曾智信, 中園聰, 矢野桂司, 赤間亮, 阪田真己子, 宝珍輝尚, 芳沢光雄, 渡辺美智子, 足立浩平(編)『文化情報学事典』, 勉誠出版, 2019.12.

小磯花絵, 天谷晴香, 居關友里子, 白田泰如, 柏野和佳子, 川端良子, 田中弥生, 伝康晴, 西川賢哉

「『日本語日常会話コーパス』モニター版の設計・評価・予備的分析」, 『国立国語研究所論集』, 18号, 7-33頁, 2020.1.31, DOI: 10.15084/00002540.

小磯花絵

「日常会話コーパスを活用した丁寧さ・対人モダリティの生起要因とその実態の解明」, 田窪行則, 野田尚史(編)『データに基づく日本語のモダリティ研究』, くろしお出版, 3-20頁, 2020.3.22.

《コーパス・データベース類》

小磯花絵, 天谷晴香, 石本祐一, 居關友里子, 白田泰如, 柏野和佳子, 川端良子, 田中弥生, 伝康晴, 西川賢哉, 渡邊友香

「『日本語日常会話コーパス』内部公開版 202003」(関係者限定公開), 2020.3.30.

《展示など》

- ・「話し言葉の多様性—コーパスから見えてくること—」, 国立国語研究所オープンハウス 2019(ポスター展示), 2019.7.20.
- ・大学共同利用機関シンポジウムブース展示, 2019.10.20.
- ・the 3rd International Symposium on Linguistic Patterns in Spontaneous Speech (LPSS 2019) ブース展示, 2019.11.21-22.

《その他の出版物・記事》

小磯花絵, 丸山岳彦

「特集: コーパスを通して話し言葉をながめる」, 『ことばの波止場 Vol.6』, 国立国語研究所, 2019.9.

小磯花絵

「巻頭言 人を対象とする研究の倫理について」, 『社会言語科学』, 22卷2号, 2020.3.

【講演・口頭発表】

田中弥生, 小磯花絵

「家庭での幼児の発話の修辞機能—脱文脈化の観点からの検討—」, ポスター発表, 言語資源活用ワークショップ 2019, 国立国語研究所, 2019.9.2.

居關友里子, 小磯花絵

「子どもによるやり取りへの参与の振る舞い—両親との会話の事例分析から—」, ポスター発表, 言語資源活用ワークショップ 2019, 国立国語研究所, 2019.9.3.

小磯花絵

「『日本語日常会話コーパス』モニター公開版: 研究の可能性」, 言語資源活用ワークショップ 2019, 国立国語研究所, 2019.9.4.

小磯花絵

「日常会話における縮約の特徴」, 言語資源活用ワークショップ 2019, 国立国語研究所, 2019.9.5.

石本祐一, 小磯花絵

「日本語日常会話コーパスを用いた会話場面と声の高さの関係性の検討」, ポスター発表, 日本音響学会 2019年秋季研究発表会, 立命館大学, 2019.9.5.

小磯花絵

「『日本語日常会話コーパス』の設計と研究の可能性」, 招待講演, 情報処理学会 第131回音声言語情

報処理研究会, 加賀・片山津温泉 佳水郷, 2020.2.13–14.

小磯花絵, 菊池英明, 山田高明

「『日本語日常会話コーパス』への韻律ラベリング—ラベリングの設計と日常会話の韻律の特徴—」,

人工知能学会 第 88 回言語・音声理解と対話処理研究会, 東海大学, 2020.3.1.

菊池英明, 山田高明, 小磯花絵

「大規模日常会話コーパスにおけるイントネーションラベリング」, ポスター発表, 日本音響学会 2020

年春季研究発表会, 埼玉大学, 2020.3.16.

田中弥生, 小磯花絵, 浅原正幸

「手順説明談話における脱文脈化の様相」, ポスター発表, 言語処理学会第 26 回年次大会 NLP2020, 茨

城大学, 2020.3.18.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・シンポジウム「話し言葉の多様性」(主催: 日常会話コーパスプロジェクト), 国立国語研究所, 2019.8.30.
- ・令和元年度 コーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—くだけた表現—」(主催: 日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成, 通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開, 大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究, 日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明), 国立国語研究所, 2019.9.5.
- ・シンポジウム「日常会話コーパス」V (主催: 日常会話コーパスプロジェクト, 共催: 一橋大学言語社会研究科), (新型コロナウイルス感染症対策のため中止).
- ・シンポジウム「ことば・認知・インタラクション」8 (主催: 科研費基盤研究 (A) 「日常場面と特定場面の日本語会話コーパスの構築と言語・相互行為研究の新展開」(17H00914), 日常会話コーパスプロジェクト), (新型コロナウイルス感染症対策のため中止).

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

小磯花絵

「Praat・ELAN 講習会」, 第 9 回コーパス利用講習会, 国立国語研究所, 2019.8.31.

《連携大学院》

- ・一橋大学大学院言語社会研究科 連携教授

《博士論文審査委員》

- ・一橋大学大学院: 副査 1 件, 2020.1.

《修士論文審査委員》

- ・一橋大学大学院: 副査 4 件, 2020.2.

前川 喜久雄 (まえかわ きくお)

研究系 (音声言語研究領域) 教授, コーパス開発センター長

【学位】博士 (学術) (東京工業大学, 2011)

【学歴】上智大学外国語学部フランス語学科卒業 (1980), 上智大学大学院外国語学研究科言語学専攻博士前期課程修了 (1982), 上智大学大学院外国語学研究科言語学専攻博士後期課程中退 (1984)

【職歴】鳥取大学教育学部 助手 (1984), 同 講師 (1987), 国立国語研究所言語行動研究部第二研究室 研究員 (1989), 同 主任研究官 (1992), 同 室長 (1994), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第二領域 領域長 (2001), 同 言語資源グループ長 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 教授, コーパス開発センター長 (2009–), 同 研究系長 (2009–2016), 同 副所長 (2013–2016), 同 研究系 (音声言語研究領域) 教授 (2016), 一橋大学 連携教授 (2005–2014)

【専門領域】音声学, 言語資源

【所属学会】ISCA, IPA, 日本音声学会, 日本言語学会, 日本音響学会, 日本語学会

【学会等の役員・委員】日本音声学会 会長, International Phonetic Association (IPA), council member

【受賞歴】

2012: 日本音声学会優秀論文賞 (「PNLP の音声的形状と言語的機能」, 『音声研究』, 15巻1号)

2012: 国立国語研究所第4回所長賞

2011: 日本音声学会優秀論文賞 (「日本語有声破裂音における閉鎖調音の弱化」, 『音声研究』, 14巻2号)

2010: 国立国語研究所第1回所長賞

【2019年度に参画した共同研究】

- ・コーパス基礎研究「コーパスアノテーションの拡張・統合・自動化に関する基礎研究」: メンバー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」: メンバー

【2019年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (B) 「リアルタイム MRI および WAVE データによる調音音声学の精緻化」, 17H02339: 研究代表者
- ・挑戦的研究 (萌芽) 「定量的分析による条件異音存立基盤の再検討: 音韻論スリム化の試み」, 19K21641: 研究代表者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

前川喜久雄, 西川賢哉

「『日本語話し言葉コーパス』への声質情報付与と予備的分析」, 『言語資源活用ワークショップ2019 発表論文集』, 205–221頁, 2019.9.3, DOI: 10.15084/00002547.

Yoshio Saito, Yurong, and Kikuo Maekawa

“An Investigation into Modern Mongolian Vowel Harmony Using Real-time Magnetic Resonance Imaging”, *Proceedings of ICPHS 2019*, pp. 1431–1434, 2019.9.8.

Kikuo Maekawa

“A real-time MRI study of Japanese moraic nasal in utterance-final position”, *Proceedings of ICPHS 2019*, pp. 1987–1991, 2019.9.9.

Kikuo Maekawa

“Five pieces of evidences suggesting large lookahead in spontaneous monologue”, *Proceedings of DiSS 2019*, pp. 7–10, 2019.9.12, DOI: 10.21862/diss-09.

Hironori Takemoto, Tsubasa Goto, Yuya Hagihara, Sayaka Hamanaka, Tatsuya Kitamura, Yukiko Nota, and Kikuo Maekawa

“Speech organ contour extraction using real-time MRI and machine learning method”, *Proceedings of INTERSPEECH 2019*, pp. 904–908, 2019.9.16.

前川喜久雄

「日本語ラ行子音の調音：リアルタイム MRI による観察」，『日本音声学会第 33 回全国大会予稿集』，98–103 頁，2019.9.29.

玉栄，西川賢哉，前川喜久雄

「モンゴル語アクセント研究のためのデータベースと音節構造」，『日本音声学会第 33 回全国大会予稿集』，210–215 頁，2019.9.29.

Kikuo Maekawa

“Remarks on Japanese /w/”, *ICU Working papers in linguistics*, 10, pp. 45–52, 2020.3.

【講演・口頭発表】

Kikuo Maekawa

“Reconstruction of Articulatory Phonetics by Means of the Real-time MRI Data”, 招待講演, Invited talk at the National Chhiao Tung University, Taiwan, 国立交通大学 (台湾), 2019.11.25.

Kikuo Maekawa

“Development of Spoken Language Resources in NINJAL”, 招待講演, Invited talk at the National Chhiao Tung University, Taiwan, 国立交通大学 (台湾), 2019.11.26.

【研究調査】

- ・『日本語話し言葉コーパス』コアの声質情報アノテーション.
- ・モンゴル語アクセントデータベースの設計・構築.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・国際シンポジウム Linguistic Patterns in Spontaneous Speech 2019 (中央研究院語言学研究所 (台北・台湾) との共催), 中央研究院語言学研究所 (台湾), 2019.11.26–27.

【一般向けの講演・セミナーなど】

Kikuo Maekawa

“Some personal reflections on(national)corpora”, 基調講演, Second ILAS Anual Linguistic Forum: National Language Corpora: Design and Construction, 中央研究院 (台湾), 2019.4.19.

前川喜久雄

「リアルタイム MRI イメージングによる新しい音声学」, 大学共同利用機関シンポジウム (研究者トーグ), 日本科学未来館, 2019.10.20.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・統計数理研究所 評議員
- ・中央研究院語言学研究所 (台湾), Advisory committee member
- ・*Language and Linguistics* (Sage Publishing), editorial board member
- ・*Journal of International Phonetic Association* (Cambridge Univ. Press), editorial board member

【大学院教育・若手研究者育成】

《連携大学院》

- ・東京外国语大学 大学院国際日本学研究院 (教授・クロスアポイント)

《博士論文審査委員》

- ・同志社大学 文化情報研究科: 副査 (2019.10–2020.1)

柏野 和佳子 (かしの わかこ) 研究系 (音声言語研究領域) 准教授

【学位】博士（学術）（東京工業大学, 2016）

【学歴】東京女子大学文理学部日本文学科卒業（1991），東京工業大学大学院総合理工学研究科博士後期課程単位取得満期退学（2015）

【職歴】富士通株式会社システムエンジニア（1991–1998），情報処理振興事業協会（IPA）技術センター研究員（1991–1997），国立国語研究所言語体系研究部第二研究室 研究員（1998），独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 研究員（2001），同 言語資源グループ 主任研究員（2009），人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 准教授（2009），同 研究系（音声言語研究領域）准教授（2017）

【専門領域】日本語学

【所属学会】計量国語学会，言語処理学会，情報処理学会，人工知能学会，日本語学会

【学会等の役員・委員】情報処理学会情報規格調査会 学会試行標準WG3 小委員会主査・学会試行標準専門委員会委員・学会試行標準WG9 小委員会委員，日本特許情報機構 産業日本語研究世話人，言語処理学会 編集委員，計量国語学会 理事

【2019年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」：メンバー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」：メンバー

【2019年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究（C）「学術的文書作成のための文体差のある語の計量的分析」，17K02800：研究代表者
- ・基盤研究（B）「都市サービスの評価の自動生成」，19H04420：研究分担者
- ・基盤研究（B）「会話文への発話者情報の付与によるコーパスの拡張」，15H03212：研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

古賀良彦（監修）柏野和佳子，西原志保，平本智弥，間淵洋子

『前頭葉を刺激！ 50歳からの1分音読でボケない脳になる』，PHP研究所，2019.9.20.

西尾実，岩淵悦太郎，水谷静夫，柏野和佳子，星野和子，丸山直子（編）

『岩波国語辞典 第八版』，岩波書店，2019.11.22.

大村舞，柏野和佳子，山崎誠

『『日本語日常会話コーパス』モニター公開版の語彙』，国立国語研究所，2020.2.10.

《論文・ブックチャプター》

小磯花絵，天谷晴香，居關友里子，白田泰如，柏野和佳子，川端良子，田中弥生，伝康晴，西川賢哉

「『日本語日常会話コーパス』モニター版の設計・評価・予備的分析」，『国立国語研究所論集』，18号，17–33頁，2020.1.31，DOI：10.15084/00002540.

《コーパス・データベース類》

山崎誠，柏野和佳子，宮嶋由美

「BCCWJ図書館サブコーパスの小説に対する話者情報」，2020.3.16.

大村舞，柏野和佳子

「『日本語日常会話コーパス』の語彙表・語数表」，2020.3.19.

大村舞，柏野和佳子

「『名大会話コーパス』の語彙表・語数表」，2020.3.24.

大村舞，柏野和佳子

「『現日研・職場談話コーパス』の語彙表・語数表」，2020.3.24.

小磯花絵，天谷晴香，石本祐一，居關友里子，白田泰如，柏野和佳子，川端良子，田中弥生，伝康晴，西川賢哉，渡邊友香

「『日本語日常会話コーパス』内部公開版 202003」（関係者限定公開），2020.3.30.

【講演・口頭発表】

柏野和佳子

「生の応答詞」, シンポジウムパネル, シンポジウム「話し言葉の多様性」, 国立国語研究所, 2019.8.30.

柏野和佳子

「『日本語日常会話コーパス』モニター公開版に見られる応答表現」, ポスター発表, 言語資源活用ワークショップ 2019, 国立国語研究所, 2019.9.3.

山崎誠, 柏野和佳子, 宮嶋由美

「BCCWJ 小説会話文への話者情報の付与とその活用」, ポスター発表, 言語資源活用ワークショップ 2019, 国立国語研究所, 2019.9.3.

柏野和佳子

「『日本語日常会話コーパス』の構築」, ポスター展示, 計量国語学会第 63 回年次大会, 国立国語研究所, 2019.9.21.

柏野和佳子

「日本語の書き言葉と話し言葉コーパスの構築と活用—学習者コーパスとの比較利用のために—」, 招待講演, 国際シンポジウム「日本語学習者向けコーパスの構築と応用研究」, 北京外国语大学(北京・中国), 2019.10.19.

柏野和佳子

「書き言葉的な語と話し言葉的な語のリスト作成について」, 招待講演, 日本語教育セミナー: 日本語作文で気をつけたい話し言葉的な言葉とは, ハノイ大学(ハノイ・ベトナム), 2020.1.6.

柏野和佳子, 平本智弥, 関洋平

「市民意見収集のための「保育園」に関するツイートからの評価表現の抽出」, ポスター発表, 言語処理学会第 26 回年次大会, オンライン, 2020.3.19.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・シンポジウム「話し言葉の多様性」(主催: 日常会話コーパスプロジェクト), 国立国語研究所, 2019.8.30.

【一般向けの講演・セミナーなど】

柏野和佳子

「Making of 岩国第八版」, 紀伊國屋書店トークイベント, 紀伊國屋書店新宿店, 2019.12.12.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・取材記事: 「チェック: 国語辞典で笑って遊ぶ イベント 150 席が即完売 作り手の仕掛け, ネタに」, 『毎日新聞』夕刊, 2019.9.6.
- ・ニホンゴ探検: 「辞書引きコーナー」
- ・国立国語研究所研究情報誌『国語研 ことばの波止場』研究情報誌編集委員会 編集委員長(vol.6: 2019.9, vol.7: 2020.3)
- ・出前授業: 「語彙力がつく! 辞書の活用」(府中市立府中第二中学校 1 年生), 2019.5.30.
- ・出前授業: 「めざせ! 辞書引きの達人!」(水俣市立水俣第一小学校 6 年生), 2019.6.19.
- ・ことばの教室: 「つくってあそんで辞書カルタ ことば博士になろう」(横須賀市立明浜小学校), 2019.12.18.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

柏野和佳子・山崎誠

「『中納言』講習会」, 第 8 回コーパス利用講習会, 国立国語研究所, 2019.8.30.

山口 昌也 (やまぐち まさや) 研究系 (音声言語研究領域) 准教授

【学位】博士（工学）（東京農工大学, 1998）

【学歴】東京農工大学工学部数理情報工学科卒業（1992），東京農工大学大学院工学研究科博士前期課程電子情報工学専攻修了（1994），東京農工大学大学院工学研究科博士後期課程電子情報工学専攻修了（1998）

【歴歴】東京農工大学工学部 助手（1998），独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 研究員（2001），同 言語資源グループ 研究員（2006），同 主任研究員（2008），人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 助教（2009），同 准教授（2011），同 研究系（音声言語研究領域）准教授（2016）

【専門領域】情報学，知能情報学，科学教育・教育工学，言語学，日本語学

【所属学会】日本教育工学会，日本語学会，言語処理学会，情報処理学会

【受賞歴】

2007：財団法人博報児童教育振興会第1回博報「ことばと教育」研究助成「優秀賞」

【2019年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」：メンバー

【2019年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究(C)「ビデオアノテーションを利用した協同型実習活動支援システムに関する研究」, 17K01105: 研究代表者
- ・基盤研究(B)「「昭和話し言葉コーパス」の構築による話し言葉の経年変化に関する実証的研究」, 16H03426: 研究分担者
- ・基盤研究(C)「日本語教師の内省過程に関する研究—研修における授業データ活用の可能性を探る—」, 17K02862: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

山口昌也

「『Webデータに基づく複合動詞用例データベース』の構築と評価」, 『国立国語研究所論集』, 17号, 15-34頁, 2019.7, DOI: 10.15084/00002222.

《コーパス・データベース類》

山口昌也

「昭和話し言葉コーパス モニター公開データ」(第1版, 全文検索システム用パッケージ作成を担当), <http://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?showa>, 2019.5.9.

山口昌也

「全文検索システム『ひまわり』用『青空文庫』パッケージ」(2回更新), <https://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?aozora>, 2019.10.2 (最終更新日).

山口昌也

「観察支援ツール FishWatchr」(ver.0.9.14-0.9.15.1, 5回更新), <https://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?fw>, 2019.11.22 (最終更新日).

山口昌也

「観察支援ツール FishWatchr Mini」(ver.1.7.1-1.11, 6回更新), <https://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?fwm>, 2020.3.6 (最終更新日).

山口昌也

「全文検索システム『ひまわり』」(ver.1.6.3-1.6.6, ver.1.7a20200127, 7回更新), <https://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?himawari>, 2020.3.12 (最終更新日).

山口昌也

「『日本語日常会話コーパス』内部公開版202003」(検索システム『ひまわり』部分を担当, 関係者限定公開), 2020.3.31.

【講演・口頭発表】

山口昌也

「国会会議録における言語表現の出現頻度に関する時間的変化モデルの検証」, ポスター発表, 言語資源活用ワークショップ 2019, 国立国語研究所, 2019.9.3.

山口昌也, 柳田直美

「観察支援システム FishWatchr Mini におけるビデオ参照機能の実現」, ポスター発表, 日本教育工学会 2019 年秋季全国大会, 名古屋国際会議場, 2019.9.8.

山口昌也, 青木さやか, 森篤嗣

「ビデオアノテーションシステム FishWatchr を用いた日本語教育授業のふりかえりにおける気づきの共有方法の分析」, 日本教育工学会 2020 年春季全国大会, 信州大学, 2020.2.29.

北村雅則, 山口昌也

「モバイルデバイスを用いたプレゼンテーション相互評価と振り返りの信頼性」, 日本教育工学会 2020 年春季全国大会, 信州大学, 2020.2.29.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

山口昌也

「『ひまわり』講習会」, 大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究 第 7 回コーパス利用講習会, 国立国語研究所, 2019.7.27.

山口昌也

「『ひまわり』講習会」, 大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究 第 9 回コーパス利用講習会, 国立国語研究所, 2019.8.31.

石黒圭 (いしぎろ けい) 研究系 (日本語教育研究領域) 教授, 領域代表

【学位】博士 (文学) (早稲田大学, 2008)

【学歴】一橋大学社会学部卒業 (1993), 早稲田大学大学院文学研究科修士課程修了 (1995), 早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導修了 (1999)

【職歴】一橋大学留学生センター 講師 (1999), 同 助教授 (2004), 一橋大学国際教育センター 准教授 (2010), 同 教授 (2013), 人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 准教授 (2015), 同 教授 (2015), 同 研究系 (日本語教育研究領域) 教授, 領域代表 (2016), 同 研究情報発信センター長 (2018)

【専門領域】日本語学, 日本語教育学

【所属学会】専門日本語教育学会, 日本語学会, 日本語教育学会, 日本語文法学会, 日本文体論学会, 表現学会, 早稲田日本語学会

【学会等の役員・委員】表現学会 理事, 日本語学会 評議員, 日本語文法学会 評議員, 専門日本語教育学会 編集幹事

【受賞歴】

2018: 日本語教育学会学会活動貢献賞

2018: 第 16 回国立国語研究所所長賞

2009: 第 7 回日本語教育学会奨励賞

【2019 年度に参画した共同研究】

- ・機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」: リーダー

【2019 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (B) 「文脈情報を用いた日本語学習者の文章理解過程の実証的研究」, 16H03438: 研究代表者
- ・挑戦的研究(萌芽)「クラウドソーシングを用いたビジネス文書のわかりやすさの言語学的研究」, 17K18504: 研究代表者
- ・基盤研究 (C) 「ノートの筆記過程の分析に基づく日本語学習者の講義理解過程の実証的研究」, 17K02879: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「アカデミック・ライティング技術の習得を目指したピア・レスポンスの実証的研究」, 17K02878: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「中国人日本語学習者のビジネス・コミュニケーションの困難点の解明」, 18K00704: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「中国人日本語学習者の言語習得過程の実証的研究と教育的資源の提供研究」, 18K00731: 研究分担者
- ・挑戦的研究 (萌芽) 「日本語聴解用辞書の開発を目的とした日本語学習者の聴解実態の実証的研究」, 17K18503: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

石黒圭 (編), 今村和宏, 烏日哲, 王麗莉, 木谷直之, Nguyen Thi Thanh Thuy, 熊田道子, 胡方方, 佐藤智照, 朱桂栄, 鈴木美加, 砂川有里子, 大工原勇人, Dang Thai Quynh Chi, 野田尚史, 藤原未雪, ポクロフスカ・オリガ, 蒙榎, 築島史恵, 楊秀娥

『日本語教師のための実践, 読解指導』, くろしお出版, 2019.11.21.

石黒圭 (編), 井伊菜穂子, 烏日哲, 赫楊, Nguyen Thi Thanh Thuy, 田中啓行, Dang Thai Quynh Chi, 張秀娟, 布施悠子, 宮内拓也, 蒙榎, 劉金鳳

『文脈情報を用いた文章理解過程の実証的研究—学習者の母語から捉えた日本語理解の姿—』, ひつじ書房, 2020.1.15.

石黒圭 (編), 青木優子, 浅井達哉, 市江愛, 井上雄太, 岩崎拓也, 岩田一成, 赫楊, 喬曉筠, 熊野健志, 佐

野彩子, 布施悠子, ベケシュ・アンドレイ, 蒙榎, 劉金鳳

『ビジネス文書の応用言語学的研究—クラウドソーシングを用いたビジネス日本語の多角的分析—』, ひつじ書房, 2020.2.20.

石黒圭, 烏日哲 (編), 井伊菜穂子, 鎌田美千子, 胡艺群, 胡方方, 田佳月, 黄均鈞, 布施悠子, 村岡貴子 『どうすれば論文, レポートが書けるようになるか—学習者から学ぶピア・レスポンス授業の科学—』, ココ出版, 2020.2.28.

石黒圭

『段落論—日本語の「わかりやすさ」の決め手—』, 光文社, 2020.2.29.

石黒圭 (編), 青木優子, 井伊菜穂子, 岩崎拓也, 赫楊, 田中啓行

『一目でわかる文章術—文章は「見た目」で決まる—』, ぱる出版, 2020.3.13.

《論文・ブックチャプター》

石黒圭

『第6章 語彙の運用』, 石井正彦 (編) 『シリーズ<日本語の語彙> 1 語彙の原理—先人たちが切り開いた言葉の沃野—』, ナカニシヤ出版, 70–82 頁, 2019.10.1.

石黒圭

『第1章 本調査の目的と背景』, 石黒圭 (編) 『文脈情報を用いた文章理解過程の実証的研究—学習者の母語から捉えた日本語理解の姿—』, ひつじ書房, 3–11 頁, 2020.1.15.

石黒圭

『第2章 本調査の枠組み』, 石黒圭 (編) 『文脈情報を用いた文章理解過程の実証的研究—学習者の母語から捉えた日本語理解の姿—』, ひつじ書房, 13–24 頁, 2020.1.15.

石黒圭

『第4章 よい発注文書の言語学的条件—悪文に学ぶ文書改善法—』, 石黒圭 (編) 『ビジネス文書の応用言語学的研究—クラウドソーシングを用いたビジネス日本語の多角的分析—』, ひつじ書房, 59–78 頁, 2020.2.20.

石黒圭

『第1章 ピア・レスponsの授業設計—学習者はどうすれば研究力が身につくのか—』, 石黒圭, 烏日哲 (編) 『どうすれば論文・レポートが書けるようになるか—学習者から学ぶピア・レスポンス授業の科学—』, ココ出版, 1–25 頁, 2020.2.28.

石黒圭

『第2章 文字・表記—書き分けの原理—』, 滝浦真人 (編) 『日本語学入門』, 放送大学教育振興会, 22–38 頁, 2020.3.30.

石黒圭

『第6章 語彙—意味のネットワークと位相—』, 滝浦真人 (編) 『日本語学入門』, 放送大学教育振興会, 88–104 頁, 2020.3.30.

石黒圭

『第11章 文章・談話—三つの捉え方—』, 滝浦真人 (編) 『日本語学入門』, 放送大学教育振興会, 175–192 頁, 2020.3.30.

《コーパス・データベース類》

石黒圭

「日本語学習者の文章理解過程データベース」(データ追加), <https://12-communication.ninjal.ac.jp/> [文章理解研究], 2020.3.

【講演・口頭発表】

石黒圭

「Wikipedia の記事作成による作文授業—法学部の初年次教育におけるピア・レスポンスを用いたアカデミック・ライティング授業の実践—」, シンポジウムパネル, 日本語教育学会春季大会, つくば国際

会議場, 2019.5.25.

石黒圭

「中国語母語話者のフィラー使用はどう変わっていくか—日本語会話における話し手の思考の言語化と聞き手への影響—」, 招待講演, 第18回対照言語行動学研究会「言語行動における認識と理解—聞き手はどう理解/共感するか—」, 青山学院大学, 2019.7.13.

石黒圭

「話し合いで『読む技術』が上がる—接続詞をめぐる学習者のディスカッションから見たピア・リーディング授業の効果—」, ポスター発表, 国立国語研究所オープンハウス 2019, 国立国語研究所, 2019.7.20.

石黒圭

「話し言葉に見る学習者の成長—フィラーを中心に—」, 招待講演, 北京師範大学国際シンポジウム「北京日本語学習者縦断コーパス (B-JAS) の構築と応用研究」, 北京師範大学 (北京・中国), 2019.10.20.

石黒圭

「ベトナム人は日本語をどのように使用しているのか」, 招待講演, 人間文化研究機構・ベトナム国家大学ハノイ校学術交流協定国際シンポジウム「グローバル時代における人文学の日越協力」, ベトナム国家大学ハノイ校 (ハノイ・ベトナム), 2019.11.12.

石黒圭

「中国人日本語学習者の文章理解の方法—固有名詞と接続詞を例に—」, 招待講演, 天津外国语大学日本語学部高度学術シンポジウム, 天津外国语大学 (天津・中国), 2019.11.21.

石黒圭

「本シンポジウムの枠組み」, シンポジウムパネル, シンポジウム「ビジネスと日本語の接点」, 国立国語研究所 (ライブ配信), 2020.3.20.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・国際シンポジウム「北京日本語学習者縦断コーパス (B-JAS) の構築と応用研究」(主催: 日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明), 北京師範大学 (北京・中国), 2019.10.20.
- ・公開シンポジウム「コミュニケーションのための日本語学習辞書を求めて—中国人学習者のための新しい辞書の構想と開発—」(主催: 日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明, 対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法, JSPS 科研費「日本語聴解用辞書の開発を目的とした日本語学習者の聴解実態の実証的研究」, 共催: 北京外国语大学北京日本学研究センター, 国立国語研究所日本語教育研究領域), 北京外国语大学北京日本学研究センター (北京・中国), 2020.1.18.
- ・シンポジウム「ビジネスと日本語の接点」(主催: 日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明, 共催: 一橋大学大学院言語社会研究科, 国立国語研究所 (ライブ配信), 2020.3.20.

【一般向けの講演・セミナーなど】

石黒圭

「修士論文の考え方、博士論文の考え方、修了後の人生の考え方」, 一橋日本語教育研究会, 一橋大学, 2019.4.14.

石黒圭

「日本語オノマトペの世界—ようこそ、ドキドキ・ワクワクの世界へ—」, 北京日本学研究センター公開講座, 北京日本学研究センター (北京・中国), 2019.5.9.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・文化庁文化審議会国語分科会国語課題小委員会委員
- ・東京都教育庁「学びの基盤」プロジェクトチーム委員

【大学院教育・若手研究者育成】

《連携大学院》

- ・一橋大学大学院言語社会研究科連携教授 (主指導担当: 博士課程 10 名, 修士課程 3 名, 大学院研究生 2 名)

《大学院非常勤講師》

- 早稲田大学大学院日本語教育研究科

《博士論文審査委員》

- 一橋大学大学院：主査 3 件, 2019.11 (1 件), 2020.2 (2 件)；副査 1 件, 2020.3

《若手研究者の受入》

- 外来研究員の受け入れ：2 名

宇佐美 まゆみ (うさみ まゆみ) 研究系 (日本語教育研究領域) 教授

【学位】博士 (教育学 (Ed.D)) (ハーバード大学, 1999)

【学歴】千葉大学教育学部教育心理学科 (1, 2 年次在籍), 立教大学文学部心理学科 3 年次編入後卒業 (1981), 慶應義塾大学大学院社会学研究科修士課程修了 (1984), ハーバード大学教育学部大学院人間発達・心理学科修士課程修了 (1991), ハーバード大学教育学部大学院人間発達・心理学科博士課程単位取得修了 (1992)

【職歴】財団法人交流協会台北事務所 日本語教育専門家 (1984), コルビーハーバード大学現代外国語学部 客員講師 (1987), シカゴ大学東アジア言語・文化学部 専任講師 (1988), 昭和女子大学文学部 専任講師 (1993), 東京外国語大学外国語学部 助教授 (1997), 同 教授 (2002), 東京外国語大学大学院地域文化研究科言語教育学講座 教授 (大学院改組に伴う配置換え) (2005), 東京外国語大学総合国際学研究院 教授 (大学院改組に伴う配置換え) (2009), 人間文化研究機構国立国語研究所研究系 (日本語教育研究領域) 教授 (2016)

【専門領域】言語社会心理学, 談話研究, 語用論, 日本語教育学

【所属学会】社会言語科学会, 日本語教育学会, 日本語用論学会, 日本語学会, 日本心理学会, 日本社会心理学会, ヨーロッパ日本語教師会, 言語処理学会, 大学英語教育学会, 日本語プロフェッショナル研究会, 計量国語学会, 大学日本語教員養成課程研究協議会, International Association of Applied Linguistics (IAAL / AILA), International Pragmatics Association (IPrA)

【学会等の役員・委員】日本語ジェンダー学会 評議員, 言語社会心理学研究会 (SPLaD) 代表

【受賞歴】

2019: IEEE Computational Intelligence Society Young Researcher Award (Tomoki Miyamoto, Daisuke Katagami, Yuka Shigemitsu, Mayumi Usami, Takahiro Tanaka, Hitoshi Kanamori, Kazuhiro Fujikake, and Yuki Yoshihara "Design of linguistic behaviors according to driver attributes support agent based on politeness theory")

2018: ファジィシステムシンポジウム 2018 ポスター・デモセッション最優秀発表賞 (宮本友樹, 片上大輔, 重光由加, 宇佐美まゆみ, 田中貴紘, 金森等, 藤掛和広, 吉原祐器 「ポライティス理論に基づく運転支援エージェントの運転者属性と運転状況に応じた言語的振る舞いの設計」)

【2019 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」サブプロジェクト「日本語学習者の日本語使用の解明」: リーダー

【2019 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・科研費基盤研究 (A) 「語用論的分析のための日本語 1000 人自然会話コーパスの構築とその多角的研究」, 18H03581: 研究代表者
- ・科研費挑戦的研究 (萌芽) 「コミュニケーション能力を高める自然会話教材の高度共有化—共同体の構築に向けて—」, 18K18685: 研究代表者
- ・科研費基盤研究 (A) 「海外連携による日本語学習者コーパスの構築および言語習得と教育への応用研究」, 16H01934: 研究分担者
- ・科研費基盤研究 (B) 「公用語の地域差・時代差に関する社会言語学的総合研究」, 16H03420: 研究分担者
- ・科研費基盤研究 (C) 「観光接触場面のツーリスト・トーク: ツーリズムのためのやさしい日本語の開発と実践」, 18K00718: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

宇佐美まゆみ (編)

『自然会話分析への語用論的アプローチ: BTSJ コーパスを利用して』, ひつじ書房, 2020.3.

《論文・ブックチャプター》

宮本友樹, 片上大輔, 重光由加, 宇佐美まゆみ, 田中貴紘, 金森等, 吉原佑器, 藤掛和広

「ポライトネス理論に基づく運転支援エージェントにおける発話の文末スタイルに着目した印象評価」,

『知能と情報』, 3号, 739–744頁, 2019.4, DOI: 10.3156/jsoft.31.3_739.

宇佐美まゆみ

「21世紀礼貌現象研究の可能性—話語礼貌理論的新発展—」, 『日語学習与研究』, 204卷5号, 23–34頁, 2019.5.

宇佐美まゆみ

「談話研究と言語教育—1960年代から現在までの流れ—」, 『ヨーロッパ日本語教育』, 23号, 194–205頁, 2019.10.

宇佐美まゆみ

「「総合的会話分析」に基づく研究—「BTSJ 日本語自然会話コーパス」と「自然会話リソースバンク(NCRB)」との連携に触れながら—」, 『ヨーロッパ日本語教育』, 23号, 206–221頁, 2019.10.

宇佐美まゆみ

「語用論的分析に適した『基本的な文字化の原則 (BTSJ)』開発の背景とその特徴」, 宇佐美まゆみ (編) 『自然会話分析への語用論的アプローチ—BTSJ コーパスを利用して—』, ひつじ書房, 1–16頁, 2020.3.10.

宇佐美まゆみ

「基本的な文字化の原則 (BTSJ) 2019年改訂版」, 宇佐美まゆみ (編) 『自然会話分析への語用論的アプローチ—BTSJ コーパスを利用して—』, ひつじ書房, 17–42頁, 2020.3.10.

《コーパス・データベース類》

宇佐美まゆみ

「BTSJ 日本語自然会話コーパス (トランск립ト・音声) 2020年版」, 2020.3.30.

【講演・口頭発表】

宇佐美まゆみ

“Universality vs. culture specificity in politeness from the viewpoints of discourse politeness theory and language education”, 9th Annual Conference on Foreign Language Teaching and Applied Linguistics (FLTAL), Eriell Prof Education (タシケント・ウズベキスタン), 2019.5.2–3.

山崎誠, 宇佐美まゆみ

「『BTSJ 自然会話コーパス』の形態素解析のための補助ツールの開発について」, 第1回 語用論コーパス科研成果発表会「『語用論的分析のための1000人自然会話コーパス』構築の趣旨と活用法」, 国立国語研究所, 2019.6.29.

重光由加, 宇佐美まゆみ

「インドの観光コミュニケーション会話の収集とその活用法」, 第1回 語用論コーパス科研成果発表会「『語用論的分析のための1000人自然会話コーパス』構築の趣旨と活用法」, 国立国語研究所, 2019.6.29.

大塚容子, 宇佐美まゆみ

「小学生と成人の会話の収集と今後の研究可能性」, 第1回 語用論コーパス科研成果発表会「『語用論的分析のための1000人自然会話コーパス』構築の趣旨と活用法」, 国立国語研究所, 2019.6.29.

宇佐美まゆみ, 山崎誠

「『BTSJ 自然会話コーパス』の全体的な特徴と今後のデータ拡充について」, 第1回 語用論コーパス科研成果発表会「『語用論的分析のための1000人自然会話コーパス』構築の趣旨と活用法」, 国立国語研究所, 2019.6.29.

宇佐美まゆみ

「語用論的分析に適したコーパスとは?」, 第1回 語用論コーパス科研成果発表会「『語用論的分析のための1000人自然会話コーパス』構築の趣旨と活用法」, 国立国語研究所, 2019.6.29.

Tomoki Miyamoto, Daisuke Katagami, Yuka Shigemitsu, Mayumi Usami, Takahiro Tanaka, Hitoshi Kanamori, Yuki Yoshihara, and Kazuhiro Fujikake

“Proposal of Driving Support Agent which Speak Based on Politeness Theory”, International Conference on Human-Computer Interaction 2019 (HCI International 2019), Walt Disney World Swan and Dolphin Resort (Orlando, Florida・米国), 2019.7.26–31.

宇佐美まゆみ

「共同構築型リソースバンク (NCRB) を用いたコミュニケーション教材の作成法と利用法」, CASTEL-J 2019, 釜山外国語大学 (釜山・韓国), 2019.8.10–11.

宇佐美まゆみ

「なぜ自然会話を素材とする Web 教材が言語と文化の教育に最適なのか? —21 世紀の教材のあり方—」, 第 23 回 AJE ヨーロッパ日本語教育シンポジウム, ベオグラード大学 (セルビア), 2019.8.29–31.

陳朝陽, 宇佐美まゆみ

「「BTSJ 日本語自然会話コーパス」における反論ストラテジーの分析」, 基調講演, 言語資源活用ワークショップ 2019, 国立国語研究所, 2019.9.2–4.

重光由加, 大塚容子, 宇佐美まゆみ

「日本語学習者の間接発話の習得: 質問紙調査報告 (2)」, 日本語の間接発話理解: 第一言語, 第二言語, 人工知能における習得メカニズムの認知科学的比較研究研究発表会, 国立国語研究所, 2019.9.22.

宇佐美まゆみ

「「日本語の間接発話理解」研究の方法論的問題点について: 第一言語習得と第二言語習得の比較研究を例として」, 日本語の間接発話理解: 第一言語, 第二言語, 人工知能における習得メカニズムの認知科学的比較研究研究発表会, 国立国語研究所, 2019.9.22.

宇佐美まゆみ

「ディスコース・ポライトネス理論の新たな展開」, 招待講演, 東海大学文学部研究会 FD 講演会, 東海大学, 2019.10.19.

宇佐美まゆみ

「『BTSJ 日本語自然会話コーパス 2018 年版』の活用法の紹介と終助詞「ね」, 「よ」, 「よね」の使用実態の分析」, 日本語学会 2019 年度秋季大会, 東北大学, 2019.10.26–27.

宇佐美まゆみ

「自然会話の教材化と NCRB (Natural Conversation Resource Bank)」, シンポジウムパネル (招待), 第 1 回日本語プロフェッショナル研究学会国際大会 (第 12 回 OPI 国際シンポジウム 2019), 大連外国语大学 (大連・中国), 2019.11.1.

宇佐美まゆみ

「共同構築型の自然会話を素材とする WEB 教材 (NCRB) について」, シンポジウムパネル (招待), 元智大学特別講義, 元智大学 (台湾), 2019.11.11–12.

宇佐美まゆみ

「対話システム研究と談話研究の接点—言語研究から貢献できることは (パネルセッション①「対話システム構築と談話研究・日本語教育の接点」)」, シンポジウムパネル (招待), 元智大学特別講義, 元智大学 (台湾), 2019.11.11–12.

Mayumi Usami

“New version of Discourse Politeness Theory: Focusing on the concepts of “face-balance principle” and “time sequence””, Conference 2019 New Zealand Linguistic Society, University of Canterbury (Christchurch・ニュージーランド), 2019.11.28–29.

宇佐美まゆみ

「自然会話の教材化と共同構築型 WEB 教材 NCRB (Natural Conversation Resource Bank)」, 第 27 回国学院大学日本語教育研究会, 國學院大學, 2019.12.7.

宇佐美まゆみ

「共同構築型多機能データベース NCRB (Natural Conversation Resource Bank) 構築の趣旨と教材作成機能の使い方」, 招待講演, ニューヨーク大学特別講義, ニューヨーク大学 (ニューヨーク・米国), 2020.1.22.

宇佐美まゆみ

「共同構築型多機能データベース NCRB (Natural Conversation Resource Bank) 構築の趣旨と教材作成機能の使い方」, 招待講演, カリフォルニア大学サンタクラーズ校特別講義, カリフォルニア大学サンタクラーズ校 (カリフォルニア・米国), 2020.1.24.

宇佐美まゆみ

「共同構築型多機能データベース NCRB (Natural Conversation Resource Bank) 構築の趣旨と教材作成機能の使い方」, 招待講演, ハワイ大学特別講義, ハワイ大学 (ハワイ・米国), 2020.1.27.

Iori Kasahara, Mayumi Usami, and Minoru Karasawa

“Stereotype Priming Effects on Language Use: Applying Morphological Analysis on Conversational Data”, ポスター発表, Society for Personality and Social Psychology Convention 2020, Hyatt Regency, New Orleans (New Orleans・米国), 2020.2.27.

宇佐美まゆみ

「『共同構築型多機能データベース NCRB (Natural Conversation Resource Bank)』構築の趣旨と自然会話を素材とする教材の意義」, 招待講演, ハーバード大学日本語教育研究会, ハーバード大学 (ケンブリッジ・米国), 2020.3.4.

宇佐美まゆみ

「『共同構築型多機能データベース NCRB (Natural Conversation Resource Bank)』の教材作成機能を使った「自然会話を素材とする教材」の試作」, シンポジウムパネル (招待), ハーバード大学日本語教育研究会, ハーバード大学 (ケンブリッジ・米国), 2020.3.4.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・第1回 語用論コーパス科研成果発表会 「『語用論的分析のための1000人自然会話コーパス』構築の趣旨と活用法」 (主催: 学習者コミュニケーション, 共催: 言語社会心理学研究会, 国立国語研究所, 2019.6.29.)

【その他の学術的・社会的活動】

- ・国立国語研究所外来研究員の受け入れ (1名)
- ・*Language standards, norms, and variation in Asia*: 査読協力
- ・九州地区国立大学間連携教育系・文系論文集編集委員会: 査読協力
- ・『アジア・アフリカ言語文化研究』(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所): 査読協力

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

宇佐美まゆみ

「『総合的会話分析』による人間の相互作用の分析」, 第11回, 第12回 BTSJ 活用方法講習会, 国立国語研究所, 2019.5.18.

宇佐美まゆみ

「『総合的会話分析』による人間の相互作用の分析」, 第13回, 第14回 BTSJ 活用方法講習会, 名古屋大学, 2019.6.2.

宇佐美まゆみ

「日本語の自然会話とディスコース・ポライトネス理論」, 第33回 NINJAL チュートリアル「日本の言語の多様性 / 日本語の自然会話とディスコース・ポライトネス理論」, 東吳大学 (台湾), 2019.11.10.

《大学院非常勤講師》

- ・國學院大學大学院

野田 尚史 (のだ ひさし) 研究系 (日本語教育研究領域) 教授, 研究主幹

【学位】博士 (言語学) (筑波大学, 1999)

【学歴】大阪外国語大学外国語学部イスパニア語学科卒業 (1979), 大阪外国語大学大学院外国語学研究科日本語学専攻修士課程修了 (1981), 大阪大学文学研究科日本学専攻博士後期課程中退 (1981)

【歴歴】大阪外国語大学国語学部 助手 (1981), 筑波大学文芸・言語学系 講師 (1985), 大阪府立大学総合科学部 講師 (1991), 同 助教授 (1993), 同 教授 (1999), 大阪府立大学人間社会学部 教授 (2005), 人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 教授 (2012), 同 センター長 (2015–2016), 同 研究系 (日本語教育研究領域) 教授, 研究主幹 (2016)

【専門領域】日本語学, 日本語教育学

【所属学会】日本語学会, 日本語教育学会, 日本言語学会, 日本語文法学会, 社会言語科学会, 言語処理学会, 計量国語学会, 日本語用論学会, 関西言語学会, 専門日本語教育学会, 韓國日本語學會, ヨーロッパ日本語教師会, American Association of Teachers of Japanese

【学会等の役員・委員】日本語学会 評議員, 日本語教育学会 審査・運営協力員, 日本言語学会 常任委員・評議員, 日本語文法学会 評議員, 社会言語科学会 研究大会発表賞選考委員, 言語系学会連合運営委員, 文化審議会 委員 (国語分科会), 文化庁「日本語教育人材養成・研修カリキュラム等開発事業」企画・評価会議 委員, 文化庁「令和元年度日本語教育総合調査」における有識者会議 委員, 日本語教育能力検定試験実施委員会 委員, 日本放送協会放送文化研究所放送用語委員会 委員

【受賞歴】

2006: 第4回日本語教育学会奨励賞 (日本語教育学会)

【2019年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」サブプロジェクト「日本語学習者の日本語理解の解明」: リーダー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」文法研究班「とりたて表現」: リーダー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」: メンバー

【2019年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・挑戦的研究 (萌芽) 「日本語聴解用辞書の開発を目的とした日本語学習者の聴解実態の実証的研究」, 17K18503: 研究代表者
- ・基盤研究 (A) 「海外連携による日本語学習者コーパスの構築および言語習得と教育への応用研究」, 16H01934: 研究分担者
- ・基盤研究 (B) 「文脈情報を用いた日本語学習者の文章理解過程の実証的研究」, 16H03438: 研究分担者
- ・基盤研究 (B) 「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究: 複文を中心に」, 15H03210: 研究分担者
- ・基盤研究 (B) 「自閉症を中心とした発達障害児の音韻体系の言語学・音声学的研究」, 18H00666: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「日本語学習者の小説読解困難点に関する実証的研究と読解支援教材開発のための研究」, 17K02880: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

野田尚史, 追田久美子 (編)

『学習者コーパスと日本語教育研究』, くろしお出版, 2019.5.30.

野田尚史 (編)

『日本語と世界の言語のとりたて表現』, くろしお出版, 2019.11.16.

田窪行則, 野田尚史 (編)

『データに基づく日本語のモダリティ研究』, くろしお出版, 2020.3.22.

《論文・ブックチャプター》

野田尚史

「限定を表すとりたて表現が使われる場面と主体性・主観性—日本語とスペイン語の対照研究—」, 澤田治美, 仁田義雄, 山梨正明 (編)『場面と主体性・主観性』, ひつじ書房, 17–38 頁, 2019.4.

野田尚史

「読んで理解する過程の解明—「読解コーパス」の開発—」, 野田尚史, 迫田久美子 (編)『学習者コーパスと日本語教育研究』, くろしお出版, 23–42 頁, 2019.5.30.

野田尚史, 島津浩美

「中国語漢字による日本語音声表記」, 『国立国語研究所論集』, 17 号, 75–100 頁, 2019.7, DOI: 10.15084/00002225.

野田尚史

「とりたて表現の対照研究の方法」, 野田尚史 (編)『日本語と世界の言語のとりたて表現』, くろしお出版, 3–20 頁, 2019.11.16.

野田尚史

「第 3 章 文法の読解指導—文の構造をとらえるための読解指導—」, 石黒圭 (編)『日本語教師のための実践・読解指導』, くろしお出版, 46–64 頁, 2019.12.27.

野田尚史

「主題・とりたて表現とモダリティの呼応—日本語とスペイン語の対照研究—」, 田窪行則, 野田尚史 (編)『データに基づく日本語のモダリティ研究』, くろしお出版, 179–197 頁, 2020.3.22.

野田尚史

「日本語学習者の読解過程の研究方法と研究課題」, 野田尚史 (編)『日本語学習者の読解過程』, ココ出版, 5–24 頁, 2020.3.31.

《総説・解説など》

野田尚史

「従属節研究の課題」, *KLS Selected Papers*, 1 号, 206–211 頁, 2019.6.8.

《コーパス・データベース類》

野田尚史, 任ジェヒ, 賈黎黎, 桑原陽子, 近藤めぐみ, 邵艶紅, 白石実, 中島晶子, 花田敦子, 福田晶子, 藤原未雪, 向井裕樹, 村田裕美子, 守時なぎさ, チョウ・ミンヨン, 王雪竹

「日本語非母語話者の読解コーパス」(データ追加), <https://www2.ninjal.ac.jp/jsl-rikai/dokkai/index.html>, 2020.3.

野田尚史, 阪上彩子, 島津浩美, 中尾有岐

「日本語非母語話者の聴解コーパス」, <https://www2.ninjal.ac.jp/jsl-rikai/choukai/index.html>, 2020.3.

野田尚史, 桑原陽子, 北浦百代, 任ジェヒ, 加藤陽子, 松岡洋子, 吉本由美, 小西円, 山口美佳, 王麗莉, 塩田寿美子, 橋本佳子, 藤井明子, 丹羽順子, 蘇鉢甯, 山本晃彦, 花田敦子

「日本語学習者用読解教材「日本語を読みたい！」」(教材追加), <http://www.nihongo-tai.com/japanese/yomu/>, 2020.3.

野田尚史, 松崎寛, 太原ゆか, 阪上彩子, 萩原章子, 島津浩美, 中山英治, 奥野由紀子, 吉川景子, 中尾有岐, 小池悠加, 日比伊奈穂, 高山弘子, 村田裕美子, 久保輝幸, 首藤美香, 笠井恵子, 韓蘭靈, 鋤野亜弓, 梅澤薰, 松本妙子, 横山咲子

「日本語学習者用聴解教材「日本語を聞きたい！」」(教材追加), <http://www.nihongo-tai.com/japanese/kiku/>, 2020.3.

【講演・口頭発表】

野田尚史

「現代語から出発する古代語との対照文法の可能性」, シンポジウムパネル, 日本語学会 2019 年度春季大会, 甲南大学, 2019.5.19.

野田尚史

「日本語学習者の読解コーパスの調査方法と分析結果」, 招待講演, 講演会・ワークショップ「日本語非母語話者の読解コーパスからわかること」, 国際基督教大学, 2019.7.6.

野田尚史

「日本語学習者の読解コーパスを使ってみよう」, ワークショップパネル, 講演会・ワークショップ「日本語非母語話者の読解コーパスからわかること」, 国際基督教大学, 2019.7.6.

野田尚史

「これからの日本語教育」, 招待講演, 第 15 回日本語教育機関教員と留学生進学先教育機関の教育担当者との研究協議会, 日本学生支援機構大阪日本語教育センター, 2019.7.20.

野田尚史, 井戸美里

「日本語と世界の言語のとりたて表現」, ポスター発表, 国立語研究所オープンハウス 2019, 国立国語研究所, 2019.7.20.

野田尚史

「日本語と世界の言語のとりたて表現」, 招待講演, 国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」研究発表会, しいのき迎賓館, 2019.7.28.

高澤美由紀, 野田尚史

「スペイン語アルファベットによる日本語音声表記」, SELE2019 (Seminario de Lingüística Española de Japón), つま恋リゾート彩の郷, 2019.8.29.

野田尚史, 村田裕美子, 中島晶子, 白石実

「ヨーロッパの日本語学習者の辞書使用の問題点とその指導」, シンポジウムパネル, 第 23 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム, ベオグラード大学 (ベオグラード・セルビア), 2019.8.30.

野田尚史

「理想的な日本語学習用辞書を求めて—母語話者と非母語話者の協力の必要性—」, シンポジウムパネル, 上海外国语大学創立 70 周年記念「新しい時代における日本言語文学研究フォーラム」, 上海外国语大学 (上海・中国), 2019.11.17.

野田尚史

「コミュニケーションのための日本語教育に必要な文法を見直す」, 招待講演, シンガポール日本語教師の会 2019 年日本語教育冬季セミナー, シンガポール国立大学 (シンガポール), 2019.12.2-3.

野田尚史

「コミュニケーションのための日本語学習辞書の構想」, 基調講演, 公開シンポジウム「コミュニケーションのための日本語学習辞書を求めて—中国人学習者のための新しい辞書の構想と開発—」, 北京日本学研究センター (北京・中国), 2020.1.18.

【一般向けの講演・セミナーなど】

野田尚史

「外国人の皆さんに日本語でどう接するか? 2019—やさしい日本語の使用と相手の立場に立った理解—」, 福岡県地域日本語教室ボランティアスキルアップ講座, 八幡西生涯学習総合センター, 2019.10.19.

野田尚史

「外国人の皆さんに日本語でどう接するか? 2019—やさしい日本語の使用と相手の立場に立った理解—」, 福岡県地域日本語教室ボランティアスキルアップ講座, こくさいひろば, 2019.10.20.

野田尚史

「外国人の皆さんに日本語でどう接するか? 2019—やさしい日本語の使用と相手の立場に立った理解—」,

福岡県地域日本語教室ボランティアスキルアップ講座, えーるピア久留米, 2019.10.21.

野田尚史

「外国人材の受入れ・共生のための日本語」, 日本語ボランティア研修会, 仙台国際センター, 2019.11.30.

野田尚史

「日本語教員の公的資格について」, 日本大学日本語教育コース開設記念人文科学研究所総合講演会, 日本大学, 2020.2.6.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

野田尚史

「日本語の文はどのような成分でできているか—文の基本的な構造—」, 国立国語研究所日本語学講習会, ヤンゴン外国語大学 (ヤンゴン・ミャンマー), 2020.2.9.

野田尚史

「「は」と「が」と「も」はどう違うか—主題ととりたて—」, 国立国語研究所日本語学講習会, ヤンゴン外国語大学 (ヤンゴン・ミャンマー), 2020.2.9.

野田尚史

「日本語の文はどのような成分でできているか—文の基本的な構造—」, 国立国語研究所日本語学講習会, マンダレー外国語大学 (マンダレー・ミャンマー), 2020.2.12.

野田尚史

「「は」と「が」と「も」はどう違うか—主題ととりたて—」, 国立国語研究所日本語学講習会, マンダレー外国語大学 (マンダレー・ミャンマー), 2020.2.12.

《大学院非常勤講師 (集中講義)》

- ・大阪府立大学大学院
- ・神戸大学大学院

野山 広 (のやま ひろし) 研究系 (日本語教育研究領域) 准教授

【学位】修士 (文学) (早稲田大学, 1988), 修士 (日本語応用言語学) (モナシュ大学, 1995), 修士 (教育学) (早稲田大学, 1996)

【学歴】早稲田大学卒業 (1985), 早稲田大学大学院文学研究科教育学専攻修士課程修了 (1988), 豪州モナシュ大学大学院日本研究科日本語応用言語学専攻修了 (1995), 早稲田大学大学院教育学研究科国語教育専攻修士課程修了 (1996), 早稲田大学大学院文学研究科日本語・日本文化専攻博士後期課程単位取得退学 (2001)

【職歴】文化庁文化部国語課 専門職員 (日本語教育調査官) (1997), 独立行政法人国立国語研究所日本語教育部門第二領域 主任研究員 (2004), 同 領域長 (2005), 同 整備普及グループ長 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 上級研究員 (2009), 同 准教授 (2010), 同 研究系 (日本語教育研究領域) 准教授 (2016)

【専門領域】応用言語学, 日本語教育学, 基礎教育保障学, 社会言語学, 多文化・異文化間教育, 言語政策・計画研究

【所属学会】日本語教育学会, 基礎教育保障学会, 異文化間教育学会, 移民政策学会, 社会言語科学会, ヨーロッパ日本語教師会

【学会等の役員・委員】基礎教育保障学会 常任理事・副会長, 日本語教育学会 編集委員会委員 (副委員長), 異文化間教育学会 理事, 多文化社会専門職機構 代表理事, 日本語プロフィシェンシー研究会 監事, 港区国際化推進アドバイザーミーティング 委員長 (座長), 立川市第4次多文化共生推進プラン検討会議 会長

【2019年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」サブプロジェクト「日本語学習者の日本語使用の解明」: メンバー

【2019年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (A) 「基礎教育を保障する社会の基盤となる日本語リテラシー調査の開発に向けた学際的研究」, 19H00627: 研究代表者
- ・基盤研究 (A) 「海外連携による日本語学習者コーパスの構築および言語習得と教育への応用研究」, 16H01934: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「夜間中学校の有用性と存在意義に関する学際的研究」, 17K04860: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

馬渢仁, 工藤和宏, 野山広

「異文化間教育研究における政策と研究者の役割—研究の総括—(特定課題研究)」, 『異文化間教育』, 51号, 1-21頁, 2020.3.

《コーパス・データベース類》

迫田久美子, 佐々木藍子, 須賀和香子, 細井陽子, 野山広, 他

「I-JAS」=「多言語母語の日本語学習者横断コーパス (International Corpus of Japanese as a Second Language)」, <https://chunagon.ninjal.ac.jp/static/ijas/about.html>, 2020.3.30.

【講演・口頭発表】

野山広, カルダー淑子

「補習授業校における母語(継承語)支援—グローカルな言語教育の実践に向けて」, 第23回AJE ヨーロッパ日本語教育シンポジウム, ベオグラード大学(ベオグラード・セルビア), 2019.8.29-31.

野山広, 福島青史, カルダー淑子

「リテラシーの力を支える学びとネットワーク～言語環境や連携・協力の可能性に焦点を当てながら」, パネル発表, EJHIB2019—社会・人・ことばの動態性と統合—(同時開催 第二回南米日本語教育シンポジウム/V Encontro de Pós-Graduandos em Estudos Japoneses), ジャパンハウス(サンパウロ・ブ

ラジル), 2019.9.5.

野山広

「北京日本語学習者縦断コーパス (B-JAS) の構築と成果報告」, 招待講演, 国際シンポジウム「日本語学習者向けコーパスの構築と応用研究」, 北京日本学研究センター (北京・中国), 2019.10.19.

野山広

「学習者に対する縦断的ビリーフ調査の結果から見えてきたこと」, 招待講演, 国際シンポジウム「北京日本語学習者縦断コーパス (B-JAS) の構築と応用研究」, 北京師範大学 (北京・中国), 2019.10.20.

野山広

「複言語話者の加齢による第二言語の摩滅に関する縦断研究」, ポスター発表, 日本語教育学会秋季大会, くにびきメッセ, 2019.11.24.

野山広

「地域の住民として学び, 協働し, 貢献するということ—縦断調査の結果から」, 招待講演, 第 14 回 NINJAL フォーラム「私の日本語の学び方」, 一橋講堂, 2019.11.30.

【研究調査】

- ・北京師範大学, 北京日本学研究センターとの協働による縦断調査 (中国・北京師範大学), 2019.5.
- ・OPI (Oral Proficiency Interview) の枠組みを活用した, 日本語学習者の会話力, 言語生活等に関する縦断調査のフォローアップ調査等 (秋田県能代市), 2020.2.

【一般向けの講演・セミナーなど】

野山広

「外国につながる子どもの教育の現状」, 日本語ボランティア入門講座, 西東京市・田無庁舎, 2019.5.16.

野山広

「これまでの地域日本語教育の課題と今後の展望」, 兵庫県地域日本語教育シンポジウム 2019, 神戸市勤労会館, 2019.10.7.

野山広

「地域日本語教育の推進について市町が果たすべき役割について」, 兵庫県地域日本語教育シンポジウム 2019, 神戸市勤労会館, 2019.10.7.

野山広

「複言語・複文化家族における対話と日本語リテラシー～その重要性を確認しながら～」, 国際交流基金シドニー日本文化センター講演会, シドニー日本文化センター (シドニー・オーストラリア), 2019.11.9.

野山広

「リテラシーアクションを伸ばす言語教育 (「リテラシー教育が受けられなかつた場合の弊害 (事例紹介)」及び「リテラシーの定義、課題について」)」, AJE (ヨーロッパ日本語教師会) Zoom 研修, オンライン (欧洲全土と日本を Zoom で結んで), 2019.11.17.

野山広

「日本語と母語の狭間で～言語習得と喪失」, 難民のための日本語教育初任教師研修講座 (2019 年度文化庁委嘱事業), (公社) 国際日本語普及協会 (AJALT) 教室, 2019.12.14.

野山広

「共生社会を支える地域の住民として学び、協働し、貢献するということ～入管法の改正を踏まえつつ～」, 自治体国際化協会・日野市研修「地域日本語教育の展開と多文化共生社会」, 日野市 生活・保険センター, 2020.1.25.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・取材ニュース:「70 年ぶりの識字調査実施へ 未就学者や外国籍の増加受け」, NHK NEWS 7, 2019.6.10,
関連記事と動画:『NHK NEWS WEB』, 『NHK WORLD-JAPAN』(英語版)

【大学院教育・若手研究者育成】

《大学院非常勤講師》

- 首都大学東京大学院
- 東海大学大学院

福永 由佳 (ふくなが ゆか) 研究系 (日本語教育研究領域) 研究員

【学位】 博士 (日本語教育) (早稲田大学, 2019)

【学歴】 金沢女子大学文学部英米文学科卒業 (1991), ウィスコンシン大学東アジア語学文学学科修士課程修了 (1993), 早稲田大学大学院日本語教育研究科博士後期課程研究指導終了により退学 (2018)

【職歴】 国立国語研究所日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室 研究員 (1998), 独立行政法人国立国語研究所日本語教育部門第一領域 研究員 (2001), 同 日本語教育基盤情報センター学習項目グループ 研究員 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 研究員 (2009), 研究系 (日本語教育研究領域) 研究員 (2016)

【専門領域】 日本語教育学, 社会言語学, 多言語使用, 識字, 移民に対する言語教育政策

【所属学会】 日本語教育学会, 社会言語科学会, 日本言語政策学会, 言語管理研究会

【学会等の役員・委員】 言語管理研究会接触場面分科会 運営委員

【2019年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」: メンバー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」: メンバー

【講演・口頭発表】

福永由佳

「日本の多言語化と言語景観—言語景観のメッセージを読み解く—」, ポスター発表, 国立国語研究所オープンハウス, 国立国語研究所, 2019.7.20.

福永由佳

「「生活者としての外国人」の日本語学習—調査から見える多様な学び—」, 招待講演, 第14回 NINJAL フォーラム「私の日本語の学び方」, 一橋講堂, 2019.11.30.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・令和元年度日本語教師セミナー (国内)「顕在化する多言語社会日本と日本語教育」(主催: 学習者コミュニケーション), 立川総合研究棟, 2020.2.15.
- ・多様化する接触場面への質的アプローチ (その2) 日本の外国人移住者の通時性と共時性からみる接触場面の言語問題 (主催: 言語管理研究会「接触場面と言語管理」分科会), 一橋大学, 新型コロナウィルスの感染拡大のため中止.

【一般向けの講演・セミナーなど】

福永由佳

「日本の多言語状況—在日パキスタン人コミュニティの調査からわかること—」, 中央大学FLP国際協力プログラム, 中央大学, 2019.5.17.

福永由佳

「外国人の社会参加と日本語能力—在日パキスタン人コミュニティの調査からわかること—」, みんなで考えよう石川の未来—外国人住民、日本人住民一人一人が連携し地域のための行動するには—, 石川県国際交流協会, 2019.6.8.

福永由佳

「新たな社会を創る日本語教育の役割—多文化多言語に開かれた教育をめざして」, 石川県国際交流協会テーマ別研修会, 石川県国際交流協会, 2019.12.15.

福永由佳

「日本語学習者の多言語使用のリアリティと対峙する日本語教育」, 令和元年度日本語教師セミナー (国内), 立川総合研究棟, 2020.2.15.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・『言語文化教育研究』査読協力

浅原 正幸 (あさはら まさゆき) コーパス開発センター教授

【学位】博士（工学）（奈良先端科学技術大学院大学, 2003）

【学歴】京都大学総合人間学部基礎科学科卒業（1998）, 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究所博士前期課程修了（2001）, 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究所博士後期課程短期修了（2003）

【職歴】奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究所 助手・助教（2004）, 国立国語研究所コーパス開発センター 特任准教授（2012）, 同 言語資源研究系 准教授（2014）, 同 コーパス開発センター 准教授（2016）, 同 コーパス開発センター 教授（2019）

【専門領域】自然言語処理

【所属学会】言語処理学会, 言語学会, 日本語学会

【学会等の役員・委員】情報処理学会自然言語処理研究会運営委員（-2019.3）, 言語処理学会編集委員（-2018.9）, 言語処理学会 第25回年次大会プログラム委員

【受賞歴】

- 2020: 言語処理学会第26回年次大会言語資源賞: 浅原正幸, 加藤祥「BERTed-BCCWJ: 多層文脈化単語埋め込み情報を付与した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』データ」（言語資源協会・言語処理学会）
- 2019: 言語処理学会論文誌『自然言語処理』2018年度論文賞: 浅原正幸「名詞句の情報の状態と読み時間について」
- 2019: 言語処理学会第25回年次大会言語資源賞: 浅原正幸「クラウドソーシングによる単語親密度の推定」（言語資源協会・言語処理学会）
- 2014: 言語処理学会論文誌『自然言語処理』2013年度論文賞: 吉川克正, 浅原正幸, 松本裕治「Markov Logicによる日本語述語項構造解析」
- 2011: Best paper award of the 7th International Conference on Natural Language Processing and Knowledge Engineering: Yanyan Luo, Masayuki Asahara, and Yuji Matsumoto “Dual Decomposition for Predicate-Argument Structure Analysis”
- 2010: The Best Paper Award of the SMBM2010 (the Fourth International Symposium on Semantic Mining in Biomedicine): Katsumasa Yoshikawa, Tsutomu Hirao, Sebastian Riedel, Masayuki Asahara, and Yuji Matsumoto “Coreference Based Event-Argument Relation Extraction on Biomedical Text”
- 2008: 言語処理学会第14回年次大会優秀発表賞: 岩立将和, 浅原正幸, 松本裕治「トーナメントモデルを用いた日本語係り受け解析」
- 2003: 平成15年度情報処理学会山下記念研究賞: 浅原正幸「日本語固有表現抽出における冗長的な形態素解析の利用」

【2019年度に参画した共同研究】

- ・コーパス基礎研究「コーパスアノテーションの拡張・統合・自動化に関する基礎研究」: リーダー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」: メンバー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」: メンバー
- ・高エネルギー加速器研究機構: 平成31年度機構間連携・異分野連携研究プロジェクト「知性と認識の情報神経物理学」: 共同研究員
- ・共同研究協定: 株式会社ワークスアプリケーションズ「国語研ウェブコーパスを用いた分散表現データ構築」
- ・共同研究協定: 株式会社リクルート「日本語版Universal Dependenciesに基づく日本語依存構造解析モデルの研究開発」

【2019年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究(A)「日本語歴史コーパスに対する統語・意味情報アノテーション」, 17H00917: 研究代表者
- ・挑戦的研究(萌芽)「コーパスからの比喩表現収集とその分析」, 18K18519: 研究代表者

- ・基盤研究 (C) 「文体分析を目的としたコーパスの文書情報拡張及びその利用」, 18K00634: 研究分担者
- ・新学術領域研究 (研究領域提案型) 「言語による時間生成」, 18H05521: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「修辞機能と脱文脈化の観点からの日常談話テキスト分析」, 19K00588: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「多義語に対するプロトタイプ義の量的分析—クラウドソーシングによる大規模調査—」, 19K00591: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「シソーラスの整備・拡張のための分類基準の作成と活用」, 19K00655: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

浅原正幸, 加藤祥

「読み時間と統語・意味分類」, 『認知科学』, 26巻2号, 219–230頁, 2019.6, DOI: 10.11225/jcss.26.219.

浅原正幸

「日本語の読み時間と節境界情報—主辞後置言語における wrap-up effect の検証」, 『自然言語処理』, 26巻2号, 301–328頁, 2019.6, DOI: 10.5715/jnlp.26.301.

鈴木類, 古宮嘉那子, 浅原正幸, 佐々木稔, 新納浩幸

「概念辞書の類義語と分散表現を利用した教師なし all-words WSD」, 『自然言語処理』, 26巻2号, 361–380頁, 2019.6, DOI: 10.5715/jnlp.26.361.

加藤祥, 浅原正幸, 山崎誠

「分類語彙表番号を付与した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の書籍・新聞・雑誌データ」, 『日本語の研究』, 15巻2号, 134–141頁, 2019.8, DOI: 10.20666/nihongonokenkyu.15.2_134.

浅原正幸

「単語埋め込みに基づくサプライザル」, 『自然言語処理』, 26巻3号, 635–652頁, 2019.9, DOI: 10.5715/jnlp.26.635.

浅原正幸, 小野創, 宮本エジソン正

「BCCWJ-EyeTrack—『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する読み時間付与とその分析—」, 『言語研究』, 156号, 67–96頁, 2019.9, DOI: 10.11435/gengo.156.0_67.

Hanae Koiso, Masayuki Asahara, Salvatore Carlino, Ken'ya Nishikawa, Kazuki Aoyama, Yuichi Ishimoto, Aya Wakasa, Michiko Watanabe, Yoshimi Yoshikawa, Nobuko Kibe, and Kikuo Maekawa

“Speech corpora in NINJAL, Japan demonstration of corpus concordance systems: Chunagon and Kotonoha”, *the 3rd International Symposium on Linguistic Patterns in Spontaneous Speech*, pp. 8–12, 2019.11.21.

Masayuki Asahara

“Word Familiarity Rate Estimation by Bayesian Linear Mixed Model”, *Proceedings of Aggregating and analysing crowdsourced annotations for NLP (AnnoNLP)*, pp. 6–14, 2019.11, DOI: 10.18653/v1/D19-5902.

浅原正幸

「Bayesian Linear Mixed Modelによる単語親密度推定と位相情報付与」, 『自然言語処理』, 27巻1号, 133–150頁, 2020.3, DOI: 10.5715/jnlp.27.133.

《コーパス・データベース類》

Megagon Labs

「GiNZA」, <https://megagonlabs.github.io/ginza/>, 2019.4.2. (株式会社リクルートからのプレスリリース: https://www.recruit.co.jp/newsroom/2019/0402_18331.html)

【講演・口頭発表】

加藤祥, 浅原正幸, 山崎誠

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』新聞・書籍・雑誌データの助動詞に対する用法情報付与」, ポスター発表, 日本語学会2019年度春季大会, 甲南大学, 2019.5.18–19.

浅原正幸

「クラウドソーシング結果の可視化手法と統計処理」, 日本言語学会第 158 回大会, 一橋大学, 2019.6.22.
西内沙恵, 加藤祥, 浅原正幸

「語義間類似度の双方向評定に基づくプロトタイプ的意味の解明—クラウドソーシングを用いた量的調査による多義的形容詞分析—」, 日本認知言語学会第 20 回全国大会, 関西学院大学, 2019.8.4–5.
加藤祥, 西内沙恵, 浅原正幸

「多義語用例の類似度による語義の分類:「遠い」と「近い」を例に」, ポスター発表, 日本認知言語学会第 20 回全国大会, 関西学院大学, 2019.8.4–5.

Rei Kikuchi, Sachi Kato, and Masayuki Asahara

“Collecting figurative expressions using indicators and semantic tagged Japanese corpus”, ポスター発表, the Fifteenth International Cognitive Linguistics Conference (ICLC-15), 関西学院大学, 2019.8.6–11.

Sachi Kato and Masayuki Asahara

“Exploring Metaphorical Expressions in Japanese newspaper-article corpora”, ポスター発表, the Fifteenth International Cognitive Linguistics Conference (ICLC-15), 関西学院大学, 2019.8.6–11.

吳佩珣, 近藤森音, 森山奈々美, 萩原亜彩美, 加藤祥, 浅原正幸

「『分類語彙表』と『岩波国語辞典第五版タグ付きコーパス 2004』の対応表」, ポスター発表, 言語資源活用ワークショップ 2019, 国立国語研究所, 2019.9.2–4.

加藤祥, 森山奈々美, 浅原正幸

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』書籍サンプルの NDC 情報増補」, ポスター発表, 言語資源活用ワークショップ 2019, 国立国語研究所, 2019.9.2–4.

加藤祥, 浅原正幸

「視線走査実験に基づく情報の表示順序の分析」, ポスター発表, 日本認知科学会第 36 回大会, 静岡大学, 2019.9.5–7.

Takuya Miyauchi and Masayuki Asahara

“Statistical Approaches to a Correlation between Information Structure and Word Orders of Noun Phrases in Japanese”, 16th International Conference of the Pacific Association for Computational Linguistics, ヒルトンハノイ (ハノイ・ベトナム), 2019.10.11–13.

Masayuki Asahara

“Word Familiarity Rate Estimation by Bayesian Linear Mixed Model”, Aggregating and analysing crowdsourced annotations for NLP (AnnoNLP), Asia Expo (香港), 2019.11.3.

Hanae Koiso, Masayuki Asahara, Salvatore Carlino, Ken'ya Nishikawa, Kazuki Aoyama, Yuichi Ishimoto, Aya Wakasa, Michiko Watanabe, Yoshimi Yoshikawa, Nobuko Kibe, and Kikuo Maekawa

“Speech corpora in NINJAL, Japan demonstration of corpus concordance systems: Chunagon and Kotonoha”, 招待講演, the 3rd International Symposium on Linguistic Patterns in Spontaneous Speech (AnnoNLP), 中央研究院 (台北・台湾), 2019.11.21–22.

浅原正幸, 西内沙恵, 加藤祥

「NWJC-BERT: 多義語に対するヒトと文脈化単語埋め込みの類似性判断の対照分析」, 言語処理学会第 26 回年次大会, 茨城大学, 2020.3.16–19.

Chenjing Geng, Lis Kanashiro Pereira, Fei Cheng, Masayuki Asahara, and Ichiro Kobayashi

“Dependency Enhanced Contextual Representations for Japanese Temporal Relation Classification”, 言語処理学会第 26 回年次大会, 茨城大学, 2020.3.16–19.

浅原正幸, 加藤祥

「BERTed-BCCWJ: 多層文脈化単語埋め込み情報を付与した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』データ」, ポスター発表, 言語処理学会第 26 回年次大会, 茨城大学, 2020.3.16–19.

西内沙恵, 加藤祥, 浅原正幸

「ヒトによる多義的形容詞に対する類似性の評価データベース構築—「長い」と「短い」の事例から—」

ポスター発表, 言語処理学会第 26 回年次大会, 茨城大学, 2020.3.16–19.

松田寛, 若狭絢, 山下華代, 大村舞, 浅原正幸

「UD Japanese GSD の再整備と固有表現情報付与」, ポスター発表, 言語処理学会第 26 回年次大会,

茨城大学, 2020.3.16–19.

田中弥生, 浅原正幸, 小磯花絵

「手順説明談話における脱文脈化の様相」, ポスター発表, 言語処理学会第 26 回年次大会, 茨城大学,

2020.3.16–19.

河村宗一郎, 久本空海, 真鍋陽俊, 高岡一馬, 内田佳孝, 岡照晃, 浅原正幸

「chiVe 2.0: Sudachi と NWJC を用いた実用的な日本語単語ベクトルの実現へ向けて」, ポスター発表,

言語処理学会第 26 回年次大会, 茨城大学, 2020.3.16–19.

Yohei Oseki and Masayuki Asahara

“Deep vs. shallow computational models of human eye movement”, ポスター発表, the 33rd Annual CUNY

Conference on Human Sentence Processing, UMass Amherst (Massachusetts・米国), 2020.3.19–21.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・日本言語学会第 158 回大会ワークショップ「クラウドソーシングを用いた言語分析」, 一橋大学, 2019.6.22–23.
- ・the 2019 Australian Systemic Functional Linguistics Association conference: “Linguistic Chronogenesis: Text, Time, and the Processing of Temporal Experience,” The University of Sydney (Sydney・オーストラリア), 2019.10.2–4.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・言語処理学会第 25 回年次大会プログラム委員
- ・言語処理学会第 26 回年次大会プログラム委員
- ・2019 Conference on Empirical Methods in Natural Language Processing and 9th International Joint Conference on Natural Language Processing (EMNLP-IJCNLP 2019) : Program Committee Member
- ・The 33rd Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation (PACLIC 33) : Program Committee Member
- ・The 12th International Conference on Language Resources and Evaluation (LREC-2020) : Scientific Committee Member
- ・The 58th annual meeting of the Association for Computational Linguistics (ACL-2020) : Program Committee Member

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

浅原正幸

「言語認識過程に対する自然言語処理」, 情報処理学会連続セミナー 2019 第 1 回 自然言語処理, 理化学研究所 革新知能統合研究センター, 2019.6.26.

石本 祐一 (いしもと ゆういち) コーパス開発センター 特任助教

【学位】博士（情報科学）（北陸先端科学技術大学院大学, 2004）

【学歴】宇都宮大学工学部卒業（1997），北陸先端科学技術大学院大学情報科学研究科情報処理学専攻博士前期課程修了（2000），北陸先端科学技術大学院大学情報科学研究科情報処理学専攻博士後期課程修了（2004）

【職歴】東京工科大学メディア学部 助手（2007），同 助教（2009），人間文化研究機構国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員（2010），情報システム研究機構国立情報学研究所 特任研究員（2010），人間文化研究機構国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員（2013），同 研究情報資料センター 特任助教（2013），同 コーパス開発センター 特任助教（2017）

【専門領域】音声工学，音響音声学

【所属学会】日本音響学会，電子情報通信学会

【受賞歴】

2016: Oriental COCOSDA 2016 ITN Best Paper Award

【2019年度に参画した共同研究】

- ・コーパス基礎研究「コーパスアノテーションの拡張・統合・自動化に関する基礎研究」：メンバー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」：メンバー

【2019年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究(C)「自発会話コーパスを用いた「会話の間合い」に関わる音声・言語特徴の解明」, 18K11514: 研究代表者
- ・基盤研究(A)「日常場面と特定場面の日本語会話コーパスの構築と言語・相互行為研究の新展開」, 17H00914: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Yuichi Ishimoto, Takehiro Teraoka, and Mika Enomoto

“An Investigation of Prosodic Features Related to Next Speaker Selection in Spontaneous Japanese Conversation”, *Proceedings of Oriental COCOSDA 2019*, 2019.10.25.

Hanae Koiso, Masayuki Asahara, Salvatore Carlino, Ken'ya Nishikawa, Kazuki Aoyama, Yuichi Ishimoto, Aya Wakasa, Michiko Watanabe, Yoshimi Yoshikawa, Nobuko Kibe, and Kikuo Maekawa

“Speech corpora in NINJAL, Japan demonstration of corpus concordance systems: Chunagon and Kotonoha”, *Proceedings of LPSS 2019*, pp. 8–12, 2019.11.21.

Yuichi Ishimoto and Hanae Koiso

“Prosodic diversity according to relationship among participants in everyday Japanese conversation”, *Proceedings of LPSS 2019*, pp. 62–66, 2019.11.21.

石本祐一

「音声処理」，村上征勝，金明哲，小木曾智信，中園聰，矢野桂司，赤間亮，阪田真己子，宝珍輝尚，芳沢光雄，渡辺美智子，足立浩平（編）『文化情報学事典』，勉誠出版，2019.12.17.

《展示など》

- ・「国立国語研究所研究資料室収蔵資料」，計量国語学会第63回年次大会ポスター展示, 2019.9.21.

【講演・口頭発表】

高田智和，石本祐一，関川雅彦

「国立国語研究所収蔵音声・映像資料と試視聴システム」，ポスター発表，日本語学会2019年度春季大会，甲南大学，2019.5.19.

石本祐一，生永匠，高田智和

「国立国語研究所研究資料室収蔵音声・映像資料のデジタル化と試視聴システムの構築」，ポスター発

表, 東洋学へのコンピュータ利用第31回研究セミナー, 国立国語研究所, 2019.7.26.

石本祐一

「日常会話音声に対する基本周波数推定の課題」, ポスター発表, 言語資源活用ワークショップ2019, 国立国語研究所, 2019.9.3.

石本祐一, 小磯花絵

「日本語日常会話コーパスを用いた会話場面と声の高さの関係性の検討」, ポスター発表, 日本音響学会2019年秋季研究発表会, 立命館大学, 2019.9.5.

石本祐一, 寺岡丈博, 榎本美香

「三人会話の次話者選択に関わる言語・音響特徴の分析」, ポスター発表, 日本音響学会2020年春季研究発表会, 埼玉大学, 2020.3.16.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・言語資源活用ワークショップ2019(主催: コーパス開発センター), 国立国語研究所, 2020.9.2.

岡 照晃 (おか てるあき) コーパス開発センター 特任助教

【学位】博士（工学）（奈良先端科学技術大学院大学, 2015）

【学歴】 豊橋技術科学大学工学部卒業（2010）, 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士前期課程修了（2012）, 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士後期課程短期修了（2015）

【職歴】 京都大学大学院情報学研究科 特定研究員（2015）, 人間文化研究機構国立国語研究所言語変化研究領域プロジェクト非常勤研究員（2016）, 同 コーパス開発センター 特任助教（2016）

【専門領域】 計算言語学, 自然言語処理

【受賞歴】

2011: 情報処理学会第 201 回自然言語処理研究会学生奨励賞

2009: 豊橋技術科学大学平成 21 年度後期「卓越した技術科学者養成プログラム」

2009: 豊橋技術科学大学平成 21 年度前期「卓越した技術科学者養成プログラム」

2008: 舞鶴工業高等専門学校学業成績優秀賞

【2019 年度に参画した共同研究】

- ワークスアプリケーションズ共同研究協定 メンバー

【2019 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- 若手研究「アクセント情報付き大規模単語データベースの構築」, 19K13173: 研究代表者
- 若手研究者海外派遣プログラム（短期）「New words in Japanese and the design of UniDic electronic dictionary」, : 代表者
- 基盤研究（A）「日本語歴史コーパスに対する統語・意味情報アノテーション」, 17H00917: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

岡照晃

「形態素解析」, 村上征勝（監修）, 金明哲, 小木曾智信, 中園聰, 矢野桂司, 赤間亮, 阪田真己子, 宝珍輝尚, 芳沢光雄, 渡辺美智子, 足立浩平（編）『文化情報学事典』, 勉誠出版, 138–143 頁, 2019.12.17.

《コーパス・データベース類》

岡照晃

「『UniDic 非コアデータ』複数（2 つ）の短単位に分割可能な複合語のリスト_2019_03」, https://teru-oka-1933.github.io/unidic_non_core/, 2019.8.15.

岡照晃

「『UniDic 非コアデータ』関連語リスト_2019_03」, https://teru-oka-1933.github.io/unidic_non_core/, 2019.8.15.

岡照晃

「unidic-csj-3.0.1」, <https://unidic.ninjal.ac.jp/>, 2019.12.17.

岡照晃

「unidic-csj-3.0.1.1」, <https://unidic.ninjal.ac.jp/>, 2020.2.21.

ワークスアプリケーションズ徳島人工知能 NLP 研究所

「ChiVe」（ワークスアプリケーションズ共同研究協定）

【講演・口頭発表】

Teruaki OKA

“New words in Japanese and the design of UniDic electronic dictionary”, Globalex Workshop on Lexicography and Neologism 2019 (GWLN 2019), Indiana University (インディアナ・米国), 2019.5.8.

岡照晃

「クラウドソーシングによる形態論情報付与付き辞書整備」, 日本言語学会第 158 回大会, 一橋大学, 2019.6.22–23.

岡照晃

「UniDic 非コアデータ—解析用 UniDic の ID 情報にひも付く追加情報の公開について—」, 国立国語研究所, 2019.9.2.

河村宗一郎, 久本空海, 真鍋陽俊, 高岡一馬, 内田佳孝, 岡照晃, 浅原正幸

「chiVe 2.0: Sudachi と NWJC を用いた実用的な日本語単語ベクトルの実現へ向けて」, ポスター発表, 言語処理学会第 26 回年次大会, 茨城大学, 2020.3.16–19.

【その他の学術的・社会的活動】

- 短単位自動解析辞書 UniDic ver.3.0 の作成・公開
- 短単位自動解析辞書 UniDic 非コアデータの作成・公開

VII

資 料

1

運営会議

運営会議規程

- 委員は 20 名以内、内過半数は所外の学識経験者。
- 所内委員は、副所長、研究系長、センター長、その他所長の氏名する教授又は客員教授若干名。
- 会議は所長の求めに応じ、議長がこれを招集する。
- 委員の過半数の出席がなければ議事を開き、議決することができない。
- 会議の議事は出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは議長の決するところによる。
- 専門的事項について審議を行うための専門委員会(所長候補者選考委員会、人事委員会、名誉教授候補者選考委員会)を置くことができる。
- 議長は、必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。

2019 年度の開催状況

- 第1回 [2019年6月24日 13:30-15:30 (フクラシア東京ステーション)]

▶ 議事概要確認

- 前回議事概要(案)について

▶ 審議事項

- 研究教育職員の選考について
- 特任研究員の選考について
- 昇任人事について
- その他

▶ 報告事項

- 平成30事業年度に係る業務の実績に関する報告書について
- 平成31年度計画について
- 令和元年度運営費交付金について
- 令和2年度概算要求(案)について
- 創立記念事業について
- その他
 - 商標登録の進捗状況について
 - 国立国語研究所の活動状況について

- 第2回 [2019年10月29日 13:30-15:30 (フクラシア東京ステーション)]

▶ 議長・副議長選出・議事概要確認

- 議長及び副議長の選出について
- 前回議事概要(案)について

▶ 審議事項

- 人事委員会委員の選出について

▶ 報告事項

- 公募型研究(共同利用型)について
- その他
 - 国立国語研究所の活動状況について

▶ 意見交換

- 研究発表

- 第3回 [2020年1月8日(書面審議)]

▶ 審議事項

- 前回議事概要(案)について

2. 公募型研究（共同利用型）の決定について
- ・第4回 [2020年2月7日 13:30-15:30 (フクラシア八重洲)]
 - 議事概要確認
 1. 前回議事概要（案）について
 - 審議事項
 1. 令和2年度客員教員について
 2. 所長候補者選考のスケジュールについて
 - 報告事項
 1. 4年目終了時評価における実績報告書（案）について
 2. 令和元年度事業年度に係る業務の実績に関する報告書（案）について
 3. 令和2年度計画（案）について
 4. 令和2年度運営費交付金等について
 5. 公募型研究（令和2年度開始分）の採択について
 6. 国立国語研究所の活動状況について
 7. その他

運営会議の下に置かれる専門委員会

(1) 所長候補者選考委員会

- ・所長候補者選考委員会規程
 - 委員会の任務は、被推薦者名簿の作成、適任者名簿の作成、その他所長選考に必要な予備的事項に関するを行う。
 - 委員会は運営会議委員のうち運営会議議長が指名する研究所内の者及び研究所外の者若干名で組織する（研究所内の委員を過半数とする）。
 - 委員の任期は1年とし再任を妨げない。欠員の後任者の任期は前任者の残任期間とする。
 - 委員の過半数の出席がなければ議事を開き、議決することができない。
 - 委員会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは議長の決するところによる。
 - 委員長は必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。

(2) 人事委員会

- ・人事委員会規程
 - 委員会は研究所の研究教育職員の採用及び昇任人事に係る候補者の選考に関する事項の審議を行う。
 - 委員会は運営会議委員のうち運営会議議長が指名する、研究所外の者及び研究所内の者若干名で組織する。
 - 委員の任期は1年とし、再任を妨げない。欠員の後任者の任期は前任者の残任期間とする。
 - 委員会は委員の過半数の出席で議事を開催する。
 - 委員会の議事は出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは委員長の決するところによる。
 - 委員長は必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。
- ・人事委員会審議状況
 - 2019年4月10日（第1回、メール審議）、2019年6月14日（第2回）
 - 言語変異研究領域教授として五十嵐陽介氏を運営会議に推薦
 - 言語変異研究領域特任助教として中川奈津子氏を運営会議に推薦

2 評価体制

国立国語研究所では、効率的かつ効果的な自己点検・評価を実施し、その評価結果を適切に業務運営に反映させるため、自己点検・評価委員会を設置している。この自己点検・評価を第三者評価に適切に関連づけるため、外部評価委員会を設置している。外部評価委員会では、2019年度の「機関拠点型基幹研究プロジェクト・センターの研究活動」、「組織・運営」、「管理業務」について研究所がまとめた自己点検・評価に対し、外部評価委員がその専門的立場から検証をおこなった。

(1) 自己点検・評価委員会

この委員会では、自己点検・評価の基本的な考え方の作成、自己点検・評価の実施、評価結果の公表及び活用に関するここと、外部評価委員会の評価結果に関することを担当する。2019年度は7回開催した。

(2) 外部評価委員会

外部評価委員会規程

- 委員会は、自己点検・評価の結果に基づく評価に関すること、研究所の中期計画及び年度計画の評価に関すること、共同研究プロジェクト等の評価に関すること、その他評価に関することについて審議する。
- 委員会は10名以内の委員をもって組織する。委員は研究所の設置目的について理解のある学外の学識経験者等の中から所長が委嘱する。
- 委員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は前任者の任期とする。
- 委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。委員会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。
- 委員会は、必要に応じて委員以外の者に出席を求める、意見を聴取することができる。
- 外部評価の実施は、研究所の中期計画及び年度計画の実施に関する評価の時に行うものとする。委員会は、評価の結果を所長に報告するものとする。

令和元年度業務の実績に関する評価の実施について

- 評価の実施の趣旨
 - 年度当初に文部科学省に提出した「大学共同利用機関法人人間文化研究機構令和元年度計画」に記載した計画の実施状況について自己点検評価をおこない、その妥当性を検証するため外部評価委員会による評価を実施。
- 評価の実施方法
 - 評価は書面審査でおこなう。
 - 研究所が作成した、令和元年度の計画及びその実施状況が記入された「元年度業務の実績報告書」（「機関拠点型基幹研究プロジェクト・センターの研究活動」、「組織・運営」、「管理業務」）の内容を検証。

外部評価委員会【令和元年度実績評価】

- 2020年9月10日10:00-12:00（オンライン）
 - 議事
 - 前回議事概要（案）確認
 - 機関拠点型基幹研究プロジェクト評価について
 - 令和元年度共同研究プロジェクト評価について
 - 令和元年度「コーパス開発センター」及び「研究情報発信センター」の評価について
 - 令和元年度「組織・運営」・「管理業務」の評価について
 - その他

(3) 基幹研究プロジェクトの評価

各プロジェクトリーダーが作成した「自己点検報告書」に基づいて、外部評価委員会委員による書面審査をおこなった。

3

所長賞

功績顕著な職員に対し、所長からその功績をたたえ表彰をおこない、研究所の活性化に資することを目的とするもので、学術上の功績および研究支援業務等で優れた功績があつたと認められる者を対象とし、原則として年2回おこなう。

第19回所長賞：2019年度後期（2019年4月1日–2019年9月30日）

・所長賞

- ・プラシャント・パルデシ（研究系（理論・対照研究領域）教授）

◦業績： Pardeshi, P., Butler, A., Horn, S., Yoshimoto, K., Nagasaki, I. (eds.) Vol 18: Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and ProcessingLiLT (Linguistic Issues in Language Technology) Stanford: CSLI社, 2019.7.

◦理由：国際的なジャーナルに掲載された論文集の編集

・若手研究者奨励賞

- ・熊谷学而（明海大学講師（研究系（理論・対照研究領域）元プロジェクトPD フェロー））

◦業績： Kumagai, Gakuji. 2019. “A sound-symbolic alternation to express cuteness and the orthographic Lyman’s Law in Japanese”, *Journal of Japanese Linguistics*, 35 (1): 39–74, 2019.5.

◦理由：評価の高い国際会議録（査読のあるプロシーディングズ）に掲載された論文

- ・青井隼人（研究系（言語変異研究領域）特任助教）

◦業績： 日本言語学会第157回大会（2018年秋季、京都大学）大会発表賞「北琉球沖縄語伊江方言の破裂音」, 2019.6.

◦理由：学会レベルでの受賞

- ・布施悠子（研究系（日本語教育研究領域）プロジェクト非常勤研究員）

◦業績： 布施悠子「初任日本語教師キャリア形成過程の可視化の試み—複線径路・等至性アプローチを用いて—」, 『日本語教育』173号, 2019.6.

◦理由：日本を代表するピアレビュー誌に掲載された学術論文

- ・松井真雪（日本学術振興会特別研究員PD（研究系（理論・対照研究領域）元プロジェクトPD フェロー））

◦業績： ① Mayuki Matsui. International Congress of Phonetic Sciences 2019 Shortlist for Best Paper by an Early Career Researcher, 2019.8.

② 2018年度日本音声学会優秀論文賞： Mayuki Matsui and Alexei Kochetov. 「Tongue Root Positioning for Voicing vs. Contrastive Palatalization: An Ultrasound Study of Russian Word-Initial Coronal Stops (有声性対立のための舌根調音と硬口蓋化子音対立の関係—ロシア語語頭舌頂閉鎖音の超音波画像解析—)」, 2019.9.

◦理由：学会レベルでの受賞

- ・中川奈津子（研究系（言語変異研究領域）特任助教）

◦業績： 日本語学会2019年春季大会発表賞：「琉球八重山白保方言のアクセント体系は三型であって、二型ではない」, 2019.5.

◦理由：学会レベルでの受賞

- ・村山実和子（福岡女子短期大学講師（研究系（言語変異研究領域）元プロジェクト非常勤研究員））

◦業績： 村山実和子「接尾辞「ハシ(ワシイ)」の変遷」日本語学会『日本語の研究』, 15巻2号, 2019.8.

◦理由：日本を代表するピアレビュー誌に掲載された学術論文

第20回所長賞：2020年度前期（2019年10月1日–2020年3月31日）

・所長賞

- ・野田尚史（研究系（日本語教育研究領域）教授）

◦業績： (1) 野田尚史編『日本語学習者の読解過程』ココ出版, 2020.3.

(2) 野田尚史編『日本語と世界の言語のとりたて表現』くろしお出版, 2019.11.

◦理由：全国的に定評のある学術出版社による著書・編書の国内出版

- ・石黒圭（研究系（日本語教育研究領域）教授）

◦業績： (1) 石黒圭・鳥日哲編『どうすれば論文・レポートが書けるようになるか—学習者から学ぶピア・レスポンス授業の科学』ココ出版, 2020.2.

(2) 石黒圭編『日本語教師のための実践・読解指導』くろしお出版, 2019.11.

(3) 石黒圭編『文脈情報を用いた文章理解過程の実証的研究—学習者の母語から捉えた日本語

理解の姿』ひつじ書房, 2020.1.

(4) 石黒圭編『クラウドソーシングを用いたビジネス文書の言語学的研究—インターネット上の求人サイトから臨むビジネス日本語研究の新たな地平—』ひつじ書房, 2020.2.

◦理由: 全国的に定評のある学術出版社による著書・編書の国内出版

◦宇佐美まゆみ (研究系 (日本語教育研究領域) 教授)

◦業績: 宇佐美まゆみ編『自然会話分析への語用論的アプローチ』ひつじ書房, 2020.3.

◦理由: 全国的に定評のある学術出版社による著書・編書の国内出版

◦プラシャント・パルデシ (研究系 (理論・対照研究領域) 教授)

◦業績: プラシャント・パルデシ, 粕山洋介, 砂川有里子, 今井新悟, 今村泰也編『多義動詞分析の新展開と日本語教育への応用』開拓社, 2019.11.

◦理由: 全国的に定評のある学術出版社による著書・編書の国内出版

◦新野直哉 (研究系 (言語変化研究領域) 準教授)

◦業績: 新野直哉『近現代日本語の「誤用」と言語規範意識の研究』ひつじ書房, 2020.2.

◦理由: 全国的に定評のある学術出版社による著書・編書の国内出版

◦高田智和 (研究系 (言語変化研究領域) 準教授)

◦業績: 情報処理学会 2019 年度 (令和元年度) 山下記念研究賞の受賞

◦理由: 学会レベルでの受賞

◦若手研究者奨励賞

◦新永悠人 (弘前大学人文社会科学部助教 (研究系 (理言語変異研究領域) 元特任助教))

◦業績: 新永悠人「琉球奄美大島湯湾方言の名詞・代名詞複数形の機能とその通言語的な位置づけ」『言語研究』, 157 号, 2020.2.

◦理由: 日本を代表するピアレビュー誌に掲載された学術論文

◦蒙榎 (新潟大学教育・学生支援機構准教授 (研究系 (日本語教育研究領域) 元プロジェクト PD フェロー))

◦業績: ブックチャプター (3 点)

(1) 蒙榎・鳥日哲「中国語母語話者の読解指導: 漢字圏の学習者の困難点とその指導法」石黒圭 (編著)『日本語教師のための実践・読解指導』65–81 頁, くろしお出版, 2019.11.

(2) 蒙榎・Nguyen Thi Thanh Thuy「固有名詞の語義把握の方法」石黒圭 (編著)『文脈情報を用いた文章理解過程の実証的研究: 学習者の母語から捉えた日本語理解の姿』75–93 頁, ひつじ書房, 2020.1.

(3) 蒙榎「ポライオニスの実態とその問題点日本式の他者配慮が外国人にどこまで通じるか?」石黒圭 (編著)『ビジネス文書の応用言語学的研究: クラウドソーシングを用いたビジネス日本語の多角的分析』183–197 頁, ひつじ書房, 2020.2.

◦理由: その他, 上記と同等と所長が判断する学術的な業績又は社会的な業績

◦平田秀 (武蔵野大学講師 (研究系 (理論・対照研究領域) 元プロジェクト PD フェロー))

◦業績: 平田秀著『三重県尾鷲方言のアクセント研究』, ひつじ書房, 2020.1.

◦理由: 全国的に定評のある学術出版社による著書・編書の国内出版

4 研究教育職員の異動 (2019 年度の異動者)

2019.4.1	准教授	窪田悠介	採用	研究系
2019.8.1	特任助教	中川奈津子	採用	研究系
2020.3.31	特任助教	新永悠人	辞職	研究系

VIII

外部評価報告書

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立国語研究所

令和元年度業務の実績に関する外部評価報告書

国立国語研究所 外部評価委員会

令和 2 年 9 月 10 日

はじめに

令和元年度（平成 31 年度）の外部評価書をお届けします。令和元年度は第 3 期中期計画の終盤に差し掛かり、4 年次中間評価の年でもありました。外部評価委員の方々には第 3 期の国語研の研究について、より広い観点から中間評価報告書へのコメントもいただき感謝します。

令和元年は国語研創立 70 周年、人間文化研究機構移管 10 周年の年であり、10 月 1 日には、周年記念として、国語研の 70 年・10 年を振り返ると同時に第 4 期の構想を発表し、識者の方々からご意見をいただく会を開きました。その際のご意見、ご提言を取り入れながら、現在第 4 期の準備を進めております。

令和元年度末にはコロナ感染症の発生・拡大に伴って、国語研も大きな影響を受け、年度末の研究会、ワークショップ、シンポジウムもそのほとんどが中止を余儀なくされました。また、4 月、5 月の緊急事態宣言下では、ひと月以上研究所を閉鎖せざるを得ませんでした。そのため外部評価委員によるヒアリングも行えず、外部評価委員の皆様にはご迷惑をおかけすることとなりました。

幸い、テレワーク、オンラインでの事業、研究会、会議等が行えるようになると、計画は着々と進み、それほどの遅滞なく研究、事業を行うことができています。外部評価委員会もオンラインにより行われました。その際は国語研の活動に対し高い評価を与えてくださったこと、また、貴重なご意見・ご提言をくださったことに対し、外部評価委員会委員の皆さんに感謝いたします。

いよいよ、令和 3 年度は第 3 期の最後の年になります。来るべき第 4 期に備えて、所員一同この評価と提言にこたえるべく誠心誠意、国語研のより一層の発展のために努力を重ねていきたいと存じます。ますますのご指導ご鞭撻をお願いいたします。

令和 2 年 9 月
国立国語研究所長 田窪 行則

目 次

1.	評価結果報告書	1
1.	1. 令和元年度「機関拠点型基幹研究プロジェクト評価・センターの研究活動」 に関する評価結果	2
2.	2. 令和元年度「管理業務」に関する評価結果	87
2.	資料	93
1.	1. 国立国語研究所外部評価委員名簿	94
2.	2. 国立国語研究所令和元年度業務の実績に関する評価の実施について	95
3.	3. 機関拠点型基幹研究プロジェクト一覧	96
4.	4. 国立国語研究所外部評価委員会規程	97
5.	5. 国立国語研究所外部評価委員会【令和元年度実績評価】（第1回）議事次第	99

1. 評価結果報告書

令和元年度の国立国語研究所の外部評価を次のように実施しました。

令和2年9月10日 国立国語研究所外部評価委員会【令和元年度実績評価】(第1回)

その結果を以下の通り報告します。

外部評価委員会
委員長 坂原 茂

国立国語研究所令和元年度外部評価にあたって

本報告書は、機関拠点型基幹研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」の令和元年度分実績についての外部評価委員会の評価のまとめである。評価対象は、(1) プロジェクト全体、(2) 6つの共同研究プロジェクト（「対照言語学」、「統語・意味解析コーパス」、「消滅危機言語・方言」、「通時コーパス」、「大規模日常会話コーパス」、「学習者コミュニケーション」）、(3) 2つのセンター（コーパス開発センター、研究情報発信センター）、(4) 「管理業務」である。

令和元年度のプロジェクト全体に対する評価は「順調に進捗している」であり、(1) 研究成果・研究水準、(2) 研究体制、(3) 教育・人材育成、(4) 社会連携・社会貢献、(5) 国際連携・国際発信のいずれにおいても高い評価に値し、次年度以降もこのレベルの研究の継続が期待できると判断された。6つの共同研究プロジェクトの評価は、A（計画を上回って実施している）が5、B（計画どおりに実施している）が1であり、今年度はA評価が1つ増え、全体的に充実した研究が行われていると評価された。2つのセンターの評価はA（計画を上回る成果を上げている）とB（計画どおりに実施している）が1つずつで、センターの多方面の活動とデータベース構築の成果が高く評価された。管理業務については、A（計画を上回って実施）とB（計画通り実施）がそれぞれ2つずつで、全体的に良好な業務運営が行われていると評価された。

今年度は新型コロナウイルス感染拡大のため研究活動に予期せぬ制約が課されたにもかかわらず、さまざまな工夫を凝らして研究水準を維持できたことは賞賛に値する。また、今年度は新型コロナウイルス感染拡大のためヒアリングが実施できなかったが、昨年度実施して、評価にきわめて有益であることが確認できたので、来年度以降、事情が好転したら再びヒアリングを実施することが強く望まれる。

以上のように、外部評価委員会は、令和元年度の本プロジェクトの進捗状況は全体的に計画をやや上回り、順調に伸展していると評価した。本プロジェクトは、種々のコーパス開発を始めとして、これ以降の日本語研究を大きく変える可能性を秘めたきわめて重要なプロジェクトであるので、外部評価委員会としては、プロジェクトに携わる各人がそのことを意識しつつ、これ以降もこの順調さを維持して、プロジェクトの完遂に励むことを強く希望する。

令和2年9月
外部評価委員会
委員長 坂原 茂

機関拠点型基幹研究プロジェクト評価報告書

評価に関する総括

《達成状況の評価》

順調に進捗している

(判断理由等)

(1) 研究成果・研究水準, (2) 研究体制, (3) 教育・人材育成, (4) 社会連携・社会貢献, (5) 国際連携・国際発信, のいずれにおいても計画通り順調に進んでいる。

【プロジェクト全体の連携活動に関する評価】

(1) 研究成果・研究水準について

令和元年度の研究成果・研究水準は量的・質的にもきわめて高い評価に値する。

研究は量的に期待以上の成果を上げている。国際シンポジウム 18 件を実施した。国内シンポジウム・ワークショップ 53 件を企画し, 中止になった 10 件を除き, 43 件を実施した。書籍・報告書は英語書籍 2 冊を含む 20 冊を刊行した。コーパスについては, 通時コーパス班が新規に『日本語歴史コーパス』「江戸時代編Ⅲ近松淨瑠璃」及び『日本語歴史コーパス』「奈良時代編Ⅱ宣命」作成し, またそれぞれ研究班が開発中のコーパスの追加・拡充を行うなど活発に研究が進んでおり, データの蓄積も順調である。

研究水準はきわめて高く, 学界をリードする最先端の研究である。研究活動が先進的な研究にとどまらず, それぞれの研究分野全体を見通すパースペクティブから入門・解説にも力を入れ, 研究の広がりに多大な貢献をしている点も好感がもてる。前者の例としては, 「対照言語学」班『日本語と世界の言語のとりたて表現』(野田尚史 (編). くろしお出版), 「統語コーパス」班 "Ideophones, Mimetics and Expressives" (K. Akita and P. Pardeshi (eds.). John Benjamins), 「危機言語・方言」班 "Proceedings of International Symposium Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia - Poster Session" (H. Aoi (ed.). アジア・アフリカ言語文化研究所) などが挙げられる。後者の例としては, 「対照言語学」班『よくわかる言語学』(窪塙晴夫 (編). ミネルヴァ書房), 「学習者のコミュニケーション」班『日本語教師のための実践・読解指導』(石黒圭 (編). くろしお出版) などが挙げられる。全体として, バランスの取れた高度な研究活動が行われていると評価できる。

(2) 研究体制について

研究体制は, 研究推進のための合理的でバランスの取れた構成になっており, 他大学と組織的に連携し, 大学機能強化に貢献するなど, 高い評価が与えられる。

研究は 6 つの基幹プロジェクト (〔対照言語学〕, 「統語・意味解析コーパス」, 「消滅危機言語・方言」「通時コーパス」, 「日常会話コーパス」, 「学習者のコミュニケーション」) を中核として国内外の 590 人の研究者を共同研究員として組織されている。

各班の研究の進捗状況を管理するために共同研究プロジェクト推進会議, 自己点検・評価委員会を設置し, 研究情報の共有化, 班同士の連携, 合同シンポジウムの企画, プロジェクト全体の自己点検・評価を行っている。

研究の共同利用に関しては、今年度から、これまでの活動に加えて、研究所が保有する言語資源等の研究資料や実験機器等を活用する公募型プロジェクト「共同利用型」を新たに導入し、12件のプロジェクトを採択するなど、日本語研究の共同利用拠点としての役割を強化した。

プロジェクト間の連携強化に関しては、全基幹プロジェクト参加の合同シンポジウムの成果をとりまとめた『データに基づく日本語のモダリティ研究』(くろしお出版)を刊行し、また各班が開発する言語資源の有効な活用を進めるため定期的に「領域横断コーパス会議」を開催し、複数のコーパスを活用した共通テーマに基づく合同シンポジウムを開催するなど、活発に取り組んでいる。

「対照言語学」「統語・意味解析コーパス」「学習者のコミュニケーション」の各班ではアドバイザリーボードを設置し、海外の研究者からのアドバイスを積極的に取り入れプロジェクトの運営に反映させるなど開かれた研究姿勢を取っている。

(3) 教育・人材育成について

教育・人材育成についても、大学との連携、教材開発、若手研究者の育成や社会人の学び直しなどに多大な貢献をしており、高い評価が与えられる。

大学院教育では、一橋大学で3人が授業を行い、博士学位論文審査の主査5件、副査2件を担当した。また東京外国語大学においても2人が講義を担当した。「危機言語」班は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所との協定に基づき、特任助教の雇用、フィールドワーク事前研修、報告書の作成、英語論文集の作成などさまざまな活動を共同で行った。

教材及び教育プログラムの開発に関して、「危機言語」班は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 LingDy3 と『フィールドワーク事前研修報告書』を、機構広領域連携型プロジェクト「地域社会」と、鹿児島大学大学院との連携授業の報告書『地域文化の可能性』を共同で刊行した。

若手研究者の育成では、博士学位を取得した若手研究者をプロジェクト研究員(PD フェロー)として7人、ほかに非常勤研究員を26人雇用し、専門的研究指導を行なった。そのうち、1人が日本学術振興会特別研究員に採用され、4人が大学・研究所へ常勤・非常勤として就職した。

若手研究者のキャリアパスとして特任助教を4人雇用し、また大学院生32人、JSPS特別研究員8人(国語研受入者4人を除く)を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、若手研究者が経験を積む機会を作った。また研究発表の便宜を計る、調査旅費を支援するなど、若手研究者に好適な研究環境を提供した。

青森県八戸市方言の方言調査では、参加する学生・大学院生を全国に公募し、応募した8人に対して事前講習・方言調査・事後指導を行い、フィールドワークの実践的な研究力を身につけさせた。

こうした若手研究者の研究支援の結果として、特任助教2名とプロジェクト非常勤研究員1名が学会等の賞を受賞した。また若手研究者のモチベーションを高めるため、若手研究者向けの賞を設置し、優秀発表賞を1人に授与した。

若手研究者の育成のため、若手研究者向けのチュートリアル・講習会を20回企画・開催(3件中止)し、合計で379人(学生152人)が参加した。

社会人の学び直しへの貢献として、海外では、ウズベキスタンのサマルカンド国立外国語大学と日本センターで日本語教師を対象としたセミナーを開催し、シンガポール国立大学でシンガポール日本語教師の会と共に日本語教育の公開セミナーを行った。国内でも日本語教師セミナー、日本語教育ボランティアのスキルアップ講座、現役教師の学び直し講演・講習を行った。

中学校・高等学校の国語科教員及び教職課程の学生院生向けに『日本語歴史コーパス』活用の講習会を企画したが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となった。鹿児島県沖永良部島和泊町と知名町で役場職員向け方言の保存と復興に関する研修会を4回開催した。

(4) 社会連携・社会貢献について

社会連携・社会貢献については、一般向けの多数のシンポジウム・講演会の開催、地方自治体と連携した方言語彙集の作成やワークショップの開催、産業界との連携、一般人・子供向けの研究成果の発信などさまざまな努力がなされた。また本研究所作成の各種言語コーパスの重要性が広く認識されるようになってきており、この面に関しても高い評価が与えられる。

一般向けシンポジウム・講演会としては、第14回NINJALフォーラム「私の日本語の学び方」、小・中学生向けに「ニホンゴ探検」を開催した。また研究所創立70周年・移管10周年記念事業の一環として、オープンハウス2019を開催し、ポスター発表35件、研究資料室中央資料庫見学ツアーなどを行なった。プロジェクトの最新の研究成果を発信する研究情報誌『国語研 ことばの波止場』6号・7号を刊行した。

地方自治体との連携では、『宮崎県椎葉村方言語彙集』の作成、鹿児島県沖永良部島の和泊方言復興活動、鹿児島県薩摩川内市甑島での甑島方言講演会、沖縄県竹富島でのワークショップなどを行なった。また文化庁や鹿児島県などと連携して「危機的な状況にある言語・方言サミット（奄美大島）」を開催した。日本・海外の危機言語の保存・継承に携わる人々が参加し、活動報告や意見交換を行ない、この模様は地元の新聞やメディアに取り上げられた。

展示を通した研究成果の公開については、人間文化研究機構の「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」と共同で、八丈島の方言動画作品を3本作成し、昨年度に作成した与論島の方言動画作品4本を公開した。可搬型展示ユニットを「れきはく出開帳」を各所で展示し、東外大で講演会を開催した。

産学連携については、異分野融合研究を推進するために、東京大学や日本IBMなど複数の研究機関と連携し Universal Dependencies（言語横断的な係り受け構造を設計する世界的試み）の研究を推進し、日本語の自然言語処理ライブラリ「GiNZA」をリクルートMegagon Lab.より公開した。『日本語歴史コーパス』とジャパンナレッジ「新編日本古典文学全集」本文とのリンクの追加や、日本テレワーク学会などとの連携によるビジネス日本語のプロジェクトの実施などさまざまな活動を行なった。また、『三省堂全訳読解古語辞典』や『岩波国語辞典 第八版』の編纂・改訂に本研究所作成の各種コーパスが活用されるなど、産業界での注目が高まっている。

(5) 国際連携・国際発信について

国際連携・国際発信に関しても、高いレベルで研究活動が行なわれており、高い評価に値する。

海外機関研究者83人を共同研究員に加え、14人を外来研究員として受け入れ、共同研究を推進した。今年度は新たに2件の国際学術交流協定を締結した（ケラニア大学日本学研究センター（スリランカ）、オーストリア科学アカデミー・デジタル人文学センター（オーストリア））。これまでに締結した16件（第2期に締結したものと合わせると19件）の国際連携協定を活用して、「オックスフォードNINJAL上代日本語コーパス」の共同整備（オックスフォード大学人文科学部）など、国際共同研究体制を強化した。18件の国際シンポジウム・ワークショップ・フォーラム等を開催し、参加者が合計1,570人となるなど、研究成果を広く国際的に発信し、海外の機関と連携して国際的な共同研究を推進した。

共同研究の成果の国内外への発信のために、論文集 Ideophones, Mimesis and Expressives を John Benjamins社から刊行した。2017年開催の国際シンポジウムの研究成果が海外の研究雑誌 Linguistic Issues in Language Technology (LiLT) の特集号に採択され刊行されたほか、2018年度に東京外大AA研と共同で開催した国際シンポジウムにおけるポスター発表を元にした

Proceedings of International Symposium Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia –Poster Session– (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所) を編集して刊行した。

日本語研究のさらなる国際化に向けて, NINJAL チュートリアルを台湾の東吳大学で開催したほか, 中国, インド, ミャンマー, カンボジアでも NINJAL 日本語学講習会を実施し, 日本語研究者を中心に合計 236 人が受講した。

国連の定める国際先住民言語年 2019 の一環として開催された Perspectives Conference (2019 年 10 月 31 日～11 月 2 日, パデュー大学, アメリカ) において, パネルセッション “Endangered Languages in Japan: Focus on the Ryukyuan languages and dialect of Tohoku districts” を東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所と共同で企画・実施した。同じく国際先住民言語年 2019 のイベント (2019 年 12 月, ユネスコ本部, パリ) において, 日本の危機言語データベース・電子的アーカイブスペースについて報告した。

(6) その他特記事項

特になし。

【今後の活動に向けた意見】

研究, コーパス作成・公開, 教育・人材育成, 社会連携・社会貢献, 国際連携・国際発信のいずれに関しても高い水準の活動が行われており, 次年度以降もこのレベルを維持した研究継続が期待できる。

したがって, 効率よく機能している現在の研究体制を維持しつつ, 積極的な研究活動を継続することを期待する。

各プロジェクト・センターの評価

対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法

プロジェクトリーダー：窟薙 晴夫

I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

日本語の研究は日本国内に長い伝統と優れた成果を有している一方で、他の言語と相対化させる努力が十分ではなく、(i)世界諸言語の中で日本語がどのような言語であるのか、(ii)一般言語学・言語類型論の視点から見ると、日本語の分析にどのような知見が得られるのか、(iii)日本語の研究が世界諸言語の研究や一般言語学・言語類型論にどのように貢献するのか、いまだ十分に明らかにされたとは言えない。現代の日本語研究に求められているのは、日本語の研究が世界諸言語の研究、とりわけ一般言語学や言語類型論研究にどのように貢献できるのかという「内から外を見る」視点と、一般言語学や言語類型論研究が日本語の分析にどのような知見をもたらすかという「外から内を見る」視点である。

本プロジェクトは、この両視点から日本語の言語事実を分析することにより、日本語（諸方言を含む）を世界の諸言語と対照させて日本語の特質を明らかにし、それにより日本語研究の国際化を図ることを主たる目的とする。日本語の音声・音韻、語彙・形態、文法、意味の構造を、言語獲得（第一言語獲得、第二言語習得）はもとより、言語に関する他の学問分野（心理学、認知科学他）との接点・連携をも視野に入れて、対照言語学・言語類型論の観点から分析することにより、諸言語間に見られる類似性（普遍性）と相違点（個別性・多様性）を明らかにする。このような対照研究を通じて得られた研究成果を国内外に向けて発信する。

上記の目的を達成するために、本プロジェクトは音声・音韻特徴を分析する音声研究班と、形態・文法・意味構造を分析する文法研究班の2つの研究班（サブプロジェクト）を組織する。音声研究班は「語のプロソディーと文のプロソディー」を主テーマに、文法研究班は「名詞修飾表現」「とりたて表現」「動詞の意味構造」の3つをテーマに研究を進める。ともに海外の研究者との国際共同研究と国際シンポジウムの開催・誘致を軸に、論文集（英文、和文）の刊行や、アジアを中心とする諸言語の構造の異同を可視化する言語地図（電子媒体）の刊行を目指す。

2. 年次計画（ロードマップ）

● 全体計画・研究組織

音声研究班と文法研究班は研究成果発表会や研究文献リスト作成などの日常的な活動をそれぞれ独自に行う一方で、「対照言語学の観点から日本語の特質を解明する」という共通の目標に沿って国際シンポジウムを定期的に開催し、その成果を英文論文集などの成果刊行物として公刊する。また、日本語や言語類型論に関する国際会議を合同で誘致し、プロジェクト全体で日本語研究と国語研の国際化を推し進める。

	28年度	29年度	30年度	元年度	2年度	3年度
シンポジウム等	オノマトペ国際シンポジウム， NINJAL フォーラム「オノマトペ」開催	「プロソディー」に関する国際ワークショップ開催	「プロソディー」「移動動詞」「動詞の意味構造」に関する国際ワークショップ開催	「プロソディー」「動詞の意味構造」に関する国際ワークショップ開催，国際認知言語学会共催	NINJAL チュートリアル開催	国際会議 JK 2021 の開催
刊行・出版		NINJAL フォーラムの成果の刊行， 音声関係の啓蒙書刊行	論文集の編集作業， 「プロソディー」に関する研究論文集刊行	「名詞修飾」「とりたて表現」に関する各研究論文集刊行	英文論文集の編集作業， 「移動表現」に関する各研究論文集刊行	「日本語と言語類型論」「動詞の意味構造」「移動動詞」に関する各研究論文集の刊行
データ		言語地図の作成				公開

・研究組織

リーダー：

窟菌晴夫

班リーダー：

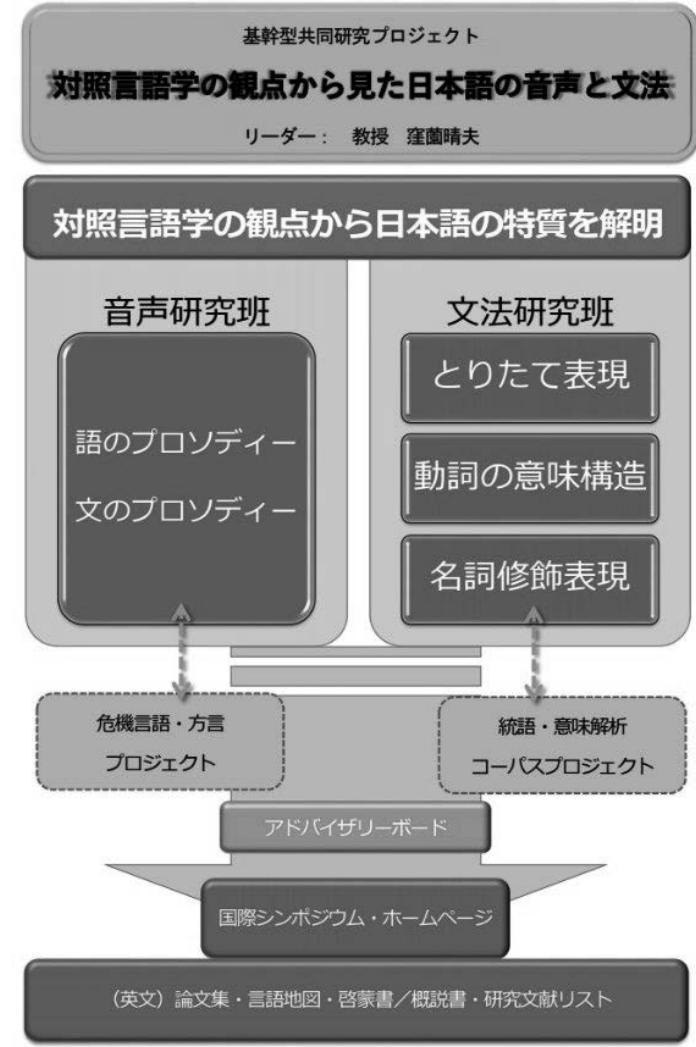
窟菌晴夫（音声）

野田尚史（とりたて表現）

松本曜（動詞の意味構造）

プラシャント・パルデシ

および窟田悠介（名詞修飾表現）



● 年次計画

平成 28 年度（研究プロジェクトの始動）

1. 日英語によるプロジェクト HP を開設し、以後、隨時更新する。
2. 若手研究者をプロジェクト PD フェローとして合計 2 名雇用し、研究指導を行う。また日本学術振興会外国人特別研究員（PD）2 名に対して研究指導を行う。
3. 国内外の主要研究者から成るアドバイザリーボードを設置し、プロジェクトの運営や成果発信について隨時アドバイスを求める。
4. 研究班、研究テーマごとに研究成果発表会と打合せ会議を年数回開催する。
5. NINJAL 国際シンポジウムとして The 24th Japanese Korean Linguistics Conference (JK 24) (10 月 14～16 日) とオノマトペ国際シンポジウム (12 月 17～18 日) の 2 つを開催する。またその成果の取りまとめ（論文集の編集）に着手する。
6. オノマトペをテーマに一般社会向けの NINJAL フォーラムを開催する（1 月 21 日）。
7. 第二期中期計画期間に着手した『日本語版連濁事典』、Mouton Handbook (Japanese Contrastive Linguistics の巻)、*The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants, Tonal Change and Neutralization* の編集作業を完了する。
8. 言語地図の立案を開始する（項目・言語の選択、刊行方法等）。
9. 大学院生向けのチュートリアル（国内）を開催する。
10. 年度末にプロジェクトの合同研究発表会を開催し、客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。

平成 29 年度（研究プロジェクトの展開）

1. 引き続き若手研究者をプロジェクト PD フェローとして合計 2 名雇用し、研究指導を行う。また日本学術振興会特別研究員（PD）1 名に対して研究指導を行う。
2. 研究班ごとに研究成果発表会を年数回開催する。
3. 「プロソディー」と「名詞修飾」をテーマにそれぞれ国際シンポジウムを開催する。
4. 年度末にプロジェクトの合同研究発表会を開催し、客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。
5. Mouton Handbook (Japanese Contrastive Linguistics および Syntax の巻)、*Tonal Change and Neutralization* の編集作業を完了する。
6. 前年度に開催した NINJAL 国際シンポジウム 2 件と NINJAL フォーラム 1 件の成果を取りまとめ、それぞれ論文集、啓蒙書として編集を行う。
7. 『移動表現の類型論 II (仮題)』の編集作業を行う。
8. 音声関係の啓蒙書を執筆する（1 冊目）。
9. 言語地図の作成を開始する。

平成 30 年度（研究成果の中間とりまとめ）

1. 引き続き若手研究者をプロジェクト PD フェローとして合計 2 名雇用し、研究指導を行う。
2. 研究班、研究テーマごとに研究成果発表会と打合せ会議を年数回開催する。
3. 年度末にプロジェクトの合同研究発表会 (Prosody and Grammar Festa 3) を開催し、客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。
4. 音声（プロソディー）と文法（移動動詞、動詞の意味構造）に関する国際シンポジウム・ワークショップをそれぞれ開催する。
5. 前年度に開催した「プロソディー」に関する国際ワークショップの論文の編集を行い、出版社に入稿する（公刊は 1 年後）。また「とりたて表現（和文）」「移動表現（和文）」「名詞修飾（和文）」に関する

する各論文集の編集作業を進める（公刊は1年後の予定）。

6. 引き続き言語地図の作成用のデータ収集を行う。
7. 大学院生向けのチュートリアルを国内と海外でそれぞれ開催する。

令和元年度（研究プロジェクトの拡充）

1. 若手研究者をプロジェクトPDフェローとして合計2名雇用し、研究指導を行う。
2. 研究班、研究テーマごとに研究成果発表会と打合せ会議を年数回開催する。
3. 年度末にプロジェクトの合同研究発表会（Prosody and Grammar Festa 4）を開催し、客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。
4. 「プロソディー」に関する国際シンポジウムを開催する。また、国際認知言語学会を共催する。
5. 前年度に開催した「移動動詞」に関する国際シンポジウムの成果を研究論文集（英文）として取りまとめる（公刊は1～2年後）。また「動詞の意味構造（和文）」に関する論文集の編集に着手する。
6. 「とりたて表現（和文）」「名詞修飾（和文）」に関する各研究論文集を刊行する。
7. 引き続き言語地図の作成を行う。

令和2年度（研究成果のとりまとめ）

1. 引き続き若手研究者をプロジェクトPDフェローとして合計2名雇用し、研究指導を行う。
2. 研究班、研究テーマごとに成果取りまとめのための研究発表会と打合せ会議を年数回開催する。
3. 年度末にプロジェクトの合同研究発表会（Prosody and Grammar Festa 5）を開催し、客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。
4. 前年度に開催した「プロソディー」に関する国際シンポジウムの成果を英文論文集として取りまとめる（公刊は1～2年後）。また「移動表現（和文）」に関する研究論文集を刊行し、「移動動詞（英文）」「動詞の意味構造（和文）」に関する各論文集の編集作業を完了する。
5. 言語地図の取りまとめを行う。

令和3年度（研究成果の公刊）

1. 引き続き若手研究者をプロジェクトPDフェローとして合計2名雇用し、研究指導を行う。
2. 一般社会向けのNINJALフォーラム（第2回）を開催する。
3. 大学院生向けのチュートリアルを開催する。
4. 「移動動詞（英文）」「動詞の意味構造（和文）」「日本語と言語類型論（和文）」の各論文集を刊行する。
5. 言語地図を公刊（公開）する。

【3年目までの成果物】〔編者〕

1. *Sequential Voicing in Japanese Compounds* (John Benjamins). 2016年6月 [パンス]
2. 『日本語コーパス活用入門：NINJAL-LWP 実践ガイド』（大修館）2016年7月 [パルデシ]
3. *The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants* (Oxford University Press). 2017年4月 [壅菌]
4. 『日本語を分析するレッスン』（大修館書店）2017年4月 [野田]
5. 『オノマトペの謎』（岩波書店）2017年5月 [壅菌]
6. 『通じない日本語』（平凡社新書）2017年12月 [壅菌]
7. *Handbook of Japanese Syntax* (De Gruyter Mouton). 2017年12月 [野田]
8. *Japanese Korean Linguistics 24* (CSLI). 2018年1月 [船越]
9. *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics* (De Gruyter Mouton). 2018年2月 [パルデシ]
10. *Tonal Change and Neutralization* (De Gruyter Mouton). 2018年3月 [壅菌]

11. *The Linguistic Review* 36 卷 1 号, 特集 Prosody and Prosodic Interfaces in Japanese and Korean, 2019 年 2 月 [窪菌]

【5 年目までの成果物】 上記に加え次のものを刊行する。

1. 『日本語と世界の言語のとりたて表現』 (くろしお出版) 2019 年 [野田]
2. 『よくわかる言語学』 (ミネルヴァ書房) 2019 年 [窪菌]
3. 『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』 (ひつじ書房) 2020 年 [パルデシ]
4. *Broader Perspectives on Motion Event Descriptions* (John Benjamins). 2020 年 [松本]
5. 『移動表現の類型論と第二言語習得』 2020 年 [松本]
6. 『動詞の意味と百科事典的知識 (仮題)』 2021 年 [松本]
7. *Motion Event Descriptions from a Cross-Linguistic Perspective.* 2021 年 [松本]
8. 『日本語と言語類型論 (仮題)』 (開拓社) 2021 年度 [窪菌他]
9. 『日本語の歴史的対照文法』 (和泉書院) 2021 年 [野田]

II. 令和元年度活動概要

令和元年度予算総額 29,630 千円

令和元年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

対照言語学研究を推進するために、国内研究者 22 人を共同研究員として追加し、国内外あわせて 155 人の組織で事業を遂行した。4 つの研究班ごとの公開研究発表会を計 11 回 (国内学会でのワークショップ 2 回を含む), 4 班合同の発表会 (Prosody and Grammar Festa 4) を 1 回, 国際シンポジウム・ワークショップを 8 件開催した。これら 20 件の企画において計 559 件の研究発表が行われ (うち学生が筆頭発表者のもの 169 件), 計 1369 人 (延べ) の参加者が得られた (うち海外機関研究者 508 人, 大学院生を含む学生 420 人)。国際シンポジウム・ワークショップのほとんどは国内外の機関 (理化学研究所, 日本音声学会, ソウル大学, カリフォルニア大学, 北京師範大学, デкан大学, ムンバイ大学, 国際認知言語学会) との共同事業として立案・実施したものである。

またプロジェクト全体で図書 6 冊, 論文 65 編 (ブックチャプター 29 編含む), 学術発表・講演 110 件 (一般向け除く) を公開・刊行した (いずれもプロジェクトへの謝辞を記したもののみ)。このうちプロジェクトの所内メンバー (教員 5 名) は 2 冊の図書 (研究論文集 1 冊, 概説書 1 冊), 論文 15 編を刊行し, さらに 7 冊の研究論文集の編集を行った。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

前年度に締結した学術交流協定に基づき, 神戸大学大学院人文学研究科と Kobe-NINJAL-Oxford 言語学コロキウム「日本語研究の最前線」(令和 1 年 7 月 21 日, 神戸大学) と上記の Prosody and Grammar Festa 4 をともに共同開催した。

また平成 31 年 1~3 月に構築した言語地図作成用のデータベースを利用し, 名詞修飾表現の言語地図の試作版を構築し, β 版を内部公開した。文献目録については, 諸言語の移動動詞に関する文献目録 (英文) の増補版 (ver. 3.2) と, 鹿児島県甑島方言の研究文献目録 (和文) をそれぞれ公開した。

この他, 国際シンポジウムの開催や出版企画についてアドバイザリーボードのメンバーに意見を求め, その意見をテーマや招待講演者の選定, 出版企画の立案に活用した。

3. 教育に関する計画

若手育成としてPDフェローを2人雇用し、学振PD2人を外来研究員として受け入れ、それぞれ研究指導を行った。またプロジェクト全体で6人の非常勤研究員を雇用し、対照言語学の事業を推進した。

さらに大学院生8人、学振PD4人を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、プロジェクト主催の発表会等で研究発表の機会を与えた。また研究発表会や国内／国際シンポジウム・ワークショップ等において延べ169人の大学院生（筆頭発表者）に発表の機会を与え、大学院生20人に対して発表旅費を支援し、加えて計3名の大学院生に対して言語調査の旅費を援助した。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

プロジェクト全体で地域社会と連携した講演を計5件、それ以外の講演を2件行った（プロジェクトへの謝辞を記したもののみ）。このうち所内メンバー（教員5名）は鹿児島県薩摩川内市と交わした連携協定に基づき、同市・甑島の全小学校（5校）において小学生・教員・地元住民を対象として方言講演会を開催し、計298人（小学生156人、教員・一般142人）の参加者を得た。また東京言語研究所主催の小学校～大学教師向けのワークショップ（『教師のためのことばワークショップ』）などにおいて日本語に関する講演を行った。

5. グローバル化に関する計画

国内外において合計8件の国際シンポジウム・ワークショップ等を開催し、合計941人の参加を得た。このうち国内では国際シンポジウム Learning Sounds of Asian Languages（理化学研究所脳神経科学研究センタープロジェクトと共催）、6th International Conference on Phonetics and Phonology（ICPP 2019、カリフォルニア大学と共に）、Pre-IPP Workshop（日本音声学会と共に）、15th International Cognitive Linguistics Conference（国際認知言語学会他と共に）、ワークショップ Lectures on the Japanese language from cognitive/typological perspectives の5件を開催した。海外ではソウル大学との学術交流協定に基づき国際ワークショップ JK 27 Satellite and the 1st NINJAL-SNU Joint Workshop（ソウル大学）を共催し、またインドのプネーで International Workshop on nominalization and noun modification、ムンバイで公開講演会“What is nominalization? –Towards the theoretical foundations of nominalization”をそれぞれ開催した。

海外の日本語研究者を対象としたNINJAL 日本語学講習会を4ヶ国（中国、インド、ミャンマー、カンボジア）の計5ヶ所で開催し、合計236名の参加者を得た。

また人的交流として海外の研究者5人を外来研究員として受け入れた。

プロジェクト全体では48件、国際会議で研究成果を発表した。このうち所内メンバー（教員5名）は2019 Joint Conference of Linguistic Societies in Korea（慶熙大学）、Neglected Aspects of Motion Event Description（NAMED）2019（パリ高等師範学校）、上海外国语大学創立70周年記念「新しい時代における日本言語文学研究フォーラム」などにおいてそれぞれ招待講演・基調講演を行った。

6. その他

該当する活動なし。

III. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画を大きく上回って実施した
(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画	
1. 対照言語学研究を推進するために、4つの研究班（下記）ごとの公開研究発表会を計11回（国内学会においてシンポジウム・ワークショップ2回を含む）、4班合同の発表会（Prosody and Grammar Festa 4）を1回、国際シンポジウム・ワークショップ等を8回開催した。これら計20件の企画において計559件の研究発表が行われ（うち学生が筆頭発表者のもの169件）、計1369名（延べ）の参加者が得られた（うち海外機関研究者508人、大学院生を含む学生420人）。	
① このうち、班ごとの研究発表会および国内学会シンポジウム・ワークショップ計11回の内訳は音声研究班が3回（令和1年5月11日、7月21日、11月17日）、とりたて班が1回（令和1年7月28日）、動詞の意味構造班（以下「意味構造班」）が3回（令和1年9月21日、令和2年2月6日、2月17日）、名詞修飾班が4回（令和1年6月23日、9月19日、12月6日、12月17日）であった。これらの発表会に合計341人の参加が得られた（うち海外機関研究者10人、大学院生を含む学生64人）。発表数は合計46件であった。（国内学会シンポジウム・ワークショップの詳細については下記2を参照）。	
② プロジェクト全体の統合を図るために、令和2年2月15-16日に、プロジェクト全体の研究発表会（Prosody and Grammar Festa 4）を開催し、87人の参加者を得た（うち海外機関研究者1人、大学院生を含む学生20人）。この合同発表会では「日本語と言語類型論」と題するシンポジウム（発表5件）と6件の口頭発表および15件のポスター発表により、対照言語学および言語類型論に関する研究成果を報告した。	
③ 国際シンポジウム等（計8件） <ul style="list-style-type: none">理化学研究所脳神経科学研究センターのプロジェクトと合同で言語獲得に関する国際シンポジウム Learning Sounds of Asian Languages を東京大学で開催した（令和1年7月6日）。参加者は51人（うち海外機関研究者9人）、発表件数は7件（すべて口頭、海外機関研究者による発表5件）であった〔音声研究班〕。前年度に締結したソウル大学人文学部との学術交流協定に基づき、国際ワークショップ（JK 27 Satellite and the 1st NINJAL-SNU Joint Workshop）をソウル大学で開催した（令和1年10月17日）。参加者は35人、発表件数は5件（口頭、海外機関研究者による発表3件）であった〔音声研究班〕。カリフォルニア大学SPOTプロジェクトとの共催で、The 6th International Conference on Phonetics and Phonology (ICPP 2019)を開催した（国文学研究資料館、令和1年12月13-15日）。参加者は異なりで128人（うち海外機関研究者48人）、発表件数は61件（口頭16件、ポスター発表45件；うち海外機関研究者による発表38件、学生が筆頭発表者の発表23件）であった〔音声研究班〕。ICPP 2019前日の12月12日に日本音声学会と共にPre-ICPP Workshop: Introduction to pitch accent systems around the worldを開催した。参加者は48人（うち海外機関研究者26人）、発表件数は5件（口頭、すべて海外機関研究者による発表）であった〔音声研究班〕。The 15th International Cognitive Linguistics Conferenceを令和1年8月6-11日に関西学院大学で国際認知言語学会他と共に開催した。参加者は558人（うち海外機関研究者311人、学生数186人）、発表件数は398件（口頭発表322件、ポスター発表76件；うち海外機関研究者による発表301件）であった〔意味構造班〕。ワークショップ Lectures on the Japanese language from cognitive/typological perspectives	

を The 15th International Cognitive Linguistics Conference のイベントとして令和1年8月6日に関西学院大学で開催した。参加者数は55人（うち海外機関研究者45人、学生数20人）、発表件数は3件であった〔意味構造班〕。

- ・International Workshop on nominalization and noun modification を Deccan College Post-Graduate and Research Institute (インド Pune) で令和1年12月19-20日) に開催した。参加者は48人（うち海外機関研究者45人）、発表件数は7件（すべて口頭、うち海外機関研究者による発表3件）であった〔名詞修飾班〕。
- ・公開講演会 “What is nominalization? -Towards the theoretical foundations of nominalization-” を University of Mumbai (インド Mumbai) で令和1年12月24日に開催した。参加者は18人（うち海外機関研究者18人）であった〔名詞修飾班〕。

2. 国内学会において下記のワークショップを企画した。

- ① 日本言語学会第158回大会（令和1年6月22-23日、一橋大学）において国語研の共同利用型研究プロジェクト「大規模コーパスを利用した言語処理の計算心理言語学的研究」と合同でワークショップ「計算心理言語学—概要と展望—」を開催した。参加者は75人であった〔名詞修飾班〕。

- ② 日本言語学会第159回大会（令和1年11月16-17日、名古屋学院大学）において「鹿児島県甑島方言の音声と文法」と題するワークショップを企画・開催した。参加者は45人であった〔音声研究班〕。

3. プロジェクトの所内メンバー（教員5名）が合計2冊の書籍（研究論文集1冊、概説書1冊）を刊行し、さらに7冊の研究論文集の編集を行った。

- ① 音声研究班は共同研究員・客員教員等の協力を得て、言語学の概説書『よくわかる言語学』（窪薙晴夫編、ミネルヴァ書房）を令和1年10月に刊行した。また国際シンポジウム ICPP 2019 の成果を英文論文集として出版すべく Oxford University Press へ出版企画書を提出し、提出原稿の編集作業を開始した。

- ② とりたて班は研究論文集『日本語と世界の言語のとりたて表現』（野田尚史編、くろしお出版）を令和1年11月に刊行した。また、研究論文集『日本語の歴史的対照文法』（野田尚史・小田勝編、和泉書院から令和3年度に刊行予定）の編集を進めた。

- ③ 意味構造班は、*Broader Perspectives on Motion Event Descriptions* (John Benjamins社から令和2年度出版予定) の編集を行った。また『移動表現の類型論と第二言語習得』（くろしお出版から令和2年出版予定）および *Motion Event Descriptions from a Cross-Linguistic Perspective* (Mouton社から出版予定) の執筆・編集を進めた。

- ④ 名詞修飾班は論文集『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』（パルデシ・プラシャント、堀江薰編、ひつじ書房）の編集を進め、令和1年9月に出版社に原稿を入稿し、校正作業を進めた（出版社の都合により令和2年前半に刊行予定）。

- ⑤ プロジェクト全体の論文集『日本語と言語類型論（仮題）』の執筆陣と出版社（開拓社）を確定し、編集作業を開始した。

4. プロジェクト全体

プロジェクト共同研究員の研究成果も含め、プロジェクト全体で図書6冊と論文65編（ブックチャプター含む）を刊行し、発表・講演を110件行った（いずれもプロジェクトへの謝辞を記したもののみ）。

5. 言語調査

- ・プロソディーの対照研究を推進するために令和1年7月と10月に鹿児島県甑島でそれぞれ方言調査を行った〔音声研究班〕。
- ・令和1年4月、5月（名古屋）、8月（インド）、9-10月（ウズベキスタン）、12月（インド）、令和2

<p>年1月（沖縄）で名詞修飾表現に関する調査を行った〔名詞修飾班〕。</p> <ul style="list-style-type: none"> トルコで令和1年9月と令和2年3月の2回、エチオピアで令和2年3月に、それぞれ動詞の意味に関する調査を行った〔意味構造班〕。 <p>6. 音声研究班が編集に携わり前年度に刊行された研究論文集『英語学を英語授業に活かす』（開拓社、池内正幸・窪田晴夫・小菅和也共編）が、『英語教育』2019年10月号（大修館書店）の「2019年度英語教育資料」において「英語学／言語学・今年のベスト3」に選定された。</p> <p>7. とりたて表現班が編集に携わり平成29年度に刊行された研究論文集 <i>Handbook of Japanese Syntax</i> (De Gruyter Mouton社) が、<i>Journal of Japanese Linguistics</i> Volume 35, Issue 2 に掲載されたK. Mihara氏の書評において、"an excellent overview of Japanese syntactic researches, containing both descriptive studies and theoretical studies", "a very well compiled book that helps researchers and (graduate) students"と評された。</p>	
<p>（2）研究実施体制等に関する計画</p> <p>9. 前年度に締結した神戸大学大学院人文学研究科との学術交流協定に基づき、<u>Kobe-NINJAL-Oxford言語学コロキウム「日本語研究の最前線」</u>（令和1年7月21日、神戸大学）と、<u>Prosody and Grammar Festa 4</u>（令和2年2月15-16日、神戸大学）をそれぞれ共催した。参加者は前者が38人（うち海外機関研究者3人）、後者が87人（うち海外機関研究者1人）であった。</p> <p>10. 対照言語学研究を実施するために、<u>国内研究者22人を共同研究員として追加し、国内外あわせて155人の組織でプロジェクトの事業を遂行した</u>（うち大学院生8人、海外研究機関に属する研究者15人）。また海外から5人（米国2人、イギリス、ブルガリア、台湾各1人）を、国内から2人の研究者（ともに学振PD）を外来研究員として受け入れ、共同研究を行った。</p>	

「計画を大きく上回って実施した」と自己評価した理由
国内研究会11回（国内学会ワークショップ2回を含む）と国際シンポジウム・ワークショップ8回の開催は計画を大幅に上回るものであった。とりわけ国際シンポジウム・ワークショップについては理化学研究所、日本音声学会などの国内学術機関・団体およびソウル大学、カリフォルニア大学、国際認知言語学会などの国際学術機関・団体とそれぞれ共催できたことは大きな収穫であった。図書を2冊刊行し、7冊の研究論文集の編集作業を行ったことに加え、これまでに刊行した研究論文集に国内外から好意的な第三者評価が得られたことも大きい。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
<p>（1）共同利用・共同研究に関する計画</p>	
<p>1. 言語地図</p> <p>平成31年1~3月に構築した言語地図作成用のデータベースを利用し、名詞修飾表現の言語地図の試作版を構築し、β版を内部公開した〔名詞修飾班〕。</p>	
<p>2. 文献目録</p> <p>諸言語の移動動詞に関する文献目録（英文）の増補改訂を行い、ver. 3.2を令和1年10月31日に公開した〔意味構造班〕。また鹿児島県甑島方言の研究文献目録（和文）を作成し、令和2年1月に公開した〔音声研究班〕。</p>	
<p>3. 音声研究班が平成28年度に公開した甑島アクセントデータベースは、方言アクセントの研究に使用さ</p>	

れており、年間 618 件のアクセスがあった。

（2）共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画

- 神戸大学大学院人文学研究科との学術交流協定に基づき、Kobe-NINJAL-Oxford 言語学コロキウム「日本語研究の最前線」と Prosody and Grammar Festa 4 を共催した（詳細については「1. 研究に関する計画」(2)-1 参照）。
- ソウル大学人文学部との共催で国際ワークショップ (JK 27 Satellite and the 1st NINJAL-SNU Joint Workshop) をソウル大学で開催した。またカリフォルニア大学 SPOT プロジェクトとの共催で、The 6th International Conference on Phonetics and Phonology (ICPP 2019) を開催した（詳細については「1. 研究に関する計画」(1)-1-③参照）。
- 「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」プロジェクトと共に予定していたシンポジウム「日本語文法研究のフロンティア—日本の言語・方言の対照研究を中心に—」（令和 2 年 2 月 29 日）は、2~3 月に予定していた他のイベント同様、コロナウイルスの問題により開催を断念した。
- 音声研究班は国際シンポジウム ICPP 2019（令和 1 年 12 月 13-15 日）の立案に際し、テーマの設定および講演者の選定等についてアドバイザリーボードの意見を求め、それを活用した。名詞修飾班では論文集の刊行についてアドバイザリーボードの意見を求め、それを活用した。
- 理化学研究所脳神経科学研究センターのプロジェクトと合同で国際シンポジウム Learning Sounds of Asian Languages を開催した（詳細については「1. 研究に関する計画」(1)-1-③参照）。

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
--------	------------

（1）大学院等への教育協力に関する計画

該当する活動なし。

（2）人材育成に関する計画

- 若手研究者を育成するために、PD フェローを 2 人、非常勤研究員を 6 人雇用した。
- 大学院生 8 人、学振 PD4 人を共同研究員としてプロジェクトに参画させた。
- プロジェクトが企画したイベント（研究発表会、シンポジウム・ワークショップ他）において合計 169 人の大学院生（筆頭発表者）に発表の機会を提供した。
- 大学院生 3 人に対して調査旅費を、20 人に成果発表の旅費を支援した。
- 国語研オープンハウス（令和 1 年 7 月 20 日、国語研）において大学生・大学院生向けのポスター発表を 5 件行った。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおりに実施した
--------	------------

（1）産業界や地域社会との連携に関する計画

- 鹿児島県薩摩川内市と同市甑島の方言保存を主目的とした連携協定を締結した（令和 1 年 5 月 28 日）。この協定に基づき、甑島の全小学校（5 校）において小学生・教員・地元住民を対象として「甑島方言の大切さ」と題する講演を行った（令和 1 年 7 月 13 日、10 月 11-12 日）。参加者は計 298 人（小学生 156 人、教員・一般 142 人）であった。

(2) 研究成果の社会への普及に関する計画

2. 上記 1 の社会連携による講演および下記 2 の現役教師向けの講演とは別に、プロジェクト全体で一般社会人向け講演を 3 件行った（プロジェクトへの謝辞を記したもののみ）。
3. 現役教師向け講演会等
上記の講演とは別に、現役教師の学び直しのための講演・講習をプロジェクト全体で 27 件行った（プロジェクトへの謝辞を記したもののみ）。所内メンバー（教員 5 名）の主な業績は次のとおりである。
 - ・講演「教科横断的なことばの教育」（東京言語研究所主催第 9 回『教師のためのことばワークショップ』（令和 1 年 8 月 17 日）〔音声研究班〕）。
 - ・アジア 4ヶ国計 5ヶ所で開催した日本語学講習会では受講者の中に日本語教師が多数含まれていた（詳細については「5. その他：グローバル化 (2) -1-⑨」参照）〔名詞修飾班〕。

5. その他の目標を達成するための措置

(1) グローバル化に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画を大きく上回って実施した
(1) 国際的協業に関する計画	
1. 海外の研究者 5 人（米国 2 名、イギリス・ブルガリア・台湾各 1 人）を外来研究員として受け入れた。	
(2) 国際的発信に関する計画	
2. 下記の 8 件の国際シンポジウム・ワークショップ・講演会（①～⑧）と計 5 件の海外日本語学講習会⑨を開催し（②⑦⑧⑨は海外で開催），合計 1177 人の参加者を得た。 ①理化学研究所脳神経科学研究センターのプロジェクトと合同で言語獲得に関する国際シンポジウム Learning Sounds of Asian Languages を東京大学で開催した（詳細については「1. 研究に関する計画」(1)-1-③参照）。 ②ソウル大学人文学部との共催で国際ワークショップ（JK 27 Satellite and the 1 st NINJAL-SNU Joint Workshop）をソウル大学で開催した（詳細については「1. 研究に関する計画」(1)-1-③参照）。 ③カリフォルニア大学との共催で ICPP 2019 (6 th International Conference on Phonetics and Phonology) を国文学研究資料館で開催した（詳細については「1. 研究に関する計画」(1)-1-③参照）。 ④日本音声学会と共に Pre-ICPP Workshop を国語研で開催した（詳細については「1. 研究に関する計画」(1)-1-③参照）。 ⑤国際認知言語学会他と共に The 15 th International Cognitive Linguistics Conference を関西学院大学で開催した（詳細については「1. 研究に関する計画」(1)-1-③参照）。 ⑥ワークショップ Lectures on the Japanese language from cognitive/typological perspectives を関西学院大学で開催した（詳細については「1. 研究に関する計画」(1)-1-③参照）。 ⑦International Workshop on nominalization and noun modification をインドの Deccan College Post-Graduate and Research Institute で開催した（詳細については「1. 研究に関する計画」(1)-1-③参照）。 ⑧公開講演会 “What is nominalization? –Towards the theoretical foundations of nominalization” をインドのムンバイ大学で開催した（詳細については「1. 研究に関する計画」(1)-1-③参照）。 ⑨海外の日本語研究者（日本語教師・日本語学習者を含む）向けの NINJAL 日本語学講習会を以下の 4ヶ国、計 5ヶ所で開催し、合計 236 名の参加者を得た〔名詞修飾班〕。 ・中国（北京師範大学）（令和 1 年 11 月 2 日、参加者 32 名）。	

- ・インド(Symbiosis Institute of Foreign & Indian Languages , Pune)（令和1年12月21-22日, 参加者81名)；
- ・ミャンマーのヤンゴン（令和2年2月9日, 参加者69名), マンダレー（令和2年2月12日, 参加者40名)。
- ・カンボジア（令和2年2月29日, 参加者14名)。

3. 国際出版

3冊の英文研究論文集 (*Broader Perspectives on Motion Event Descriptions*, John Benjamins, *Motion Event Descriptions from a Cross-Linguistic Perspective* および *Prosody and Prosodic Interfaces* の編集を行った (詳しくは「1. 研究に関する計画」(1)-3 参照)。また同じく所内メンバー (教員5名)が下記を含む5編の論文を海外のジャーナル・論文集に発表した。

- ・H. Kubozono, The phonological structure of Japanese mimetics and motherese. In Akita Kimi and Prashant Pardeshi (eds.) *Ideophones, Mimetics and Expressives*, 35-56. John Benjamins.
- ・H. Noda, El tema en las oraciones del español y el japonés. In Toshihiro Takagaki (ed.) *Exploraciones de la lingüística contrastiva español-japonés*, 131-150. Ediciones Universidad Autónoma de Madrid.
- ・Y. Kubota and R. Levine, Modal auxiliaries and negation: A type-logical account. *Proceedings of WoLLIC 2019*, 415-432. Springer.
- ・Y. Kubota, et al., Underspecification and interpretive parallelism in Dependent Type Semantics. *Proceedings of the IWCS 2019 Workshop on Computing Semantics with Types, Frames and Related Structures*, 1-9.

4. 国際発表

共同研究員を含めたプロジェクト全体で48件, 国際会議で成果発表を行った (プロジェクトへの謝辞を記したもののみ。所内メンバー (教員5名) の主な業績は次のとおりである。

- ・国際会議 19th International Congress of Phonetic Sciences (ICPhS 2019, オーストラリア・メルボルン) 〔音声研究班 (窪田) 〕。
- ・国際ワークショップ JK 27 Satellite and the 1st NINJAL-SNU Joint Workshop (ソウル大学) 〔音声研究班 (窪田) 〕。
- ・6th NINJAL ICPP (国文学研究資料館) 〔音声研究班 (窪田) 〕。
- ・上海外国语大学創立70周年記念「新しい時代における日本言語文学研究フォーラム」〔とりたて班 (野田) 〕。
- ・国際会議 The 15th International Cognitive Linguistics Conference (関西学院大学) 〔意味構造班 (松本) 〕。
- ・国際会議 13th Conference of the Association for Linguistic Typology (パヴィア大学) 〔意味構造班 (松本) 〕。
- ・国際ワークショップ NAMED 2019 (パリ高等師範学校) 〔意味構造班 (松本) 〕。
- ・2019 Joint Conference of Linguistic Societies in Korea (慶熙大学) 〔名詞修飾班 (窪田) 〕。
- ・Japanese and Korean Linguistics 2019 (西江大学) 〔名詞修飾班 (窪田) 〕。
 - ・WoLLIC 2019. (エト雷ヒト大学) 〔名詞修飾班 (窪田) 〕。
- ・Workshop at the 13th International Conference on Computational Semantics (IWCS 2019) (Gothenburg大学) 〔名詞修飾班 (窪田) 〕。

5. 文献目録 (英語) の公開

移動動詞に関する文献目録(英文)を増補改訂し公開した(「2. 共同利用・共同研究に関する計画(1)-2」参照)。

「計画を大きく上回って実施した」と自己評価した理由

計8件の国際シンポジウム・ワークショップと計5回の海外日本語学講習会は、いずれも計画を大きく上回るものであった。これらの企画の多くが国内外の研究機関・学会との共同事業であり、国際的な連携を深めることに成功した。また国際シンポジウム・ワークショップでの発表も計画を上回る成果であった。

6. その他

該当する活動なし。

令和元年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施している

今年度は、研究面およびグローバル化の内容において、自己評価にある通り、Sに相当する成果が挙げられている。特に、国際シンポジウムの開催は当初の計画を超えて行われており、高く評価される。研究論文集『日本語と世界の言語のとりたて表現』(野田尚史編、計368頁。くろしお出版、令和元年11月16日刊)、言語学概説書『よくわかる言語学』(窪薙晴夫編著、計232頁、ミネルヴァ書房、令和元年10月31日刊)などの著作なども刊行されている。

教育面、社会貢献面については講習会、講演会などが行われ、計画通りの遂行、すなわちBの評価と見なすことができる。ただし、その内容は高く評価できるものである。

一部にイベント中止や出版刊行の遅れなどもあるようであるが、それぞれの事情は十分に理解できるものであり、もって計画通りの進行でないと言うべきものではない。以上から、全体として計画を上回った実施というAの評価が妥当だと思われる。

《各項目別》

1. 研究について

今回、出版関係では、研究論文集『日本語と世界の言語のとりたて表現』(野田尚史編、計368頁。くろしお出版、令和元年11月16日刊)および言語学概説書『よくわかる言語学』(窪薙晴夫編著、計232頁、ミネルヴァ書房、令和元年10月31日刊)の著作の刊行があった。このほか、Broader Perspectives on Motion Event Descriptions, John Benjamins, Motion Event Descriptions from a Cross-Linguistic Perspective およびProsody and Prosodic Interfacesの編集など、英語での論文編集ということも評価される。「移動表現」に関する研究論文集刊行なども含め、それぞれの分野での研究発表が進められている。

研究発表関係では、特に、言語獲得に関する国際シンポジウム Learning Sounds of Asian Languages, ICPP 2019 (6th International Conference on Phonetics and Phonology) およびそのプレワークショップなど、国際的な共催ワークショップが多数開催されている。これは当初計画の「複数件」ということを超えて実施されている。

名詞修飾に関する研究論集の刊行は現時点では出版社の都合などでまだ実現を見ていないようだが、すでに入稿等を済ませているとのことであり、もって低い評価とするには当たらないと判断し

た。データベース関係でも、名詞修飾表現の言語地図の試作版を構築し、 β 版を内部公開した由であり、着実に研究が進められていることがうかがえる。

以上から、S評価に近いA評価に相当すると言える。

2. 共同利用・共同研究について

神戸大学大学院人文学研究科との学術交流協定、ソウル大学、カリフォルニア大学と連携した国際シンポジウム・ワークショップ、など、国内外の学術交流がなされていることは注目され、当初計画を上回る成果と言える。

様々な学会やプロジェクトとの共催も盛んであり、共同利用機関として期待される役割が果たされていると思われる。

なお、移動動詞に関する文献目録（英文）の増補改訂、鹿児島県甑島方言の研究文献目録（和文）データベースの構築などデータベース関係の作業も進められている。

なお、シンポジウム「日本語文法研究のフロンティア—日本の言語・方言の対照研究を中心に—」（令和2年2月29日）など、2~3月に予定されていたイベントがコロナウイルスの問題により開催されていないが、これは社会状況のやむをえない事情であって、もって計画通りの遂行を果たしていないと判断するには当たらない。全体として計画通りの遂行（B評価）と判断される。

3. 教育について

若手育成としてPDフェローを2人雇用し、学振PD2人を外来研究員として受け入れ、それぞれ研究指導を行っている。またプロジェクト全体で6人の非常勤研究員を雇用し、対照言語学の事業を推進した、ということであり、研究者の育成に貢献している。

さらに大学院生8人、学振PD4人を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、プロジェクト主催の発表会等で研究発表の機会を与えたほか、研究発表会や国内／国際シンポジウム・ワークショップ等において延べ169人の大学院生（筆頭発表者）に発表の機会を与え、大学院生20人に対して発表旅費を支援し、加えて計3名の大学院生に対して言語調査の旅費を援助したという。これらは計画通りと見なされる。以上から全体評価として、B評価ができる。

研究者をめざす大学院生は国内外を問わず、いろいろな大学院に所属している。その点で、関連する特定の大学との連携だけでなく、広く、インターネット環境などを利用したチュートリアルのようなみんなが参加できるような教育の重要性は高くなっている。こうした広い取り組みの充実も今後大きく期待されるところであろう。

4. 社会との連携及び社会貢献について

甑島の全小学校（5校）においての小学生・教員・地元住民を対象とした「甑島方言の大切さ」と題する講演会など、方言講演会などの活動は極めて重要である。今回計画通りの遂行と考えてよい。また、こうした講演会活動も大切にしつつ、ほかにインターネットなどを通じた常続的な情報発信や、地域の行政と連携した取り組みなどもさらに期待されるところであろう。

海外での日本語学講習会などの活動（下記5と関わる）も計画通りに多数遂行されており、日本語教育への貢献も見られる。また、「教科横断的なことばの教育」など、学校教育への貢献が見られることなど、その広がりにも注目したい。こういった状況はB評価と判断されるが、内実として、A評価に近いもののようにも思われる。

5. グローバル化について

国際シンポジウム Learning Sounds of Asian Languages (理化学研究所脳神経科学研究センタープロジェクトと共に), 6th International Conference on Phonetics and Phonology (ICPP 2019, カリフォルニア大学と共に), Pre-IPP Workshop (日本音声学会と共に), 15th International Cognitive Linguistics Conference (国際認知言語学会他と共に), ワークショップ Lectures on the Japanese language from cognitive/typological perspectives, ソウル大学との国際ワークショップ JK 27 Satellite and the 1st NINJAL-SNU Joint Workshop, インドでの International Workshop on nominalization and noun modification, ムンバイでの公開講演会 “What is nominalization? –Towards the theoretical foundations of nominalization”, というように、国際シンポジウムやワークショップが計 8 回ある。様々な共催を通じて、積極的に海外での発信をしている点は高く評価される。論文執筆についても、5 編の論文を海外のジャーナル・論文集に発表しており、高く評価される。

また、上記「4 社会貢献」とも関わるが、中国、インド、ミャンマー、カンボジアなどの日本語講習会は、計 5 回行われており、海外での日本語教育の振興に関わる重要な貢献である。このほか、海外での研究発表、講演なども多数なされている。こうした成果は計画を大きく上回るものであり、S 評価に相当するものと評価される。

6. その他特記事項

特になし。

統語・意味解析コーパスの開発とそれに基づく言語研究 プロジェクトリーダー：プラシャント・パルデシ

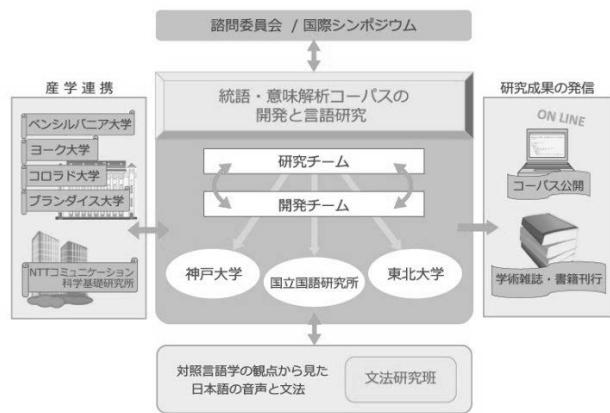
I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

現在世界の主要言語について Penn Treebank 方式の統語解析情報付きコーパス（ツリーバンク）が作られ、言語学および言語処理の研究に目覚ましい成果を挙げている。しかし日本語については十分な規模の公開されたツリーバンクは存在しない。

本プロジェクトでは、上記のような日本語研究の遅れを挽回し、多様な日本語の機能語、句、節および複雑な構文を大量の言語データから検索・抽出して研究することを可能とする統語・意味解析情報付き日本語構造体コーパス NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ)・Keyaki Treebank/Kainoki Treebank/Kusunoki Treebank の構築に加えて、述語項構造解析のために必要となる意味役割割情報を付与するコーパスの開発も試みる。さらに、このコーパスを利用して、日本語の研究を行い、その成果を国内外に向けて発信する。コーパスの共同利用の推進の一環として、最終年度までに5~6万文規模のコーパスを完成させる予定であり、言語処理の技術を持たない人でも簡単に利用できるインターフェースとともに、国立国語研究所のホームページから一般公開する。また、日本語に堪能でない海外の研究者にも本コーパスを利用できるようにローマ字版も用意する。

上記の目的を達成するために、本プロジェクトでは、右図の示すように、日本国内外の研究者から構成される研究班に加えて国立国語研究所、東北大学、神戸大学にコーパス開発班を設け、それらの班が相互に連携しながら開発と研究を進める。また、日本語研究の国際化を目指して、世界のコーパス言語学研究の最前線で活躍している海外の研究者および日本国内の中堅研究者で Advisory Board を構成し、このメンバーのアドバイスを中心に諸企画の方針・方向を決定し、国際的研究ネットワークの構築を図る。また、国際シンポジウムなどを開催し、その成果を海外の定評のある出版社・研究雑誌を通じて発信する。



2. 年次計画（ロードマップ）

● 全体計画

- ・コーパス開発：6年間で5~6万文規模の統語・意味解析コーパスを完成させ、一般公開する。
- ・日本語に堪能でない海外の研究者にも本コーパスを利用できるようにローマ字版も提供する。
- ・コーパス使用の利便性を図るために複数の検索ツール（インターフェース）を提供する。
- ・統語・意味解析コーパスに基づく研究を行い、研究成果を国内外に発信する。

● 年次計画

平成 28 年度：研究プロジェクトの始動（1 年目）

1. プロジェクト HP（日英版）を開設・公開し、隨時更新する。
2. 若手研究者の育成の一環として PD フェローを雇用し、研究指導を行う。
3. 非常勤研究員を数名雇用し、アノテーション作業を行う。
4. 研究班と開発班の合同研究会を年数回、国内各地の大学で開催し、若手研究者にも積極的に参加してもらう。
5. 国内外の学会で研究発表を行う。
6. 国内外の主要研究者から成るアドバイザリーボードを設置し、プロジェクトの運営や成果発信について隨時アドバイスを求める。
7. インターネットを通じてアノテーション作業が円滑に行える環境を海外の研究者と連携しながら構築する。
8. 海外の大学と研究交流協定を結ぶ。
9. 日英版のユーザーフレンドリーなインターフェースを構築し、NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスと合わせて公開する（1 万文）。
10. 2013 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果を取りまとめ、論文集を編集する。
11. 2016 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム Mimetics in Japanese and other language of the world の研究成果を取りまとめ、論文集を編集する。

平成 29 年度：研究プロジェクトの推進（2 年目）

1. プロジェクト HP（日英版）を開設・公開し、隨時更新する。
2. 若手研究者の育成の一環として PD フェローを雇用し、研究指導を行う。
3. 非常勤研究員を数名雇用し、アノテーション作業を行う。
4. 研究班と開発班の合同研究会を年数回国内各地の大学で開催し、若手研究者にも積極的に参加してもらう。
5. 国内外の学会で研究発表を行う。
6. 国際シンポジウム (Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing) を企画し、実施する。研究成果の編集を開始する。
7. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに 1 万文を追加し、合計 2 万文のデータを公開する。
8. 2013 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果を取りまとめ、論文集を編集する。
9. 2016 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム Mimetics in Japanese and other language of the world の研究成果を取りまとめ、論文集を編集する。

平成 30 年度：研究成果の中間とりまとめ（3 年目）

1. プロジェクト HP（日英版）を開設・公開し、隨時更新する。
2. 若手研究者の育成の一環として PD フェローを雇用し、研究指導を行う。
3. 非常勤研究員を数名雇用し、アノテーション作業を行う。
4. 研究班と開発班の合同研究会を年数回国内各地の大学で開催し、若手研究者にも積極的に参加してもらう。
5. 国内外の学会で研究発表を行う。

6. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに1万文を追加し、合計3万文のデータを公開する。
 7. 大学院生向けの統語コーパス利用講習会（チュートリアル）を2回開催する（内一回はNINJALチュートリアル）。
 8. アノテーションマニュアル試作版作成・ウェブ公開する。
 9. インターフェースの開発・改良を続行する。
 10. 国際シンポジウム (Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing) の研究成果をとりまとめ、プロジェクトの内部と外部の査読者によるレビューを経た後に、海外の定期評議会である研究雑誌 LILT (*LINGUISTIC ISSUES IN LANGUAGE TECHNOLOGY*) に提出する。
 11. 日本語の統語論の教育に特化した *Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective* を執筆し、この教材の練習問題を NPCMJ コーパスを利用して解くための仕組みを模索する。
 12. 幼児の発話データへの統語意味解析情報付与のための研究（宮田 Susanne 教授との共同研究）を開始する。
 13. 述語と機能語に対する詳細な形態論情報付与のための研究（宮田 Susanne 教授との共同研究）を開始する。
 14. 日本語学習者のコミュニケーション（リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ），科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し、「文型バンク」の開発・公開を進める。
 15. 2013年12月に開催した NINJAL 国際シンポジウム MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果を取りまとめ、論文集を編集する。
 16. 2016年12月に開催した NINJAL 国際シンポジウム Mimetics in Japanese and other language of the world の研究成果を取りまとめ、論文集を編集する。
- 令和元年度：研究プロジェクトの拡充（4年目）**
1. プロジェクト HP（日英版）を開設・公開し、随時更新する。
 2. 若手研究者の育成の一環として PD フェローを雇用し、研究指導を行う。
 3. 非常勤研究員を数名雇用し、アノテーション作業を行う。
 4. 研究班と開発班の合同研究会を年数回国内各地の大学で開催し、若手研究者にも積極的に参加してもらう。
 5. 国内外の学会で研究発表を行う。
 6. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに1万文を追加し、合計4万文のデータを公開する。
 7. 大学院生向けの統語コーパス利用講習会（チュートリアル）を開催。
 8. 日本語の統語論の教育に特化した *Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective* を刊行し、併せて、この教材の練習問題を NPCMJ コーパスを利用して解くための仕組みも公開する。
 9. アノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開
 10. 幼児の発話データへの統語意味解析情報付与のための研究（宮田 Susanne 教授との共同研究）を継続し、CHILDES (Child Language Data Exchange System) と連携してデータを公開する。
 11. 述語と機能語に対する詳細な形態論情報付与のための研究（宮田 Susanne 教授との共同研究）を継続する。
 12. インターフェースの開発・改良を続行する。

13. 岡山大学（竹内研究室）と連携し、述語構造シソーラス（Predicate-Argument Structure Thesaurus (PT)）で分析された意味役割とフレームの情報を統語・意味コーパス NPCMJ に加える。
14. 2013 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果の編集を完了・出版社 (Oxford Univ. Press) に入稿する（刊行時期は出版社の都合によるもの）。
15. 2016 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム Mimetics in Japanese and other language of the world の研究成果を出版社 (John Benjamins) に入稿する。（刊行時期は出版社の都合によるもの）。
16. 2017 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing の研究成果をとりまとめ、プロジェクトの内部と外部の査読者によるレビューを完了し、海外の定評のある研究雑誌 LILT (*LINGUISTIC ISSUES IN LANGUAGE TECHNOLOGY*) に提出する。
17. 日本語学習者のコミュニケーション（リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ），科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し、「文型バンク」の開発・公開を進める。

令和 2 年度：研究成果のとりまとめ（5 年目）

1. プロジェクト HP（日英版）を開設・公開し、随時更新する。
2. 若手研究者の育成の一環として PD フェローを雇用し、研究指導を行う。
3. 非常勤研究員を数名雇用し、アノテーション作業を行う。
4. 研究班と開発班の合同研究会を年数回国内各地の大学で開催し、若手研究者にも積極的に参加してもらう。
5. 国内外の学会で研究発表を行う。
6. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに 1 万文を追加し、合計 5 万文のデータを公開する。
7. 大学院生向けの統語コーパス利用講習会（チュートリアル）を開催する。
8. アノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開
9. インターフェースの開発・改良を続行する。
10. 統語意味解析情報を付与した幼児の発話データの公開（宮田 Susanne 教授との共同研究）
11. 述語と機能語に対して詳細な形態論情報の付与されたデータを公開（宮田 Susanne 教授との共同研究）
12. 岡山大学（竹内研究室）と連携し、述語構造シソーラス（Predicate-Argument Structure Thesaurus (PT)）で分析された意味役割とフレームの情報を統語・意味コーパス NPCMJ に加える。
13. 日本語学習者のコミュニケーション（リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ），科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し、「文型バンク」の開発・公開を進める。

令和 3 年度：研究成果の公開（6 年目）

1. プロジェクト HP（日英版）を開設・公開し、随時更新する。
2. 若手研究者の育成の一環として PD フェローを雇用し、研究指導を行う。
3. 非常勤研究員を数名雇用し、アノテーション作業を行う。
4. 研究班と開発班の合同研究会を年数回国内各地の大学で開催し、若手研究者にも積極的に参加してもらう。

5. 国内外の学会で研究発表を行う。
6. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに1万文を追加し、合計6万文のデータを公開する。
7. 大学院生向けの統語コーパス利用講習会（チュートリアル）を開催する。
8. アノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開
9. 岡山大学（竹内研究室）と連携し、述語構造シソーラス (Predicate-Argument Structure Thesaurus (PT)) で分析された意味役割とフレームの情報を統語・意味コーパス NPCMJ に加える。
10. 統語意味解析情報を付与した幼児の発話データの公開（宮田 Susanne 教授との共同研究）
11. 日本語学習者のコミュニケーション（リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ），科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し、「文型バンク」の開発・公開を進める。

【3年までの成果物】

- ・NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパス（3万文）を初心者から上級者まで様々な利用が可能な各種検索インターフェースと共に公開。
- ・NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパス（3万文）をユーザーフレンドリーなインターフェースと共に公開。

【5年までの成果物】

- ・海外の定評のある研究雑誌の特集号または論文集：「NINJAL 国際シンポジウム Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing の研究成果（論文集）の刊行 (LILT (LINGUISTIC ISSUES IN LANGUAGE TECHNOLOGY))」
- ・NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパス（5万文）をユーザーフレンドリーなインターフェースと共に公開。
- ・日本語の統語論の教育に特化した入門書 *Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective* の刊行
- ・日本語学習者のコミュニケーション（リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ），科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し開発した「文型バンク」（ウェブ版）。
- ・NINJAL 国際シンポジウム MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果（論文集）の刊行 (Oxford Univ. Press)
- ・NINJAL 国際シンポジウム Mimetics in Japanese and other language of the world の研究成果（論文集）の刊行 (John Benjamins)

6年間のロードマップ

	28年度	29年度	30年度	元年度	2年度	3年度
データ	統語・意味解析コーパス(NPCMJ)を毎年1万文(計6万文)作成および一般公開					
シンポジウム等	国内外の学会で研究発表	国際シンポジウム開催、国内外の学会で研究発表	国内外の学会で研究発表	国内外の学会で研究発表	国内外の学会で研究発表	国内外の学会で研究発表
	毎年2回公開研究発表会開催					
講習会等	毎年2回統語コーパス利用講習会					
刊行・出版			国際シンポジウムの成果を刊行、アノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開	アノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開	啓蒙書・普及書を刊行、アノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開	アノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開

II. 令和元年度活動概要

令和元年度予算総額 28,000千円

令和元年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

統語・意味解析コーパスの開発と言語研究を推進するために、プロジェクト共同研究者47人（アドバイザーを含む、うちPDフェロー1名、大学院生5名）の組織でコーパス開発とコーパスに基づく言語研究を遂行した。公開研究発表会を計2回開催し、さらに学会におけるワークショップおよびシンポジウムをそれぞれ1回、企画・開催し、国内外で個別発表も行った。これらの企画において計20件の研究発表が行われ、6件の論文が刊行された。また、①NINJAL 国際シンポジウム Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing (2017年度) および②NINJAL 国際シンポジウム Mimetics in Japanese and other language of the world (2016年度) の研究成果が海外の著名な出版社から刊行された。

加えて、NINJAL 国際シンポジウムの MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES (2013年度) の研究成果の編集作業が終了し、Oxford University Pressによるレビューを経て刊行することが決定した（“Verb-Verb Complexes in Asian Languages”）。さらに、日本語統語論の教育に特化した *Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective* の執筆（岸本著）が終了し、この教材の練習問題を、NPCMJコーパスを利用して解くための仕組み（試作版）の開発が完了した。書籍の刊行に合わせて公開する予定である。

共同研究者の宮田 Susanne 教授の主導する CHILDES (Child Language Data Exchange System) と連携し、①日本語を第一言語として獲得する幼児の発話データへの統語意味解析情報付与のための研究、②CHILDESの仕組みを利用した NPCMJ に対する精密な形態論情報付与に関する研究を開始した。①の具体例として、大久保 (1967) のデータにアノテーションを付与し、CHILDES で NINJAL-Okubo データとして公開した。さらに、岡山大学竹内研究室と連携し、公開中の NPCMJ コーパスの一部のデータに意味役割とフレームの情報

を付加し、内部公開した。今後確認・修正などを経て一般公開する予定である。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

国内外の主要研究者から成るアドバイザリーボードと相談しながらアノテーションの質的な拡充を行った。共同利用の推進のために、コーパスの構築の面において、NPCMJ コーパスに新たなデータ 1 万文を追加し、総データ量を 4 万文に増やし、公開した（2017 年の公開から 2020 年 3 月 25 日現在のアクセス統計：ユーザー数 11,940、ページビュー数 250,503（Google Analytics 統計）。また、コーパスの利用を推進するために NPCMJ コーパス利用講習会を国内の大学で 2 回開催した。これらの講習会に 51 名の参加者（うち大学院生を含む学生 17 名）があった。さらに、日本語学習者のコミュニケーション（リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ）、科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し、「文型バンク」の開発・公開を進めた。初級の文型 200 件に意味解説を追加し、インターフェースとともに公開した。大久保（1967）のデータにアノテーションを付与し、CHILDES で NINJAL-Okubo データとして公開した。

3. 教育に関する計画

PD フェロー一人、および大学院生 5 名を非常勤研究員として雇用し、アノテーション作業や共同研究における発表の機会を提供することによって若手研究者を育成した。また、研究所で雇用されている非常勤研究員の国内外での学会発表の経費を援助した。さらに、統語コーパス利用講習会を 2 回開催し、コーパス利用に関するノーハウを提供した。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

NPCMJ コーパスをオンラインで公開し、研究に目的を絞らない、幅広い層の人々からの利用促進に努めた。インターフェースの開発だけでなく、オンラインドキュメンテーション、ユーザーズマニュアルを充実させ、コーパスにより容易にアクセスができるようにした。

5. グローバル化に関する計画

国際シンポジウム 3 件（Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing, MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES, Mimetics in Japanese and other language of the world）の研究成果の編集作業を進め、3 件のうち 2 件が刊行され、残る 1 件も Oxford University Press から刊行することが決まった。国際会議において研究成果を 2 件発表した。また、日本語の統語論の教育に特化した Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective の執筆を完了させ、出版社に入稿し、念校の確認まで作業を進めた（来年度刊行予定）。加えて、NPCMJ コーパスの漢字仮名交じりデータをローマ字化した形でも公開している。また、検索インターフェースを含めたウェブサイトはすべて日本語と英語の 2 言語で作成されている。

6. その他

該当する活動なし。

III. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画	
1. 統語・意味解析コーパスに1万文のデータを追加し、複数のインターフェースとともに公開した。コーパスの開発と言語研究を推進するために、研究発表会を2回開催し、さらに学会におけるワークショップおよびシンポジウムをそれぞれ1回、企画・開催した。	
● 研究発表会	
① 第1回研究発表会（2019年5月12日、弘前大学創立50周年記念会館（参加者数18人、うち大学院生を含む学生4人）。	
② 第2回研究発表会（2019年6月15日、お茶の水女子大学（参加者数19人、うち大学院生を含む学生6人）。	
● 学会におけるワークショップ、シンポジウム	
③ 言語科学会第21回国際年次大会（JSL2019）ワークショップ（2019年7月7日）東北大学川内キャンパス）を企画・実施（参加者数82人）（発表の詳細は資料1.4）	
④ 関西言語学会第44回大会シンポジウム「高度文法情報付きコーパスとその日本語研究への応用」（2019年7月14日）関西大学（参加者数58人）（発表の詳細は以下資料1.5）	
2. 検索インターフェースのマニュアル（ユーザーズガイド）の日本語版と英語版およびNPCMJアノテーションマニュアル（第1～13節；14節以降は準備中）をプロジェクトのホームページで公開した。	
3. NPCMJコーパスに基づく研究の成果として、国内外の学会、プロジェクトの公開研究会等で以下の成果を発表した。	
● 国際学会での成果発表：口頭発表及びポスター発表4件	
● 国内学会・プロジェクト公開研究会での成果発表：口頭発表16件	
● 論文刊行：6件（内3件は英語による国際発信）	
（資料1.7）	
4. H29年度に開催した国際シンポジウム Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing の研究成果をとりまとめ、プロジェクトの内部と外部の査読者によるレビューを経て、海外の定評のある研究雑誌 LILT に提出し、LINGUISTIC ISSUES IN LANGUAGE TECHNOLOGY VOL 18, ISSUE 0-5 (2019年8月)として刊行された (ISSN: 1945-3604, , Introduction+5 papers, total 161 pages)（資料1.8）。	
5. 2013年12月に開催したNINJAL国際シンポジウム MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES (“Verb-Verb “Complexes in Asian Languages”)の研究成果の編集を終え、Oxford University Pressに提出した。外部評価の結果、出版が決定した。現在印刷中である。	
6. 2016年12月に開催したNINJAL国際シンポジウム Mimetics in Japanese and other language of the world の研究成果(論文集)が2019年6月にJohn Benjamins社から刊行された(資料1.9)。	
7. 日本語の統語論の教育に特化した Kishimoto Hideki 著 Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective をひつじ書房に入稿し、初稿や念校のチェックを終わらせた。現在印刷中である。また、この教材の練習問題をNPCMJコーパスで解くための仕組みをウェブ上で開発した。	
(2) 研究実施体制等に関する計画	
8. 統語・意味解析コーパスの開発と言語研究を推進するために、47名のプロジェクト共同研究員（うち	

PD フェロー1名、大学院生5名)体制でコーパス開発と共同研究を推進した。

9. 昨年に続き、本年も宮田 Susanne 教授を通じて、CHILDES と連携を深め、NPCMJ コーパスデータの述語と機能語に対する詳細な形態論情報付与に精密な形態論情報付与に関する研究を続行し、試験的に一部のアノテーション付与作業も試みた。
10. 業務委託に基づき、東北大学と連携してアノテーションの研究・アノテーション作業およびデータのローマ字化作業を進めた。同じく、業務委託に基づき、神戸大学と連携して、インターフェースの改良に関する研究を行い、パターンプラウザに改良を加え、公開した。さらに、(1)7 の Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective の練習問題を作成し、当該練習問題を NPCMJ コーパスで解くための仕組みを開発した(書籍の出版と合わせて、公開する予定である)。また、岡山大学竹内研究室と連携して NPCMJ コーパスの一部のデータに意味役割とフレームの情報を付加し、内部公開した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
(1) 共同利用・共同研究に関する計画	
1. NPCMJ コーパスに新たなデータ1万文を追加し、総データ量を4万文に増やした(データの追加は3月を予定している)(2017年の公開から2020年3月25日までのアクセス統計:ユーザー数11940、ページビュー数250,503(Google Analytics)。また、日本語の統語論の教育に特化したAnalyzing Japanese Syntax: A Generative Perspectiveという教材の練習問題をNPCMJ コーパスで解くための仕組みを開発した。書籍の出版と合わせて、公開する予定である。	
2. NPCMJ コーパス利用講習会を国内の大学で2回開催した。 統語・意味解析コーパス(NPCMJ)講習会、2019年5月11日、弘前大学(参加者数21人、うち大学院生を含む学生8人) 統語・意味解析コーパス(NPCMJ)講習会(NINJAL チュートリアル)、2020年2月1日、品川インター シティホール&貸会議室(参加者数30人、うち大学院生を含む学生9人)	
3. 大久保(1967)による国立国語研究所での研究成果にアノテーションを付与する作業を客員教授の宮田先生と連携して進め、「NINJAL-Okubo」データとしてCHILDES(Child Language Data Exchange System)で公開した。(資料2. 1)	
4. 日本語学習者のコミュニケーション(リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ)、科研プロジェクト「「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究:複文を中心に」」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し、「文型バンク」の拡充を進めた。初級の文型200件に意味解説を追加し、インターフェースとともに公開した。(資料2. 2)	
5. 国内外の主要研究者から成るアドバイザリーボードと相談しながらアノテーションの質的な拡充を行った。詳細は以下の2を参照。	
6. アドバイザリーボードと相談しながら、客員教授の宮田 Susanne 氏の主導するCHILDES(Child Language Data Exchange System)と連携し、日本語を第一言語として獲得する幼児の発話データへの統語意味解析情報付与のための研究を続行し、一部のデータにアノテーションを付与した。また、平行して、時間軸に沿って幼児の言語発達の過程を可視化できるインターフェースの開発を進めた。来年度はNPCMJに格納し、公開する予定。	
7. 研究に関する計画(2)3を参照。	

(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
--------	------------

(1) 大学院等への教育協力に関する計画

(2) 人材育成に関する計画

- PD フェロー一名、および非常勤研究員として大学院生を 5 名雇用し、アノテーション作業や共同研究を通じて若手研究者を育成した。
- 大学院生 5 名を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、公開研究会において、発表の機会を提供した。
- 研究所で雇用されている非常勤研究員の国内外での学会発表の経費を援助した。
- 統語・意味解析コーパスの開発とそれに基づく言語研究を推進するために、統語コーパス利用講習会を 2 回開催した。(詳細は「2. 共同利用・共同研究に関する計画」(1) 2 の実施状況を参照)

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおりに実施した
--------	------------

(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画

(2) 研究成果の社会への普及に関する計画

- NPCMJ コーパスをオンラインで公開し、研究に目的を絞らない、幅広い層の人々からの利用促進に努めた。インターフェースの開発だけでなく、オンラインドキュメンテーション、ユーザーズマニュアルを充実させ、コーパスにより容易にアクセスができるようにした(2017 年の公開から 2020 年 3 月のアクセス統計: ユーザー数 11940, ページビュー数 250,503 (Google Analytics 統計))。

5. グローバル化に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
--------	-------------

(1) 国際的協業に関する計画

- スロベニア大学の研究者を 1 名外来研究者として受け入れた。
- ロシア国立人文大学言語学部言語類型論学料(博士課程)の大学院生を特別共同利用研究員として受け入れ、研究指導を行った。

(2) 国際的発信に関する計画

- 上記 1. 研究に関する計画 4, 5 および 7 を参照。
- NPCMJ コーパスの漢字仮名交じりデータをローマ字化した形でも公開している。また、検索インターフェースを含めたウェブサイトはすべて日本語と英語の 2 言語で作成されている。
- 国際会議において口頭発表 4 件、論文 3 件、計 7 件の研究成果を発表した。

6. その他

該当する活動なし。

令和元年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施している

このプロジェクトの中心である、日本語の統語・意味コーパス (NPCMJ コーパス) の開発と拡充は、予定通り進展しており、令和元年度も 1 万文のアノテーション付きデータが追加された。統語情報だけでなく意味情報のタグも付されたコーパス・プロジェクトはユニークな試みであり、発足当初と比べるとインターフェースも充実してきている。研究成果の発表件数（国際学会での発表 4 件、国内学会での発表 16 件、論文刊行 6 編）は、ほぼ例年通りであるが、3 冊の論文集 (Linguistic Issues in Language Technology vol 18, Mimetics in Japanese and other language of the world, Mysteries of Verb-Verb Complexes in Asian Languages) および統語論教育のためのテキスト (Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective) の刊行が計画よりも順調に進んでいるため、A 評価とした。NPCMJ コーパスのシステムは機能が多岐にわたっているだけに、使いこなすための技術が必要な側面があり、練習問題つきの教科書は有用であろうと思われる。今後の発展に期待したい。

《評価項目》

1. 研究について

このプロジェクトの中心である、日本語の統語・意味コーパス (NPCMJ コーパス) の開発と拡充は、予定通り進展しており、令和元年度も 1 万文のアノテーション付きデータが追加され、さらに、CHILDES との連携も進められている。国際シンポジウムの成果をまとめた論文集 3 冊のうち 2 冊 (Linguistic Issues in Language Technology vol 18, Mimetics in Japanese and other language of the world) はすでに刊行され、残り 1 冊 (Mysteries of Verb-Verb Complexes in Asian Languages) も印刷中とのことで、計画を上回るペースで進行している。また、統語論教育のためのテキスト (Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective) も念校を済ませ、出版が待たれる。その他、国際学会での発表 4 件、国内学会での発表 16 件、論文刊行 6 編と、研究成果の発表も順調であり、ワークショップ・チュートリアル・シンポジウム等も計画通り着実に開催されている。統語情報だけでなく意味情報のタグも付されたコーパス・プロジェクトは、ユニークな試みであり、今後も利用者が増えるように工夫を重ねていってほしい。

2. 共同利用・共同研究について

NPCMJ コーパスには、令和元年度も一万文のデータが追加され、コーパスの拡充が進んでいる。NPCMJ コーパス講習会/チュートリアルを国内で 2 回開催し 50 名程度の参加者があった。外部研究機関との連携としては、国際的に広く利用されている、言語発達のコーパスである CHILDES と連携し、アノテーションの作業にも着手している。また、岡山大学の竹内研究室とも共同研究を進め、述語構造シソーラス (Predicate-Argument Structure Thesaurus (PT)) で分析された意味役割とフレームの情報を NPCMJ に加えた。また、国語研内の他グループと連携し、「文型バンク」の拡充も進め、初級の文型 200 件に意味解説を追加した。このように、共同利用・共同研究について概ね順調に進展していると判断できる。

3. 教育について

コーパス講習会やチュートリアルの開催については例年通りであるが、令和元年度の活動としては、日本語の統語論教育に特化した Kishimoto Hideki 著 Analyzing Japanese Syntax: A Generative

Perspective の刊行が注目される。この教材の練習問題をNPCMJ コーパスで解くための仕組みもウェブ上で開発されており、今後の利用者の増加に期待したい。また、これまでと同様、PD フェローや非常勤研究員を雇用するとともに、大学院生を共同研究員としてプロジェクトに加えており、若手研究者の育成を図っている。

4. 社会との連携及び社会貢献について

NPCMJ コーパスは、その性質上、どうしてもアカデミックな目的のために利用されることが多いのではないかと考えられるが、今後は、いろいろな機会を利用して、利用者の範囲を広げていく工夫を重ねていってほしい。また、自己点検報告書には、ユーザー数やページビューの年次変化も記載されていると、わかりやすいと思う。

5. グローバル化について

外来研究者 1名および特別共同利用研究員 1名を受け入れている。国際的発信に関しては、国際シンポジウムの成果をまとめた書籍が 2 冊刊行され、1 冊が印刷中である。NPCMJ コーパスはローマ字でも使用でき、ウェブサイトも英語と日本語の 2 言語で作成されている。グローバル化については、問題ないと判断している。

6. その他特記事項

特になし。

日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成

プロジェクトリーダー：木部暢子

I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

本プロジェクトは、日本の消滅危機言語・方言の記録・分析・継承を目的として、各地の言語・方言の調査を実施し、言語資源の整備・分析を行うとともに、言語・方言の継承活動を支援して地域の活性化に貢献することを目的とする。

近年、世界的な規模でマイナー言語が消滅の危機に瀕している。2009年、ユネスコは世界の危機言語リストを発表したが、その中には日本で話されている8つの言語—アイヌ語、与那国語、八重山語、宮古語、沖縄語、国頭語、八丈語—が含まれている。しかし、消滅の危機に瀕しているのはそれだけではない。日本各地の伝統的な方言もまた、消滅の危機にさらされている。これらの言語・方言が消滅する前にその包括的な記録を作成し言語分析を行うこと、また、これらの言語・方言の継承活動を支援することは、言語学上の重要な課題であるばかりでなく、日本社会においても重要な課題である。

以上のような状況を踏まえ、本プロジェクトでは、次のことを実施する。(1)日本の危機言語・方言の語彙集、文法書、談話テキストの作成と言語分析、(2)音声・映像資料（ドキュメンテーション付き）、「日本語諸方言コーパス」等の言語資源の整備、(3)地域と連携した講演会・セミナーの開催、(4)若手育成のためのフィールドワークの手引き書の作成。

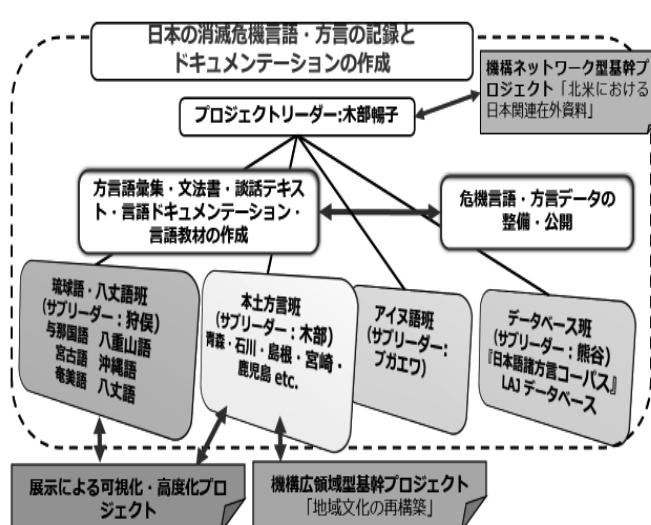
なお、実施にあたっては、機構の広領域型基幹プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」の「方言の記録と継承による地域文化の再構築」、ネットワーク型基幹プロジェクト「北米における日本関連在外資料調査研究・活用」、「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化」と連携する。

2. 年次計画（ロードマップ）

●全体計画・研究組織

本プロジェクトの実施にあたっては、図のような研究班を組織する。

- ・琉球語・八丈語班、本土方言班は6年間で、琉球24地点、八丈語、本土16地点（東北地点、関東3地点、中部・関西3地点、中国・四国3地点、九州3地点）の語彙集・文法書・談話テキスト、言語ドキュメンテーション、言語教材を作成する。アイヌ語班はアイヌ語の口承文芸コーパスを作成する。
- ・データベース班は「日本の危機言語・方言の音声データベース」、「アイヌ語口承文芸コーパス」、「日本語諸方言コーパス」、「『日本言語地図』データベース」の整備・公開を行う。
- ・研究成果として、以下のものをを目指す。書籍：ムートン社 *Handbook of Japanese Dialects* , *Handbook of the Ainu Language* , 危機言語・方言に関する英文論文集、『日本語の格』（仮題）、『談話のなかの方言』、『沖縄県久米島方言調査報告書』、『島根県隠岐の島方言調査報告書』、『石川県白峰方言調査報告書』、『愛



知県木曽川方言調査報告書』,『青森県むつ市方言調査報告書』,『青森県八戸市方言調査報告書』,『宮崎県椎葉村方言語彙集(仮題)』,

コーパス・データベース:『アイヌ語口承文芸コーパス』,『日本語諸方言コーパス』,「日本の危機言語・方言データベース」,『日本言語地図』データベース,

その他:フィールドワークの手引き書,各地の語彙集・文法書・談話テキスト・言語ドキュメンテーション,言語教材。

●年次計画

平成28~29年度(1~2年目)

- ① 調査:琉球語,八丈語,本土方言の調査を行う。
- ② 研究会:「格と取り立て」,「指示詞・代名詞」に関する研究会,コーパスに関する合同シンポジウムを開催する。
- ③ 言語資源:「日本語諸方言コーパス」,「危機言語・方言音声データ」,「アイヌ語口承文芸データ」等を拡充・整備し,公開する。
- ④ 地域との連携:「危機的な状況にある言語・方言サミット」(年1回),「方言セミナー」(年1回)を開催する。
- ⑤ 若手育成:大学院生,PD等を調査へ参加させる。フィールドワークの手引き書の準備を行う。
- ⑥ 成果:『日本語の格表現』(くろしお出版),『かたりの中の方言』(勉誠出版)を出版する。『沖縄県久米島方言調査報告書』,『島根県隠岐の島方言調査報告書』,『石川県白峰方言調査報告書』を刊行する。ムートン社 *Handbook of Japanese Dialects, Handbook of the Ainu Language* (30年4月刊行予定),『椎葉村方言語彙集』(31年出版予定)の出版準備を行う。

平成30年度(3年目)

- ① 調査:琉球語,八丈語,本土方言の調査を行う。
- ② 研究会:国際シンポジウム“Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia: Description, Documentation and Revitalization.”,「動詞・形容詞」に関する研究発表会を開催する。
- ③ 言語資源:『日本語諸方言コーパス』モニター版を公開する。また,「危機言語・方言」音声データ,『アイヌ語口承文芸コーパス』,『日本言語地図』データベースのデータ補充,及び首都圏大学生調査の結果分布地図,属性別集計表の作成。
- ④ 地域との連携:「方言セミナー」,(1回)を開催する。
- ⑤ 若手育成:大学院生,PD等を調査へ参加させる。『フィールドワークの手引き書』の作成を進める。
- ⑥ 成果:『白峰方言調査報告書』,『隠岐の島方言調査報告書』を刊行する。ムートン社 *Handbook of Japanese Dialects, Handbook of the Ainu Language* の出版準備を行う。各地点の語彙集・文法書・談話テキスト・言語ドキュメンテーション・フィールドワークのテキストの刊行準備を進める。

令和元~2年度(4~5年目)

- ① 調査:琉球語,八丈語,本土方言,アイヌ語の調査を行う。
- ② 研究会:「方言語彙集」,「文法記述」に関する研究会,コーパス合同シンポジウムを開催する。
- ③ 言語資源:『日本語諸方言コーパス』のデータを拡充整備する。「危機言語・方言」データ,『アイヌ語口承文芸コーパス』,『日本言語地図』データベース等のデータを拡充・公開する。
- ④ 地域との連携:「方言セミナー」,「危機的な状況にある言語・方言サミット」を開催する。
- ⑤ 若手育成:大学院生,PD等の調査への参加。
- ⑥ 成果:『椎葉村方言語彙集(仮題)』,『むつ市方言調査報告書』,『日本語の格表現』(くろしお出版),『か

たりの中の方言』(勉誠出版) を出版する。各地点の語彙集・文法書・談話テキストをウェブで公開する。

⑦ 展示による言語研究の可視化・高度化を実施する。

令和3年度（6年目）

- ① 調査：次期準備調査を実施する。
- ② 研究会：研究成果報告会を開催する。
- ③ 言語資源：『日本語諸方言コーパス』(90 時間) を一般公開する。「危機言語・方言音声データ」, 「アイヌ語口承文芸コーパス」, 『日本言語地図』データベース 等のデータを拡充・公開する。
- ④ 地域との連携：「方言セミナー」を開催する。
- ⑤ 若手育成：大学院生, PD 等の調査への参加。
- ⑥ 成果：ムートン社 *Handbook of Japanese Dialects, Handbook of the Ainu Language* , 『フィールドワークの手引き（仮題）』を出版する。各地点の語彙集・文法書・談話テキストをウェブで公開する。
- ⑦ 展示による言語研究の可視化・高度化を実施する。

6年間のロードマップ

	H28 年度	H29 年度	H30 年度	R 元年度	R2 年度	R3 年度
調査			琉球語, ハト語, アイヌ語, 本土方言調査			
データ	『諸方言コーパス』データ整備	モニタ版公開	データ整備	方言コーパスを使った方言研究	本公開	
				危機言語・方言音声データ・アイヌ語口承文芸コーパス等整備・公開		
シンポジウム等	毎年, 研究発表会, 危機言語・方言サミット, コーパス合同シンポジウム, 方言セミナー開催		国際シンポジウム開催	ハワイ大合同シンポジウム	ハワイ大合同シンポジウム	ハワイ大合同シンポジウム
刊行・出版	『久米島方言調査報告書』 『島根県隠岐の島方言調査報告書』, 『白峰方言調査報告書』等刊行	『椎葉村方言語彙集（仮題）』, 『愛知県木曽川方言調査報告書』等刊行	『むつ市方言調査報告書』, 『日本語の格表現』,	『椎葉村方言語彙集（仮題）』, 『かたりの中の方言』, 『フィールドワークの手引き（仮題）』, <i>Handbook of Japanese Dialects</i> , <i>Handbook of the Ainu Language</i> ,		

II. 令和元年度活動概要

令和元年度予算総額 33,895 千円

令和元年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

【フィールドワーク】日本の危機言語・方言の記録・保存のために、全国 40 地点において語彙集・文法書・談話テキスト、言語教材の作成のための調査を行なった。2019 年度のテーマは「格・情報構造」である。また、広領域連携型「地域社会」と連携して、青森県八戸市方言を集中的に調査する合同調査、および宮崎県椎葉村方言の方言語彙集のための調査を実施した。【研究発表会等】プロジェクト研究発表会「格・情報構造（琉球諸語）」、日本語文法学会パネルセッション「日琉諸方言の格と情報構造」、「手話言語と音声言語に関する民博フェスタ 2019」（民博と共に）を開催した。【研究成果】共同研究員の研究も含めて、

図書・報告書6件、ブックチャプター9件、論文23本、コーパス・データベース等4件、学術発表・学術講演71件、一般向けの講演・セミナー等22件、講習・チュートリアル等13件、執筆記事11件、取材記事28件の研究成果を公開した。【教材・教育プログラム】東京外大AA研LingDy3と共同で『フィールドワーク事前研修報告書』を刊行した。また、機構の広領域連携型プロジェクト「地域社会」及び鹿児島大学と共同で、連携授業の報告書『地域文化の可能性』を刊行した。【受賞】客員准教授の下地理則（九州大学准教授）が南琉球伊良部方言の研究により第47回金田一京助博士記念賞、および第16回日本学術振興会賞を受賞した。また、プロジェクトのメンバーが2019年度日本語学会春季大会発表賞、日本言語学会第157回大会発表賞、日本音声学会学術研究奨励賞を受賞した。【社会的意義】プロジェクトの調査や活動が東北や奄美・沖縄の新聞・テレビで紹介され、地元で注目された。また、ウェブ配信の講談社現代ビジネスの「大阪弁は危機言語」という意外な現実が2,400以上人にシェアされ、方言の危機を社会的現象として考えるきっかけとなった。【大学との組織的な連携】東外大AA研LingDy3との連携協定に基づき、クロスマーチアポイントメントにより特任助教を雇用し、フィールドワーク事前研修、『フィールドワーク事前研修報告書』の作成、昨年度に開催した危機言語の国際ポスターセッションの発表を元にした英語論文集の作成、国連の定めた国際先住民言語年2019の企画・運営、展示等を共同で実施した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

【データベース等の構築】昨年度公開した『日本語諸方言コーパス(COJADS)』モニター版のデータを拡充するとともに、COJADSのホームページを開設し、データのダウンロード等の機能を整備した。COJADSは公開後1年で登録ユーザー数が3,000人以上となるなど、研究及び一般社会で広く活用されている。その他、「危機言語DB」の基礎語彙、『アイヌ語口承文芸コーパス』『日本言語地図データベース』のデータを拡充し、公開した。また、地域の方言資料の公開を支援する事業として、『鳩間島方言辞典』『多良間島方言辞典』を編集し、刊行した。【コーパスを使った研究】COJADSモニター版を活用して、13件の発表を行なった（うち4件が国際学会）。また、ブックチャプター2本を作成した。【コーパス講習会・講演会】COJADSモニター版の利用促進のため、利用講習会及び研究発表会「方言コーパスを活用した方言研究の開拓」を開催した。また、コーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション」を「通時コーパス」「日常会話コーパス」「学習者コーパス」と合同で開催した。

3. 教育に関する計画

【発表の機会の提供支援】プロジェクトの研究会に若手研究者の発表を積極的に組み入れ、若手研究者に発表の機会を提供した。【フィールドワーク指導】青森県八戸市方言調査に参加する大学院生を全国に公募し、応募者8人に対して事前研修、フィールドワーク指導、報告書作成指導を行なった。【調査旅費・学会発表旅費支援】若手研究者に対して方言の語彙集・文法書・談話テキスト、言語教材の作成のための調査旅費を援助した。また、JSAA2019（モナッシュ大学、オーストラリア）、NINJAL-UHM Linguistics Workshop（ハワイ大学）、IYIL2019（アメリカ、フランス）、LPSS 2019（Academia Sinica、台湾）等の国際学会での発表の旅費を支援した。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

【地域社会との連携】宮崎県椎葉村との連携事業「椎葉村方言調査と『椎葉村方言語彙集』の作成」が最終年度を迎える。これまでの調査データをまとめて、『椎葉村方言語彙集』の原稿を完成させた（出版は来年度の予定）。また、沖永良部島和泊町、知名町との連携協定に基づき、小学生・中学生向けの方言の研修会、方言辞書作成のための講座、子どもたちに方言を継承する活動「わどうまいしまむにプロジェクト」

の発表会を開催した。【社会人の学び直し】沖永良部島和泊町・知名町で役場職員を対象とする研修会を実施し、方言の保存と復興に関する指導を行なった。【一般向け講義・講演会等】「危機的な状況にある言語・方言サミット（奄美大島）」を文化庁、鹿児島県、奄美市等と共に開催し、プロジェクトメンバー4人が報告を行なった。また、沖縄県石垣白保等で一般向け、及び子ども向けの方言の講演を行なった。【展示】人間文化研究機構「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」と共同で、八丈島のことばと文化を紹介する動画作品3本を作成したほか、モバイル型展示ユニットを使ったことばの展示4件（東外大AA研、与論町生涯学習フェア・文化祭等）、東外大AA研での展示に合わせた講演会1件を開催した。また、人間文化研究機構「北米における日本関連在外資料調査研究・活用」と共同で、「ハワイ：日系移民150周年と憧れの島のなりたち」（歴博と共同開催）、沖縄県北中城村、沖縄県立図書館、沖縄県公文書館と連携して、戦後の沖縄復興に奔走した比嘉太郎に関する展示を開催した。

5. グローバル化に関する計画

【協定に基づく研究】ハワイ大学マノア校との連携協定に基づき、NINJAL-UHM Linguistics Workshopをハワイ大学マノア校で開催し、統語と意味のインターフェース、言語獲得、コーパス言語学の観点から基調講演、口頭発表、ポスター発表、セミナーワークショップを行なった。【国際学会・国際会議での発表】プロジェクト全体として27件の国際学会・国際会議での講演、発表等を行なった。主なものに、21st Biennial Conference of Japanese Studies Association of Australia 2019（モナッシュ大学、オーストラリア）での講演・発表、国連の国際先住民言語年2019のPerspectives Conference（パデュー大学、アメリカ）におけるパネルセッション Endangered Languages in Japanの企画・実施（東外大AA研LingDy3と共に開催）、同じく、国際先住民言語年2019のInternational Conference Language Technologies for All（ユネスコ本部、フランス）におけるポスター発表、The 3rd International Symposium on Linguistic Patterns in Spontaneous Speech（Academia Sinica、台湾）におけるポスター発表等がある。【国際出版】ムートン社 *Handbook of Japanese Dialects*, *Handbook of the Ainu Language* の編集を行なった（出版は2021年度の予定）。昨年開催した危機言語の国際シンポジウムにおけるポスター発表を元にした英語論文集を東外大AA研Lingdy3と共に編集し、東京外大のホームページで公開した。【データ公開】『喜界島方言調査報告書』『宮古島方言調査報告書』を英訳し、「危機言語DB」のウェブサイトで公開した。また、危機言語・方言のデータを音声記号、日本語、英語で公開した。

6. その他

該当する活動なし。

III. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画	
(1) フィールドワーク	
1. 共同研究員が40地点において、日本の危機言語・方言の語彙集、文法書、談話テキスト、方言教材の作成と言語分析のための調査を実施した。今年度の調査テーマ「格・情報構造」である。	
2. 青森県八戸市で1地点の方言を集中的に記録する合同調査を行なった（機構の広領域連携型プロジェクト「地域社会」と共同実施）（2019.8.26-29、参加者19人（内大学院生3人、公募の学生8人、外国か	

らの参加1人)。6人の話者の協力により、基礎語彙600単語と例文、文法項目(格、情報構造、疑問詞、文タイプ、テンス・アスペクト、ヴォイス、形容表現、名詞述語)を調査した。調査の様子は、地元紙に掲載された。調査報告書は2020年度に刊行の予定である。

(2)研究発表会・講演会

3. 第1回プロジェクト研究発表会「格・情報構造(琉球諸語)」を開催した(2019.6.16、国語研、参加者数49人(内学生数9人)、発表件数6件)。第2回の研究発表会「格・情報構造(本土諸方言)」(2020.3.8)は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止とした。
4. そのほか、日本語文法学会で「格・情報構造」に関するパネルセッション「日琉諸方言の格と情報構造」(格表現と情報構造との関係に関する類型論的研究)を開催した(2019.12.8、学習院大学)。
5. 危機言語としての手話言語の研究として、民博と共同で「手話言語と音声言語に関する民博フェスタ2019/SSL2019」(2019.12.7、国立民族学博物館第4セミナー室)を開催した。また、認知言語学的手話研究の第一人者、シャーマン・ウィルコックス教授を招いて講演会「手話の談話における指示と空間使用」を開催した(2019.8.3、国語研、参加者数55人)。

(3)研究成果の公表

6. 『日本語の格表現』(くろしお出版)を2020年3月に刊行する予定で校正段階まで進めたが、新型コロナウイルスの影響で刊行は2020年度にずれ込むこととなった。『かたりの中の方言』(勉誠出版)も2020年度の刊行となった。
7. 椎葉村との連携協定による『椎葉村方言語彙集』の作成事業が最終年度を迎える、『椎葉村方言語彙集』の原稿を完成させた。(詳細については4(1)「社会との連携」参照)
8. 前年度に実施した青森県むつ市方言調査の報告書『青森県むつ市方言調査報告書』(国立国語研究所、65頁)を刊行した。
9. 共同研究員の研究も含めて、図書・報告書6件、ブックチャプター9件、論文23本、コーパス・データベース等4件、学術発表・学術講演71件、一般向けの講演・セミナー等22件、講習・チュートリアル等13件、執筆記事11件、取材記事28件の研究成果を公開した。(プロジェクトの企画によるもの、プロジェクトに対する謝辞を含むもののみ)。

(4)教材及び教育プログラムの開発

10. 東京外大AA研LingDy3と共同で、2016-2019年度のフィールドワーク事前研修の講義内容をまとめた『フィールドワーク事前研修報告書』を作成した。
11. 昨年実施した鹿児島大学大学院との連携授業の報告書『地域文化の可能性』を、機構広領域連携型プロジェクト「地域社会」と共同で刊行した。2020年度に出版社からの出版を計画している。

(1)受賞

12. 下地理則客員准教授(九州大学准教授)が『南琉球宮古語伊良部島方言』により第47回金田一京助博士記念賞を、「伊良部島方言の記述文法、特にアクセントと統語現象の言語類型論的研究」により第16回(令和元年度)日本学術振興会賞を受賞した。
13. その他、特任助教が日本言語学会第157回大会発表賞を、非常勤研究員が2019年度日本語学会春季大会発表賞を、共同研究員・准教授が日本音声学会学術研究奨励賞を受賞した。

(2)新聞、テレビでの報道

14. 青森県八戸市方言調査(デーリー東北新聞、東奥日報)、沖永良部方言の継承活動(南海日日新聞)、竹富島の方言講座(八重山日報)、与論町生涯学習フェア・文化祭(南海日日新聞)、与那国や沖永良部の絵本の作成(朝日英字新聞)など28件の新聞記事や放送番組が報道された。
15. 特に、沖縄のことばの継承活動を紹介する特集番組「くとうばどう たから 消滅危機言語を守る人」

を琉球朝日放送が制作し、2019年12月26日に放映された。

16. ウェブ配信の講談社現代ビジネスに執筆した「大阪弁は危機言語」という意外な現実」が2,400人以上にシェアされ(2020.3.31時点)，社会的に大きな反響を生んだ。

(2) 研究実施体制等に関する計画

(1) 大学との組織的な連携

17. プロジェクトを推進するために、国内外の研究者74人(内大学院生4人、日本学術振興会特別研究員5人、国外機関所属者4人)をプロジェクト共同研究員として組織した。
18. 東京外大AA研LingDy3との連携協定に基づき、クロスアポイントメントにより特任助教1人を雇用し、八戸市方言調査、フィールドワーク事前研修、『フィールドワーク事前研修報告書』の作成、昨年度に開催した危機言語の国際ポスターセッションの発表を元にした英語論文集の作成、IYIL2019(5「グローバル化」参照)におけるセッションの企画・実施、AA研における展示等を実施した。
- (2) 共同研究を通した大学支援

19. 上記(4)11連携授業の報告書『地域文化の可能性』の刊行を通じて、鹿児島大学大の教育を支援した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
--------	------------

(1) 共同利用・共同研究に関する計画

(1) データベース等の構築・公開

- 「危機言語DB」に島根県松江市の基礎語彙データ、与論島のことばと文化を紹介する動画4本を追加、『アイヌ語口承文芸コーパス』にアイヌ語千歳方言のデータ7話を追加、『日本言語地図データベース』(LAJの原データの電子化)に25項目のデータを追加し、データベースを充実させた。
- 『日本語諸方言コーパス(COJADS)』モニター版(中納言検索)に11時間分のデータを追加公開した。また、COJADSのホームページを制作し、ウェブサイトからデータ・ダウンロードができるようにし、コーパスの利用環境を整えた。
- 地元の人が作成した方言辞典の公開を支援する事業として、『鳩間島方言辞典』(1841頁)、『多良間島方言辞典』(555頁)を編集し、刊行した。2020年度にオンライン公開の予定である。

(2) データベース等に関する講習会・講演会

- COJADSモニター版の利用促進のため、利用講習会及び研究発表会「方言コーパスを活用した方言研究の開拓」を開催した(科研費基盤(A)と共に、2019.9.6、参加者数28人、内学生数2人)。

(3) データベース等を使った研究成果

- COJADSモニター版を使って、日本方言研究会(口頭発表)、日本語学会春季大会(ポスター発表)等、13件の発表を行なった(うち4件が国際学会)。また、COJADSモニター版を使って2本のブックチャプターを執筆した。
- COJADSモニター版は、諸方言の自然談話データを横断的に検索することができる日本で初めての大規模方言コーパスである。公開後1年で登録ユーザー数が3,000人以上となるなど、方言研究及び一般社会で活用されている。

(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画

(1) 共同利用・共同研究を推進するための大学との組織的な連携

- 連携協定に基づき、琉球大学に「沖縄における消滅危機言語・方言の調査・保存に関する研究」を事業

<p>委託し、沖縄県伊江島等の言語を記録した。</p> <p>(2) プロジェクト合同の研究集会</p> <p>8. コーパス合同シンポジウム「<u>コーパスによる日本語のバリエーション</u>」を「通時コーパス」「日常会話コーパス」「学習者コーパス」、科研費基盤(A)、科研費基盤(B)等と共同で開催した（2019.9.5、発表件数4件、参加者数64人、内学生数9人）。</p> <p>9. 合同シンポジウム「日本語文法研究のフロンティア－日本の言語・方言の対照研究を中心に－」を「対照言語」文法研究班「とりたて表現」と共同で2020年2月29日に開催する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止した。</p> <p>(3) 共同利用・共同研究の評価等</p> <p>10. 客員教授／共同研究員の岩崎勝一教授（UCLA）にプロジェクトの今後の国際的な展開についてアドバイスを受け、国際会議の発表等に反映させた。</p>	
---	--

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>(1) 大学院等への教育協力に関する計画</p>	
<p>(2) 人材育成に関する計画</p>	
<p>(1) プロジェクト非常勤研究員の雇用</p> <p>1. 若手研究者を育成するために、特任助教5名を雇用（うち1名は東外大AA研とのクロスアポイントメントによる雇用、1名は人間文化研究機構総合人間文化研究推進センターの雇用、1名は総合情報発信センターの雇用）、PDフェローを1名、非常勤研究員を9名雇用し、危機言語・方言の調査研究、COJADSの構築、言語の展示等を通してキャリア支援を行なった。</p> <p>(2) 大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加</p> <p>2. 大学院生4人、日本学術振興会特別研究員5人を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、方言調査や研究会での発表の場を提供した。</p> <p>3. 若手研究者の<u>国際学会等での発表に対して旅費支援を行なった</u>。主な支援内容は以下のとおりである（国際学会については、5(1)「グローバル化」を参照）。△JSAA（モナッシュ大学、オーストラリア）4人。△NINJAL-UHM Linguistics Workshop（ハワイ大学、アメリカ）3人。△IYIL2019（パデュー大学・アメリカ）3人。△IYIL2019（ユネスコ本部・フランス）3人、△LPSS 2019（Academia Sinica、台湾）3人。</p> <p>(3) 若手研究者への研究費の支援</p> <p>4. 40地点調査の語彙集・文法書・談話テキスト、言語教材の作成のための<u>調査の旅費</u>を援助した。（1(1)「研究水準及び研究の成果」参照）</p> <p>(4) チュートリアル</p> <p>5. 青森県八戸市方言調査（1(1)(1)「フィールドワーク」参照）に参加する<u>大学院生を全国公募し</u>、応募者8人に対して事前研修、フィールドワーク、報告書作成を通して若手研究者を指導した。</p> <p>6. 第33回NINJALチュートリアル（台湾東吳大學、2019.11.9、参加人数41人）において、「日本の言語の多様性」の講義を行なった。2020年3月に東北大外で実施する予定だった第35回NINJALチュートリアルは、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止とした。</p>	

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画を上回って実施した
(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画	
1. 2014年度から実施している宮崎県椎葉村との連携事業「椎葉村方言調査と『椎葉村方言語彙集』の作成」(5ヵ年計画)が今年度、最終年度を迎える。これまでの調査データをまとめて、12集落の方言よりなる『椎葉村方言語彙集』を完成させた。出版は当初の予定どおり来年度に行う予定である。	
2. 鹿児島県沖永良部島和泊町、知名町との連携協定に基づき、和泊町で <u>親子向け・小学生・中学生向け研修会</u> を各1回、知名町で「 <u>しまむに教室</u> 」(方言辞書を作成するための講座)を5月-11月に毎月2回開催し、方言の保存と復興に関する指導を行なった。また、沖永良部島の方言を子どもたちに継承する活動「 <u>わどうまい しまむにプロジェクト(和泊島ことばプロジェクト)</u> 」の発表会を開催した(2020.2.16、国語研)。これらの活動は、地方誌で報道され、地元で注目された。	
(2) 研究成果の社会への普及に関する計画	
(1)一般向け講義・講演会・フォーラム	
3. 「 <u>危機的な状況にある言語・方言サミット(奄美大島)</u> 」を文化庁等と共同で開催し、プロジェクトから4人が報告を行なった(2020.2.22-23、AiAiひろば、奄美文化センター、主催・共催 文化庁、鹿児島県、奄美市、国立国語研究所等、参加人数570人)。	
4. 竹富小中PTA文化部主催「 <u>ことばと絵のワークショップ 夏のてーどうんむに教室</u> 」(2019.8.16)にプロジェクトのメンバーが講師として参加し、方言に関する講義を行なった。	
5. 2020年2月12-17日にゆらでいく祭りの一部として、沖縄県石垣白保の公民館講座で一般向け、及び中学生向けに方言に関する講演を行なった。	
6. 「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」(人間文化研究機構)と共同で、昨年度作成した <u>与論のことばと文化に関する動画作品4本</u> を「危機言語DB」のページで公開した。また、今年度新たに八丈島の方言動画作品3本を作成、 <u>モバイル型展示ユニット</u> の展示を4回開催、展示に関する講演会を1回開催した。	
7. 「北米における日本関連在外資料調査研究・活用」(人間文化研究機構)と共同で、「 <u>ハワイ：日系移民150周年と憧れの島のなりたち</u> 」(歴博と共同開催)、沖縄県北中城村、沖縄県立図書館、沖縄県公文書館と連携して、戦後の沖縄復興に奔走した比嘉太郎に関する展示を開催した。	
(2)インターネット等を通した研究成果の社会への発信	
8. COJADSモニター版を拡張・公開するとともに、その活用を促進した。(2(1)共同利用・共同研究を参照)	
9. 「危機言語DB」、「アイヌ語口承文芸コーパス」、「日本言語地図データベース」等のデータを拡充し、ホームページで公開した。(2(1)共同利用・共同研究を参照)	
10. 絵本をとおした言語復興活動として、与那国、竹富、沖永良部の方言の絵本を出版した。この取組は多くの新聞で紹介された。	
(3)社会人を対象とするスキルアップの計画等	
11. 鹿児島県沖永良部島和泊町で役場職員研修会を3回、知名町で1回開催し、方言の保存と復興に関する指導を行なった。	
12. その他、上記の「言語・方言サミット」や講演、展示をとおして、文化団体、一般市民に危機言語・方言の記録・保存・復興の啓蒙活動を行なった。	

5. グローバル化に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
(1) 国際的協業に関する計画	
(1) 海外の研究者の受入	
1. 海外の研究者 4 人が共同研究員としてプロジェクトに参加し、その内 1 人が 8 月の八戸方言調査に參加した。	
(2) 海外の大学との連携	
2. ハワイ大学マノア校との連携協定に基づき、 <u>NINJAL-UHM Linguistics Workshop</u> (2019. 10. 12-13, ハワイ大学) を企画・開催した。13 の大学・研究機関から 54 人 (内大学院生 22 人, 国外機関所属 39 人) が参加し、統語と意味のインターフェース、言語獲得、コーパス言語学の観点から、基調講演 3 件、口頭発表 9 件、ポスター発表 16 件、及びセミナーワークショップを行なった。国語研からは、言語変異研究領域と理論・対照研究領域の教員 3 人と共同研究員等 12 人が参加した。	
(2) 国際的発信に関する計画	
(1) 英語による研究成果の発信	
3. 昨年度に開催した危機言語に関する国際シンポジウムを元にした英語論文集を Mouton 社から刊行する準備を進めた。また、ポスターセッションの発表を元にした英語論文集 <u>Proceedings of International Symposium Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia -Poster Session-</u> を東外大 AA 研 Lingdy3 と共同で作成し、東外大のホームページで公開した。	
4. ムートン社 <i>Handbook of Japanese Dialects</i> , <i>Handbook of the Ainu Language</i> の編集作業を進めた (出版は 2021 年度の予定)。	
5. プロジェクト全体として 27 件の国際学会、国際会議での講演、発表を行なった。主な発表に以下のものがある。	
○ <u>JSAA2019</u> (モナッシュ大学、オーストラリア、2019. 7. 1-4) Keynotes Talk 1 件及、研究発表 5 件。	
○国連の定める <u>国際先住民言語年 (IYIL2019)</u> の <u>Perspectives Conference</u> におけるパネルセッション <u>Endangered Languages in Japan</u> の企画・運営 (パデュー大学、アメリカ、2019. 10. 31-11. 2、東外大 AA 研 LingDy3 と共同)。プロジェクトメンバー 5 人と与論・沖永良部の 4 人が発表。	
○同じく、IYIL2019 の <u>International Conference Language Technologies for All</u> (LT4All) (自動翻訳や音声認識などことばのテクノロジーをすべての言語に) (ユネスコ本部、パリ、2019. 12. 4-6) におけるポスター発表 1 件。	
○ <u>LPSS 2019</u> (Academia Sinica, 台湾、2019. 11. 21) 口頭発表 1 件、ポスター発表 1 件。	
6. 『喜界島方言調査報告書』『宮古島方言調査報告書』を英訳し、「危機言語 DB」のウェブページで公開した。また、危機言語・方言のデータを音声記号、日本語、英語で公開した。	

6. その他

該当する活動なし。

令和元年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施している

本プロジェクトは、5つの評価項目「研究」「共同利用・共同研究」「教育」「社会との連携及び社会貢献」「グローバル化」のすべてにおいて実施計画を上回る成果を挙げているため、「A 評価」が妥当だと考えられる。感染症拡大を予防するため公開講座などの一部見送りはあったが止むを得ないことであり、今期の成果全体への影響は最小限に止まっているといえる。また、ウェブページ充実への努力がみられた。国際的発信と地域社会への発信の両面を視野に入れつつ、学術研究の高い質を保ちながら、利活用への工夫を模索した構築がなされている。移動が制限される今日の状況に鑑み、これからもウェブページの一層の工夫が望まれる。他方、欠かすことのできない実地調査や、現実の場を共有するプレゼンテーションもまた活発に行われてきた。種々のバランスのとれた本プロジェクトの活動および成果を高く評価したい。

《評価項目》

1. 研究について

研究水準と成果及び研究実施体制の充実について、実施計画を上回る十二分な成果を挙げている。フィールドワークは全国40地点で実施され、内1地点の集中調査も滞りなく実施されたことは計画通りである。研究発表及び研究成果の公開は計画通り実施され、「格・情報構造」に関する公開研究発表会、手話言語を危機言語のひとつに位置づけた調査研究の公開があった。『椎葉村方言語彙集』の完成、『青森県むつ市方言調査報告書』の刊行をみた。なお、講演会等一部とりやめは、感染症拡大防止のために必要な措置であった。研究の量的側面を測る指標として共同研究員の研究を含めて図書・報告書6件、論文23本、コーパス・データベース4件、学術発表・学術講演71件、その他83件が挙げられ、また、質的側面を測る指標として客員准教授の金田一京助博士記念賞、日本学術振興会賞の受賞、特任助教、非常勤研究員の各日本語学会発表賞受章、共同研究員・准教授の日本音声学会学術研究奨励賞受賞が報告されたことをみても、質量ともに充実した成果が知られる。

2. 共同利用・共同研究について

共同利用・共同研究の質的量的側面及び実施体制の充実について、実施計画を上回る十二分な成果を挙げている。危機言語DB、アイヌ語口承文芸コーパス、日本言語地図データベース、日本語諸方言コーパスは、着実にデータの拡充が行われた。計画された『鳩間島方言辞典』(1841頁)に加えて『多良間島方言辞典』(555頁)の編集刊行をみたことは当初の計画を上回る成果である。諸方言自然談話を蓄積した大規模方言コーパス COJADS モニター版を用いた研究発表とワークショップは順調に実施され、COJADS公開後1年で登録ユーザー数が3000人以上となったことは特筆される成果である。コーパスを公開するばかりではなく、それを用いて、国際学会を含め積極的に研究発表を推進したことは研究の質と量の観点から高く評価される。大学との組織的連携については、琉球大学との安定的な共同研究が今期も継続された。また、UCLA教授からのアドバイスを受け国際会議の発表等に反映させたことは、プロジェクトの機能的広がりと強化のために望ましいことであった。

3. 教育について

大学院等への教育協力に関する計画、人材育成に関する目標を達成するための措置は、実施計画を上回る十二分な成果を挙げている。人材育成に関しては、若手研究者育成のためのプロジェクト

非常勤研究員の雇用によるキャリア支援が十分に行われた。また、大学院生4名、日本学術振興会特別研究員5名をプロジェクトに参加させ、方言調査や研究会での発表の場を提供した。特に国際学会等での発表に対しての旅費支援は、若手研究者の視野を広げ危機言語に関する国際的研究連携を促す観点から評価される。若手研究者に対する調査旅費の支援も滞りなく実施された。大学院生を全国公募し、応募者8名に対して事前研修、フィールドワーク、事後指導を通して若手研究者を育成する試みは、本年度も計画通り実施された。方言調査能力の育成機会が人文系の高等教育で失われつつある現状に鑑み、大学院等への教育協力を側面から支える活動としても評価できる。また、チュートリアルを台湾東吳大學で行い41名の参加を見たことも、視野の広い若手育成実施成果のひとつである。

4. 社会との連携及び社会貢献について

自治体との連携及び研究成果の社会への普及は、いずれも実施計画を上回る十二分な成果を挙げている。自治体との連携は、宮崎県椎葉村との協定に基づく『椎葉村方言語彙集』の完成、鹿児島県沖永良部島和泊町、知名町との連携協定に基づく親子向け・小中学生向け研究会の開催、方言辞書作成講座「しまむに教室」の開催、方言継承活動「わどうまいしまむに（和泊島ことば）プロジェクト」の開催があった。研究成果の社会への普及は、①一般向け講義・講演会・フォーラム、②モバイル型展示ユニットを活用した展示・講演会、③インターネットを利用したコーパスの発信に分類されるが、いずれも充実した実施回数と成果を挙げている。プロジェクトが作成した動画作品、展示ユニット、絵本、コーパスなどの多様な媒体を用いた発信が工夫された。危機言語の継承には使用者の意識醸成が鍵となるが、役場職員研修会、文化団体、一般市民に向けた方言の記録・保存・復興の啓蒙活動につなげた努力は高く評価できる。また、機構との共同研究「ハワイ：日系移民150周年と憧れの島のなりたち」が沖縄県立図書館、同公文書館との連携で展示された。海を越えた日本語にも注目した点で、学術的社会的意義が認められる。

5. グローバル化について

研究体制における国際的協業、研究過程及び研究成果の国際的発信について、いずれも実施計画を上回る十二分な成果を挙げている。海外研究者のプロジェクト受入が4名あった。ハワイ大学マノア校との連携協定に基づきプロジェクトが企画開催した同大学でのワークショップには、国内外13の大学・研究機関が参加し、成果の国際的発信とともに研究交流がなされた。そのほかに、国際会議での口頭発表はプロジェクト全体として27件あり、JSAA2019於オーストラリア・モナシュ大学、IYIL（国際先住民言語年）2019 Perspectives Conference於アメリカ合衆国・パデュー大学、IYIL2019 LT4All於フランス・ユネスコ本部、LPSS2019於台湾・Academia Sinicaなど、世界各地で実施された。英語文献の公刊については、Mouton社から刊行予定の英語論文集2冊の刊行準備が行われた。東外大AA研Lingdy3と共同で作成した英語論文集は、東外大のウェブページで公開された。国語研危機言語のウェブページで、『喜界島方言調査報告書』（304頁）、『宮古島方言調査報告書』（338頁）の全文英訳が掲載されたことは高く評価される。

6. その他特記事項

ウェブページ改善の努力は、特筆される。音声記号を用いた危機言語の記録・保存・公開、継承支援のための利活用のしやすさ、日本語と英語を用いた発信など、時には矛盾する多様な目的に応じる工夫がみられた。

通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開

プロジェクトリーダー：小木曾 智信

I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

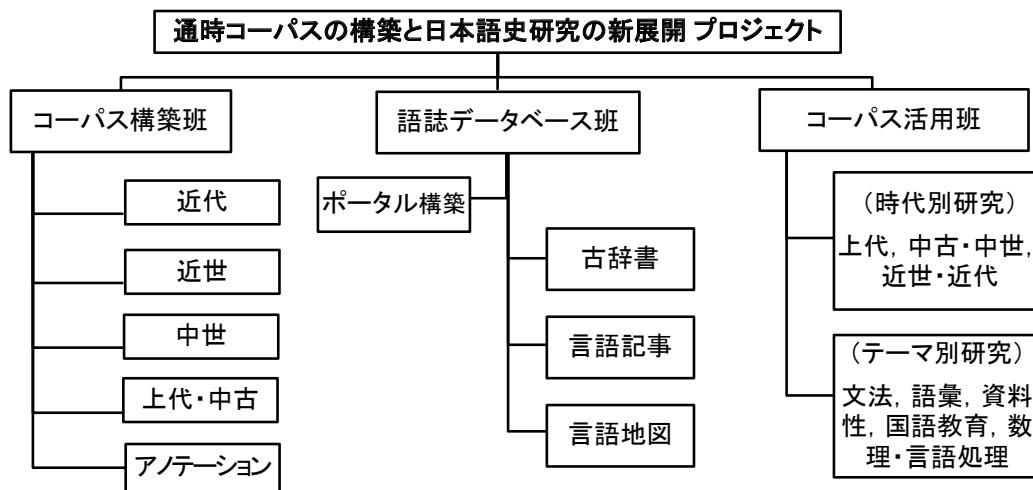
本プロジェクトは、上代（奈良時代）から近代までの日本語資料をコーパス化し、日本語の歴史研究が可能な通時コーパスと語誌のデータベースを構築する。そして、このコーパス・データベースを活用することで新たな観点から日本語史研究を展開する。従来の日本語史研究は、専門知識を必要とするさまざまな文献を取り扱う必要から、研究が特定の資料や形式に偏ったものになりがちであった。通時コーパスを構築し活用することによって個別の資料だけでなく日本語史全体をマクロな視点から見た研究を展開することを可能にする。さらにコーパス言語学で培われてきた新しい研究手法を導入し、従来行えなかった視点からの研究を展開する。

既に国語研究所では『日本語歴史コーパス』の構築に着手しているが、本プロジェクトではこのコーパスを通時コーパスとして利用可能にするために大幅に拡張する。第2期中期計画で構築済みの「平安時代編」（平安仮名文学作品）、「室町時代編」（狂言）等に加え、上代の万葉集・宣命、中古以降の和歌集、中世のキリスト教資料・軍記物・抄物、近世の洒落本・人情本、近代の雑誌・教科書・小説等をサブコーパスとして追加する。このほかにも、日本語史研究に資する資料を選定してコーパスに追加し、上代から近代までの日本語を一本に繋ぐ通時コーパスとして完成させる。また、コーパスと関連付けた語誌データベースを構築し、語誌情報のポータルページを公開し、研究者のみならず日本語の歴史に興味を持つ人々に役立つ情報を提供する。コーパスを活用する研究班には、上代、中古・中世、近世・近代の各時代別の研究グループの他、文法・語彙、資料性・アノテーションの検討の研究グループを設け、コーパス構築に携わるメンバーも全員が参加して研究活動を展開する。

なお、プロジェクトの実施にあたっては、オックスフォード大学東洋学部日本語研究センター、および人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の構築」の中の「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」（代表者・高田智和）と連携して行う。また、実践女子大学との提携に基づきデジタル化された所蔵資料の活用を図る。

2. 年次計画（ロードマップ）

●全体計画・研究組織



「コーパス構築班」は6年間で奈良時代から明治・大正時代までをカバーする通時コーパスを構築する。上代・中古、中世、近世、近代の時代ごとにグループを置き、プロジェクト非常勤研究員を配置してコーパス開発にあたる。「語誌データベース班」は、コーパスと連携した語誌データベースを開発するために古辞書、言語記事、言語地図のグループを置き、各々専任教員が中心となってデータベースを開発する。またポータル構築のグループを置き、コーパスと語誌データベースの情報を統合した語誌情報ポータルサイトの設計・構築にあたる。「コーパス活用班」は、時代別に上代、中古・中世、近世・近代の研究グループを置き、コーパス構築班と連携しつつ各時代の日本語の研究にあたる。また分野別に、文法、語彙、数理・言語処理の研究グループを置き各分野の研究にあたるほか、資料性、アノテーションのグループを置き、それぞれコーパスに追加する資料、アノテーションに関する研究を行う。このほか、人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の構築」の中の「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」の研究組織と連携して表記の研究を行う。コーパス活用班にはコーパス構築班のメンバー、PD・大学院生を含む若手研究者を参加させる。

●年次計画

※各年、研究発表会（シンポジウムを含む）・講習会を1回以上開催する。サブコーパスの名称は仮称。

平成28年度（1年目）

- ・「鎌倉時代編II日記・紀行」、「明治・大正編I雑誌」（太陽・女性雑誌非コアデータ）を公開。
- ・日本語学会でワークショップを開催。

平成29年度（2年目）

- ・「奈良時代編I万葉集」、「室町時代編IIキリスト教資料」、「江戸時代編I洒落本」を公開。
- ・書き言葉コーパス入門書を出版。

平成30年度（3年目）

- ・「江戸時代編II人情本」、「明治・大正編II教科書」を公開。
- ・古辞書データベースの試作版を公開。

●3年目までの成果物

コーパス構築班は『日本語歴史コーパス』を拡張し下記のサブコーパスを公開する。

「鎌倉時代編II日記・紀行」「室町時代編IIキリスト教資料」「奈良時代編I万葉集」「明治・大正編I雑誌」「明治・大正編II教科書」「江戸時代編I洒落本」「江戸時代編II人情本」「和歌集編（八代集）」「明治・大正編III明治初期口語資料」

語誌データベース班は、語誌データベースの一部として古辞書データベースの試行版を公開する。コーパス活用班は、ワークショップ・公開研究会を2回以上、国際シンポジウムを1回開催し、書籍1冊を刊行する。また、プロジェクト全体として一般向けのNINJALフォーラムを1回開催する。

令和元年度（4年目）

- ・「奈良時代編II宣命」、「江戸時代編III近松淨瑠璃」を公開。

令和2年度（5年目）

- ・「明治・大正編IV近代小説」を公開。
- ・語誌情報ポータルサイトの公開。
- ・研究論文集の出版。

●5年目までの成果物

コーパス構築班は、奈良時代から明治・大正時代までの通時的な研究ができるコーパスとして『日本語歴史コーパス』を拡張し公開する。語誌データベース班は、各種語誌データベースを構築し、語誌情報の

ポータルサイトを公開する。コーパス活用班は、国際シンポジウムを1回開催し、研究論文集を1冊以上出版する。

令和3年度（6年目）

- ・「鎌倉時代編III軍記」を公開。
- ・『日本語歴史コーパス』（奈良時代～明治・大正時代）の（一次）整備完了。
- ・「語誌情報ポータルサイト」の完成。

II. 令和元年度活動概要

令和元年度予算総額 28,500千円

令和元年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

- ・通時コーパス活用班のグループ研究発表会を5回企画し3回実施（2回は新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止），『日本語歴史コーパス』の講習会（チュートリアル）を3回開催した。
- ・プロジェクト全体での研究発表会として「通時コーパス」シンポジウム2020（3月13日）を企画したが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となった。
- ・研究成果を、書籍1件、論文・ブックチャプター等29件、発表・講演42件、コーパス・データベース等7件として公開した（プロジェクトに対する謝辞を含むもののみ）。
- ・『日本語歴史コーパス』「和歌集編（八代集）」の長単位と掛詞データを整備し、掛詞検索に対応した検索アプリケーション「中納言」を通して12月に公開した。また、新規に「江戸時代編III近松淨瑠璃」「奈良時代編II宣命」を3月に公開した。
- ・言語地図画像データベースに「森重幸 分布図からみた徳島県の方言 アクセント」等9件を追加・公開した。
- ・語誌情報ポータル（語誌データベース）の新バージョンを構築し、3月に公開した。
- ・日本語学会2019年度春季大会でワークショップ「『日本語歴史コーパス』の今とこれから」を開催した（5月19日）。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

- ・検索アプリケーション「中納言」をアップデートし、多重形態論情報（掛詞）検索に対応した。
- ・『日本語歴史コーパス』「和歌集編（八代集）」の長単位と掛詞データを整備し12月に公開した。
- ・新規に『日本語歴史コーパス』「江戸時代編III近松淨瑠璃」「奈良時代編II宣命」を3月に公開した。
- ・『日本語歴史コーパス』これまでの登録ユーザー数は約13,600人、2019年度の検索件数は約31万件となった。また、2019年度中に『日本語歴史コーパス』を利用して発表された研究論文と全国学会の発表件数は、72本となった。
- ・日本語の語彙研究の基礎資料として広く利用されてきた『語彙研究文献語別目録』（佐藤喜代治編『講座日本語の語彙別巻』（明治書院、1983年）に収録）を電子化した全文データをオープンデータとして公開した。
- ・「語誌情報ポータルサイト」（旧称：語誌データベース）のアップデートを行った。

3. 教育に関する計画

- ・コーパス講習会を3回（4月九州大・9月京都大・1月名古屋大）開催した。

- ・「日本語歴史コーパス活用ワークショップ」を 8 月 20, 21 日に開催し、大学院生を招待して高度な通時コーパスの活用 (SQL, R) の講習会を行った。
- ・中学校・高等学校の国語科教員及び教職課程の学生院生向けに『日本語歴史コーパス』活用の講習会 (国語教育活用ワークショップ) を企画したが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となった。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

- ・前年度に引き続き、ジャパンナレッジ (ネットアドバンス社) との共同により『日本語歴史コーパス』からジャパンナレッジ新編日本古典文学全集・JK Books 「太陽」へのリンクを行った。
- ・三省堂古語辞典の編纂に、コーパス活用の面で協力し、通時コーパスを活用した記事を執筆した。

5. グローバル化に関する計画

- ・オックスフォード大学東洋学部日本語研究センターと共同で ONCOJ のアップデートを行ない、日英語の解説ページを整備して公開した。
- ・上海外国语大学において 11 月 7 日に NINJAL セミナー「日本語研究の基盤としての言語資源」を開催した。

6. その他

該当する活動なし。

III. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画どおり実施した
(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画	
1. プロジェクト研究成果を、書籍 1 件、論文・ブックチャプター等 29 件、発表・講演 42 件、コーパス・データベース等 7 件として公開した。(原則としてプロジェクトに対する謝辞を含むものに限った)	
2. 古辞書データベース・言語地図データベース・言語記事データベースの整備を行ない、これらのデータベースとコーパスの統計情報を一括して検索することができる「語誌情報ポータル」(旧称: 語誌 DB) をアップデート・公開した。	
日本語の語彙研究の基礎資料として広く利用されてきた『語彙研究文献語別目録』(佐藤喜代治編『講座日本語の語彙別巻』(明治書院, 1983 年) に収録) 全文データを電子化しオープンデータとして公開した。	
3. 通時コーパス活用班のグループ研究発表会を 5 回企画、3 回開催した。(6 月 29 日, 9 月 9 日, 12 月 22 日に開催。3 月 2 日, 3 月 14 日は新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止)	
4. 日本語学会 2019 年度春季大会でワークショップ「『日本語歴史コーパス』の今とこれから」を開催した(5 月 19 日)。	
また、プロジェクト独自の試みとして「『日本語歴史コーパス』活用ワークショップ 2019」を開催した(8 月 20 日, 21 日)。	
5. プロジェクト主催で公開講演会「言語史の計量的研究」を開催した(6 月 22 日)。	
6. プロジェクト全体の研究発表会として 3 月 13 日に「通時コーパス」シンポジウム 2020 を企画したが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止。※持橋プロジェクトとの共催	

(2) 研究実施体制等に関する計画

7. 『日本語歴史コーパス』を活用した研究を実施するために、国内外の研究者 80 人をプロジェクト共同研究員として組織して研究活動を行った（国内 76 人、海外 4 人）。
8. 『日本語歴史コーパス』の構築を実施するためプロジェクト非常勤研究員 4 名を雇用し、プロジェクト PD フェロー 1 名とあわせ、合計 5 名でコーパス構築を行った。
9. 人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の構築」の中の「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」の研究組織と連携して研究を実施した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
(1) 共同利用・共同研究に関する計画	
<ol style="list-style-type: none">1. 『日本語歴史コーパス』「江戸時代編Ⅲ近松淨瑠璃」を整備し、3月31日に公開した。2. 『日本語歴史コーパス』「奈良時代編Ⅱ宣命」を整備し、3月31日に公開した。3. 『日本語歴史コーパス』「和歌集編」（八代集）の長単位・掛詞を整備し、12月27日に公開した。<ul style="list-style-type: none">・検索アプリケーション「中納言」を ver. 2.5.0 にアップデートし、多重形態論情報（掛詞）検索に対応した。・2019 年度中に、『日本語歴史コーパス』を利用して発表された研究論文・全国学会の発表件数は、72 本となった。4. 「語誌情報ポータル」（旧称：語誌 DB）をアップデートし公開した。〔重出〕5. 『日本語歴史コーパス』「鎌倉時代編Ⅲ軍記」、「明治・大正編Ⅳ近代小説」、「明治・大正編Ⅴ新聞」を整備し、令和 2 年度以降に公開するための準備を行った。6. 日本語学会 2019 年度春季大会で開催したワークショップ（5月19日）においてアンケートを行い、今後通時コーパスに取り入れる資料について学界の意見を求めプロジェクトの計画に反映させた。7. 『日本語歴史コーパス』利用の講習会（チュートリアル）を 3 回（4月18日九州大・9月30日京都大・2月5日名古屋大）開催した。8. 通時コーパス活用班のグループ研究発表会を 5 回企画、3 回開催した。（6月29日、9月9日、12月22日に開催。3月2日、3月14日は新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止）〔重出〕	
(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画	
<ol style="list-style-type: none">9. 「オックスフォード NINJAL 上代日本語コーパス」のアップデートを共同で行うなど、英国オックスフォード大学との連携協定のもとで共同研究を推進した。10. コーパス関係の所内プロジェクトや科研費プロジェクトと合同で合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—くだけた表現—」を開催した（9月5日）。11. プロジェクト評価結果を踏まえ、「語誌データベース」の名称見直しを行ない当初計画案にあった「語誌情報ポータル」とした。また、評価委員の意見を踏まえ日本語学会ワークショップでのアンケートを行って通時コーパスに関する学界の意見を収集した。12. 新領域創出型プロジェクト「現代語の意味の変化に対する計算的・統計力学的アプローチ」との共催で「通時コーパス」シンポジウム 2020 を企画した（新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止）。〔重出〕	

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
(1) 大学院等への教育協力に関する計画	
1. イタリア・パヴィア大学より、ファン・シャンシャン氏を特別共同利用研究員として受け入れた。	
(2) 人材育成に関する計画	
2. PD フェローを 1 名、非常勤研究員を 3 名雇用し、コーパス構築を進めるとともに、コーパスを活用した研究方法の指導を行った。	
3. 大学院生 5 名を共同研究員としてプロジェクトに参画させた。	
4. コーパス活用班研究会、『日本語歴史コーパス』活用ワークショップ 2019 等において、大学院生に発表等の機会を提供し旅費、英文校正等の補助を行った（「通時コーパス」シンポジウムは新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止）。	
5. 若手研究者に対して学会発表（国際学会 DigitalHumanities2019 ユトレヒト出張）等の経費の援助を行った。	
6. 『日本語歴史コーパス』利用の講習会（チュートリアル）を 3 回（4 月 18 日九州大・9 月 30 日京都大・21 月 5 日名古屋大）開催した。〔重出〕 また、「日本語歴史コーパス活用ワークショップ」を 8 月 20, 21 日に開催し、大学院生を招待して高度な通時コーパスの活用（SQL, R）の講習会を行った。	

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画を上回って実施した
(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画	
1. (株)小学館・(株)ネットアドバンスと連携して公開した『日本語歴史コーパス』とジャパンナレッジ「新編日本古典文学全集」本文へのリンクを追加し、『日本国語大辞典』とのリンクについての打合わせを行った。	
2. 情報システム研究機構・人文学オープンデータ共同利用センター（CODH）との共同で、八木書店・日本近代文学館と覚書にもとづき、近代文献の OCR に関する研究を行った。	
3. 三省堂古語辞典の編纂に、コーパス活用の面で協力し、通時コーパスを活用した記事を執筆した。	
(2) 研究成果の社会への普及に関する計画	
4. 『日本語歴史コーパス』を拡充し、コーパス検索アプリケーション「中納言」を通してインターネット上で無償にて公開した。これまでの登録ユーザー数は約 13,600 人、2019 年度の検索件数は約 31 万件となった。	
5. 歴史的資料を対象とした形態素解析のための辞書整備を行い、インターネット上で無償にて公開した。また、この辞書を用いて形態素解析を行う Web 上のツール「Web 茶まめ」のアップデートを行った。	
6. 中学校・高等学校の国語科教員及び教職課程の学生院生向けに『日本語歴史コーパス』活用の講習会（国語教育活用ワークショップ）を企画したが、（3 月 2 日・群馬大学）新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止。 また、領域指定型プロジェクト「古文教育に資する、コーパスを用いた教材の開発と学習指導法の研究」との共同で中学高校等の古文の授業での利用を想定したコーパス簡易検索アプリケーション「ことねり」を開発し、公開した。	

5. グローバル化に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
(1) 国際的協業に関する計画	
1. オックスフォード大学と共同で「オックスフォード・NINJAL 上代語コーパス」(ONCOJ) のアップデートを行なって1月に公開し、日英語の解説ウェブページを整備して3月に公開した。 2. 上海外國語大学において11月7日にNINJALセミナー「日本語研究の基盤としての言語資源」を開催した。 3. 海外の研究者4人を共同研究員に加え、『日本語歴史コーパス』活用に関する共同研究を行った。	
(2) 国際的発信に関する計画	
4. 国際学会において『日本語歴史コーパス』に関する発表を行った。 5. 『日本語歴史コーパス』の新規公開データについて、英文Webページを作成し情報を発信した。	

6. その他

該当する活動なし。

令和元年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施している

各項目の評価は、すべてB（計画どおりに実施している）以上で、A項目が複数に亘ることから、総合的には、A（計画を上回って実施している）と評価したい。

特に、「研究」ならびに、その発信である「共同利用・共同研究」「社会との連携及び社会貢献」の側面における計画の実施状況を高く評価したい。「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」のためには、『日本語歴史コーパス』の拡充と、その外部発信が必要不可欠であるが、その両方ともに着々と進展が伺えるものとなっている。また、同コーパスを活用した、三省堂古語辞典編纂への協力、中学高校の古文授業への対応を視野に入れた簡易検索ツール「ことねり」の開発等、単なる学術研究の殻に閉じこもることのない、広い視野を有しているところも併せ評価したい。

また、「教育」「グローバル化」の面においても、盛んな人的交流と情報発信が看取できる点も、評価されるべきである。

《評価項目》

1. 研究について

(1) 研究水準及び研究の成果等に関しては5項目、(2) 研究実施体制等に関しては3項目の研究計画を立て、数値目標を伴っていたものは、ほぼそれを超えたかたちで達成されている。プロジェクト研究成果発信は、書籍1件、論文・ブックチャプター等29件、発表・講演42件、コーパス・データベース等7件と申し分ないものであり、また、今回特筆すべきものとして、

「語誌情報ポータル」をアップデート・公開したことが挙げられる。このことにより、古辞書・言語地図・言語記事が、『日本語歴史コーパス』とも関連付けられて統合され、語別に前述の情報を一覧できるようになったことは刮目すべきであり、今後の各語ごとのデータ拡充が期待される。また、研究発表会、ワークショップ、シンポジウムの開催計画も計画通り、着実に履行されている。

また、『日本語歴史コーパス』を活用した研究実施のための研究組織態勢、ならびに、『日本語歴史コーパス』そのものの構築のためのプロジェクト非常勤研究員の雇用、および、人間文化研究機構プロジェクトとの連携も計画通りに進められた。

2. 共同利用・共同研究について

(1) 共同利用・共同研究に関しては8項目、(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関しては3項目の計画を立て、ほぼ計画通りに履行されている。本プロジェクトにおいては、『日本語歴史コーパス』が共同利用されるために、計画通り公開されることは最重要なことであり、その公開が順調になされていることは、高く評価されるべきである。また、それと連動する「語誌情報ポータル」がアップデート公開されたことも、共同利用の側面から注目すべきことであった。従来の、古辞書・言語地図・言語記事の三者からなる「語誌DB」だけでは、「語誌」と言うにはもの足りないものがあったが、『日本語歴史コーパス』と連動することによって、名称としても問題のないものとなった。

また、共同利用されるためには、講習会、ワークショップ、研究発表会等において、ユーザー側からの使い勝手の情報収集を行なうことも有用なことと考えられるが、そのことも踏み行なわれている。さらに、共同利用の実施体制の整備・推進、研究計画の改善も誠実に行なわれている。

それから、どこに書くべきか迷うが、自己評価が1「研究について」がBで、2「共同利用・共同研究について」がAとなっているが、印象としては、逆のようにも思える。(このあたり、担当者からの答弁がいただければと思います)

さらに、ここに書くべきか迷うことではあるが、1「研究について」では、(1)と(2)の計画がそれぞれ独立したナンバリングになっているのに、2「共同利用・共同研究について」では、(1)と(2)の計画が連番で結ばれている(さらに、3「教育に関する計画」では、1のタイプに戻り、5「グローバル化」になってまた連番)のは、なにか意図があると見るべきなのだろうか(分担して書類作成した?)。

さらに、これは、むしろ、もとの自己点検様式書の問題なのかもしれないが、「共同利用」と「成果公開」は別の概念のようにも思われる。「共同利用」の成果とは、どれぐらい使われたかということが問題になる(エビデンスが難しい? アクセス件数?)のではないかとも思う。あわせて、備忘のためにも、ここに付記した。

3. 教育について

(1) 大学院等への教育協力に関しては1項目、(2) 人材育成に関しては5項目の計画を立て、それぞれの項目について、ほぼ計画通りの達成となっている。海外の研究者からも『日本語歴史コーパス』が活用されること、国内で、『日本語歴史コーパス』を活用できる若手研究者が育つことは、極めて重要な課題と思われる所以、それが計画通り行なわれていることは評価できる。また、「大学院生4名以上を共同研究員としてプロジェクトに参画させる。」((2)2.)を毎年行なって、コンスタントに『日本語歴史コーパス』を研究に活用できる人材を育成しようとして、単年度で現に達成していることも評価できる。さらに、国際学会で発表する若手研究者への経費援助も、上述の、海外の研究者からの『日本語歴史コーパス』活用のデモンストレーションとしても意義深いと考えられる。

4. 社会との連携及び社会貢献について

(1) 産業界や地域社会との連携に関しては2項目、(2) 研究成果の社会への普及に関しては3項目の計画を立て、一部、計画になかった実施項目も達成している。たとえば、(株)小学館・(株)

ネットアドバンスと連携して公開した『日本語歴史コーパス』とジャパンナレッジ「新編日本古典文学全集」本文へのリンクを追加したことに加え、計画にはなかった『日本国語大辞典』とのリンクについての打合わせを行ったこと、三省堂古語辞典の編纂に、コーパス活用の面で協力し、通時コーパスを活用した記事を執筆したこと、中学高校等の古文の授業での利用を想定したコーパス簡易検索アプリケーション「ことねり」を開発し公開したことなどが挙げられる。なかでも、「ことねり」は、冒頭一字と品詞情報から、資料別用例にアクセスでき、中学高校等の古文授業で、活用されることが大いに期待できる（中納言のアカウントがないと使えないのは、若干ハードルか）。昨今の、高校教育で古典は必要か否かの議論にも寄与するかもしれない。古文の用例が、これほど簡便に検索できるのであれば、古文の本文に接するための、いわゆる「垣根」は低くなるからである。

5. グローバル化について

(1) 国際的協業に関しては3項目、(2) 国際的発信に関しては2項目の計画を立て、各項目について、ほぼ計画通りに実施されている（自己評価としてはAのようだが、どの点が、計画以上なのか、伝わってこないように思う）。なお、分りづらかったのは、(1)2.「海外において書き言葉コーパス利用の講習会（セミナー）を行う。」という計画で、通時コーパスのためのプロジェクトでなぜ、BCCWJが立ち交じっているのか、また、それを実施した「上海外国语大学において11月7日にNINJALセミナー「日本語研究の基盤としての言語資源」を開催」では、『日本歴史コーパス』に関しても発題されているのに、そこへの言及もない（いわゆる、ねじれている）ことである。

6. その他特記事項

特になし。

大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究

プロジェクトリーダー：小磯 花絵

I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

本プロジェクトの目的は、均衡性を考慮した大規模な日本語日常会話コーパスを構築し、それにに基づく分析を通して、日常会話を含む話し言葉の特性を、レジスター・相互行為・経年変化の観点から多角的に解明することである。そのために、（1）多様な日常場面の会話 200 時間を収めた大規模コーパスの構築を目指す会話コーパス構築班、及び、構築したコーパスを用いて、（2）語彙・文法・音声などに着目してレジスター的多様性を研究するレジスター班、（3）会話相互行為の中で文法が果たす役割や構造を研究する相互行為班、（4）語彙・文法・音声などに着目して話し言葉の経年変化を研究する経年変化班の四つの班を組織して研究を進める。

会話コーパス構築班では、日常の会話行動に関する調査にもとづき、自宅・職場・店舗・屋外での家族・友人・同僚・店員との会話など、多様な日常場面での会話を網羅するようコーパスを設計するものであり、世界的に見ても新しい試みである。また、従来の多くの会話コーパスのように収録のために人を集めて会話をもらうのではなく、生活の中で生じる会話を会話者自身に収録してもらうことにより、日常の会話を自然な形で記録する点にも特色がある。会話の音声・映像を収録し、文字化した上で、形態論情報や統語情報、談話情報などのアノテーションを施し、一般に公開する。これにより、話し言葉に関する高度なコーパスベースの研究基盤の確立を目指す。こうしたコーパスは、話し言葉や会話行動に関する基礎研究だけでなく、日本語教育や辞書編纂、音声情報処理、ロボット工学などの応用研究にも資するものである。また、後世の人々が 21 世紀初頭の日本人の生活や文化を知るための貴重な記録となる。

コーパスに基づく話し言葉研究では、現代の日常会話に加え、講演などの独話、発話を前提に書き言葉で記されたシナリオ、発話を前提としない小説などの会話文、1950 年代以降の話し言葉など、多様なデータを対象に、高度な統計的分析や緻密な微視的分析を通して、話し言葉の語彙・文法・音声・相互行為上の特性や仕組み、その経年変化の実態を、実証的に解明する。こうした研究を支えるものとして、昔の話し言葉データや BCCWJ の小説などの会話文、国会会議録などを対象にデータを整備し一般に公開する。

このように本プロジェクトでは、日常会話を含む様々なコーパスやデータベースを整備・構築し一般に公開することによって、話し言葉コーパスの共同利用・共同研究の基盤強化をはかる。

2. 年次計画（ロードマップ）

●全体計画・研究組織

本プロジェクトの実施にあたって図に示す 4 つの班を組織して研究を推進する。

【コーパス構築班】

多様な場面の日常会話を収めた『日本語日常会話コーパス』を構築し、次の通り公開する。

平成 30 年度：50 時間の会話の映像・音声・転記・短単位データをモニター公開（31, 32 年度も継続して公開）

令和 3 年度：200 時間分の会話の映像・音声・転記・短単位データに加え、コアデータ 20 時間には人手で各種アノテーション（長単位・文節・発話単位・係り受け・対話行為など）を付与して本公開

【3 つの研究班】

各班の研究に必要となるコーパス・データベース・アノテーションを隨時整備し、各班のテーマの研究を推進する。

構築したコーパス・データベースについては以下の通り公開する。

平成 28 年度：『名大会話コーパス』中納言版・ひまわり版を一般公開（レジスター班）

平成 29 年度：『国会会議録』ひまわり版を一般公開（経年変化班）

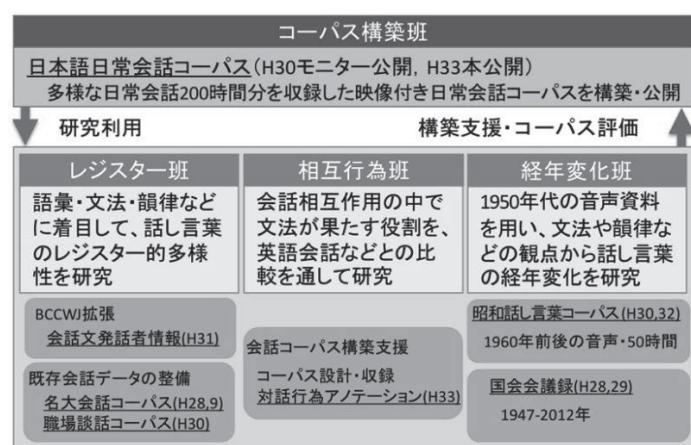
平成 30 年度：『現日研・職場談話コーパス』中納言版を一般公開

平成 30 年度：『昭和話し言葉コーパス』独話をモニター公開（経年変化班）

令和元年度：BCCWJ 中納言版 会話文発話者情報の拡張（レジスター班）

令和 2 年度：『昭和話し言葉コーパス』を本公開（経年変化班）

各班の研究成果をとりまとめて論文集を編纂し、令和 3 年度末までに 1 冊以上刊行する。



● 年次計画

H28 年度	会話コーパス整備	会話収録・データ整備の開始 アノテーション仕様策定・自動付与システム整備 [昭和話し言葉コーパス] 転記テキスト作成開始 [国会会議録検索システム] 構築・公開 [BCCWJ 発話者情報] アノテーション仕様策定・付与開始 [名大会話コーパス] 形態論情報付与
	その他のデータ整備	班ごとに研究会合を持ち研究を始動 シンポジウム 1 回、班合同研究発表会 1 回開催 コーパス利用講習会 2 回開催 『名大会話コーパス』一般公開（形態論情報付きテキスト検索版）
	研究	既存データを中心とする予備研究を推進
	成果発表	シンポジウム 1 回、班合同公開研究発表会 1 回開催
	若手育成	コーパス講習会 2 回開催
	成果物公開	
H29 年度	会話コーパス整備	会話収録・データ整備の継続 コアデータ・アノテーション人手修正開始 プロジェクト内部のデータ公開 [昭和話し言葉コーパス] 転記テキスト作成継続 [BCCWJ 発話者情報] アノテーション継続
	その他のデータ整備	既存データを中心とする予備研究を推進
	研究	シンポジウム 1 回、班合同公開研究発表会 1 回開催
	成果発表	コーパス講習会 2 回開催
	若手育成	
H30 年度	会話コーパス整備	会話収録・データ整備の継続 コアデータ・アノテーション人手修正継続 [昭和話し言葉コーパス] アノテーション開始、モニター公開準備 [BCCWJ 発話者情報] 検索システム整備開始
	その他のデータ整備	既存データにプロジェクト整備データを加えて研究を展開 シンポジウム・ワークショップ 3 回開催 フォーラム（日本語の変化を探る）1 回開催
	研究	
	成果発表	
	若手育成	コーパス講習会 2 回開催

	成果物公開	<u>『日本語日常会話コーパス』50時間モニター公開</u> <u>『昭和話し言葉コーパス』25時間モニター公開（うち許諾が取れたもの）</u> <u>『現日研・職場談話コーパス』一般公開</u>
R元年度	会話コーパス整備 その他のデータ整備 研究 成果発表 若手育成 成果物公開	会話収録・データ整備の継続 コアデータ・アノテーション人手修正継続 [昭和話し言葉コーパス] アノテーション継続 既存データにモニター公開データを加えて研究を開始・コーパス評価 シンポジウム3回開催 コーパス講習会2回開催 <u>『BCCWJ発話者情報』一般公開（中納言版）</u> <u>『日本語日常会話コーパス』50時間モニター公開（継続）</u> <u>『昭和話し言葉コーパス』モニター公開（継続）</u>
R2年度	会話コーパス整備 研究 成果発表 若手育成 成果物公開	会話収録・データ整備の継続 コアデータ・アノテーション人手修正継続 既存データにモニター公開データを加えて研究を推進・コーパス評価 シンポジウム2回開催 コーパス講習会2回開催 <u>『昭和話し言葉コーパス』本公開</u> <u>『日本語日常会話コーパス』50時間モニター公開（継続）</u>
R3年度	会話コーパス整備 研究 成果発表 成果物公開	公開準備（データ統合・検証、個人情報処理など） 研究成果のとりまとめ シンポジウム1回開催 コーパス講習会1回開催 <u>『日本語日常会話コーパス』本公開</u> 論文集の刊行1冊以上

II. 令和元年度活動概要

令和元年度予算総額 30,530千円

令和元年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

- ・レジスター班の研究成果を発信するため、シンポジウム「話し言葉の多様性」を令和1年8月30日に国語研で開催した。
- ・プロジェクト全体の研究成果を発信するため、シンポジウム「日常会話コーパスV」を令和2年3月9日に一橋大で開催する計画だったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止した。
- ・会話コミュニケーションについての議論を深めるため、関連する科研費プロジェクトと合同でシンポジウム「ことば・認知インタラクション8」を令和2年3月10日に国立情報学研究所で開催する計画だったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止した。
- ・『日常会話コーパス』モニター公開版を対象に語彙表などの基本的統計情報を報告書としてとりまとめ、プロジェクトのサイトで公開した。
- ・以上の研究成果は、プロジェクト共同研究員の研究成果も含めて、報告書1冊、論文・ブックチャプター

11 件, 辞典編纂 1 件, 発表・講演 41 件, データベース等 4 件 (うち 1 件はプロジェクト内限定) として公開した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

- ・昨年度, 音声・文字化資料をオンラインで公開した『昭和話し言葉コーパス』モニター版について, 形態論情報を新たに付与し, オンライン検索システム「中納言」にて音声配信機能を付けて公開した。
- ・『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の図書館サブコーパスの文学・物語に含まれる会話文に対し, 話者情報 (話者名・性別・年代) を付与し, オンライン検索システム「中納言」で公開した。
- ・昨年公開した『日本語日常会話コーパス』モニター版に加え, 追加 50 時間 (計 100 時間) をプロジェクト共同研究員およびその指導学生に限定公開し, 研究・教育に活用した。
- ・コーパス構築・コーパス研究の可能性を広げるため, コーパス構築に関わる複数のプロジェクトと合同で, 合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—くだけた表現」を国語研で開催した。

3. 教育に関する計画

- ・コーパス言語学分野の人材を育成するために, 若手研究者や大学院生を主対象とする講習会を 3 回 (計 4 コース) 開催した。また講習会で用いた資料をプロジェクトのサイトで公開した。
- ・若手研究者を育成するため, 非常勤研究員 5 名を雇用した。R を用いた統計勉強会を開催するなどし, コーパス言語学の若手研究者の育成につとめた。結果, 非常勤研究員 1 名が令和 1 年 9 月に博士号 (京都大学) を取得した。
- ・共同研究員が指導する大学生・大学院生に『日常会話コーパス』を優先的に提供してコーパス活用の研究支援を実施することで, 修士論文 2 本, 卒業論文 4 本の成果に結びついた。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

- ・プロジェクトで構築した『日本語日常会話コーパス』モニター版, 『昭和話しことばコーパス』モニター版, 『名大会話コーパス』, 『現日研究・職場談話コーパス』, 『国会会議録』を, インターネットを通して一般に公開し, 今年度合計で 1 万件を超える新規利用申請があった。
- ・『岩波国語辞典 第八版』(岩波書店) の改訂に際し, 語釈の記述や見出し語の選定に『日本語日常会話コーパス』が用いられるなど, 産業界で活用された。

5. グローバル化に関する計画

- ・国語研と Academia Sinica が共催で開催した国際会議 Linguistic Patterns in Spontaneous Speech 2019 (Academia Sinica, 11 月 21-22 日) にて『日常会話コーパス』のデモンストレーションを行い, 研究成果を国際的に発信した。
- ・海外在住の研究者 1 名をプロジェクト共同研究員として加え, 『日本語日常会話コーパス』を用いたデータセッションを通して, コーパスについて評価してもらった。

6. その他

該当する活動なし。

III. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画</p> <p>[公開研究発表会・講演会、国際シンポジウム]</p> <ol style="list-style-type: none">プロジェクト全体の研究成果を発信するために、各班合同のシンポジウム「日常会話コーパスV」を令和2年3月9日に一橋大学で開催する予定だったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止した。レジスター班の研究成果を発信するために、シンポジウム「話し言葉の多様性」を令和1年8月30日に国語研で開催した。口頭発表4件、パネル「生の話し言葉から見えてくるもの」1件（話題提供5件）、参加者は119名（うち学生15名）であった。<u>コーパス合同シンポジウム</u>を令和1年9月5日に開催した（詳細は「2. 共同利用・共同研究に関する計画」を参照）。会話コミュニケーションについての議論を深めるため、関連する科研費プロジェクトと合同でシンポジウム「ことば・認知インタラクション8」を令和2年3月10日に国立情報学研究所で開催する予定だったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止した。『日本語日常会話コーパス』および『昭和話し言葉コーパス』の研究成果を発信するため、令和1年9月21日に計量国語学会第63回大会においてデモンストレーションを行った。 <p>[フィールド調査]</p> <ol style="list-style-type: none">昨年度までに収集を終えた会話の場面や話者のバランスを検証した上で、不足する種別・属性の会話・話者（会議会合および中高生）を増補すべく、職場や学校を中心に収録調査を新たに実施し、目標の10時間分の会話を収録した。 <p>[研究成果の公表]</p> <ol style="list-style-type: none">『日常会話コーパス』モニター公開版を対象に語彙表などの基本的統計情報を報告書としてとりまとめ、プロジェクトのサイトで公開した。以上の研究成果を、報告書1冊、論文・ブックチャプター11件、辞典編纂1件、発表・講演41件として公開した。 <p>(2) 研究実施体制等に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none">コーパスに基づく話し言葉研究を推進するために、国内外の研究者55名をプロジェクト共同研究員として組織した。今年度は、日本語史や音声工学（音源分離処理・音声認識）など、これまで不足していた分野の共同研究員を増補した。	

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>(1) 共同利用・共同研究に関する計画</p> <p>[データベース等の構築・公開]</p> <ol style="list-style-type: none">『日常会話コーパス』については、本公開の準備のために、文字化や各種アノテーションを行った。アノテーションは、これまで進めてきた短単位・長単位・談話行為（ISO24617-2 日本語拡張版）に加え、韻律情報（X-JToBI 簡易版準拠）や係り受けについても実施した。述語項構造についてはコーパス開発センターと共同で方針を検討した。『日本語日常会話コーパス』50時間分のモニター公開を引き続き行い、語彙表・語数表を作成して公開	

した。また追加 50 時間のデータ（計 100 時間）をプロジェクト内の共同研究員およびその指導学生に公開し、研究・教育に活用した。

3. 1950 年代から 1970 年代にかけて国立国語研究所で録音された音声資料『昭和話し言葉コーパス』のうち、昨年度、音声・文字化資料をオンラインで公開した 17 時間の独話について、形態論情報を新たに付与した上で、令和 2 年 1 月 23 日にオンライン検索システム「中納言」（音声配信機能付き）にて公開した。また会話 25 時間の整備を継続し、来年度に予定している本公開の準備を進めた。
4. 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の図書館サブコーパスの文学・物語 (NDC:913~993 の 2707 サンプル) に含まれる会話文に対し、話者情報（話者名・性別・年代）を付与し、令和 2 年 3 月 16 日に、オンライン検索システム「中納言」で情報を公開した。これにより、実際に話された会話と小説等で書かれた会話の異同を、コーパスを用いて研究できる環境が整った。

[データベース等に関する講習会]

5. プロジェクトで構築・公開したコーパスを対象とする講習会を 3 回（計 4 コース）開催し、計 54 名が参加した。また講習会で用いた資料をプロジェクトのサイトで公開した。

*第 7 回コーパス利用講習会（7 月 27 日）

・検索システム「ひまわり」コース

*第 8 回コーパス利用講習会（8 月 30 日）

・オンライン検索システム「中納言」コース

*第 9 回コーパス利用講習会（8 月 31 日）

・音声映像システム「Praat」・「ELAN」コース

・検索システム「ひまわり」コース

[データベース等を使った研究成果]

6. プロジェクトで整備した上記コーパスを用いた研究発表を、シンポジウム「話し言葉の多様性」や言語資源活用ワークショップ、言語学会、語用論学会、音響学会、言語処理学会、国際会議 ICPHS や SPSS などで発表した。
7. 『日本語日常会話コーパス』モニター公開を引き続き行い、今年度は中納言版（完全無償）については 3946 件の新規利用申請が、HDD 版（実費負担）については 52 件の新規契約申請（うち 8 件は海外の大学、6 件は企業）があった。

（2）共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画

[プロジェクト合同の研究集会]

8. プロジェクト間の連携を深め、コーパス構築・コーパス研究の可能性を広げるために、「方言コーパス」、「通時コーパス」、「学習者コーパス」、「コーパスアノテーション」など、コーパス構築に関わる複数のプロジェクトと合同でシンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション－くだけた表現」を令和 1 年 9 月 5 日に国語研で開催した（参加者は 64 名）。

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>（1）大学院等への教育協力に関する計画</p> <p>特になし</p>	

(2) 人材育成に関する計画

[プロジェクト非常勤研究員の雇用]

1. 若手研究者を育成するため、非常勤研究員を5名雇用した。

[大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加等・発表機会の提供・研究費の支援]

2. 大学院生や非常勤研究員に、会話データを優先的に研究利用できる環境を整え、またRを用いた統計勉強会を開催するなどして、コーパス言語学の若手研究者の育成につとめた。結果、非常勤研究員5名のうち1名が令和1年9月に博士号（京都大学）を取得した。
3. プロジェクトが主催するシンポジウムにおいて、大学院生を含む若手研究者6名に発表の機会を提供する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止した。
4. 若手の非常勤研究者1名に対し、国際会議での成果発表のための経費を援助した。

[講習会]

5. プロジェクトが主催した講習会のうち、第7回コーパス利用講習会と第8回コーパス利用講習会については、若手育成を目標に若手研究者を主対象として実施した。（詳細は「2. 共同利用・共同研究に関する計画」を参照）

[その他]

6. 2018年12月に公開した『日本語日常会話コーパス』モニター版が、明海大学大学院応用言語学研究科の日本語学特論・日本語教育学特論や専修大学、お茶の水女子大学ゼミナールなどの授業で活用された。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおりに実施した
--------	------------

(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画

1. 『岩波国語辞典 第八版』（岩波書店）の改訂に際し、語釈の記述や見出し語の選定に『日本語日常会話コーパス』が用いられるなど、産業界で活用された。

(2) 研究成果の社会への普及に関する計画

[インターネット等を通した研究成果の社会への発信]

2. プロジェクトで整備・公開した『日本語日常会話コーパス』モニター版、『昭和話し言葉コーパス』モニター版、『名大会話コーパス』、『現日研・職場談話コーパス』、『国会会議録』を、インターネットを通して一般に発信した。今年度は合計で1万件を超える新規利用申請があり、研究広く活用された。
3. コーパス利用講習会の資料をプロジェクトのサイトを通じて一般に発信した（詳細は「2. 共同利用・共同研究に関する計画」を参照）。

5. グローバル化に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
--------	------------

(1) 国際的協業に関する計画

1. 海外在住の研究者1名をプロジェクト共同研究員として加え、日常会話コーパスを用いたデータセッションを通して、コーパスについて評価してもらった。

(2) 国際的発信に関する計画

国語研とAcademia Sinicaが共催で開催した国際会議 Linguistic Patterns in Spontaneous Speech 2019 (Academia Sinica, 2019年11月21-22日)にて『日常会話コーパス』のデモンストレーションを行

い、研究成果を国際的に発信した。

6. その他

該当する活動なし。

令和元年度の評価

《評価結果》

計画どおり実施している

研究については、前年度までに収集したデータのバランスを検証した上で、新たな収録調査によつてデータを増補して目標の10時間分の会話を収録し、『日常会話コーパス』モニター公開版の基本的統計情報を報告書としてとりまとめて公開するなど、計画通り進捗している。予定していたシンポジウムを新型コロナウイルス感染拡大防止のために中止したが、その前にシンポジウム「話し言葉の多様性」を開催してレジスター班の研究成果を発信した。

共同利用・共同研究についても、予定通りコーパスの作成・拡張・公開が進んでいる。特に『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の拡張版によって、実際の会話と小説等の中の会話を実データで比較する研究を可能にした。『日本語日常会話コーパス』に関して国内外の大学や企業から利用申請があったことから、本プロジェクトは学術にも産業にも有用と考えられる。

教育については、雇用や研究環境整備や勉強会により若手研究者の育成を図り、学思の取得等に結び付いている。また、前年度に公開した『日本語日常会話コーパス』モニター版が、大学・大学院の授業等で活用されている。

社会との連携及び社会貢献については、プロジェクトで整備・公開したコーパスについて今年度の合計で1万件を超える新規利用申請があり、学術研究に広く活用されていることがわかる。また、『岩波国語辞典 第八版』(岩波書店)の改訂に『日本語日常会話コーパス』が用いられるなど、本プロジェクトの成果は実務でも活用されている。

グローバル化については、Academia Sinicaと共に開催した国際会議で『日常会話コーパス』のデモンストレーションを行うとともに、海外の研究者をプロジェクト共同研究員に加えてコーパスを評価してもらうなど、国際的な研究成果の発信と研究協力を図っている。

以上のように全項目にわたってプロジェクトが計画通り進捗していると考えられる。今後のコーパスの開発・改良のため、コーパスの利用状況等を調査して利用者のニーズを明らかにすることが望ましいと思う。

《評価項目》

1. 研究について

前年度までに収集した会話の場面や話者のバランスを検証した上で、不足する種別・属性の会話・話者（会議会合および中高生）を増補すべく、職場や学校を中心に収録調査を新たに実施し、目標の10時間分の会話を収録した。また、『日常会話コーパス』モニター公開版を対象に語彙表などの基本的統計情報を報告書としてとりまとめ、プロジェクトのサイトで公開した。研究は計画通り進捗していると考えられる。

計量国語学会第63回大会においてデモンストレーションを行い、『日本語日常会話コーパス』と『昭和話し言葉コーパス』の研究成果を発信した。また、コーパス合同シンポジウム「話し言葉の

多様性」を開催してレジスター班の研究成果を発信した。これらとプロジェクト共同研究員の研究成果も含めて、報告書1冊、論文・ブックチャプター11件、辞典編纂1件、発表・講演41件、データベース等4件により研究成果を公開した。プロジェクト全体の研究成果を発信するシンポジウム「日常会話コーパスV」と会話コミュニケーションについての議論を深めるため関連する科研費プロジェクトと合同で開催するはずだったシンポジウム「ことば・認知インタラクション8」は新型コロナウイルス感染拡大防止のため予定通り開催できなかった(後者は2020年6月27日にオンラインで開催されている)が、これはやむを得ないだろう。

2. 共同利用・共同研究について

前年度に音声・文字化資料をオンラインで公開した『昭和話し言葉コーパス』モニター版に対して形態論情報を付与し、オンライン検索システム「中納言」にて音声配信機能付きで公開した。『日常会話コーパス』および『日本語日常会話コーパス』についても予定通り作業が進み、データの活用も始まっている。また、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の図書館サブコーパスの文学・物語に含まれる会話文に対し、話者情報(話者名・性別・年代)を付与して「中納言」で公開した。これは、実際の会話と小説等の中の会話の異同についてコーパスで研究することを可能にしたという点で重要な貢献である。

プロジェクトで構築・公開したコーパスに関する講習会を3回開催し、その資料をプロジェクトのサイトで公開した。また、これらのコーパスを用いた研究の成果を学術集会等で発表した。『日本語日常会話コーパス』を引き続きモニター公開し、国内外の大学や企業から利用申請があった。このことから、本プロジェクトの成果は学術にも産業にも有用と考えられる。

3. 教育について

非常勤研究員5名の雇用、若手研究者が『日常会話コーパス』のデータを優先的に利用できる環境の整備、Rを用いた統計勉強会などにより、コーパス言語学の若手研究者の育成を図り、共同研究員が指導する学生の修士論文2本・卒業論文4本、非常勤研究員1名の博士号(京都大学)取得等に結び付いている。また、若手の非常勤研究者1名に対し、国際会議での成果発表のための経費を援助した。

さらに、前年度に公開した『日本語日常会話コーパス』モニター版が、明海大学大学院応用言語学研究科の日本語学特論・日本語教育学特論や専修大学、お茶の水女子大学ゼミナールなどの授業で活用された。

4. 社会との連携及び社会貢献について

プロジェクトで整備・公開した『日本語日常会話コーパス』モニター版、『昭和話し言葉コーパス』モニター版、『名大会話コーパス』、『現日研・職場談話コーパス』、『国会会議録』を、インターネットを通して一般に発信した。今年度は合計で1万件を超える新規利用申請があり、学術研究に広く活用されていることがわかる。

また、『岩波国語辞典 第八版』(岩波書店)の改訂に際し、語釈の記述や見出し語の選定に『日本語日常会話コーパス』が用いられるなど、本プロジェクトの成果は実務でも活用されている。

5. グローバル化について

国語研とAcademia Sinicaが共催した国際会議 Linguistic Patterns in Spontaneous Speech 2019にて『日常会話コーパス』のデモンストレーションを行うとともに、海外在住の研究者1名をプロ

ジェクト共同研究員に加えて『日本語日常会話コーパス』を用いたデータセッションを通してコーパスを評価してもらうなど、国際的な研究成果の発信と研究協力を図っている。

6. その他特記事項

特になし。

日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明

プロジェクトリーダー：石黒 圭

I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

本プロジェクトの目的は、日本語学習者のコミュニケーションを多角的に解明するとともに、その成果を日本語教育に応用する方法を明らかにすることである。具体的には、日本語教育やその関連領域の研究者や教育者、そして日本語学習者に有益なコーパスを構築すること、論文集や教師指導書を刊行すること、シンポジウムや研修会を開催することである。

本プロジェクトでは日本語学習者のコミュニケーションを多角的に解明するために、3つのサブプロジェクトを設ける。「日本語学習者の日本語使用の解明」、「日本語学習者の日本語理解の解明」、「日本語学習のためのリソース開発」である。

サブプロジェクト「日本語学習者の日本語使用の解明」では、「学習者の会話能力の解明」と「学習者の日本語習得過程の解明」を行う。「学習者の会話能力の解明」としては、母語話者と学習者の自然会話コーパスを構築し、それをもとにして学習者の会話能力を解明する。この研究は、条件統制された「自発的な自然会話」をデータとした研究であることに特色がある。「学習者の日本語習得過程の解明」としては、さまざまな言語を母語とする学習者の対話や作文のコーパスを構築し、それをもとにして異なる言語を母語とする日本語学習者の日本語の習得過程を解明する。この研究は、日本を含む世界のさまざまな地域において統制された条件で収集したデータを用いることにより、母語による違いを重視することに特色がある。

サブプロジェクト「日本語学習者の日本語理解の解明」では、「学習者の読解過程の解明」と「学習者の聴解過程の解明」を行う。これまでの研究は学習者の言語産出活動である発話や作文に焦点を当てたものが中心であったが、この研究は学習者の言語理解活動である読解や聴解に焦点を当てたものである。学習者に理解した内容を母語で語ってもらったデータや教室での学習者の談話を通して、外からは見えない読解や聴解の過程を可視化する研究である点に特色がある。

サブプロジェクト「日本語学習のためのリソース開発」では、「オンライン日本語基本動詞辞典の作成」と「読解教材・聴解教材の開発」を行う。「オンライン日本語基本動詞辞典の作成」としては、日本語の基本動詞が持つさまざまな意味を図解なども用いてわかりやすく解説する音声付オンライン辞典を作成し、日本語教師や学習者に提供する。これは、大規模コーパスを活用して作成した辞典である点に特色がある。「読解教材・聴解教材の開発」では、日本語学習者用の読解教材・聴解教材を作成するための共同研究を行った上で、ウェブ版教材サンプルを作成し、日本語教師や学習者に提供する。これは、サブプロジェクト「日本語学習者の日本語理解の解明」で得られた調査結果に基づいて教材を作成する点に特色がある。

2. 年次計画（ロードマップ）

● 全体計画・研究組織

学習者のコミュニケーション	H28年度	H29年度	H30年度	R1年度	R2年度	R3年度
日本語使用班						
自然会話コーパス (BTSJ)	先行公開 294会話 (588名分)	39会話追加 計333会話 (666名分)	改訂公開 計333会話 (666名分)	35会話追加 計368会話 (736名分)	22会話追加 計390会話 (780名分)	本格公開 10会話追加 全400会話 (800名分)
シンポジウム	1回	1回	1回	1回	1回	1回
講習会	1回	1回	1回	1回	1回	1回
多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS)	先行公開 225名分	225名分追加 計450名分	210名分追加 計660名分	215名分追加 計875名分	本格公開 175名分追加 計1050名分	既存データの確認・修正 コーパスの維持・運用
北京日本語学習者縦断コーパス (B-JAS)	データ収集	データ収集	データ収集	データ収集	データ公開準備	データ公開準備
ワークショップ	1回	1回	1回	1回	1回	
日本語理解班						
日本語非母語話者の読み解コーパス		先行公開 45件	40件追加 計85件	20件追加 計105件	10件追加 計115件	本格公開 全115件
日本語非母語話者の聴解コーパス				先行公開 20件	30件追加 計50件	本格公開 全50件
日本語学習者の文章理解過程データベース		先行公開 3名分	57名分追加 計60名分	60名分追加 計120名分	60名分追加 計180名分	本格公開 全180名分
シンポジウム等		1回	1回	1回	1回	1回
リソース開発班						
基本動詞辞典	先行公開 15見出し	15見出し追加 計30見出し	15見出し追加 計45見出し	15見出し追加 計60見出し	15見出し追加 計75見出し	本格公開 15見出し追加 計90見出し
研究発表会	1回	1回	1回	1回	1回	1回
ウェブ版教材の開発		先行公開 28件	5件追加 計33件	5件追加 計38件	5件追加 計43件	本格公開 全43件
国際シンポジウム等		NINJAL国際シンポジウム (ICPL)開催			国際シンポジウム開催	
プロジェクト全体						
NINJAL日本語教師セミナー (国内)	1回	1回	1回	1回	1回	1回
NINJAL日本語教師セミナー (海外)	1回	1回	1回	1回	1回	1回
NINJALチュートリアル	1回		1回			
刊行・出版		学習者の作文能力に関する論文集刊行	学習者の会話能力に関する論文集刊行	学習者の読み解過程に関する論文集刊行	学習者の読み解過程に関する論文集刊行	学習者の習得過程に関する論文集刊行
			読み解活動に関する教師指導書刊行	基本動詞辞典に関する論文集刊行	読み解教材開発に関する研究書刊行	学習者の聴解過程に関する論文集刊行

●年次計画

【平成 28 (2016) 年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築に着手する。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築に着手する。
- ・日本語学習者の読解コーパスの構築に着手する。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典の作成に着手する。
- ・ウェブ版読解教材の開発に着手する。

【平成 29 (2017) 年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し、その一部を試験公開する。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築を継続し、その一部を試験公開する。
- ・日本語学習者の読解コーパスの構築を継続し、その一部を試験公開する。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典の作成を継続し、その一部を試験公開する。
- ・ウェブ版読解教材の開発を継続する。ウェブ版聴解教材の開発に着手する。
- ・NINJAL 国際シンポジウム (ICPLJ) を開催する。

【平成 30 (2018) 年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・日本語学習者の読解コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典の作成を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・ウェブ版読解教材の開発を継続し、サンプルを試験公開する。ウェブ版聴解教材の開発を継続する。
- ・学習者の会話能力に関する論文集を刊行する。
- ・学習者の読解活動に関する教師指導書を刊行する。

【令和元 (2019) 年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・日本語学習者の読解コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典の作成を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・ウェブ版読解教材の開発を継続し、試験公開の範囲を拡大する。ウェブ版聴解教材のサンプルを試験公開する。
- ・学習者の読解過程に関する論文集を刊行する。

【令和 2 (2020) 年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・日本語学習者の読解コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典の作成を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・ウェブ版読解教材とウェブ版聴解教材の開発を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・学習者の読解過程に関する論文集を刊行する。
- ・読解教材開発に関する研究書を刊行する。
- ・日本語学習者のコミュニケーションに関する国際シンポジウムを開催する。

【令和 3 (2021) 年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスを本格公開する。

- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスを本格公開する。
- ・日本語学習者の読解コーパスを本格公開する。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典を本格公開する。
- ・ウェブ版読解教材とウェブ版聴解教材を本格公開する。
- ・学習者の日本語習得過程に関する論文集を刊行する。
- ・学習者の聴解過程に関する論文集を刊行する。

II. 令和元年度活動概要

令和元年度予算総額 29,400千円

令和元年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

本プロジェクトでは、研究に関する計画として研究論文集を計8点刊行した。

日本語使用班で、学習者コーパスに関する以下の研究論文集3点を刊行した。

- 宇佐美まゆみ編『自然会話分析への語用論的アプローチ—BTSJコーパスを利用して—』(ひつじ書房)
 - 迫田久美子・石川慎一郎・李在鎬編『日本語学習者コーパス I-JAS 入門—研究・教育にどう使うか—』(くろしお出版)
 - 石黒圭・鳥日哲編『どうすれば論文・レポートが書けるようになるか学習者から学ぶピア・レスポンス授業の科学—』(ココ出版)
 - 日本語理解班で、日本語学習者の読解過程に関する以下の研究論文集4点を刊行した。そのうち、④は学会誌の書評で高い評価を受けた。
 - 野田尚史・迫田久美子編『学習者コーパスと日本語教育研究』(くろしお出版)
 - 石黒圭編『日本語教師のための実践・読解指導』(くろしお出版)
 - 石黒圭編『文脈情報を用いた文章理解過程の実証的研究—学習者の母語から捉えた日本語理解の姿—』(ひつじ書房)
 - 野田尚史編『日本語学習者の読解過程』(ココ出版)
- リソース開発班で、オンライン日本語基本動詞ハンドブックの成果を取りまとめた下記の研究論文集を刊行した。
- プラシャント・パルデシ、糸山洋介、砂川有里子、今井新悟、今村泰也編『多義動詞分析の新展開と日本語教育への応用』(開拓社)

2. 共同利用・共同研究に関する計画

本プロジェクトでは、共同利用・共同研究に関する計画として次の八つを推進した。

- 母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し、44会話のコーパスデータを追加し、計377会話(754名分)を公開した。また、その活用のために講習会・講演会を6回開催した。
- 多言語母語の日本語学習者横断コーパスの構築を継続し、日本語学習者215名分の第四次データ公開に加え、175名分の第五次データ公開を前倒しで行い、これにより、全データ1050名分の公開を終え、完成了。また、その活用のために講習会・講演会を3回開催した。
- 日本語非母語話者の読解コーパス、日本語非母語話者の聴解コーパスはそれぞれに20件を新たに公開した。
- 日本語学習者の文章理解過程データベースは180名分のコーパスデータを新たに公開したことで、全データ

タ 240 名分の公開を前倒しで終え、完成した。

- ⑤ウェブ版読解・聴解教材は合計 7 レッスンを新たに公開した。
- ⑥オンライン日本語基本動詞ハンドブックの 15 見出しを新たに公開した。
- ⑦北京日本学研究センターと共同で行っている日本語学習者の日本語習得過程に関するデータ収集を終え、大学入学から卒業までの 4 年間のデータ収集を完了した。
- ⑧「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」プロジェクト等との連携のもと、日本語文型バンクの開発・補充、公開を継続し、それに関連する特別講演を 2 回行った。

3. 教育に関する計画

本プロジェクトでは、教育に関する計画として、次の四つを行った。

- ①プロジェクト PD フェローを 2 名雇用し、日本語教育分野の人材を育成した。
- ②博士課程に在籍する大学院生 14 名を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、研究の指導を行った。
- ③研究会を 2 回開催し、母語話者と学習者の自然会話コーパスに関する大学院生や若手研究者に発表の機会を提供了。
- ④NINJAL チュートリアルを海外（台湾の東吳大学）で開催した。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

本プロジェクトでは、社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置として、次の三つを遂行した。

- ①ビジネス日本語のプロジェクトを、株富士通研究所、株クラウドワークス等と協力して遂行し、次の論文集を刊行するとともに、公開シンポジウムを 1 件開催した。
・石黒圭編『クラウドソーシングを用いたビジネス文書の言語学的研究—インターネット上の求人サイトから臨むビジネス日本語研究の新たな地平—』（ひつじ書房）
- ②国立国語研究所日本語セミナー（海外）を、ウズベキスタン 2 都市で「世界諸言語からみた日本語」というタイトルで開催した。また、国内の国立国語研究所日本語教師セミナーを、国文学研究資料館で「顕在化する多言語社会日本と日本語教育」というタイトルで開催した。
- ③日本語教師を対象とした講座を、国際基督教大学グローバル言語教育研究センターとの共催で開催した。また、日本語ボランティアのための講座・研修会を、福岡県国際交流センターおよび仙台観光国際協会との共催で開催した。

5. グローバル化に関する計画

本プロジェクトでは、グローバル化に関する計画として次の四つを推進した。

- ①連携協定を結んでいる北京日本学研究センターと共同で、日本語学習者の日本語習得過程に関する大学卒業までの縦断データ収集を完了し、それに関連する二つのシンポジウムを北京日本学研究センターと北京師範大学で開催した。また、日本語教育の辞書に関するシンポジウムを北京日本学研究センターと共同で開催した。
- ②日本語教育学関連の著名な研究者に参加を依頼し、アドバイザリーボードの運用を開始した。

6. その他

該当する活動なし。

III. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画を大幅に上回って実施した
(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画	
1. 日本語使用班で、学習者コーパスに関する以下の研究論文集3点を刊行した。	
①宇佐美まゆみ編『自然会話分析への語用論的アプローチ—BTSJ コーパスを利用して—』(ひつじ書房)を、2020年3月に刊行した。	
②迫田久美子・石川慎一郎・李在鎬編『日本語学習者コーパス I-JAS 入門—研究・教育にどう使うか—』(くろしお出版)を、2020年3月に刊行した。	
③石黒圭・鳥日哲編『どうすれば論文・レポートが書けるようになるか学習者から学ぶピア・レスポンス授業の科学—』(ココ出版)を2020年2月に刊行した。	
2. 日本語理解班で、日本語学習者の読解過程に関する以下の研究論文集4点を刊行した。	
①野田尚史・迫田久美子編『学習者コーパスと日本語教育研究』(くろしお出版)を2019年5月に刊行し、書評で高い評価を受けた(下記4.参照)。	
②石黒圭編『日本語教師のための実践・読解指導』(くろしお出版)を2019年11月に刊行した。	
③石黒圭編『文脈情報を用いた文章理解過程の実証的研究—学習者の母語から捉えた日本語理解の姿—』(ひつじ書房)を2020年1月に刊行した。	
④野田尚史編『日本語学習者の読解過程』(ココ出版)を2020年3月に刊行した。	
3. リソース開発班で、オンライン日本語基本動詞ハンドブックの成果を取りまとめた下記の研究論文集を刊行した。また、論文集を先行して刊行することに集中し、講演・研修会は行わなかった。	
①プラシャント・パルデシ、糸山洋介、砂川有里子、今井新悟、今村泰也編『多義動詞分析の新展開と日本語教育への応用』(開拓社)を2019年11月に刊行した。	
4. 野田尚史・迫田久美子編『学習者コーパスと日本語教育研究』(くろしお出版)が、 <i>Journal of Japanese Linguistics</i> Volume 35 Issue 1に掲載された書評において、C. K. Thomson 氏から"This monograph is to be commended for its contribution to Japanese language education curriculums and for that it demonstrated the potential of the corpora studies which can make further contributions to betterment of Japanese language education"と評された	
(2) 研究実施体制等に関する計画	
5. プロジェクトを推進するために、3つのサブプロジェクトによる共同研究体制を組織し、国内外の日本語教育研究者179名で共同研究を推進している。	
6. 本プロジェクトの研究遂行のために、PD フェローを2名、プロジェクト非常勤研究員を13名、技術補佐員を7名雇用した。	

「計画を大きく上回って実施した」と自己評価した理由

予定していた3冊に対し、8冊の研究論文集論文集を2019年度に刊行できたため。とくに、野田尚史・迫田久美子編『学習者コーパスと日本語教育研究』(くろしお出版)が、*Journal of Japanese Linguistics*誌において学術的に高い評価を得たため。エビデンスデータは上記の本文の説明を参照。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画を大幅に上回って実施した
<p>(1) 共同利用・共同研究に関する計画</p> <p>1. コーパスデータの追加、活用のための講習会は次の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none">・母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し、予定を上回る 44 会話のコーパスデータを追加し、計 377 会話（754 名分）を公開した（2020 年 3 月）。・活用のために開催された講習会・講演会は次の 3 件（5 回）である。 <p>①「第 11 回、第 12 回 BTSJ 活用方法講習会」を国語研にて 2019 年 5 月 18 日に開催（参加者数：17 名、8 名）。</p> <p>②「第 13 回、第 14 回 BTSJ 活用方法講習会」を名古屋大学東山キャンパスにて 2019 年 6 月 2 日に開催（参加者数：25 名、16 名）。</p> <p>③「第 1 回語用論コーパス成果発表会」を国語研にて 2019 年 6 月 29 日に開催（参加者数：52 名）。</p> <p>④シンポジウム「日本語教育は、自然会話コーパスで変わる」を東京外国語大学にて 2020 年 3 月 14 日に開催予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となった。</p> <p>2. コーパスデータの公開、活用のための講習会は次の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none">・コーパスデータの公開は、令和元年度計画していた第四次公開に加え、計画していなかった第五次公開も行い、I-JAS の全データの公開を終えた。 <p>①I-JAS の第四次公開は、2019 年 5 月に、日本語学習者 215 名分のデータを公開した。</p> <p>② I-JAS の第五次公開は、2020 年 3 月 175 名分のデータの提供を行った。これにより、I-JAS の全データ 1050 名分の公開を終え、完成した。</p> <ul style="list-style-type: none">・活用のために開催された講習会・講演会は次の 1 件である。 <p>①コーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—くだけた表現—」を国語研にて 2019 年 9 月 5 日に共同発表（参加者数：64 名）。</p> <p>②「日本語学習者コーパス「I-JAS」完成記念シンポジウム」を国文研にて 2020 年 3 月 21 日に開催予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため延期となった。</p> <p>③「第 5 回学習者コーパスワークショップ」を国文研にて 2020 年 3 月 21 日に開催に開催予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため延期となった。</p> <p>3. 日本語学習者の読解・聴解コーパスの構築・公開状況は次の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none">・「日本語非母語話者の読解コーパス」は 20 件を新たに公開した。・「日本語学習者の文章理解過程データベース」は 180 名分のコーパスデータを新たに公開したことで、全データの公開は終わり、完成した。・「日本語非母語話者の聴解コーパス」はウェブサイトを構築し、20 件のコーパスデータを公開した。 <p>4. ウェブ版読解・聴解教材の開発は合計 7 レッスンで、具体的な内容は次の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none">・ウェブ版読解教材は、「人的資源関連の論文」シリーズ 2 レッスンの教材を公開した。・ウェブ版聴解教材は、「クリーニングの受付」シリーズ 4 レッスン、「雑談」シリーズ 2 レッスン、「著作権の講義」シリーズ 1 レッスンを公開した。 <p>5. オンライン日本語基本動詞ハンドブックの作成継続の状況は次の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none">・2020 年 3 月末までに 15 見出しを追加した。また、2020 年 3 月末までに音声・ミニアニメの追加・差し替え（55 見出し）、コアイメージ・活用表の差し替え（41 見出し）を行った。	
<p>(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画</p>	

6. 北京日本学研究センターと共同で行っている日本語学習者の日本語習得過程に関するデータ収集を継続し、4年次のデータを収集した。2019年度で対象学習者の大学入学次から4年次までのデータ収集を終え、データ収集は完了した。
7. 日本語学習者の読解において、国際交流基金日本語国際センターと共同研究を推進し、その成果を、石黒圭編『日本語教師のための実践・読解指導』(くろしお出版)に収録した。
8. 2018年度に引き続き、「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」プロジェクトおよび科研課題番号18H03575(準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発)と連携し、日本語文型バンクの開発・補充、公開を続行し、初・中級の文型の意味解説の執筆、レベル分けの作業を行った。また、中・上級の文型(約300件)について見出し執筆作業を続行し、内部公開を行った。さらに、関連する特別講演を2019年10月31日に中国人大で、2019年11月1日に連携先の北京外国语大学北京日本学研究センターでそれぞれ開催した。(参加者数:12名、22名)

「計画を大きく上回って実施した」と自己評価した理由

全体として予定よりも多くのデータをアップロードすることができ、とくに、多言語を母語とする日本語学習者コーパス(I-JAS)と日本語学習者の文章理解過程データベースは、予定よりも早く、2019年度末までにすべてのデータの公開を完了したため。

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
--------	-------------

(1) 大学院等への教育協力に関する計画

1. 英国から特別共同利用研究員1名を受け入れた。

(2) 人材育成に関する計画

2. プロジェクトPDフェローを2名雇用し、日本語教育研究に関する研究指導を行うことにより、日本語教育分野の人材を育成した。
3. 博士課程に在籍する大学院生14名を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、コーパスの構築・分析作業を通して研究の指導を行った。
4. 言語社会心理学研究会(SPLaD)第5回・第6回定例研究会(プロジェクトと共催)を2019.4.20と2019.6.15に開催し、母語話者と学習者の自然会話コーパスに関する情報提供を行うとともに、大学を超えて、大学院生や若手研究者に発表の機会を提供了。(参加者数5名、4名)
5. NINJALチュートリアルを次の通り担当した。
 - ・台湾の東吳大学で2日間にわたり開催されたNINJALチュートリアル(海外)において、2日目の2019年11月10日「日本語の自然会話とディスコース・ポライトネス理論」というタイトルで講義を担当した。(参加者数:50名)
 - ・NINJALチュートリアル(国内)を、2020年3月17日に久留米大学福岡サテライトにおいて「日本語の自然会話とポライトネス理論」というタイトルで講義を担当予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となった。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画を上回って実施した
--------	-------------

(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画

1. ビジネス日本語のプロジェクトを、日本テレワーク学会 Job Casting 部会、(株)富士通研究所、(株)クラウドワークスとの協力で遂行し、次の成果を上げた。
 - ・石黒圭編『クラウドソーシングを用いたビジネス文書の言語学的研究—インターネット上の求人サイトから臨むビジネス日本語研究の新たな地平—』(ひつじ書房)を2020年1月に刊行した
 - ・公開シンポジウム「ビジネスと日本語の接点」を2020年3月20日に会場を変更してWeb開催した。(参加者数:82名)
2. NTT(2名)、NTTドコモ(1名)の研究員3名とともに、2019年度日本語教育学会秋季大会にて、「対話システム構築と談話研究・日本語教育の接点」と題したパネルセッションを行った。

(2) 研究成果の社会への普及に関する計画

3. 日本語教師等を対象とする「国立国語研究所日本語教師セミナー」を国内で1回、海外で2回開催した。その他、日本語教師を対象とした講演会を行った。
 - ・海外の「国立国語研究所日本語教師セミナー」は、ウズベキスタンのサマルカンドにあるサマルカンド国立外国語大学で2019年9月17・18日に、また、ウズベキスタンのタシュケントにあるウズベキスタン・日本センターで2019年9月21・22日に、それぞれ「世界諸言語からみた日本語」というタイトルで行った。(参加者数:サマルカンド57名、タシュケント33名)
 - ・国内の「国立国語研究所日本語教師セミナー」は、「顕在化する多言語社会日本と日本語教育」というタイトルで2020年2月15日に国文学研究資料館で行った。(参加者数:64名)
 - ・国際基督教大学グローバル言語教育研究センターとの共催で2019年7月6日に国際基督教大学で講演会・ワークショップ「日本語非母語話者の読解コーパスからわかること」を行い、講演会に74名、ワークショップに43名)が参加した。
4. 地域のボランティア対象の講座で、次のような研修を行った。
 - ・福岡県国際交流センターとの共催で2019年10月19日～21日に北九州市・福岡市・久留米市で福岡県地域日本語教室ボランティアスキルアップ講座を行い、105名が参加した。
 - ・仙台観光国際協会との共催で2019年11月30日に仙台市で日本語ボランティア研修会を行い、61名が参加した。
5. 一般の方に日本語教育や日本語学習者などを広く知つもらうことを目的とした講演会として、第14回NINJALフォーラム「私の日本語の学び方」を2019年11月30日に一橋大学一橋講堂で開催した(参加者数:274名)。

5. グローバル化に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
(1) 国際的協業に関する計画	
<ol style="list-style-type: none"> 1. 海外在住の研究者30名を共同研究員として加え、日本語学習者のコミュニケーションに関する研究を実施した。 2. 連携協定を結んでいる北京日本学研究センターと共同で、日本語学習者の日本語習得過程に関する大学卒業までの縦断データ収集を完了した。(「2. 共同利用・共同研究に関する計画」の「(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画」の1.を参照) 3. 「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」プロジェクトの報告書に日本語学講習会として記載済みのため、こちらでは記載を割愛した。 4. 日本語教育学関連の著名な研究者6名(国内3名、中国、インド、ヨーロッパ各1名)からなるアドバ 	

イザリーボードのメンバーを確定してメーリングリストを作成し、運用を開始した。

(2) 国際的発信に関する計画

5. シンガポール日本語教師の会との共催で2019年12月2日にシンガポール国立大学で公開セミナー「コミュニケーションのための日本語教育に必要な文法を見直す」を行い、49名が参加した。
6. 連携協定を結んでいる北京日本学研究センターと共催でシンポジウムを3件開催した。
①国際シンポジウム「日本語学習者向けコーパスの構築と応用研究」を、2019年10月19日に連携先の北京外国语大学北京日本学研究センターで同センターと共に開催した。(参加者数:151名)
②国際シンポジウム「北京日本語学習者縦断コーパス(B-JAS)の構築と応用研究」を、2019年10月20日に調査協力協定を結んでいる北京師範大学外国語言文学学院で同学院と共に開催した。(参加者数:99名)
③2020年1月18日に公開シンポジウム「コミュニケーションのための日本語学習辞書を求めて—中国人学習者のための新しい辞書の構想と開発—」を開催した。(参加者数:55名)

6. その他

該当する活動なし。

令和元年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施している

本プロジェクトの目的は、日本語学習者のコミュニケーションを多角的に解明するとともに、その成果を日本語教育に応用する方法を明らかにすることであり、3つのサブプロジェクトすなわち、①「日本語学習者の日本語使用の解明」、②「日本語学習者の日本語理解の解明」、③「日本語学習のためのリソース開発」で構成されている。2019年度は上記プロジェクトの4年目に当たる。

自己評価については、「研究」および「共同利用・共同研究」は「S」、その他については「A」と評価されており、以下に見るようないずれの項目においても相応の成果をあげており、総合的に見て「A評価」が妥当であると考えられる。新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて中止や延期になったシンポジウムなどが若干数あるが、「研究」および「共同利用・共同研究」については質的にも量的にも十二分な成果がみられ、また、「教育」「社会連携・社会貢献」「グローバル化」についても十分な成果をあげたと考えられる。

《評価項目》

1. 研究について

(1) 研究水準及び研究の成果に関しては3冊の論集の刊行が計画されていたが、日本語使用班で3冊、日本語理解班で4冊、リソース開発班で1冊、計8冊の論集を刊行し、計画を大きく上回る十二分な成果をあげており、うち日本語理解班の1冊については、*Journal of Japanese Linguistics*に掲載された書評において高い評価を得ていることも特筆できる。リソース開発班で計画されていた講演・研修会が、論文集を先行して刊行することに集中したため開催されなかったことは十分理解できるが、今後は講演・研修会などを通じた発信にも期待したい。(2)研究実施体制等に関しては、研究体制の組織化及び大学等との連携について2項目が計画されていたが、いずれにおいても計画を上回る規模の人員を組織化しており十分な成果をあげている。以上、研究については、総じて計画を大きく上回る十二分な成果を挙げている。

2. 共同利用・共同研究について

(1) 共同利用・共同研究に関しては、各種コーパスの構築を継続し、コーパスデータの追加・公開、またコーパス活用のための講習会の開催など、また、ウェブ版教材の開発・公開、オンラインハンドブックの拡充・公開も計画されていた。コーパスデータの追加件数は計画を大きく上回り、I-JAS、読解コーパスは全データの公開を終えて完成しており、オンライン日本語基本動詞ハンドブックの作成継続の過程でコンテンツの追加・差し替えなど、コンテンツ内容の更新・拡充を行っている。新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて、関連するシンポジウムやワークショップが一部中止されたが、総じて十二分な成果をあげている。(2) 実施体制等に関しては、北京日本学研究センターおよび国際交流基金日本語国際センター、また「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」プロジェクトなどとの連携協力のもとでのデータ収集を完了させ、また共同研究成果を出版し、日本語文型バンクの拡充を図りその成果を連携機関等で公開しており、連携強化に充分充実した成果をあげている。以上、共同利用・共同研究については、総じて計画を大きく上回る十二分な成果を挙げている。

3. 教育について

(1) 大学院等への教育協力に関しては、研究所としての評価方法の変更に伴って特に計画はなかったが、プロジェクトとして1件の特別共同利用研究員の受け入れを行っている。(2) 人材育成に関しては4件の計画があった。新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて国内で計画されていたNINJALチュートリアルが中止となったが、PDフェローの雇用については計画通り、大学院生については計画の3.5倍の人員の指導を行い、海外でのNINJALチュートリアルは参加者50名を得て実施するなど、計画を上回る人員の指導・育成を行っている。教育については、総じて計画を上回る十分な成果を挙げている。

4. 社会との連携及び社会貢献について

(1) 産業界・地域社会との連携に関しては、ビジネス日本語に関する研究を、計画されていた日本テレワーク学会Job Casting部会に加えて(株)富士通研究所および(株)クラウドワークスとも連携して進め、成果を論集として刊行し、82名の参加者を得て公開シンポジウムを開催している。また、NTTおよびNTTドコモの研究員3名と共に日本語教育学会秋季大会でパネル発表を行い、産業界・地域社会との連携の成果を公表している。(2) 研究成果の社会への普及に関しては、日本語教師を対象としたセミナーを海外で2回、国内で1回開催し、加えて国内でワークショップ・講演会を開催している。また、地域日本語教室のボランティアを対象としたスキルアップ講座や研修会を開催するとともに、日本語教育や日本語学習者についての社会的理解を深めることを目的としたNINJALフォーラムを開催し274名の参加者を得ている。以上、産業界・地域社会との連携については、総じて計画を上回る十分な成果を挙げている。付言すれば、地域日本語教育に関しては、文化庁国語課が展開している地域日本語教育の普及事業やコンテンツ開発事業についても目配りが欲しい。

5. グローバル化について

(1) 国際的協業に関しては3項目、(2) 国際的発信に関しては2項目が計画されていたが、計画以上の事業を実施しており、十分な成果をあげている。国際的協業については、海外在住の研究者30名を共同研究員として加え、また日本語教育関連の研究者6名(国内3名、中国、インド、ヨーロッパ各1名)によるアドバイザリーグループを確定し運用を開始している。また、連携協定締結

先との協力で継続してきたデータ収集を完成させている。国際的発信については、シンガポール日本語教師会との共催で、また北京日本学研究センターとの共催で3件のシンポジウムを開催し、十分な発信の成果を挙げている。以上、グローバル化については、総じて計画を上回る十分な成果を挙げている。付言すれば、海外の日本語教育・日本語教師研修・日本語教育研究などについては、国際交流基金が豊富な知見・情報を有しているので、今後の連携のあり方について工夫が欲しい。

6. その他特記事項

特になし。

コーパス開発センター
センター長：前川 喜久雄

I. 令和元年度活動概要

令和元年度予算総額 55,532 千円

令和元年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

コーパス開発センター専任職員・研究員で、ジャーナル論文 10 本（解説論文 1 本、紀要論文 2 本含む）、国際会議発表 16 件（うち 9 件が査読付き論文あり）。「言語資源活用ワークショップ」を 9 月に開催。Academia Sinica とともに国際会議 LPSS 2019 を 11 月に共催。

形態素解析用辞書 UniDic、係り受けツリーバンク Universal Dependencies、シソーラス分類語彙表を中心とした共同研究を展開。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

「少納言」「中納言」「梵天」および包括的検索系「KOTONOHA」の開発維持管理を実施。

「中納言」に新たに『昭和話し言葉コーパス』を搭載。

「中納言」上の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に話者情報を新たに追加。

3. 教育に関する計画

検索系の講習会を 3 回実施。教員免許状更新講習に協力。情報処理学会セミナーに登壇。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』と『日本語話し言葉コーパス』の頒布を進める。

2019 年 10 月に形態素解析用辞書 UniDic-3.0 を公開。日本語語彙の分散表現データを配布。

5. グローバル化に関する計画

台湾 Academia Sinica と国際的協業を推進。

国際的な係り受けツリーバンク構築プロジェクト Universal Dependencies に参画。

6. その他

高エネ研機構間連携プロジェクトに参画。

II. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
<p>（1）研究水準及び研究の成果等に関する計画</p> <p>コーパス開発センター専任職員・研究員で、ジャーナル論文 10 本（解説論文 1 本、紀要論文 2 本含む）、国際会議発表 16 件（うち 9 件が査読付き論文あり）。</p> <p>NLP2020 言語資源賞を受賞（言語処理学会・言語資源協会）</p> <p>「言語資源活用ワークショップ 2019」を 9/2-9/4 に開催（参加者数 異なり 165 人（内 国外機関所属者 4</p>	

人/学生 45 人), 3 日間 延べ 315 人)。発表件数 50 件 (内 招待講演 6 件, 国外機関所属者 2 件, 学生発表 13 件, ポスター発表 33 件)。同ワークショップ内で Universal Dependencies のテーマセッションを設定。

台湾中央研究院語言学研究所と 「The 3rd International Symposium on Linguistic Patterns in Spontaneous Speech (LPSS 2019)」を台北にて共催 (参加者数 異なり 109 人 (内 国外機関所属者 92 人/学生・ポスドク 25 人))。発表件数 26 件。

言語処理学会第 26 回年次大会 (2020 年 3 月 新型コロナウイルス感染拡大防止のためオンライン開催) に, ゴールドスポンサーとして支援。

(2) 研究実施体制等に関する計画

東京大学・京都大学・九州大学・奈良先端科学技術大学院大学・日本 IBM・NTT CS 研・Megagon Lab (2019 年度より参画) と Universal Dependencies に関する研究を進めた。

茨城大学・常葉大学とともに分類語彙表関連の研究を進めた。

京都大学とともに音声アライメントに関する研究を進めた。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
(1) 共同利用・共同研究に関する計画	
1. 「少納言」「中納言」「梵天」に格納されている『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)を用いた研究業績累計 1181 件 (内 2019 年以降成果物 209 件), 「中納言」に格納されている『日本語話し言葉コーパス』(CSJ)を用いた研究業績累計 1,237 件 (内 2019 年以降成果物 106 件)。包括的検索系の累計利用セッション 14,357 件 (2020/03/31 現在).	
2. 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)累計有償契約数 443 件 (内 2019 年度契約 35 件), 『日本語話し言葉コーパス』(CSJ)累計有償契約 947 件 (内 2019 年度契約 42 件) (2020/03/31 現在)。包括的検索系に『日本語話し言葉コーパス』(CSJ), 『日本語日常会話コーパス』(CEJC), 『日本語諸方言コーパス』(COJADS)の音声配信機能を設定済み。 「中納言」に新たに『昭和話し言葉コーパス』を搭載。 「中納言」上の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に話者情報を追加。	
(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画	
3. 「梵天」の講習会を 10/18 に東京女子大で実施(41 人参加)。 2020 年 1-3 月に包括的検索系講習会を 2 回予定。新型コロナウイルス対応の影響で中止。 代わりに授業用アカウント説明会を 3/27, 3/31 にオンラインで実施(13 人, 17 人参加)。 授業用アカウントを累計 64 授業 (2019 年度 48 授業) に発行	

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画をどおり実施した
(1) 大学院等への教育協力に関する計画	
(2) 人材育成に関する計画	
1. 2020 年 1-3 月に包括的検索系講習会を 2 回予定。	

2. 「梵天」の講習会を 10/18 に東京女子大で実施(41 人参加)。
3. 講義用アカウントを累計 64 授業 (2019 年度 48 授業) に発行
4. 【項番 2. (2) 再掲】。
5. プロジェクト予算でプロジェクト非常勤研究員を 5 名雇用 (内, 大学院在学中 1 名)。2020 年度より 1 名常勤職に採用が決まる。
6. 言語資源活用ワークショップ 2019 において優秀発表賞を 1 名に授与。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおり実施した
(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画	
1. 東京大学・京都大学・九州大学・奈良先端科学技術大学院大学・日本 IBM・NTT CS 研・Megagon Lab (2019 年度より参画) と Universal Dependencies に関する研究を進めた【項番 1. (2) 再掲】。	
2. 株式会社ワークスアプリケーションズと Sudachi 分散表現ベクトルのコンパクト化に関する研究を進めた。	
(2) 研究成果の社会への普及に関する計画	
3. UniDic-3.0 を 2019 年 10 月に公開。	
4. 2019 年度の UniDic の総ダウンロード数 2854 件 (内, 現代語 UniDic 2229 件)	
5. 分類語彙表に対して単語親密度情報 (WLSP-familiarity) ・反対語情報 (WLSP-antonym) を追加した。また『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する分類語彙表番号アノテーション (BCCWJ-WLSP) を付与。	
6. UniDic や分類語彙表を閲覧するシステム Cradle を開発・公開	
7. コーパス頒布のための契約書発行システムの整備を進める。2020 年度より包括契約 (利用者数制限なし, 成果物数制限なし) の枠組を契約書発行システム上に設定。	
8. 日本語語彙の分散表現データ NWJC2vec を累計 147 の企業・大学研究室・個人に配布 (2020/03/31 現在)。	
9. Megagon Lab. より共同研究の成果物として, 日本語の自然言語処理ライブラリ 「GiNZA」 を公開。	
10. 6/26 に情報処理学会 連続セミナー 2019 「AI と歩む未来(1) : 自然言語処理の最新動向」に浅原が講師として登壇【項番 3. (2) 再掲】	
筑波大学の国語科教員免状更新講習選択講習 C 「コーパスで見る日本語の姿」 (7/6 実施) に協力。【項番 3. (2) 再掲】	

5. その他の目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおりに実施した
(1) 国際的協業に関する計画	
1. Academia Sinica と共同研究を進めた:	
2. 2019 年 4 月 19 日に, 中央研究院語言学研究所で開催される Second ILAS Annual Linguistics Forum にて基調講演をおこなった。	
3. 台湾の中央研究院語言学研究所と共に 2019 年 11 月 21-22 日に台北で自発音声に関する国際ワーク ショップ LPSS2019 を企画運営した【項番 1. (1) 再掲】。	
4. 台湾国立交通大学での招待講演 2019 年 11 月 25 日	

5. "Reconstruction of Articulatory Phonetics by Means of the Real-time MRI Data" , 2019年11月26日 "Development of Spoken Language Resources in NINJAL"
6. 国際的な係り受けツリーバンク構築プロジェクト Universal Dependencies に参画した。

(2) 国際的発信に関する計画

8. コーパス開発センター専任職員・研究員で2件の国際会議発表を行った【項目1. (1) 再掲】。
9. 第11回国際計量言語学会 IQLA (2020年開催 於国語研)受け入れの準備を行った。

6. その他

- 所内のコーパス開発プロジェクト支援のために、研究図書室と共同で所内全体で利用可能な「小学館ジャパンナレッジ lib」を10ライセンス購入した。
- 所内のコーパス開発プロジェクト支援のために、形態論情報データベースの保守管理を行った。今年度はハードウェアの更新を実施。

令和元年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施している

(総括)

研究面ではジャーナル論文発表、国際会議発表を多数行い、学会優秀論文賞受賞など高い研究成果をあげている。また、形態素、係り受け、意味、音声アラインメントの各分野において、大学、公的研究機関、企業との連携体制の下で言語資源の整備を着実に進めている。機械学習を利用した自然言語処理のための基礎的データの作成と配布は優れた取り組みである。また、コーパス普及を目的とした検索ツールの公開・維持管理、教材作成、講習会実施を積極的に進めている。国外の研究機関との共催による国際研究集会の企画運営など国際会議への関与も積極的であり、国語研のプレゼンス向上に貢献している。コーパス開発研究センターの活動は計画を上回って実施していると判断される。

《各項目別》

1. 研究について

言語処理・音声処理・言語資源構築技術に関する研究成果について、自然言語処理、認知科学をはじめとする学術雑誌に学術論文10件、InterSpeech、ICPhSをはじめとする国際会議発表16件を行なっている。また、言語資源活用ワークショップ2019を国語研で主催、The 3rd International Symposium on Linguistic Patterns in Spontaneous Speech (LPSS 2019)を台湾中央研究院言語学研究所と共に台北で開催など、国際的な研究集会を企画・開催して研究成果の発表を行うとともに、関連研究者の研究交流の場を提供している。これらのことから研究に関しては計画を上回る成果を上げており、学術的意義が高いと判断される。

また、東京大学・京都大学をはじめとする複数の大学、さらには日本IBM・NTT CS研などの民間企業研究所との共同研究も進行しており、他大学と組織的に連携し、大学の機能強化に貢献していると判断される。今後はそれらの共同研究が一掃の研究成果を生み出すことを期待する。

2. 共同利用・共同研究について

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ), 『日本語話し言葉コーパス』(CSJ)はいずれも現代日本語の標準的な言語コーパスとして定着しており, コーパス言語学の発展に大きく寄与している。両コーパスとも有償契約数が順調に増加しており, コーパスの利用拡大が認められる。また「少納言」「中納言」「梵天」などの検索系の利用も累計 14,000 件以上にのぼり, それを通じた研究業績も数多く出ている。コーパスデータの構築・公開を通じた共同利用・共同研究について計画を上回る成果を上げていると判断される。

3. 教育について

プロジェクト非常勤研究員として大学院生を含む 5 名を雇用して研究活動に参加させて, 研究者としての育成を図っている。また国立国語研究所で開発された検索システム「中納言」「梵天」を大学講義で利用するためのアカウント配布, および利用講習会の開催, 若手向け優秀賞の設定などの活用を通じて, コーパス言語学研究者の育成・奨励を図っているなど, 人材育成に関して計画通り成果をあげている。

4. 社会との連携及び社会貢献について

東京大学・京都大学をはじめとする複数の大学, さらには日本 IBM・NTT CS 研などの民間企業研究所との共同で着実に継続して自然言語処理研究を進めている。また日本語語彙の分散表現 NWJC2vec の開発および企業・大学研究室・個人への配布は, 近年重要度の増している機械学習自然言語処理分野での基本データ貢献として高く評価される。今後もさらに一掃の貢献を期待する。形態素解析用辞書 UniDic, 分類語彙表関連データおよび閲覧システムの整備と配布は着実に推進されている。社会連携・社会貢献に関しては計画を上まつて進行していると判断される。

5. グローバル化について

Academia Sinica と共同研究, 台湾中央研究院言語学研究所との共催による国際ワークショップ LPSS2019 の企画開催, 國際的係り受けツリーバンク構築プロジェクト Universal Dependencies への参画など国際連携は着実に進められている。

6. その他特記事項

特になし。

研究情報発信センター

センター長：石黒 圭

I. 令和元年度活動概要

令和元年度予算総額 37,200 千円

令和元年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

本センターは、大学共同利用機関として共同利用に供するため、各種研究情報、研究資料及び研究成果の収集・整理・管理・維持を行い、広く社会に発信することで、研究の向上に寄与することを目的とするため、主に所蔵資料とそのデータベース構築・公開に関して、学会で研究発表を行うことに努めた。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

「国立国語研究所学術情報リポジトリ」「日本語研究・日本語教育文献データベース」「研究資料室収蔵資料データベース」など、所管するデータベース類の開発・公開を推進した。収蔵資料の共同利用体制を整備し、2019年度共同利用型研究（公募型）の採択課題（全12件中10件が研究資料室収蔵資料の活用研究）に対して提供した。日本語学会機関誌『日本語の研究』展望論文執筆者に対して、文献DBデータの先行公開を実施した。また、京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター主催「東洋学へのコンピュータ利用第31回研究セミナー」に共催し、共同利用・共同研究拠点との連携活動を行った。『人間文化研究機構の情報関連事業第三期後半における基本方針』に基づく高度連携システムのデータ構築計画の募集に、代表機関：国文研、連携機関：国語研で応募して採択された。

3. 教育に関する計画

研究発信業務強化のため、プロジェクト非常勤研究員2名を雇用し、その育成に努めた。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

『国立国語研究所論集』を2回、オンラインと冊子体の両形態で発行するとともに、円滑な発行を維持できるよう、2018年度に引き続き編集体制の見直しを行った。

5. グローバル化に関する計画

日本語学的・言語学的にパイオニア的価値を持ち、その評価がほぼ確立した日本語論文を英訳し、オープンアクセスで公開した（Pioneering Linguistic Works in Japan）。

6. その他

該当する活動なし。

II. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画	
1. 所蔵資料とそのデータベース構築・公開について、学会で研究発表を9件、論文公表を1件行った。	

(2) 研究実施体制等に関する計画

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
(1) 共同利用・共同研究に関する計画	
1. 「国立国語研究所学術情報リポジトリ」について、PDF・メタデータの作成整備、登録、DOI付与を継続実施した（追加 582 件）。総件数は 2,103 件に達し、遡及分については、著作権および個人情報保護に関する対応が必要なものを除き、ほぼ全てを登録した。新規分および既 Web 公開の PDF については、リポジトリでの公開を呼びかけ DOI 登録によりアクセシビリティを高めた。また、本年度のオープンアクセス方針施行に伴い、案内・登録申請を呼びかけ、個人著作物の登録を推進した。	
2. 「日本語研究・日本語教育文献データベース」(Web) に新規データを 3,432 件追加した。大学学術機関リポジトリ及び学会誌掲載論文の本文 PDF へのリンク約 2 万 9 千件についてリンク情報の付与・点検を継続した。『国語年鑑』1990～1993 年版の図書データを追加した。また、1957～1993 年版の論文集データを追加し、『国語年鑑』遡及分登録作業を完了した。Web ページをスマートフォン・タブレット端末にも対応したレスポンシブデザインに変更した。この改修によりアクセス数が倍増した（2019 年 1 月期と 2020 年 1 月期の比較による）。海外関係文献は、洋雑誌・韓国学会誌掲載論文の登録を継続するとともに、台湾の主要学会誌・主要大学紀要掲載論文の採録に着手した。	
3. 「外来語に関する意識調査Ⅱ（全国調査）」及び「行政情報を分かりやすく伝える言葉遣いの工夫に関する意識調査（自治体調査）」の回答データセットを公開した（2019 年 12 月）。また、「鶴岡調査データベース ver. 3.0」において、2011 年調査（第 4 回）の回答データの追加を行い、公開した（2019 年 11 月）。	
4. 研究資料室収蔵資料の利活用促進のため、研究資料室収蔵資料の各目録の整備を進め、「研究資料室収蔵資料データベース」に、「保存箱目録」と「音声・映像ファイル目録」を追加公開した（2019 年 10 月）。また、「中央資料庫地形図地勢図リスト」を公開した（2019 年 12 月）。「資料群一覧」には、2019 年度中に資料群 6 点（fo0247～fo0252）を追加公開した。	
5. 研究資料室収蔵の音源・映像資料について、2,129 点の媒体変換（デジタル化）を進めた（カセットテープ 1,000 点、DAT テープ 501 点、ミニディスク 2 点、オープンリール録音 1 点、VHS テープ 532 点、β テープ 17 点、8 ミリビデオテープ 3 点、デジタルビデオ 73 点）。また、所内専用試視聴システム「音声・映像データベース」に上記のデジタル化資料を増補収録した（音声 3,237 点、映像 680 点）。	
6. 第 2 期中期計画中に実施した共同研究プロジェクトの特設サイトのアーカイブサイトを作成した。	
(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画	
7. 2019 年度共同利用型研究（公募型）の採択課題（全 12 件中 10 件が研究資料室収蔵資料の活用研究）に対して研究資料を提供し、共同利用に基づく共同研究体制を強化した。	
8. 京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター主催の「東洋学へのコンピュータ利用第 31 回研究セミナー」に共催し、共同利用・共同研究拠点との連携活動を行った（参加者数 41 名）。	
9. 「『人間文化研究機構の情報関連事業第三期後半における基本方針』に基づく高度連携システムのデータ構築計画の募集」に、代表機関：国文研、連携機関：国語研で応募し、採択された。（日本文学および日本語研究分野を包括する研究論文の分類語彙集構築）	
10. 日本語学会機関誌『日本語の研究』展望論文執筆者に対して、文献 DB データの先行公開を実施した。	

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した。
(1) 大学院等への教育協力に関する計画	
(2) 人材育成に関する計画	
1. 社会調査のデータセット等の整備・公開のため、プロジェクト非常勤研究員を1名新たに雇用した。また、「日本語研究・日本語教育文献データベース」の登録範囲拡張のため、プロジェクト非常勤研究員1名の雇用を継続し、その育成に務めた。	

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおりに実施した
(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画	
(2) 研究成果の社会への普及に関する計画	
1. 『国立国語研究所論集』第17号（2019年7月）と第18号（2020年1月）をオンラインと冊子体の両形態で発行した。また、担当委員制を導入し、編集体制を強化するとともに、外注内容を見直し編集校正作業を効率化した。	

5. その他の目標を達成するための措置

自己点検評価	計画を上回って実施した
(1) 国際的協業に関する計画	
(2) 国際的発信に関する計画	
1. 日本語学的・言語学的にパイオニア的価値を持ち、その評価がほぼ確立した日本語論文を英訳し、オープンアクセスで公開した（2019年11月, <i>Pioneering Linguistic Works in Japan</i> ）。	

6. その他

1. ネットワーク・サーバ運用保守業務及びサポートデスク業務は、2019年度から情報基盤室に移管された。
--

令和元年度の評価

《評価結果》

計画どおりに実施している

（総括）

センター主管の研究としては特筆すべき成果は見当たらないが、学術情報リポジトリ、文献データベース、社会調査データセットなど各種データベースの整備・新規データ追加・オープンアクセス化、また研究資料室収蔵の音源・映像データのデジタル化などを通じて大学・研究機関の共同利用・共同研究に資するデータ公開が着実に進められており、研究プロジェクトは計画どおりに実施していると判断できる。今後は研究データ公開・発信に加えて利用度・成果把握を行い、研究情報発信方針策定に活用することを期待する。

《各項目別》

1. 研究について

研究所所蔵資料とそのデータベース構築・公開に関連して、計量国語学に学術論文1件、日本語学会、人間文化研究情報資源共有化研究会等での研究集会で発表9件を行なっている。それらは調査、資料収集、データベース構築の紹介・解説が中心であり、研究成果の質としてはやや物足りない。

2. 共同利用・共同研究について

所管するさまざまなデータベースコンテンツに関して、学術情報リポジトリのデータ整備・登録、オープンアクセスの推進、日本語研究・日本語教育文献データベース、国語年鑑、海外関係文献の収集追加、外来語意識調査、鶴岡調査データなどの社会調査データセットの公開、研究資料室収蔵の音源・映像資料のデジタル化などを通じてデータの整備・登録追加・アクセス向上が継続して積極的に進められている。また、京都大学人文科学研究所と共に東洋学へのコンピュータ利用研究セミナー開催、人間文化研究機構の高度連携システムのデータ構築計画の募集に採択、共同利用型研究への研究資料提供など、共同利用・共同研究の実施体制整備が着実に進められている。共同利用・共同研究に関しては計画を上回って実施されていると判断される。今後は公開・提供された研究所所管の各種データ・資料を利用した研究成果について、外部も含めた全体的な活用について把握されることを期待する。

3. 教育について

非常勤研究員2名を雇用し、データの公開および拡充に当たるとともに育成を行っている。

4. 社会との連携及び社会貢献について

国立国語研究所論集の発行を継続して行なっている。

5. グローバル化について

日本語学・言語学分野で評価が確立した日本語論文を英訳し、Pioneering Linguistic Works in Japanとしてオープンアクセスで公開している。

6. その他特記事項

特になし。

令和元年度「管理業務」に関する評価シート

業務運営の改善及び効率化に関する目標を達成するために取るべき措置

1. 組織運営の改善に関する目標を達成するための措置

【計画】

外部有識者の参加を得て、運営会議及び各種委員会を開催するとともに、機関の組織運営に研究者コミュニティ等の意見を積極的に取り入れる。

【実績】

- ・運営会議において、外部委員から研究所の研究活動について意見等をいただき、以下のとおり見直しを図った。
- ・機関の長に係る任期及び教授称号等の取扱いについて審議した。
- ・次期所長の選考方法、選考スケジュールについて審議した。
- ・総合研究大学院大学への参入について意見交換を実施した。
- ・研究所のロゴマークについて、広報活動面から知的財産保護のため商標登録申請を実施した。

2. 教育研究組織の見直しに関する目標を達成するための措置

【計画】

機関拠点型基幹研究プロジェクトの共同研究プロジェクトを研究系とセンターにより推進し、国際学術機関等の連携及び国際協力の推進を国際連携室において図る。また、研究事業の進捗状況に関する情報をIR推進室において管理する。

【実績】

- ・毎月開催している共同研究プロジェクト推進会議において基幹研究プロジェクトの進捗状況などを確認するとともに、コーパス開発センターでは、研究系と協力して「言語資源活用ワークショップ2019」を開催し、各種言語資源関連プロジェクトの成果を公開形式で報告するとともに、言語資源活用の先進的な事例を紹介して知識を共有した。研究情報発信センターでは、学術研究及び教育活動の成果を「国立国語研究所学術情報リポジトリ」としてウェブで公開（公開件数582件）し、研究所の学術研究・教育活動の発展（アクセス数79,592件、ダウンロード数174,577件）に貢献した。
- ・国際発信力を高めるために、2件の国際連携協定を締結し、共同研究を開始した。また、国際連携室が主導して、台湾の東吳大学においてチュートリアル授業「日本の言語の多様性／日本語の自然会話とディスコース・ポライトネス理論」を実施し、日本語学・言語学・日本語教育研究の諸分野における最新の研究成果や研究方法を若手研究者等に教授した。
- ・IR推進室においては研究成果に関するデータを収集・管理するとともに、将来計画委員会及び自己点検・評価委員会等に情報を提供した。また、研究成果の分析指標のうち、社会への貢献をかかる指標の策定を目指し、IRシンポジウム「社会に魅せる研究力を測る—論文では見えてこない社会に貢献する研究を評価する指標—」を開催した。

3. 事務等の効率化・合理化に関する目標を達成するための措置

【計画】

機構内機関及び機構外機関との業務の共同実施

【実績】

- ・コピー用紙の調達について、機構内3機関（本部・国文研・国語研）と2機構6機関の計9機関で共同調達を実施した。

<ul style="list-style-type: none"> ・自動販売機の設置・運営の業務委託を2機構4機関（国文研、国語研、統数研、極地研）共同で実施し、令和2年4月から運用することとなった。 ・西東京地区国立大学法人等共同開催の職員研修1件に職員を参加させた。①令和元年度西東京地区国立大学法人等共同開催職員研修【同一労働同一賃金】(R1.10.18開催、参加者2名) ・関東甲信越地区国立大学法人等主催の職員研修2件に職員を参加させた。①第54回関東・甲信越地区国立大学法人等会計事務研修(R1.10.23、参加者1名)②2019年度東京地区及び関東甲信越地区国立大学法人等係長研修(R1.10.30、参加者1名) ・人間文化研究機構本部主催による研修2件に職員を参加させた。①令和元年度人間文化研究機構事務系職員の人事評定者研修(R1.10.30開催、参加者3名)②令和元年度ハラスメント相談員研修(R1.11.7開催 参加者6名) 	
自己点検評価	計画どおり実施した

《評価結果》

計画どおりに実施している

- （組織運営の改善に関する目標を達成するための措置）については、計画通り、外部委員からの意見聴取を行い、それを生かしていくつかの問題の審議・検討を行った。
- （教育研究組織の見直しに関する目標を達成するための措置）についても、計画通り行われている。共同研究プロジェクト推進会議を毎月開き、基幹研究プロジェクトとコーパス開発センターが協力してさまざまな活動を行った。2件の国際連携協定を締結し、台湾の東吳大学でチュートリアル授業を行うなど、積極的に国際発信を行った。IR推進室は適切に研究成果のデータを収集・管理し、将来計画委員会及び自己点検・評価委員会等に情報を提供し、IRシンポジウム「社会に魅せる研究力を測る—論文では見えてこない社会に貢献する研究を評価する指標—」を開催し、社会への貢献をはかった。
- （事務等の効率化・合理化に関する目標を達成するための措置）についても、計画通り、機構内機関及び機構外機関との業務の共同実施が適切に実行された。

財務内容の改善に関する目標を達成するためにとるべき措置

1. 外部研究資金、寄付金その他の自己収入の増加に関する目標を達成するための措置

【計画】

常勤研究者の科研費への研究代表者もしくは研究分担者としての参加率を毎年度80%以上にするため、競争的資金の申請に向けた説明会や研究計画書の作成支援等を実施する。

【実績】

- ・令和元年度に配分された科研費（新規及び継続課題）に研究代表者又は研究分担者として、常勤研究者33名のうち32名が参加した（参加率97%）。
- ・近隣の研究機関と合同で科研費説明会（9月27日）を開催した。
- ・外部資金についての公募情報を所内グループウェアに掲載するとともに、全研究者宛てに電子メールで周知した。特に、科研費については、常勤・非常勤を問わず全研究者を参加対象とした科研費申請準備会議を開催（10月3,4日）し、申請者が他分野を含む採択経験豊富な研究者と研究計画・方法について意見交換を行い、若手研究者の育成にも配慮しつつ申請書作成指導等科研費申請を奨励・支援した。（令和2年度分申請28件）
- ・『日本語話し言葉コーパス』『現代日本語書き言葉均衡コーパス』及び『日本語日常会話コーパス（モ

ニター版)』の有償頒布を行い、総額 28,020 千円（前年度比約 300%）となる収入を得た。

2. 経費の抑制に関する目標を達成するための措置

【計画】

- (1) 一般管理費の分析を行い、分析結果を基に教職員に対しコスト意識の啓発を図るとともに、契約方法の見直し等を実施する。

【実績】

- ・研究所内の事務室内、廊下やエレベータ前、トイレに、電力節減、夏期の軽装励行のポスターを掲示し、職員に対するコスト意識・省エネ意識の啓発を図った他、4 階テラスに遮光及びグリーンカーテンを設置し、昨年度に引き続き省エネ化を図った。
- ・複数年で契約締結している施設常駐管理・空調設備保守点検・消防設備等点検・清掃環境衛生の業務請負契約の期間満了に伴い、前回同様複数年契約による入札を実施し、業務の効率を図った。
- ・昨年度拡大したペーパーレス会議を、引き続き今年度も対象会議を拡大し合計 4 会議をペーパーレス化し、消耗品の節約と労務の軽減に努めた。

【計画】

- (2) 業務の外部委託等を促進させるとともに、職員の人事費や外部委託の状況を分析し、経費の抑制策を検討する。

【実績】

- ・働き方改革の一環として一部部署においてフレックスタイムを試行的に導入した。試行結果を検証した上で令和 2 年 4 月から正式に実施することが決定した。
- ・7、8 月の 2 カ月間、管理部職員を対象に「ゆう活（夏の生活スタイル改革）」を実施し、対象者に對し定時で帰宅するよう促した他、実施しやすい環境にするため会議の設定時間や一定の時間以降に仕事の発注を行わないよう全職員へ働きかける等超過勤務の抑制とワークライフバランスの向上に努めた。
- ・昨年に引き続き水曜日の定時退勤日の所内放送及び全職員メールの送信により、意識啓発を促し超過勤務の削減を務めた。
- ・引き続き、施設管理業務及びネットワーク管理業務について外部委託を行い、業務の効率化を図った。

自己点検評価

計画どおり実施した

《評価結果》

計画を上回って実施している

- 1 (外部研究資金、寄付金その他の自己収入の増加に関する目標を達成するための措置) については、計画を上回り、科研費への常勤研究者参加率が 97% に達した。自己収入もコーパスの有償頒布により総額 28,020 千円となり着実に増加した。
- 2 (経費の抑制に関する目標を達成するための措置) については、計画 1、2 ともさまざまな工夫を凝らして、積極的に実施されている。

自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供に関する目標を達成するためによるべき措置

1. 評価の充実に関する目標を達成するための措置

【計画】

- 自己点検・評価等を実施し、組織運営の改善に活用する。

【実績】

- ・所内に自己点検・評価の実施、評価結果の公表及び活用に関する目的とした自己点検・評価委員会（委員6人）と研究所が実施する共同研究プロジェクトの推進及び連携・調整を図ることを目的とした共同研究プロジェクト推進会議と連携して開催し、PDCAサイクルを管理している。
- ・自己点検及び評価の検証を行うための所外の専門家8名で構成される外部評価委員会による機関拠点型基幹研究プロジェクトの自己点検評価・外部評価を実施した。

2. 情報公開や情報発信等の推進に関する目標を達成するための措置**【計画】**

国立大学法人評価委員会の評価結果や業務実績報告書など評価に係る情報等を、ウェブサイト等に掲載し、広く社会に公開する。

【実績】

- ・国立大学法人評価委員会の評価結果や業務実績報告書に加えて、外部評価委員会による研究系・センターの実績及び組織運営の評価をまとめた外部評価報告書を、ウェブサイト及び『国立国語研究所年報』を通じて公開した。

自己点検評価	計画どおり実施した
--------	-----------

《評価結果》**計画を上回って実施している**

- 1 (評価の充実に関する目標を達成するための措置) については、計画通り、所内に自己点検・評価を実施しただけでなく、外部評価委員会による外部評価も実施した。
- 2 (情報公開や情報発信等の推進に関する目標を達成するための措置) については、計画通り、国立大学法人評価委員会の評価結果や業務実績報告書をウェブサイト及び『国立国語研究所年報』で公開しただけでなく、外部評価委員会による外部評価報告書も公開した。

その他業務運営に関する重要目標を達成するためにとるべき措置**1. 施設設備の整備・活用等に関する目標を達成するための措置****【計画】**

施設整備・既存施設の維持管理及び省エネルギー対策を実施する。

【実績】

- ・研究所施設を関連外部団体による学会開催やTV番組撮影等のロケ用地として施設の外部貸出を実施し、収益の改善を図る共に既存施設の活用を促した。
- ・定期的な施設・設備の点検結果及び日常的な研究所内外の施設点検等（木の剪定、通路の補修等）により、計画的な維持管理を行い、職員及び利用者の適切な予防安全に努めた。
- ・研究所内の事務室内、廊下やエレベータ前、トイレに、電力節減、夏期の軽装励行のポスターを掲示し、職員に対するコスト意識・省エネ意識の啓発を図った他、4階テラスに遮光及びグリーンカーテンを設置し、昨年度に引き続き省エネを図った。

2. 安全管理に関する目標を達成するための措置**【計画】**

危機管理に関するマニュアルに基づく訓練や研修等を実施する。

【実績】

- ・建物耐震改修工事の関係で建物内での総合防災訓練及び各種体験訓練の実施ができなかつたため、

代わりに、立川防災館で地震体験教室等4種類の防災体験学習及び消防訓練を実施した。(12月23日・24日)

- ・新型コロナウイルス感染拡大に伴う業務対応として、2月上旬に教員の在宅勤務を開始し感染拡大防止に取り組んだ。3月には管理部の在宅勤務について準備と業務の整理を始めた。所内会議、打合せをWEB会議に移行するためWEB会議システムを2月に導入し、在宅で所内会議を実施できるよう対応した。
- ・新型コロナウイルス感染防止を目的とした在宅勤務特例実施時の情報セキュリティの取り扱いの作成をした上で対応した。

3. 法令遵守等に関する目標を達成するための措置

【計画】

公的研究費の適正な使用に関する研修会等及び研究倫理教育等を実施し、受講者の理解度チェック及び受講状況の管理監督を行う。また、情報セキュリティに関する研修を実施する。

【実績】

- ・日本学術振興会が提供している研究倫理eラーニングコース[eL CoRE]を新規採用の研究者16名に受講させるとともに、採用時オリエンテーションを実施した。また、人間文化研究機構令和元年度コンプライアンス教育研修会及び研究倫理教育研修会(11月20日)に教職員を21名参加させた。
- ・人間文化研究機構本部主催の各情報セキュリティ研修に対象者を参加させるとともに、標準型攻撃メール訓練、やCSIRT訓練、報告体制確認訓練を実施した。また、CSIRT構成員を文部科学省主催・国立大学法人等CSIRT研修(9月19日・2月20日)、に参加させた。
- ・メール誤送信対策機能の設定マニュアルを配付する等、隨時、情報セキュリティ対策に関する注意喚起を行った。

自己点検評価	計画どおり実施した
--------	-----------

《評価結果》

計画どおりに実施している

- 1 (施設設備の整備・活用等に関する目標を達成するための措置)については、計画通り行われた。研究所施設を学会開催やTV番組撮影のロケ用地として貸し出すなどを実施し、既存施設を有効に活用し、かつ収益の改善を図るなどの工夫がなされた。省エネルギー対策もさまざまな方法で推進された。
- 2 (安全管理に関する目標を達成するための措置)については、計画通り、防災体験学習及び消防訓練が行われるとともに、新型コロナウイルス感染拡大に対しては、教員の在宅勤務やWEB会議の利用などで感染防止に努めた。
- 3 (法令遵守等に関する目標を達成するための措置)については、新規採用の研究者16名を公的研究費の適正な使用に関する研修会に参加させ、また対象者を情報セキュリティに関する研修に参加させるなど、計画通り行われた。

【総合評価】

管理業務はきわめて良好に行われており、すべての面で計画通りか計画を上回り、高い評価に値する。これ以降も、この良好な状態を維持することが期待される。

2. 資 料

国立国語研究所外部評価委員名簿（敬称略）

- ◎ 坂原 茂 東京大学名誉教授
専門： フランス語学、認知言語学
- 小野 正弘 明治大学教授
専門： 国語学・日本語史
- 上山あゆみ 九州大学教授
専門： 生成文法・日本語統語論
- 沖 裕子 信州大学名誉教授
専門： 談話、方言、日本語教育
- 片桐 恭弘 公立はこだて未来大学学長
専門： 情報科学、社会言語学
- 砂川 裕一 群馬大学名誉教授
専門： 哲学、比較文化基礎論、言語文化教育論、日本語日本事情教育論
- 橋田 浩一 東京大学教授
専門： 自然言語処理
- 森山 卓郎 早稲田大学教授
専門： 日本語学、日本語文法

任期：平成 30 年 10 月 1 日～令和 2 年 9 月 30 日（2 年）

◎委員長 ○副委員長

国立国語研究所令和元年度業務の実績に関する評価の実施について

1. 評価の実施の趣旨

国立国語研究所では、共同研究プロジェクト及び機関拠点型基幹研究プロジェクトにおける研究計画の実施状況について、プロジェクトの代表者が行った自己点検評価及び実績報告書の妥当性を検証するため外部評価委員会による評価を実施している。

2. 評価の実施方法

評価は書面審査で行った。研究所が作成した、令和元年度の計画及びその実施状況が記入された「元年度業務の実績報告書」（「プロジェクト・センターの研究活動」、「管理業務」）の内容を検証した。

「プロジェクトの研究活動に関する評価」の点検項目及び観点は次のとおりである。

点検項目	観 点
研究成果 (研究) (共同利用)	研究業績の量的側面 ・どれだけ論文等のアウトプットがあるか
研究水準 (研究) (共同利用)	研究業績の質的側面 ・どれほど学術的意義や社会的意義があるか
研究体制 (研究) (共同利用)	研究推進にあたっての制度的側面 ・どれだけ大学と組織的に連携し、大学の機能強化に貢献しているか
教育	研究過程及び研究成果の教育的普及 ・どれほど大学等の機能強化に貢献しているか
人材育成	若手研究者の育成、及び社会人の学び直し ・どれだけ受け入れて取り組んでいるか
社会連携	自治体・産業界との連携など社会との協業 ・どれほど社会と連携しているか
社会貢献	研究成果の社会への普及 ・どれほど社会に向けて発信しているか
国際連携	研究体制における国際的協業 ・どれだけ海外の組織と連携しているか
国際発信	研究過程及び研究成果の国際的発信 ・どれだけ国際的に発信しているか
その他特記事項	

機関拠点型基幹研究プロジェクト一覧

研究領域	プロジェクト名	プロジェクト略称	リーダー
理論・対照研究領域	対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法	対照言語学	窪薙 晴夫
理論・対照研究領域	統語・意味解析コーパスの開発と言語研究	統語コーパス	プラシャント・パルデシ
言語変異研究領域	日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成	危機言語・方言	木部 暁子
言語変化研究領域	通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開	通時コーパス	小木曾 智信
音声言語研究領域	大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究	日常会話コーパス	小磯 花絵
日本語教育研究領域	日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明	学習者のコミュニケーション	石黒 圭

国立国語研究所外部評価委員会規程

平成21年10月 1日

国語研規程第7号

改正 平成28年 4月 1日

改正 平成31年 4月 1日

(趣旨)

第1条 この規程は、国立国語研究所組織規程（国語研規程第1号）第16条の規定に基づき、国立国語研究所（以下「研究所」という。）外部評価委員会（以下「委員会」という。）の組織及び運営について定めるものとする。

(任務)

第2条 委員会は、次の各号に掲げる事項について審議する。

- (1) 自己点検・評価の結果に基づく評価に関すること。
- (2) 研究所の中期計画及び年度計画の評価に関すること。
- (3) 共同研究プロジェクト等の評価に関すること。
- (4) その他評価に関すること。

(組織)

第3条 委員会は、10名以内の委員をもって組織する。

2 委員は、研究所の設置目的について理解のある学外の学識経験者等の中から所長が委嘱する。

(任期)

第4条 委員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第5条 委員会に委員長を置き、委員の互選により決定する。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故あるときは、あらかじめ委員長が指名した委員がその職務を代行する。

(議事)

第6条 委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。

2 委員会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(意見の聴取)

第7条 委員会は、必要に応じて委員以外の者に出席を求める、意見を聴取することができる。

(外部評価の実施等)

第8条 外部評価の実施は、研究所の中期計画及び年度計画の実施に関する評価の時に行うものとする。

2 委員会は、評価の結果を所長に報告するものとする。

(庶務)

第9条 委員会の庶務は、管理部総務課において処理する。

(その他)

第10条 この規程に定めるもののほか、外部評価の実施に関し必要な事項は、委員会が別に定める。

附 則

この規程は、平成21年10月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成28年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成31年4月1日から施行する。

国立国語研究所外部評価委員会【令和元年度実績評価】(第1回)

日 時： 令和2年9月10日（木） 10：00～12：00

場 所： オンライン会議（ZOOM）

議 事：

1. 前回議事概要（案）確認
2. 機関拠点型基幹研究プロジェクト評価について
3. 令和元年度共同研究プロジェクト評価について
4. 令和元年度「コーパス開発センター」及び「研究情報発信センター」の評価について
5. 令和元年度「組織・運営」、「管理業務」の評価について
6. その他
 - 4年目終了時評価について（報告）
 - 大学共同利用機関の検証に係る自己検証結果報告書について（報告）

資 料：

1. 国立国語研究所外部評価委員名簿（令和2年4月1日現在）
2. 国立国語研究所外部評価委員会規程
3. 前回議事概要（案）（平成31年8月1日）
4. 国立国語研究所プロジェクト別 令和元年度評価担当
5. 機関拠点型基幹研究プロジェクト評価報告書
- 6-1～6-6. 令和元年度共同研究プロジェクト自己点検報告書及び
令和元年度共同研究プロジェクト評価結果
- 7-1～7-2. 令和元年度国立国語研究所2センターに関する実績報告書及び
令和元年度国立国語研究所2センターに関する評価結果
8. 令和元年度「組織・運営」、「管理業務」に関する評価結果
9. 令和元年度業務の実績に関する外部評価報告書の構成について
- 10-1. 研究業績説明書
- 10-2. 現況調査表
11. 自己検証結果報告書

国立国語研究所 年報 2019 年度

2021 年 3 月 28 日 発行

編集・発行

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立国語研究所

〒190-8561 東京都立川市緑町 10-2

TEL: 0570-08-8595 FAX: 042-540-4333

<https://www.ninjal.ac.jp/>

